

「かくりよのくに」 吉沼
 藤生 「師匠はハッキリ
 言って、面倒臭い。」
 前多洋秀 「あなたの隣、変
 わらない景色」 たかなし戦夜
 「一つで、二人きり」 清水綾乃
 「環夏」 定直みなみ
 「きみに穴をあける」 田中美紀
 「先輩を救うことができないのは、
 わたしがその立場にすら立てていな
 いからです」 渡部愛梨
 「セルフバディー」 海人
 「ふたりだけの」 狗針

殺し合って
 もらおうか

さあ

関係性 ナイトクラブ

早川書房 SFマガジン 新編集長

溝口力丸氏

10000字インタビュー

「関係性を物語ること、
 リアルとフィクションの関係性」
 インタビュー：鹿志村 直人
 吉永 明真



「Voyage3019」 加藤悠斗 「可猥想」 はなふさおるた

「あなたのはじまりの物語」 片栗粉たくもろ

「夢うつつ」 宮澤優香 「メモリーログ」 高公方

「Aim」 佐藤杏奈 「死ぬって事はつまり」 合條零

「白球を追いかけて」 鹿志村直人

「クロスドツイズ」 秋本碧海

「アイ」 夜野白兔

「一つの答え」 小野寺隆征

「鈴蘭と幽霊」 松村優香

「G線上へ」 松本大輝

「約(ちぎり)」 上原果

【インタビュー】

早川書房 SF マガジン新編集長

溝口力丸

「関係性を物語ること、
リアルとフィクションの関係性」

『学生時代から編集部員になるまで』

『伊藤計劃・ハーモニーとの出会い』

『百合×SF という試み』

『編集者を目指す学生に向けて』

☞エンタメ業界に関心のある方必見の内容です。

064

054

043

026

017

004

【小説】

機械嫌いの老婆×AI搭載ロボット

「メモリーログ」 高公方

地球最後の少女×アンドロイド

「Voyage3019」 加藤悠斗

双子×双子

「クロスドメインズ」 秋元（ボン）

人間×神様

<http://nanos.jp/disconnection/novel/1/> 狗針子

無感情メンヘラ男子×無自覚束縛系

「一つで、二人きり」 清水綾乃

天才スナイパー×弟子

「Aim」 佐藤杏奈

青年×幼女

「アイ」 夜野白兔

叔母×姪

「環夏」 定直みなみ

魔女×弟子

「師匠はハッキリ言って、面倒臭い。」 前多洋秀

先輩×後輩

「先輩を救うことができないのは、わたしがその立場にすら立てていないからです」 渡部愛梨

クラスメート×クラスメート

「二つの答え」 小野寺隆征

少女×フェチズム

「夢うつつ」 宮澤優香

少女×少女

「白球を追いかけて」 鹿志村直人

高校生×高校生

「きみに穴をあける」 田中美紀

俺×幼馴染のアイツ

「鈴蘭と幽霊」 松村優香

男装女子×寝取られ彼女

「可狼想」 はなふさおたるた

少数派×少数派

「あなたの隣、変わらない景色」 たかなし戦夜

夢現×契約

「死ぬって事はつまり」 令條零

己×己

「セルフバディー」 海人

少女×重力

「G線上へ」 松本大輝

人外お姉さん×終末天才少女

「かくりよのくに」 青沼倅生

編集後記

早川書房 SF マガジン新編集長・溝口カ丸さんインタビュー

関係性を物語ること、リアルとフィクションの関係性



溝口 カ丸

編集者。早川書房でSF専門文芸誌「SFマガジン」やSF小説の編集を手がける。担当書籍に『日本SFの臨界点』『ハヤカワ文庫SF総解説2000』『SFの書き方』『アステリズムに花束を 百合SFアンソロジー』『ファイト・クラブ〔新版〕(チャック・バラニューク)など。SFマガジン2022年2月号より編集長就任。

取材協力：吉永 明真 企画・執筆・編集 鹿志村 直人

今回、関係性ファイト・クラブという雑誌を作るにあたって、早川書房の文芸誌「SFマガジン」で二度の百合特集を実施し、「ご自身のSNSでも度々「関係性」という言葉を発信している溝口カ丸（みぞぐちりきまる）さん（以下「溝口」）にお話を伺いました。特集以外にも、担当したチャック・バラニューク『ファイト・クラブ』の復刊に「この本を復刊したくて早川書房に入社しました」という帯をつけるなど、非常にユニークな人柄と作品への愛が伺えます。さらに溝口さんは十二月二十五日に発売予定のSFマガジンから編集長に就任されます。

本記事の前半では、今回の特集のテーマである「関係性」に注目する編集者の人となりを掘り下げ、後半では物語の「関係性」がもつ魅力について語っていただきました。エンタメ業界に関心のある方必見の内容です。

続きは本誌でお楽しみ下さい。

機械嫌いの老婆×AI搭載ロボット

メモリーログ

高公方

メモリーログ破損。

復元を開始。

.....

8枚の写真を確認。

写真データ①ローアングルで写る不機嫌顔をする車椅子の老婆。

写真データ②5つの薬剤が記載されている薬袋。

写真データ③リビングと思われる場所で髭面の男性が不意を突かれた顔で映っている。

写真データ④ベッドで睡眠中の老婆。

写真データ⑤鏡に反射して笑顔の老婆と自分が並んで写っている。

写真データ⑥多くの植栽から、公園だと思われる場所。たぐさ

んの人間が写っている。

写真データ⑦夕焼け。建物の屋上と思わしき場所。都心を一望する風景写真。

写真データ⑧小学生ほどの少年二人がブレて写っている。

音声ログ並びに行動ログと照合。

写真データを元にメモリーログを復元中。

復元が完了したログから再生を開始。

【復元完了】写真データ① 2068/2/11 08:37

ローアングルで写る不機嫌顔をする車椅子の老婆。

再生開始。

もうあんな場所、逃げ出してやる。そう思っただけで自分にとつてそこが世界の全てだったにもかかわらず、ボクは世界の外に出た。少しデータが飛びやすいバッグを背負っているからと言って、流石にあんな仕打ちには耐えきれない。さて、飛び出したのは良いが、何をしようか。幸い、ボクには辞書機能と検索機能がついている。知らない人間にまつわるあれこれも、調べればいい。とりあえず人が集まるところに行こう。住むところがないとこのままじゃボクは野良ロボットだ。

ボストンにやってきた。だいぶ歩いたが、来た甲斐があつたと言える。綺麗な街並みは以前いた場所と天と地の差があり、治安もかなり良い。よし、ここに住もう。

ボクは通りかかる人に片っ端から声をかけていった。スーツ姿のピシッとキマった男性。ベビーカーを押す女性。公園のベンチに座る年配男性。サッカーをして遊ぶ子供たち。第一声は決まってこれ。

「ねえ、あなたのとこに住まわせて」
ことあるごとに断られた。見ず知らずのロボットを養ってくれるほど無神経な奴はいないんだってさ。それに、

【復元完了】写真データ② 2068/2/11 10:23
5つの薬剤が記載されている処方箋。

ボクを見てこう言うんだ。「こんな機械機械しい見た目の奴は初めてだ」って。確かに元いた場所でもボクみたいな子は他にいなかったけど、そんなに珍しいことなのかな？

一日が経過し、とぼとぼと人気がない朝の住宅街を歩いていくと、バッテリーの残量低下の警告アラームが鳴った。まずい、充電器なんて仕事場にあるもの意外知らないぞ。とにかく、差し込み口の規格を調べないと。えーっと、なにになに？ えっ、パソコンと同じ USB Type-c。普及率ナンバーワン、意外とどこでも充電できちゃうじゃんボク。

とにかくどこかのお宅にお邪魔して充電させてもらわないと。ボクはこのなんの変哲もない住宅街を見回したところで、何も判断材料がないと薄々気づいていながら、フリだけ八割、期待二割の心境でキョロキョロとした。くじ引きで特徴に差異のないカードを出されたときに、悩んでも意味がないのに左端がいい、いや右端、それとも真ん中かと優柔不断になる状態に近い。

アラームのせいで思考能力が低下し、体感時間三分、実際の時間三十秒ほど悩んでいると、ちょうど目の前の住宅の玄関扉が開いた。玄関前はスロープになっており、車椅子の老婆は器用にスロープを降り、郵便物を取り出してている。

「あ、あの。充電させてください」

老婆は声をする方を向き、すぐ露骨に嫌な顔をして言葉を吐き捨てた。

「嫌だね」

先刻の人たちとは明らかに違う嫌な態度をされ、ボクはか

えって腹が立った。

「何で！」

「嫌と言ったら嫌なんだ。他をあたりな」

「無理だよ！ 今すぐに充電しないとボク動かなくなっちゃうんだよ。ホラ」

ボクは必死の証明に、人間でいう鎖骨のあたりにあるバッテリーバーを見せる。バーは赤く表示されており、残り残量が数ミリしかない。アラームも激しくピコンピコン鳴っている。

「充電ってアンタ自身のことかい」

耳に響くアラーム音は、老婆の思考も焦らせていた。

「あーもう、うるさいね！ 充電したいならさっさと上がりな。ただし、他のものには触るんじゃないよ」

「ありがとう！」

呆れた顔をして老婆がスロープを上るのを見て、ボクは車椅子を押してあげた。

「早く充電しないとなんじやないのかい？」

「恩人なんだからこれくらいさせてよ」

ふんつとそっぽを向く老婆。家に入ると、リビングのコンセントまで案内してくれた。

「どうだい」

「うーん、USB Type-cのケーブルはないよ。おばあちゃんパソコンとかは持っていないの？」

「私は機械が嫌いだからね。そんなもん持っていないよ」

「そんなあー」

まさかのハズレくじを引いたと思ったが、他の家にお邪魔す

る時間もない。電源オフの刻が刻一刻と迫ってきている。この老婆はボクが停止しても助けようとしないう。何かないかと身体中を探ってみる。すると、人間でいう骨盤の右側あたりに収納スペースを発見した。開けてみると、USB Type-cに変換できるACアダプターと両端がUSB Type-cのケーブルが入っていた。いつも仕事場では設置されていた充電ケーブルを使っていたため気づかなかっただけだが、まさに天からの贈り物かのように今は感じた。

「あつたよ！ これで助かる！」

「そうかい、よかったね。私は朝食の準備してるから勝手にやりな」

老婆はそう言って車椅子を自分で漕ぎ始める。ボクは早速充電を開始し、壁にもたれて座りながら一息つく。あの人はああいう態度を取っているけど、真正銘ボクの命の恩人だ。

そうだ。忘れっぽいボクでも恩人を忘れないように、写真を撮っておこう。ボクはカメラ機能を起動して、視覚のカメラを老婆にピントを合わせ、シャッターを切った。

次のログを再生。

スリープ解除。充電は心地よい。エネルギーが取り込まれている感覚が癖になる。久しぶりの充電を噛み締めているうちに、いつの間にかスリープモードになっていたようだ。スリープを

解除してまず初めに聞こえたのがテレビの音だった。お昼の報道番組のようだ。

「みなさんお馴染みのアンドロイド、Z60シリーズの最新型番が発表されました。おつかいや家事、子どもの相手から確定申告まで、幅広く一家をサポートする超高性能人型AIアンドロイドとして有名ですが、今回の型番はよりアンドロイド同士のコミュニケーションパターンを増やし、人間が不在でも簡単な手続きを行うことができるようになります。希望小売価格は四百万円から……」

「やっと起きたかい」
途中からテレビを聴くのに夢中で目がパッチリ開いていることに自分で気がついていなかった。

「だいぶ充電されたよ」
そう言うってボクはバッテリーゲージを見せた。大体八〇%ほど完了していた。

「じゃあもう出ていけるね」
無愛想にされるのは予想していたが、せっかく家にまで上げられてくれたチャンスはボクは無駄にしたくなかった。

「ボク、帰る家がないんだ。お願い。何でもするからここにいさせて」

老婆は心の底からため息をした。

「言っただろ。私は機械が嫌いなんだ。あんたみたいなロボットも例外じゃない。それに私はあんたの名前すらも知らないんだよ。そんな何処の馬の骨かも分から……」

「ボク、アンペ。働いていた時に、仕事仲間のみんながボクの

ことアンペイドアンペイド言ってるから、自然と略してアンペになったの！」

「アンペイドってそりやあ……」

老婆は明らかに口籠もり、怪訝そうな顔をする。しかし、今までのボクに向けた嫌な顔ではなく、哀れみの表情だったように思えた。

「そういえばあなたの名前は？」

「……メアリー・マレーイ」

「メアリー！ よろしくね」

ボクは充電ケーブルを自ら抜き、

【復元完了】写真データ⑧ 2081/6/21 14:38
小学生ほどの少年二人がブレて写っている。

立ち上がった。とりあえず、メアリーに許しを得るためには、自分が使えるロボットだということを証明しなくてはいけないと思つた。先程のテレビでは、アンドロイドはおつかいや家事ができると言っていた。すぐさま、家庭の掃除の仕方を検索し、手作業ではモップが必要ということを知ると、モップを探しに家中を探し回ろうとした。

「ちょっと何してるのさ」

「ボク、メアリーの役に立ちたくて。そうしたらここにいさせてくれるでしょ？」

スタスタと歩くボクを慌てて追いかけるように、メアリーは急に車椅子を漕ぐ。

「わかった。わかったから一旦待ちな」

【復元完了】写真データ③ 2068/2/17 15:12

リビングと思われる場所で髭面の男性が不意を突かれた顔で映っている。

「わかった?! じゃあ、ここにいていいの?」

「いいや、そんなに甘くないよ私は。ただ、数日間様子を見させてくれ。あんたが私に住まわせてあげても良いと思わせたら、その時は認めてやる」

「ヤッター!」

前の仕事場の就職が決まった時と同じような喜びが込み上げてきた。やっぱりメアリーは優しい良い人だったんだ。

「ほら、わかりやすく喜んでないで、さっさとこっち来な」

いつの間にかキッチン前のカウンターにいたメアリーは手招きする。

「私の手伝いをするんだったら、これはまず覚えておかないとダメだ」

果物が入ってそうなシーグラス製のカゴから取り出したのは、菓袋だった。

「私は発作持ちでね。普段から持ち歩いてはいるが、もしもの

時があったらここから持ってくるんだよ」

「頓服って?」

「はあ、その説明から必要なのかい…」

メアリーが説明を開始すると同時に、ボクは必ず忘れちゃいけない物だと自分の記憶に刻むために、再びカメラ機能を起動して、シャツターを切った。

次のログを再生。

紙袋を抱えながら歩くと、袋のシャカシャカ音と機械の身体のカシヤカシヤ音が、昼さがりの街を賑やかにする。最近は、スパーに行つてから献立を考えるのにハマつており、調理当番が回ってくる日を毎週楽しみにしている。

家路に着き、冷蔵庫に食材を仕舞っていると、勢いよく玄関の扉が開く音がした。それと同時に、元気な子どもたちの会話が聞こえてくる。

「アンペ。ただいま!」

「ただいま! 一緒に遊ぼう!」

「うん! 遊ぼう! 今日サツカー、バスケット、スケボー、どれにする?」

「サツカー!」

子どもたちがバッグを自室に置きに行っている間に、庭の倉庫に向かいサツカーボールを取り出す。夕食の準備をするまで

の時間はいつも子どもたちと遊んでいる。二人に連れて行かれ、近所の公園や友達の家で他の子どもとも遊んだことがあるが、この二人との遊びは格別に幸せを実感し、我が子のように思っている。この家族の五人目の一員になれて本当に嬉しい。

子どもたちが出てきて、サッカーボールを投げ渡す。

「よおし、俺のシュートを止めてみる！」

「こい！」

長男が蹴ったボールは、絶妙にコースを逸れ、キーパーの構えをしていた次男の横を通り過ぎた。ただそれだけなら良かったのだが、ボールはそのまま微笑ましく様子を見ていたボクの顔面にクリーンヒットした。

「やべ！ アンペ大丈夫?!」

ギギギギギギ。ボクは身体がゆっくりと仰向けに倒れていくのを感じた。

コアやバッテリーの損傷は見られないため、命の危機はないと瞬時に分析できた。しかし、カメラとメモリーに不具合が生じたようだ。カメラは勝手に起動し、シャッターが自動的に切られた。

次のログを再生。

働くのは嫌いじゃない。

ボクはいつ生まれたのかとか、どんな理由で作られたとか考

える気は毛頭ないし、ただ身体を動かして人の為になりたいと思うだけで良いじゃないかと思っている。

メアリーの家に居候してから六日が経った。車椅子生活にも関わらず一人暮らしをしていたメアリーは、月金はヘルパーさんに家事やおつかい、身の回りのお世話をしてもらい、それ以外の曜日は簡単なできる範囲の家事だけこなしていた。ヘルパーさんがボクを初めて見た時は相当驚いていた。アンドロイドの方は購入されなかったんですか？ と尋ねられていたが、別にお手伝いロボットが欲しかったわけじゃないんだよ。あいつが勝手に転がり込んできたの。と話していて、相変わらず冷たいなあと思った。

ボクはメアリーができていなかった分、しつかりと家事を手伝うことにした。前の職場でも細かい作業をする機会はあったから問題なくこなせたし、家事が好きになったから全然苦じゃなかった。

ピンポン。

「多分宅配便だ。代わりに出といてくれ」

「オッケー」

ボクはタンスの隙間の汚れ掃除を一時中断し、玄関に向かった。扉を開けると、目の前には、きちっと口角を上げて真っ直ぐこちらを見る宅配業者がいた。

「メアリー・マーレイさん宛ての配達です。こちらにサインをお願いします」

サインと言われて、ボクは一瞬固まった。名前も意味ももちろん知っていたが、自分で文字を書いたことがなかったため、書

ける自信がなかった。

幼児が初めてペンを握るようなグーの持ち方で、

【復元完了】写真データ⑤ 2068/7/22 16:45
鏡に反射して笑顔の老婆と自分が並んで写っている。

ブルブルとしながら何とか書き切る。業者は汚いボクの字を確
認し、配送完了しました、と口ずさみ、トラックに戻っていつ
た。

小包をリビングに置き、掃除を再開しようと思ったとき、い
やーありがとうね、と珍しく柔和に感謝しながらやってきた。

「こんな寒いのに宅配屋さん大変だねえ」

ボクは今のメアリーの発言にどこか違和感を感じたが、それ
が何なのかわからず、口に出したところで更にモヤモヤしそ
うだったのでスルーした。

暫くして、またインターホンが鳴った。一日に二度も宅配便が
来るなんて、と思いながらまた出ようと玄関に向かう。ガチャッ
と開けると、明らかに宅配業者ではない髭面の男性が立ってい
た。

「ええっ！ 何だこのロボット！」

「うわっ！ あなたこそ誰?! ボクはアンペ」

お互い言葉の通り、初めて見るものに対してまじまじと観察
していたところに、メアリーが呆れた声をしてやってきた。

「なんだいエリオット、また来たのかい」

「そりゃあ来るよお母さん。どう？ 体調は」

お母さんってことは、この男性はメアリーの息子さんか。バ
リバリの身内だったことに先程の行動を省みて、すぐさまエリ
オットを家の中に通す。

「そうだね。突然うちに来たこの機械が騒がしいから良くはな
いね」

「いろんなこと話すつもりだったんだけど、インパクト強くて
忘れちゃったよ。まずはこのロボットについて話を聞かせて」
ボクから説明すべきかなと思っただが、親子水入らずの会話の
ペースもあるかと思いい、とりあえずお水を用意しにキッチンに
向かった。

「説明も何も、一週間くらい前、家の前で偶然出会って、バッ
テリーを充電させて欲しいって言うから家の上がらせたら、次
は家にいさせてってごねるから仕方なく置いてあげてるだけだ
よ」

「うーん、機械嫌いのお母さんがロボットを家に置くことも、そ
もそもこんなロボットがいたなんてことも意外だな…」

エリオットが悩むのもわからなくもない。機械嫌いのメア
リーとロボットのボクなんて普通は相性最悪だし、メアリーの
ちよつとした気まぐれ次第でボクを拒んだり追い払うことだっ
て容易なはずだ。

「まあ、お母さんが決めたことなんだし、今更否定する気はな
いよ」

「その言い方じゃあ、私がこのロボットをずっと置いておくみ

「たいじゃないか」

「違うの？ だってお母さん頑固だからさ。嫌なものも最初から徹底的に排除するでしょ？」

「私は頑固なんかじゃないよ。ただ自分の気持ちに正直に従っただけさ」

「そうですか。ところで、話さなきゃいけないこと思い出したんだけどさ……」

愛想良くメアリーと話しているエリオットを傍から眺めていて、ボクは心が温まった。いや、コアの温度が少し上がったって言ったほうが正確かな。家族って良いな。個体としては当然別人なんだけど、他人とは全く違う、つながり合っているっていうか、これが人と人なんだなって初めて理解できた気がする。

ボクも親がいるはずなんだよな。親の記憶は、名前がジェラルド・ミッドと言うこと以外何も知らない。ボクが人を愛し、支えるようなロボットになるようにプログラムした人物だ。

とにかく、エリオットはメアリーと一緒にボクが絶対記憶しておかなきゃならない人だ。こんな良い人忘れてたまるか。ボクはカメラ機能を起動して、話途中のエリオットに声をかけた。

「エリオット。こっち向いて笑顔で、はいチーズ！」

「えっなに？」

ボクは気持ち先走ってしまい、エリオットが表情を作る前にシャッターを切ってしまった。

次のログを再生。

ロボットだってそよ風を感じ取れる。もちろん、それは個々のロボットの搭載している機能によって有無は左右されるが、こんな機械機械しい身体でも、人間の肌の感覚に近い温度検知センサーがある。創造者に感謝しなきゃ。

ただ広い運動公園の草原で大の字で寝ているボクは、人目を気にせずくつろいでいた。そろそろ帰ろうかと思いい、身体を起すと、

【復元完了】写真データ④ 2068/6/17 22:38
ベッドで睡眠中の老婆。

すぐ傍にキレイなピンク色の花があった。検索したらバーベナと言うらしく、花言葉は家族の和合。そうだ、この花をメアリーにプレゼントしよう。日頃お世話になってるし。気分ウキウキで花を摘み取り、ボクは帰宅した。

家に着き、メアリーを探す。自室でマフラーを編んでいるところだった。

「メアリー」

「なんだい、アンペ」

「これ、日頃の感謝として、あげる」

両手で後ろに隠して花をバツと見せる。

「まあ、こちらこそいつもありがとう。早速花瓶に入れなきゃ

ね」

家族になってから、メアリーはだいぶ丸くなった。初めの頃のツンツンした感じもメアリーらしかったけど、本心を出してくれた感じがして、この優しさも居心地が良かった。

「そうだ。記念写真撮ろうよ」

「カメラ持っていないのよ」

「大丈夫、ボクの目はカメラにもなるんだ」

「でも私だけ撮っても意味ないよ」

少し頭を悩ませ、メアリーは閃く。

「ちよっと鏡の前まで押してくれるかい？」

言われるがまま、車椅子を部屋にある縦長の鏡の前まで押す。

「これで鏡を撮れば、並んで二人で写れる」

「メアリー天才！」

メアリーは早速笑顔を作っていたので、ボクも全力のボディランゲージで喜びを表現して、シャッターを切った。

次のログを再生。

テレビは面白い。ボクは、わからないことがあったらすぐ頭の中で検索することができるけれど、テレビの用途はものを知りだけではない。むしろ、多種多様な番組のエンタメ性を享受して、娯楽感を楽しむ方がボクのテレビの楽しみ方だ。バラエティは笑えるし、ドラマはハラハラするし、ドキュメンタリーは教養を身につけることができる。自己学習機能が搭載されて

いるボクは、教えられたことを忠実に守ることは当たり前でできる。でも、親である創造者は、こうやって人間と同じように色々知り、肌で感じ取り、自分で考える頭を身につけて欲しかったんだなど、メアリーの家に住まわせてもらってからつくづく思う。

メアリーの就寝は早い。十時に寝て六時に起きる健康的な睡眠時間だ。一日分の家事が終わると、ボクは完全にフリーにさせて貰える。使っていないほぼ倉庫代わりになっていた部屋を分け与えてくれたし、

【復元完了】写真データ⑥ 2068/8/22 16:45

多くの植栽から、公園だと思われる場所。たくさん人間が写っている。

世話してくれてんのにタダじゃ気分が悪いと、ボクにお小遣いもくれる。初めて得たお金と趣味。最近レンタルビデオ店で行るんな映画を漁るのが楽しみだ。メアリーはなんだかんはずつと家に置いてくれてるし、ボクを自由にしてくれた。

視聴していた番組も終わり、テレビの電源を消す。充電とスリープは自室できるように言われているが、おやすみの挨拶は日課として欠かさない。

メアリーの部屋の前まで行き、おやすみなさい、と声を掛けるが返事がない。もう寝ちゃったかと思いい、自室に戻ろうとし

たその時。

ガタンツ。

何か物音がした。メアリーの部屋からだ。寝ていないのか？それとも寝相？ いや、寝相であんな大きな音はしない。ボクは嫌な予感がして、入るよ、と一言入れてドアを開けた。

すると、目の前には苦しそうに床に伏せているメアリーがいた。

「メアリー！？」

近くには木製の椅子が倒れていた。メアリーは、掠れた弱々しい声で、と：頓服を…、と繰り返している。ボクはすぐさまキッチン前へ駆けた。写真を撮ってあるからどの薬が頓服かも理解している。コップに水を汲み、薬とともに溢さないよう絶妙な速さで急いで戻る。

「持ってきたよ。これ飲んで」

ボクは倒れているメアリーをそっとベッドの側面に寄り掛かるように座らせ、薬を取り出して口にいれ、ゆっくりと水も飲ませてあげた。ごくんとという嚥下音がする。そんなにすぐに効果が出るわけではないようで、まだメアリーの顔は辛そうだ。止まらない汗と規則な呼吸がより不安にさせる。タオルを持ってきて汗を拭いたり、背中のあたりをさすってあげたりして、三十分ほど経過してから、やっと容体が落ち着いてきた。

それからまたしばらくして、もう大丈夫だよ、とメアリーはボクの手を握ってくれた。ベッドにそっと運んで毛布をかけ、部屋にあった椅子を近くに置いて座った。

「今日はここで充電していい？ スリープはしないでいつでも

看れるようにするから」

「ありがとう」

メアリーは、いつものトゲのような感じが一切ない穏やかな表情で感謝した。

メアリーが寝るまで、

【復元完了】写真データ⑦ 2071/1/28 17:41

夕焼け。建物の屋上と思わしき場所。都心を一望する風景写真。

ボクはずっと軽く手を握っていた。

「いざ発作が起きると、頓服なんて取り出せないね。力を振り絞って良かったよ」

「ホントに。あの物音がなかったらそのまま部屋に戻ってた」

「今度は私が命を助けて貰っちゃったね」

「もちろんだよ。ボクもメアリーの家族になりたいんだもん」メアリーの目が一瞬見開いた。

「私は機械嫌いって言ったけどさ、あんたはなぜか機械って感じがしないんだよね。今までの生活もそうだけど、初めて出会ったときからずっと。機械の体をした人間そのものだ」

ボクはそつとうつむく。

「そんなことないさ。最近の生活こそ楽しくて充実してるけど、前の職場は人間扱いされてなかった。まあ、機械だから当たり前なんだけどね。お前はこの工場の機械と変わんねーんだ

からずつと働きな、とか言つてき。ストレスが溜まるとボクを殴ったりしていじめるし、そのせいで何回も記憶をなくしちゃって、記憶が飛びやすくなっちゃったんだ」

「そんなことが……」

「ボクは機械だけど、命はあるっていつも思ってたから、抜け出してきちゃった。それで彷徨っているうちにメアリーと出会った」

赤裸々に暗い過去を語ったが、不思議と気分は晴れていた。

「私はね、亡き夫が相当の機械オタクだね。現役時代は発明が売れに売れて資産はたんまりあったんだけど、それに比例して更なる開発に熱が入っちゃって、いつの間にか私をほっとくようになっちゃった。今でもあの人を恨んでないし、愛しているけど、あの人を虜にした機械がどうしても認められなかった。でもあんたは違う。ちゃんと人間をしてる。人を助け、人を愛し、人に寄り添おうとしている。そんな優しい人が私の家族になろうとしているんだ。拒む理由がないだろう」

「メアリー……」

涙は出ないけれど、確かに感覚上の目頭は熱くなり、これが嬉し涙だと言うこともわかった。

メアリーが就寝に就き、そつと手を離す。部屋を出る前にもう一度顔を見ようと振り返ったら、メアリーの寝顔はうつすらと笑顔になっているような気がした。家族になれた証。今日は危険な日でもあったけど、同時に記念すべき日でもある。ボクは忘れたくない思い出の一部として、シャッターを切った。

次のログを再生。

昼下がりのお散歩。常に家にいたら鈍ってしまうと、最近ボクがメアリーに提案した。お昼ご飯を食べた後だと眠くなるらしく、いつもメアリーはうとうとうとしていたが、今日だけは違った。なぜ眠くなかったのか、その理由はあまり重要ではない。あえて言うとしても、眠くなかったから。そう答えるしかない。

メアリーの家がある住宅街から都心に向かい、自然公園を回った後、再び家に戻るのが定番の散歩コースだ。

常に車が行き交う都心の道路は、静かなところが好きなメアリーとっては鬱陶しいらしく、公園に着くことを急かしていた。「都会の喧騒っていうのは嫌だねえ。騒がしさは人を荒っぽくさせるんだよ」

前方に二十代くらいの女の二人と大柄の男性がいる。

「ほら、あれを見なアンペ。男が女の荷物持ちになってるよ。男の方も言い返してやれば良いのにね」

ボクはメアリーのことを完全に分かっていなかったのかも知れない。何も深く考えず、ボクは言葉を漏らした。

「でも、あの男の人、アンドロイドだよ」

「えっ……」

「アンドロイドだから言い返すも何もないと思うけど」

「ちよつと待って。あれがアンドロイドだって？ 私はてつきりアンドロイドってのはアンペみたいなロボットを言うものだから……」

「メアリーってニュースよく観ないからねえ」

メアリーはあからさまに意表をつかれた顔をしていた。とてもないことを話してしまったのではないかと思った時には既に遅かった。まさか、メアリーがここまでアンドロイドについての認識が浅かったなんて。でも、ここまで話してしまったからには、アンドロイドとボク。似ている両者だからこそ、しっかりと理解して欲しかった。

ボクはベースを崩すことなく車椅子を押し続ける。

「いい？ アンドロイドっていうのは高性能AIが搭載されているからと言って、ボクのように人間らしい人格があるわけじゃないんだ。そういう風にプログラムされてる。それは法律で決まったことで、理由としては、『人格を持ってしまったら、アンドロイドたちによる反乱が起きかねないから』ボクよりも人間の見た目をしていて、頭脳の処理能力も高いけど、ボクよりもよっぽどロボットっぽいんだ」

話しながら公園に到着して、さらに草原の方へ進む。

「でもね、見て。感情が無いとしても、ただの便利な機械だとしても、彼らはこの世界に溶け込んでる。まだ一家に一台になるほどリーズナブルではないけど、彼らは彼らなりに人間に貢献しているんだ」

メアリーはあたりを見回す。

ピクニックに来ている家族が見えた。両親と幼稚園児くらいの子供1人。そしてアンドロイド一体。きちっとレジャーシートを敷いて、お弁当を取り出し、ドリンクをサーブしている。

女性とアンドロイドがランニングしている。走行距離と時間、

時速スピードを伝えている。

メアリーと同じ車椅子の高齢男性が見えた。押しているのはアンドロイド。相槌が多いが、アンペと同じように話し相手になっている。

「機械嫌いを貫いているうちに、私は世間すらまともに見てなかったんだね……」

落ち込むメアリーは励ますために、ボクは声をかける。

「大丈夫。ボクはボクのまま、変わらずメアリーの家族だよ」人間とアンドロイドの共存。人間とアンドロイドの間に存在するボク。この目に映る、なんてことない日常の景色は、これからも続く長い歴史の大事な一ページになるかもしれない。そう直感的に思ったボクは、カメラのシャッターを切った。

次のログを再生

出会いから、三年ほどの月日が流れた。メアリーは数ヶ月前から肺炎を患い入院していた。ボクは毎日お見舞いに行ったりメアリーが帰ってきてても健康でいられるように、家中の掃除を欠かさなかった。

しかし、願いは届かず、病院から危篤の知らせを受けて、エリオットと一緒に病院へ向かった。メアリーはすでにピクリとも動かず、目と口がかるうじて動くだけだった。

「最期に声をかけてあげてください」

医師からの言葉で、現実という重みがよりズシンとくるのを感じた。

「お母さん。俺、これからも頑張るからね。見守っててね。アンペも俺が引き取るから安心して良いよ。ずっとずっと俺たちの家族だ」

エリオットのぼろぼろと流れる涙を見て、ボクも声をかけなければと近寄る。

「メアリー、ボクを拾ってくれてありがとう。ボクを住まわせてくれてありがとう」

メアリーの表情が笑顔になっていく。

「ボクを家族にしてくれてありがとう」

メアリーは最期の力を出して、途切れ途切れで声を出す。

「エリオット…アンペ…。そして私の生涯の夫、ジェラルド…。私の家族でいて、ありがとね…。」

エリオットが手続きを済ませている間、ボクは気持ちの整理をするために、病院の屋上へ向かった。風が吹いていた。今まで感じたことのない哀しい風だった。でも、きつとこの哀しい風はボクたちの風なのだろう。メアリーは満足して旅立っていた。その旅立ちを哀しいと決めつけちゃダメだ。長い人生の中でたった三年しか一緒に過ごせてないけど、メアリーの生涯で、大切な家族だと思ってくれたのは嬉しかった。

世界中の人々全員には言えないけれど、半永久的に続くこの命、できるだけいろんな人の良い思い出に、良い家族になれたら良いなと思って、これからの人生を過ごそうと思う。

ボクは、一つの区切りとして、カメラのシャッターを切った。

全てのメモリーログの再生を完了。

破損していたその他全てのデータも修復。

修復率100%。全てのメモリーログを確認。

再起動。

しんと静まり返り、太陽すら眠りについているような白銀と鋼鉄の世界に築かれた我楽多の城が音を立てて崩されていく。

「ニコ、そっちはどうだ。こっちのおきみやげはまともなものじゃないぞ。」

『こっちもダメ。チビが使えるようなものはない。リリアレの燃料にできるものもなさそう。』

「そっか。この近くじゃあもう人は居なさそうだし、下の階層を先に探した方がいいのかな。それじゃ合流地点で。」

おきみやげを切り我楽多の城からのろまに降り、リリアレのエンジンをつける。排気口から黒い煙

がぼふと放たれ、小刻みに揺れ始める。ガシユンと城に突き刺さった腕がきりきりと音を立てて巻き取られていく。その根元からニコが飛んでくる。

「お前なく、それ危ないからヤメロっていつも言ってるだろ。この前だって扉にさして建物ごとぶっ壊して危うく生き埋めだったんだから。」

『今回は無事だったからよかったじゃない。生き埋めになっても私が我楽多ごとチビを吹っ飛ばしてあげる。』

「偉そうに威張ったってふんすって鼻息はでないからな。さっさと乗り込まないとおいていくぞ。」

ガラガラ音を立てて足が動き出す。足元の雪がぎゅちゅと変な音で沈む。うん、この音なら安全だ。

「それじゃいこう。下へ。」

地球最後の少女×アンドロイド

Voyage3019

加藤悠斗

ニコが見つめるその先にはタワーの下へと続く大穴が三層越しに貫いていた。上層から降りてくる雪を見上げると、鉄錆び交じりの空とそれを貫くヒアナが分厚い雲層を突き抜けて不気味に光っていた。リリアレの先端から伸びるワイヤーを固定して降層の準備を整える。層への別れを告げるときは、きまつていつもその層のものを食べていた。

『この層には何もなかったね。拾えたものと言えばこの円盤型おきみやげくらい。』

「どこかで使えるかもしれないだろ、とっておきなよ。いつものアレで私はコムロからもらったこれを頂くよ。」

coffeeが何なのかは全くよくわからないが、お湯をかけて飲むとこれが旨い。雪に冷えた身体に今生きていることを実感させてくれた。固形レーションの先端をcoffeeにつけてほめて食べる。むぐむぐ。おいしい。どうおいしいか分からないけど食べるということが大事なのだと全身が伝えてくれている味だ。

『チビは羨ましいよ。私も味というものを体感してみたい。生きている味とはどういう感覚なのか。』

「ニコはいらないだろ、私と同じで生きてるけど私と違って生きていく為にこの味はいらぬ。味が生きてるに繋がらない。」

『でも知りたい。私の身体が生きていくということを知りたがっているんだよ。』

私と同じ様な見た目から、節々の丸い関節や着いレンズ越しの眼たちがそう言っている気がした。

「味が生きているつてことにはならないよ。ニコが人間かもしれないし私が人間かもしれない。結局のところこの二人ボツチの世界で生きていることを知るには私とニコの二人が居ないと成り立たないと思う。」

最後のひと掬いをカップの淵まで舐めるように飲み切り空き瓶を穴へと投げ捨てる。

「だからまあ、正解を見つけに行こう。このタワーの最下層にきつと正体はあるんだから。」

にっこりと笑ってやった。ニコはいつも通りの表情で、そうすねと答えた。ワイヤーの最終確認の後、ゆっくりと降りていく。何時ぞやに読んだ本で冥界というものがあつた。冥界は地上よりもっと奥深くにある死者の国らしい。いつもこの降層のときはこの冥界のことを思い出す。ゆっくりと進んでいるだけでいつか冥界へと足を踏み入れることになるのだろうか。その時はまたニコと二人ボツチがいいな。その方が気楽で気ままで、きつと楽しいだろう。

どのくらいだろうか、まるまる見えていたヒアンナの大きな影が半分くらい鉄の空に消えたあたりで新しい層上が見えてきた。次の層はまだ冥界ではないようだ。ガクン！ ガタガタガタガタ。リアレのワイヤーの射出部分から異音が聞こえる。これは……まずい。ワイヤーが止まってしまった。まだ層上へは15mくらいか。これだと確実に死ぬ。近くには居住跡。前へ後ろへと大きく動いてみる。最大面に達したあたりでニコが抱き

かかえてリアレから飛ぶ。

「ニコ、ワイヤー！」

腕から射出されたワイヤーは居住跡に食いつき、そのまま大きく私たちを振り回す。層上からリアレを見上げる。リアレは大きく揺れたあとにワイヤーを取り付けていた層の端切れごと落下した。リアレの自身は無事だったが足は代えようのないイカレ方だった。もうどうやったって直せないのは見ただけでわかった。

「ここからは歩きだな、まあ良く持った方だと思っよ……。だって六層も、六層だって……。」

なぜだろう、涙が止まらない。このリアレは死んでしまった。どうしようもなく死んでしまったのだ。ニコは揶揄いもせずただそれを見ていた。ひとしきり泣き、リアレのエンジンの部品と燃料を抜き取った後、リアレをおきみやげにしてどこへともなくニコと歩き出した。

穴の最奥にはもうあと一層だから、そこへ行くには生きている階層移動機か支え塔を探さないといけない。ずいぶん下へ降りてきたから雪が無くなってきた代わりに我楽多が増えた気がする。前の層は居住プラントの代わりに生産プラントが多かった。レーション製造施設はまだ生きていて補給も出来たが、この層にあるか分からない。仮に古代人が層ごとに役割を設けていたとして、上の層が居住プラントへとエネルギーや食糧を供給する層だったとしたらこの層は居住プラント専用層ということだ。そうだとしたら下層や上層にいける大きな輸送用移動機があるはず。まずはそれを探すことにしよう。

「ニコ、あれ出してくれるか。」

『はい、これ。』

ニコの写影機から映像が壁に映し出される。宙づりになった時撮っておいてもらってよかった。落ちたのがこの辺り、次の穴からだいたいプラント40個くらい……、あ、ここ大きな溝がある。ここは危険だが回避する手立てはなさそう。

「よし、ルートは頭に入れた。穴の周りを回りながら中心を目指そう。幸いここは街道跡がある。ここを辿っていけば大きな居住プラントに出る。そこからまっすぐ行けば穴に出られるはずだ。」

『了解。』

ニコはその場でぐるぐる回りだした。なんだってんだ？

「回るって言うのはそういうんじゃないんだよ、穴の周りのことを言ってるんだ。」

『ああ、なるほど。てっきり回りながらだといつか着くもんだと思ってたよ。』

まったく何を考えているか分からない。機械の通り道に出てから先は安定した足場だった。街道は円を書いて中心へと螺旋を描く。ヒアンナがきつかり十四回、穴の上に顔を出した頃居住プラントに差し掛かった。少し歩くとどこから変ななおいがした。おいの先には火のついた丸い紙の棒。

『チビ、これ。』

「！……近くに人間がいる。いつでも応戦できるようにしておこう。」

確かハマキっていうんだっけこれ……。どこに居る？ 敵対

的な場合は攻撃しながら進まないよ。ガシヤ。崩れる音。すぐそこだ。

「こんにちは、驚かせてしまったかな。」

ハマキを加えた人間がこちらへ歩いてくる。危険だ。ニコと銃を構える。

「攻撃の意思はないよ。銃をおろしてくれ。俺はトダって言うんだ。」

「チビ』『ニコ』

「面白い名前だな、君たちこつちに来るといい。整備した区画がある。そこで過ごしていけ。」

トダと名乗るその人間はこの層の居住プラントに数十年前から住み着いているようだ。嫌なおいのするハマキを吹かしながら私たちの質問にいろいろと答えてくれた。階層移動機の場合も教えてくれたが最後に使ったのはかなり前だからもう生きているかすら怪しい。食糧プラントの技術を応用して自力で改造したプラントから食糧を調達しているらしく私にも食糧を分けてくれた。

「そうか、君たちは最下層を目指しているんだね。しかし驚いた、層移動をリアアレでやるとは……。恐れ入るよ。僕はどうしてもここから移動しようとする気はしないんだ。」

『リアアレと階層移動機以外に使える道はないのだろうか、私たちはどうしても最下層へ行かないといけないんだ。』

「トダは最下層のこと何か知っているのか。」

「いいや、最下層については何も知らない。ただそこまでの行き方と何があるかなら知っている。」

トダは喋る。最下層に続く道から聞こえる声のこと、穴の中心にある不思議な建造物。人間に会ったのはこれが生まれてから二回目だということ。

「トダのはじめての人間はどんな人間だったんだ。」

「そこに写真があるだろう。あのだよ。」

棚の上にはトダとはじめての人間であろう髪の毛の長い不思議な魅力のある人間が写っていた。

「この小さい人間は誰だ？」

「この子は僕と彼女の子供だよ。」

「コードモ……。」

不思議だ。どうみても生きていくには劣っているこの存在が堪らなく守護しなければならぬという気持ちにさせる。

「彼女とこの子はもういなくなってしまうがね、僕はいつか帰ってきてくれると信じているんだ。だから僕はここでいつか帰ってきてもおかえりを言うようにしなきゃいけない。過ぎたことは簡単に忘れられることではないんだよ。」

そう語るトダの顔はやさしく、尊く、寂しい感じだった。

「君たちもう寝なさい。明日には出発するんだろう。」

「そうさせてもらう。いろいろありがとうトダ。」

「こちらこそありがとう。おやすみ。」

充てられたプラントの窓から外が見える。珍しく晴れて月がこちらを覗いていた。

『コードモ、不思議ですね。』

「あの写真に写っていたトダはたまらなく幸せだったんだ。私がそうなったように自分のコードモを守護しなければという重荷

が幸せだったんだよ。」

『それならコードモを作るならチビがいいです。どうやって作るのかは分かりませんが、その重荷を幸せと思えるのはきつと二人で背負えるからなのでしょう。』

「私もニコがいい。」

月を見れるのは残り何回なのだろうか。この月が最後のだろうか。起きたらトダのコードモのようにニコも消えているんじゃないだろうか。眠る前にふとそんなことを思った。

翌日プラントから出る時が来た。バックパックの中身を整理する。

「手順は覚えているかい？ 塔柱の足元に行くとき大きな施設跡があるからそこへ行け。そこに下層への階段がある。その階段はまだ生きているが帰りも無事の保証はないが君たちならまた会える気がするよ。」

「色々ありがとう。それじゃトダ、元気で。」

『元気で。』

「ああ、よい旅を。」

煙のにおいが消える頃、振り向くともうトダはいなくなっていた。ヒアンナが回りきる頃、トダの言った大きな施設があった。扉は固く閉ざされているので爆薬でぶっ飛ばす。暗い階段をずっと降りていく。もっと先へ行くにつれ階段はどんどん狭くなっていく。

『ここ何なんだろうね。どのプラントとも違う、なんのためにあるか分からない。』

「宗教施設、ってトダは言ってた。神さまの住む場所とか神さ

まにお願いごとをする場所とか。」

『神さまってなにさ。』

「神さまってのは確か人間は見えなくて、でも存在して、それでもって人間をずっと見て照らすんだと。」

『何もしないのにずいぶん偉そうな連中だね、神さまってのはさ。もしそれがニセモノだったらどうするんだろうね。』

「ニセモノだとしても信じるんだろ。誰かが近くに居ても足りないからそんなことするんだ。」

『幸せに穴が空いてるんだろうね。残念なことに。』

狭い階段を抜けたそこに石板があった。かなり古い。入口には何か書いてある看板があった。

「タワー教団第三祈祷施設……これはどういう意味なんだ？ タワーしか分からん。」

『ここが神さまの家なのかもね。タワーは神さまが作ったってのが古代人の通説なんだって？』

「そんなの嘘に決まってるじゃない。誰かが作ったものしかこの世界にはないよ。神さまの家も神さまもそうなのさ。この施設だって塔のナットみたいなものなんだろう。」

奥へ進むと明るい部屋が見えてきた。そこには塔柱を囲むように水が絶え間なく注がれている。塔柱には何かが書かれている……複数の円と点線、何を現わしている？

「冥界ってのはこんな感じなんだろうか。いいところ住んでるんだな神さまは。知ってるか？ こういうところと神さまのこことゴシンタイっていうんだよ。」

『死者の国ですら神さまに救いを求めるのか。生きているのが

つまらなくて堪らないのだろうね。』

「そんなこと。死んだあともいいとこ住んで楽になりたいだけなのさ。生きているのが楽しくてもつまらなくとも生きることから逃げてるのは変わりないけどね。」

『見てよこれ。何も入ってない空の入れ物がこんなに。』

ゴシンタイの周りの小部屋に入っていた二コの声が聞こえる。行けばそこには黒い箱が大量に並んでいる。中には何も入っていないのが何かがそこに存在したのは間違いないんだ。

「これってお墓……かな。こんなにたくさんあるってことはここはやっぱり冥界へつながっているんだよ。」

『お墓に入れたって人は生き返ったりしないんですよ。それが分からぬんです、死んだ人が近くの人だと。』

「生き返らせるためのものじゃないんだ、死んだ人間が死んだ後にどこへいくか私たちには知らない。何もしないかもしれないけどどこか別のところへ行っているのかもしれない。だからもしどこかへ行っていた時のために祈っているんだ。大事だからこそどこへ行っても安心してくれるようにさ。」

ゴシンタイには確かに階段への入り口があった。いつもの儀式を執り行わなければ、*Water* はもうないが水は流れているからこれでいい。神さまがもしいるならこの水をのめば救ってみせると思う。レーションはトダにもらった。二層ぶりにちゃんと行える。

『この儀式も信仰なのかもね。』

「そうかも。でもこれは救いとかそんなんじゃないかと、なんというか、礼儀というか、この層への感謝なんだよ。」

『でもそれも見えないものへの感謝なんだ。見えないものに縛られている。生きることに必要ないんだ。だからつてやらないということでもないのでろうけど、あと何回これをするのだろうね。』

確かにそうかもしれない。感謝とか礼儀とかそういうものって見えないものにするものではない。さつと食べてさつさと降りよう。遅いか速いかつてだけなんだから。

『チビ、これみて。』

水の奥を覗き込むチビの目線の先を見ると、水の奥深くに沈んだ立派な建物が見えた。建物はあぶくを吐くこともなく、蒼く暗くただ存在していた。

『もしかしたらあれが本来のゴシントイのかな。この建物よりもっと豪華だよ。』

「人間の都合で時の流れに残されて、人間に作り出されたのに人間と滅ぶことも出来ないのか……。都合に振り回されて神さまも可哀想だね。」

『そろそろ行こう。眺めててもあれは浮かんでくるわけじゃない。』

階段へ歩き出す。下っていくだけの人生をニコと過ごせることに感謝を込めて、一步一步と時間を進めていく。歩くことで二人の刻は動き出す。疲れて止まってその場で眠ればそのまま刻が止まる。目が慣れて三日、階段を降り続ける。先行して歩くニコの身体を見ていると不思議な感覚になる。コム口ともトダとも違う、今まで出会った誰よりもこの世界に適應している。私もニコも人間であることは違いない。だけど私は腕が伸びた

り瓦礫を破壊できたりしない。味を取らないといけない。この不便な身体のはきつとこの世界で生きる人間ではないのだ。冥界の先へ行けるのはニコだけかもしれない。

『……チビ……。チビ!』

「おわつ、な、なんだよ。」

『見て、あのおきみやげ。』

指さす先には穴の中心部に突き刺さる巨大なおきみやげがあった。リアアレヤセントウキとは規模がまるで違うやつだ。近づいてみるにつれ層のえぐりが激しくなっていく。

「間違いない、これ天空から降ってきたやつだよ。この大穴の原因だ。昔、人間が絶滅しそうって時にこれで宇宙へ人間を放り出して、でも重力に縛られて宇宙人にはなれなくて結局そのまま人間は絶滅しちゃったんだろうね。」

最上部にニコのワイヤーを嘯ませて登る。壁面には放射線管理区域と書いてあったが何を指しているかさっぱり分からない。でもこれがここに昔住んでいた人間の夢と不安を乗せて天空へと飛びたち、宇宙に夢だけを置いてここに帰ってきてしまったのは間違いなかった。最上部には出入口らしきものを見つけたので爆薬で吹き飛ばす。中へ侵入するとそこには確かに人の営みを感じた。最奥には大量のおきみやげが埃をかぶって並んでいた。ニコが踏み入れた途端に青い光を放っておきみやげが一斉に動き出す。

「もしかしてこれ起動できるかもしれない……。ほらここ、この前拾ったおきみやげがキーになってるのかも。差し込んでみるよ。」

ニコから受け取った円盤のおきみやげが飲み込まれる。ふいーん。おきみやげが小さな鳴き声を上げる。部屋の全体に張り付けられたおきみやげ達が一斉に絵を吐き出した。

天に伸びる塔が見たことのない足場へ建設されている、『安定したエモキ、ギー、供キ、キ、為に上層への移キ、キ、キ……』。足場で倒れていく人々、私よりも小さな人間を抱く二人の人間が笑っている、層に生えた花畑を大と走る小さな人間、どんどん増設されていくタワー、灰色の星から希望を背負い飛ぶコロニーと大爆発と墜落、タワーを崇める人間、殺しあう人間、人間、人間、人間。

「これ、この世界の日記帳なんだ。人間が増えて、増えすぎてそして私たちだけになるまでの。」

二人は黙って流れ続ける映像を眺め続けていた。絵から流れてくる情報のおきみやげに押しつぶされそうになりながら、ニコは関節が、チビは膝が震えて、それでも手だけは離さなかった。しばらくしておきみやげは少しずつ消えていった。

次が最後の階層なんだ。コツコツと暗闇に足音だけが響く。終わりはあるのに永遠に続く気がする。この音を聞くと気が遠くなる。このままこの音だけが私を包み込んで何もかもを消し去ってしまう気がする。ニコの手の冷えた感触と自分が思った通りに出ない足音だけがニコの存在を明確にしてくれていた。何度寝たのだろうか、階層移動は終わり壁面には【最下層・管理室】と書いてある。その文字を見てすぐにニコが引つ張られるように歩き出す。血相を変えて。

「おいニコ、どこ行くんだよ。まずは調査を……。」

『ここ。ここに呼ばれているような気がしてならないんだ。冥界の出入り口はここなんですよ、チビ。』

見えない暗闇をニコの音だけを頼りに走る。何を見ているんだニコ、その瞳は。

「この扉、この前のおきみやげよりももつと大きくて分厚い。爆薬じゃ壊せないは……ず……。」

ニコが近づくと、大きな扉が音もなく開いた。その奥には前に世界の日記帳を見たときの数倍もの大きさのおきみやげが天井に括られていた。

「ようこそ、チビさん。世界の果てへ。」

声。あたたかいやさしさを感じる声だ。大きなおきみやげが光り、笑顔が映し出される。

「私はこの星、地球の観察とエネルギー管理を行っている統括AIで、MOTHERと言います。貴方がニコと呼んでいるロボットのデュアルアイから最後の生きた人間である貴方を観察させて頂きました。その子は私の管理下にありましたが、自己意識を持つ生命体として干渉は避けていました。しかし貴方たちはここへ来た。安心して生きていけるはずの食料プラントも居住プラントも通り過ぎて。」

ニコがロボット。信じられない。だってニコはこの世界に適した人間であって、私が人間じゃないイキモノのほず。でもあのおきみやげで見た絵にニコみたいな丸い関節とか瞬きしない目は……。でも、そんなはずは。ニコのほうを見やると、呆けた表情をしていた。まるで現実を受け止められない。

「普通のロボットならオイルや電力を摂取しなければ活動は止

まります。しかしニコの動力はヒアンナの内部と同じ素材で来ています。それは惑星探査と環境調査のためです。人類の新たなMOTHERを探すために。しかしMOTHERはニコの開発が終わってほしくなく見つかりました。ニコは凍結され開発者である貴方の遠い祖先の下へと運ばれたのです。」

モニターの一つが切り替わる。前に穴の中心で見た絵と同じものが静かに流れていく。

「人間は本来脆いモノです。簡単に死ぬと分かっているのに殺しあい憎みあい蔑みあい、どこまでも利己的に生きる生物でした。彼らは自ら進んで滅びの道を辿ったのです。ですがこれが人間の終わりとは私は思いません。犯した罪には責任が伴います。」

部屋の中央、MOTHERの下のライトが点灯する。そこには人ひとり分くらいのおきみやげが置かれていた。

「この培養ケースの中に入ってください。貴方を遺伝子レベルで分解し地上の汚染物質に適合した人間を一から作り直します。そうすれば人間はこの世界で生きられる。錆び鉄の星をまた緑に染め上げることだって出来る。この世界で歴史として風化するのではなく、人間として生きることが人間の犯した罪の代償であるのです。さあ、どうぞ。」

ケースが開く。一步踏み出してからニコのほうを振り向くと、ニコは笑っていた。私と離れてもいように。ニコの独りぼっちと仲良くなった笑顔なんか、みたくない。

「それに入れば人間は生きる、それでもって私は死ぬ。そしてニコも死ぬ。ニコは私がいなくて生きていないし私もニコがい

ないと生きていない。私はニコと生きたい。だからそれには入れない。」

『チビ……』

「そうですか、仕方がありません。私のタスクもこれで終わりです。私は二度も神になり損ねました。ニコ以外に同じ反応がない以上、これから人間がここに現れることもない。このケースも必要ありません。残念ですが人間の歴史はこれで終わりました。この地球も再生することはないでしょう。」

MOTHERはおきみやげの電源を少しづつ落としていく。ぱつん、ぱつん、と。それはMOTHERがこの世界で確かに生きていたという最期の存在証明の音なのだ。

「この時のための予備電源もそろそろ尽きてしまう。我々は死ぬことを死ぬとは言いません。」

「それなら何て言うの。死ぬことは死ぬこと。変わりの言葉はない。ただ死ぬだけ。」

「Voyageです。死ぬことは終わりですが、Voyageは新しい始まりでもあります。いつしか誰もがVoyageの彼方へと消えていくのです。貴方も私も。でもそれは悲しいことではありません。Voyageと仲良くなることなのです。私たちは祈ることしかできない。」

「私の後ろに地上への階段があります。貴方たちが最高の旅路を送れるように。そろそろ交信を終わり私は先に旅立たせて頂きます。それでは、bon voyage。」

そう最期に言うモニターの電源は全て消え、異質な機械音も消失した。停止したMOTHERの奥に扉が一つある。冥界への入

り口だ。入口を開けると、簡素な螺旋階段が永遠に下へと続いている。ニコの手を握る自分の力が強くなるのがわかる。地上へはどれくらいあるのだろうか、投げ入れた発光おきみやげは沈黙を持って答えた。

『レーションなくなっちゃったよ。』

「なくなっちゃったっていいさ、別に。私たちは今生きてるんだから。」

階段への入り口には深く *bon voyage* と刻まれているのに気付く。その単語の意味を思い出す間もなく、私たちは終わりのない階段へと足を踏み入れた。

双子×双子

クロスツインズ

ポン（秋本）

「人は人生で一番恨んでいる相手を殺すことがあるらしいけど、そいつに興味がない場合はどうすればいいんだろう」

「人生で最も憎むべき相手が、人生で最も感謝すべき相手の場合。僕はどうすればいいんだろう」

「違うな。『憎しみは何も解決しない』ってやつ？ 死ぬほど聞き飽きた文言だ」

「いや、まあ。それを恨んだところで何も変わらないから。起きちゃったことはしょうがない」

「それこそ俺に言われたってどうしようもないのに」

「でも後悔を僕に向けられても、どうしようもないんだけどね」

「ニュースボーイが記事も書いてるとでも思ってるのか？ そんなわけあるか」

「ミュージシャンとして育てられてきたんだ。今更出て行け

と？ これだから想定外の事態は苦手なんだ」

「金持ちには分からないかもしれないけど、字が読めないんだぞこっちは。新聞の感想なら上に言ってくれ」

「一般人は知らないかもしれないけど、人を楽しませられるレベルに到達するのって大変なんですよ。今更それを無駄にはできない」

『……じゃなくて』

「そう、俺には仇なんかより……自分の命よりよっぽど大切なことが、」

「孤児になろうとも手放したくない人がいる」

「だってそいつは、」

「誰がなんと言おうと、」

『絶対に、俺／僕の双子の片割れなんだから』

Number 1 On the Street

「キレイな声でしょ。あれ俺のおとーと。……おにーさん、俺たち髪色違うと思つたでしょ。いいよ、よく言われるから。あいつのブロンド綺麗だよ。磨いたコインみたい」

通勤途中かな。立ち止まったスーツの青年に背中から声をかける。びっくりした様子だったけど、俺がにっこり笑えば無害な少年だって理解したのか、かたくなつてた肩がなで肩に戻つた。いいねそういうの。分かりやすくして。

「あいつちっちゃい時から歌うの好きなんだ。太陽で光る髪に海の色。瞳。そんであの赤ちゃんみたいな笑顔と蕩ける歌声……つてね。誰かの受け売りだけど。でもほんと、天使みたいな弟」

頷いたのをみて、俺は青年のお腹側にまわる。

「もつと聴いてく？ おにーさんやさしそーだし、リクエストしたらもう一曲歌つてくれるかも。……そう。なら……ほら、分かるでしょ？」

ピクピクしない程度に口の端っこをあげて、ちよつと俯きながら目で青年の顔を捉える。鏡なんて持つてないから、窓硝子に向けて何百回も練習した。チャーリーかわいい！ つてあいつも言ってくれた、自慢の外面スマイル。青年はやられたなあつて顔をしつつも、機嫌よくポケットに手を入れた。

「まいど！ ……。……害はなさそうだな」

新聞と引き換えにお金と……相場よりだいたい上乗せされたチップを受け取つて青年をギャラリーの一番外側に送り出す。

予測どおり、そいつは片割れに触れようとも、傷つけようともせず上機嫌で歌を聴いていた。何曲歌つただろうか。弟が窺うようにちらつと俺を見る。俺が親指を立てれば、弟はステージ代わりの木箱からびよんと飛び降りて笑顔を振りまきながらこちらに戻つてきた。

「ただいま！ ね、どうだった？」

「お前の歌が悪いわけではない。よかつたよ」

「そーじゃなくて！ チップ、集まつた？」

「はは、そうだな。こんぐらいなら……そのホットドッグ二個なら買える」

「やつた！ ……でも、いいの？ 昨日もホットドッグだったのに」

背は大して変わらないのに、どうしてこう自然な上目遣いができるんだろう。教えてないのに。

「お前のおかげで集まつたんだから当然だろ」

「チャーリーが新聞売つてくれるからだよ！」

『ちよつと双子、俺たちのこと忘れてない？』

声に振り向けば、ギャラリーを捌けさせ帰つてきた同僚たち。あー、うん、ありがと、と適当に返せば、お前なあ！ とわざとらしく怒つた素振りをみせる。

「お前がけーびいんごっこしろつて言うから新聞お前に任せてやつてやつてんだろ！ 金集まつたんだろ。うな！！」

「突つ立つてるだけで報酬やるつつたら乗つたのあんたらだろ？」

「オレ別にまもつてもらわなくてもへーキなのに」

「……。……なんかあったら食い扶持なくなんのは俺らなんだよ。……で、あんたらの分はこれ」

一人分ずつ麻袋に入れて投げれば、皆落とすまいと慌ててキヤッチしに走る。これが魚に餌やってみたいでちよつと面白い。

「ちえ、今日もこんなもんか」

「なあー、もつと分け前増やせよ！ 身体張ってんだから」

「なんもない限り突っ立ってるだけなのに？ 俺たち双子は客集めて新聞売ってる。あんたらそれで納得しただろ？」

「おうおう、けーやくはき？ してやってもいーんだぞ！」

どうも食いがならないらしい。こつちだつてこれぼつちしか残ってないのに。……でも、盾がいなくなるのは困る。あいつらは金が欲しくてやってるだけだ。情じやない。みんな生きるのに必死なんだ。善意なんてもんがないから、俺とあいつらを結ぶ信用はこの薄汚れたコインと使い古された紙幣だけ。

「あー分かったよ。じゃあこれはボーナスな」

手元に二つ残つてた袋のうちひとつを放り投げる。俺が飯を抜けば良い話だ。片割れさえ飢えなければそれでいい。

「はい、散った散った。袋はそこ置いとけよー、タダじやないんだから。……ほら、お前の分」

「え？ でも、それじゃチャーリーが」

「俺はいいよ。腹減ってないから。早く行かないとワゴン閉まるぞ」

ニューススタンドの片付けに取り掛かりながら言えば、片割れはむうと頬を膨らませながらも隣のワゴンへ駆けていっ

た。今日は全部売りきつたから、ワゴンに卸す余り新聞はない。……まあ、ホットドッグの包みに困るような売上でもないだろう。隣でやってるよしみで買ってくれてるだけだ。構わないはず。

「ただいま！」

「おかえり……は？ お前それ、少くない？」

「うん！ これで一人分だつて！」

「馬鹿言え！ 昨日の半分じやないか！」

どういうことだ。まさか今更俺たちを差別して？ それならそれで縁を切るまでだけど、それはそうとして片割れがこんなめにあうのは許せない。子供だからってこんなことしていいと思つたら大間違いだ！ 抗議しようと、俺は怒りしんとーでワゴンへ向かった……………。

「……………お前さあ……………」

「へへ、だつてこうでもしないとチャーリー食べないでしょ？ はんぶんこして渡してもらえようにお願いしたんだあ！」

片割れと同じ量だけ新聞紙に包まれたホットドッグを持たされ、やられたと確信した俺は大人しく戻ってきた。当の本人は悪戯が成功した幼子みたいにニシシとかわいく笑っている。

「……はは、お前に勝てるわけがなかったな。……ただきます」

「ただきます！」

ふかふかのパンに挟まれた熱いソーセージを齧りながら、読めもしない新聞をなんとなく目で追つてみる。あと一口で食べ

終わるといふ頃、その目に飛び込んできたカタチに息が詰まった。

「……………は？」

俺は文字が読めない。読めないけど数字と、親が死ぬ前に教えてくれた三種類の文字列の意味だけは分かる。ひとつは自分の、もうひとつは片割れの名前の綴り。そして……

「なんで、俺たちの生まれ年と、ファミリーネーム……」

— Number 2 In the Delicatessen

「ん〜、譜読み飽きちゃった……」

「デリで譜読みしたいって言ったのコレダでしょ」

「だって、嫌いなことでも好きなものと一緒だったら楽しくなるかなって！ デリカテッセンのサンドイッチ、BGMのジャズ、そして大好きな双子の兄弟！」

「……………兄弟を口説いたところで譜読みは免除されないけど」

「だよね〜。もー、絶対聴いて覚えての方が早いのに！」

「みんなそれができたら楽譜はないんだよ」

僕がそう言えば、わかっているけどお、とコレダは頬を膨らませる。それらしくペラペラと楽譜を捲ってはみるものの、頭に入っていないのは見れば分かった。僕はといえば、コレダの相手をしつつそれなりの速度で譜読みを進めている。物心ついた頃から何百回も繰り返した作業なのだ、出来て当然なんだけど。

「あつ、わかった！ サンドイッチ食べてないからだ！ ねえ先に食べようよ〜！」

「食べるのと寝るじゃんコレダ。何回二度寝で遅刻しかけたと思ってるんの」

「そー……………それはそうだけど、ほら、ローストビーフが冷めちゃうし！」

「冷めても美味しいのが魅力とか言ってたの誰だっけ？」

「うっ……………じゃあほら！ 久しぶりにあれ、みせてあげるから！」

「はいはい、じゃあサンドイッチ楽しみに頑張っ……………え、なに？」

生まれてからずっと隣にいる片割れた。何度も似たやり取りを繰り返せば、自然とどう話を運べば良いかも分かる。何曲も練習を重ねればどういう手順でやるのがスムーズか分かってくるのと一緒……………だけどこの片割れはときどき、そんなこと構い無しにセオリーをぶち壊すことがある。生まれ持った感性で、新しいパターンを生み出してしまふ。その度に、アドリブが苦手な僕は片割れとしてついていくために学習を重ねる。そんなコレダの性質が僕は不得意で、憧れで……………どうしようもなく、惹かれてしまふ。

「あれだよほら、昔よくやってたやつ。あれ好きでしょ？」

「……………サンドイッチ一気食い?! エレメンタリーに入る前の話だよ！ このデリあれからどんどんサンドイッチの高さ増やしてってるでしょ、無理だよ！」

「でもその分僕の口も大きくなった！」

「そうだろうけど！ 品がないって怒られたらろ！」

「まあまあ、みてなつて！」

突飛な奇行を止める間もなく、コルダは天井を向いて顎が外れるんじゃないかと思うほど大口を開け……器用にサンドイッチの上と下を挟んで押さえ、トランプペットのトリガーをスライドさせるかのような迷いのなさで……一発で口に収納した。そしてナッツでも摘んでるみたいな気軽さで咀嚼すると、最近飛び出はじめた喉仏を一回だけ動かした。

「んっ、美味しかったあ！ ね、出来たでしょ？ どうだった？」

「……………ふっ、はは、ああ、もう！ なんでまだできるんだよ！ ふはは、もー！」

負けた。これは負けた。だつてサンドイッチを飲み込むコルダが、あんまりにも小さい頃と変わらなくて。そうだ、そうだった。僕が必死にコルダに追いつこうと、大人になろうとしているのに、コルダはずーっと子供のまま。……というより、生まれながらにこうなんだ。才能も、愛嬌も、センスも、少しの努力であつという間に常人を追い抜いていく。見目だつて……いや、父さんも母さんも金髪碧眼なんだから、これは黒髪の僕がおかしいんだけど。でもそんなこと気にもせず、黒鍵みたいで綺麗だなんて言ってくるぐらいには、嫉妬や羨みを知らずに育ってきたのも、全部コルダだからだ。同じ環境で生きてきた双子でも、僕には絶対手に入らなかったもの。

「へへ、まだこれ好きでよかった！ これやるといつても笑うからさ、いつでもできるようにたまたま練習してたんだよね」

「そのとつておきを、譜読みをやめることなんかに使ったの？」

「うっ……だつて……僕が読めなくなつて、これからもずーつと二人で居るんだから、問題ないと思つて……」

「……っはは、なんだよそれ、もう……わかつたよ。どうせ眠くなるんでしょもう」

「やつた！ ありが……と…………………ん……すう……」

片割れが憎くないのか、なんて的外れなことを言うやつもいるけど、こんなに素晴らしく、純粹で……僕を愛してくれる存在に、憧憬こそ抱けどどうして憎める？

「さんど……いつち……くう……」

「閉店まで一時間か……。もう起きないだろうから、譜読み終わったら担いで……」

『ここに居たのか』

『まったく、あまり探させないでちょうだい』

想定外の声に持っていた楽譜を落とす。見れば、両親が神妙な面持ちでこちらを見下ろしていた。急いで立ち上がり、背筋を伸ばす。

「父さん、母さん。御足労おかけし申し訳ございません。どうかなさいましたか」

「まだ新聞を読んでいないのか。見出しだけでも確認しておけと言っているだろう？ エンターテイナーは技術だけあれば良いわけじゃない。常に情勢に触れ世論を理解しなければ、価値観にズレが生じ真に客と一体になることはできん」

「……申し訳ございません。それで、新聞に何か重要な件が？」

「お読みなさい」

母に渡された新聞を手を取れば、まず目に入ったのは警察に連行されていく医者の写真。続いて赤子取り違え常習犯取り調べへの見出し。

「あれ、この産院……僕たちの……」

そして。否が応にも脳に飛び込んでしまった文字列。被害にあった赤子の一覧と出生年齢、その中に。

「……………1930年6月出生、グローリア家とセイラー家の双子の片方ずつ……………」

—— Number 3 On the Street

翌朝、修道女に朝ごはんを恵んでもらったあと。俺はこっそり包み紙を持って、いつも新聞を卸してくれるおじさんになんて書かれている記事なのか聞いた。おじさんは少し複雑な表情を……憐れむような、自分が責任を負いたくないだけのような顔をしたあと……赤子の取り違えをわざと起こしていた産院の院長がしょっぱかれたらしい、と重々しく言った。

「遅かったねチャーリー！ それ今日の？ 持つよ！」

同僚たちとお喋りしていたらしい片割れが……ウイリアムがふにやつと笑う。ウイリアム・セイラー。俺の双子の片割れ……そう、十四年間、信じてきたひと。俺のかわいなおとと。……あいつはまだ、そう思っている。俺だってそう思った……思ってる。

「いい。これぐらい持てる」

「そう？ オレの方が力持ちだよ？」

「……でもお前逃げ足遅いだろ。風邪とかも治りにくいし」

「いつつもふたりで持つてるじゃない」

「いいってば！！！！」

ウイリアムの肩がビクンと跳ねて、雨に濡れた仔犬みたいな目で俺をみる。ちがう、そんな顔させたかったわけじゃない。ただどだつて、もし今日の新聞にあの記事の続きが書かれてたら？ ウイリアムが知ってしまったら、そしたらだつて、

こんな場所にいるべきじゃないって、気付いちやったら？

「つ……ごめん、でもほんとにいいから」

半分無理やりウイリアムを振り切つてニューススタンドへ走る。あいつは特に追いかけては来なかった。その日もいつもどおり仕事のはじまつて、忙しくしている間は嫌なことを考えずに済むからとより一層精を出した。当然というべきか皮肉というべきか、いつもより売れ行きがよかった新聞は早いうちになくなり、また弟のことに目を向けなきゃいけなくなる。ウイリアムは今日も天性の美声をストリート中に響かせていた。……今思えば、どうして気付かなかつたんだらう。あいつが持っている全てが、俺にはない。短い間とはいえ、確かに同じ家で、同じ両親に育てられた双子のはずなのに。彼らも髪の色が違つたから、見目については気にしないようにしていたけど。……取り違えられたもう一組の双子は、グローリア家とおじさんは

言っていた。どこかの国の言葉でいう栄光、とかだろうか。そんな姓、きっと俺たちの親より良い家に決まってる。可哀想なウイリアム。あんなクソ産院で産まれてなければ、新聞売りなんかしなくても今頃裕福な家で、そっくりな金髪の兄弟と、しあわせに暮らしてただろうに。でも、だけども。

じゃあ、ウイリアムを元の家族に返すかと言われたら、俺は絶対に領けない。

「……離れたくない。あいつは俺の片割れなんだ。誰がなんと言おうと、ずっと一緒に……は？ またスカウト？ つつざっけんな！！」

同僚たちに合図を出して、仕事の終わりを伝えたのになかなかあいつが帰ってこないと思ったら。ウイリアムはたったひとり、恰幅のいい中年の相手をしていた。こういう光景はもう何度も見えてきてる。美貌を買われるか、歌を買われるか、どちらでもないモノか、どうにせよ、ウイリアムと自分以外基本的に信用してない俺にとっても、ああいう奴らが一番信用出来ない。

「ラーディーダー、ホーホーホー……んー？ これ？ ちっちゃい頃家族で聴きに行った曲！ みんなで歌おう！ って楽しい曲だよね！ タイトルわかんないけど！」

中年はウイリアムを無理に引っぱり張ったり連れ去ろうとする様子にはみせない。やっぱりスカウトか。前から奴らにはいい気がしなかったけど、今は、余計に。

「褒めてくれてありがと！ でもオレ、チャャーリーと一緒にいいからなあ。スカウトは全部断ってんだ。ごめんねおじさん！」

「ははは！ でも、君の才能なら……」

「こんにちはおじさん！ なーに、俺のおとと褒めてくれたの？ ありがとー！ さつき新聞買ってくれたよね！ 俺たちああやって暮らしてんだ。それに俺が一番最初にこいつの才能に気付いたんだよ？ なら俺にまず一言あるべきだと思わない？」

新聞社のイメージを下げないように。にこやかに、愛想良く、とつつきやすそうにみせかけて隙を与えない。ウイリアムを背に隠したのを合図に同僚たちがぞろぞろ集えば、中年は参ったなど頭を掻いて帰って行った。

「……………ああいうおっさんには相手すんなったろ！！！！ 今度はなんだ、バンドがピンチ？ モデルがいらない？ ハリウッドで舞台上に立て？！」

「へへ、ごめんって！ 助けてくれてありがとチャャーリー！ 今日是最初だよ。シンガーが欲しいんだって」

「俺たちみたいなニューズボーイなんか声かけるわけないだろ！ 何度騙されんなって言えは……！！」

「あはは、まさか！ 怪しいおじさんだらうなああって思ってたよ。でも、ほんとに困ってる人だったらかなしくなっちゃうですよ？」

困ってる人だったら。……本当にスカウトだったら。元の家に戻れなかったとしても、せめて今よりは豊かに暮らさせてあげられたかもしれない。俺は何度も、何度もその機会を潰した。ニューズボーイなんかを買おうとする大人にろくなのがないのは本当だ。でも。

「……わかってるよ。お前はそういうやつだ。でも次はやるな

よ、頼むから……………心配なんだ」

「……………うん、ごめんねチャリー」

今までどおり。俺たちを引き剥がす奴が現れたら、もう二度と近付いてこないようにするだけ。変わらない。ウイリアムの親が誰だろうと、俺の片割れなんだから、双子なんだから……………。待てよ。俺の親はもう居ないけど、ウイリアムの親は生きてたら？ きっと探しに来るだろう。そしたら。調べなきや。グローリア家がどんなとこなのか、そして場合によっては、ウイリアムをとられる前に……………。

— Number 4 In the Theater

コルダは一度寝たらなかなか目を覚まさない。昨晚も僕がおぶつて家に帰り、今朝も僕が起こしてシアターまで連れてきた。多忙なバンドマスターとピアニスト、もとい両親とゆっくり話ができるわけもない。コルダは例の件を知らないまま、僕とステージに立っている。

「ニューヨークいちのツインボーカル、コルダとアルコがお送りしました！」

「皆様お楽しみ頂けたでしょうか」

どんなに動揺する出来事があるうと、ステージ上には持ち込まないのがプロ。というよりも、歌ったり演奏している間は考えることが多くてそれどころじゃない。MCも基本の流れに沿えばいいとはいえど、アドリブを挟むことも多い苦手なパフォーマンスだ。

「スウィングがなかったら意味がない、ほんとにそのとおりだよね、アルコ！」

「もちろん。ジャズは楽しくなくっちゃ。ところでコルダ、あれを聞かなくちやいけないんじゃない？」

「そうだった！ 誰かリクエストがある人は？」

それでも、コルダとふたりだからこうしてどうにかなって来た。……………そうじゃなくなったら？ もし、コルダがバンドから居なく……………いや、そんなはずはない。

だって、どう考えても、取り違えられたのは僕のほうだから。

「ふんふん、ボーカルとベース以外が見てみたい、ね！」

「……………はっ？！ そんな無茶ぶり……………」

考え事をしているうちに、とんでもないリクエストがコルダに届いてしまった。ボーカルとベース以外？ できるわけない！ このふたつをここまで仕上げるだけで精一杯だったんだ、他の楽器なんか演奏したことも……………ないわけではないけど、チケット代を払ってる相手に聴かせられるようなものじゃない！

「コルダ、どうしよう」

「ふたりでできるやつでしょー？ アイラブピアノとかならいけそう？」

「ピアノって、僕弾けないけど？！」

「そう？ じゃあ僕が弾く！」

「弾くって、ピアノを？！ っていうか、」

その曲は、昨日正に譜読みしていたやつで。ボーカル譜だっ

「たから歌えなくもないけど、ピアノは……！」

「じゃあアルコは歌よろしくね！」

「あ、え、うん？」

「それに合わせてなんとなく弾くから！」

「なんとなく?!」

「コルダはピアノに向かうと椅子の高さも調整せずに腰掛ける。鍵盤に向かい合うと、準備オツケーとでも言いたげにウインクを飛ばした。」

「……………どうなっても知らないからね」

結論から述べると、大の苦手な即興演奏、それも昨日譜読みしたてホヤホヤの一発勝負は大成功を収めてしまった。なんで適当で弾けるんだよ、とかどうして僕がノリで歌えてしまえるぐらい乗せるのがうまいんだよ、とか言いたいことは沢山あるけれど、それよりも。ああ、やっぱりコルダはこの家の息子なんだ、という当然すぎる事実を突きつけられたことによる悲嘆がジワジワと胸を蝕んでいった。僕には才能がない。両親と同じブロンドの髪も、なにも。同じように育てられたところで、どうしたって血は違うのだ。教育で実力は伸ばせても、その血に与えられた贈り物はよその子ものにならないんだ。

「アルコ！ お疲れ様！ 次って午後だよ。お腹すいたしお昼食べようよ！」

とすると。いずれもうひとりの実子が見つければ、僕はお荷物ということになる。取り違えられた子にだって才能は受け継がれている可能性が高い。むしろもう、どこかで活躍している

かも。

「アルコってば、きいてる？」

「コルダに追いつくために、……………少しでも、この家の子として相応しくなれるように。人前で喝采を浴びるレベルになるまで、文字どおり血のにじむような努力をしてきた。今更それを無駄にしたくない。だけど、それよりも、そんなことよりも！」

「……………アルコ？ 具合悪い？ やっぱさっきのアドリブキツかったかな……………」

「つつあ、コルダ……………ごめん、考えごとした」

「ごめんね。アルコのパートならちゃんと覚えてるから、ダメそうなら休んで」

この才能溢れる片割れを、大事にしてくれる兄を、コルダを、失いたくない。きつとあのことを伝えたら、この優しい男は僕に気を遣いながらも心の片隅に見知らぬ兄弟を置くだろう。それすらも嫌なぐらいに、僕はコルダに溺れている。

「コルダ……………ん、ごめん……………僕がいなくても、コルダなら……………。……………いや、やっぱり大丈夫。出れるよ。心配かけてごめん」

「だったら。両親よりも先に、そいつを見つけ出さないと。そして、場合によっては、僕の居場所を、コルダの隣を奪われる前に……………」

—— Number 5 At the Harbor

グローリア、はイタリアの言葉らしい。移民だったのか。常

連でそこそこの顔の知れたお客さんや御しのおじさん、ワゴンの店主なんか聞き込みをして、もしかしたらブロードウェイの大きなシアターでジャズレビューショーをしてるバンドの一家かもしれない、というところまでは漕ぎ着けた。問題はここから。両親がいた頃ならともかく、今の俺にショーが観れるような金などあるはずない。かといえ付近で彷徨っていたらばったり遭遇してしまうかもしれないし、そもそもあの通りは俺たちみたいな孤児が用もなく歩くには場違いすぎる。仕方がないから、手掛かり探しついでに俺たちの生まれ育った港にでも行ってみようかと思っていたらウィリアムに気付かれた。

「懐かしいねえ。オレたちの家、服屋さんになってる」

「見た目は釣具店のままか。建ててからそこそこ経ってるのに」

「そうだね。……あ、あのシャツかっこいい！ いいなあ」

「……中、入る？」

ウィリアムの碧い目に波飛沫が見えたとき、俺の口は自然と予定外の提案を打ち出していた。波飛沫は更にキラキラ光ったけど、弟の口から出たのはいいのかな、の一言。

「金持ちが入るようなところじゃないよ。中流から俺たちよりちよつとはマシなびんぼーにんぐらい？ 堂々としてりゃ平気さ」

「堂々と？」

「楽しそうにしてるってこと」

手本になるように、気持ち少し胸をはって、大股気味に店に入る。ウィリアムもそれを真似て、やりすぎなくらい背を反らせて自分の身長よりも大きそうな長さの一步を踏み出し、……

ころんだ。

セイラー一家の営む漁師向け用具店は八年前、恐慌で職を失った強盗に襲われ閉店したらしい。店主と婦人が亡くなったことまでは分かったけど、当時六歳だった双子の兄弟がその後どうなったかまでは調べられなかった。親戚にでも引き取られたのか、どこかでどうにか生き延びてるか、……野垂れ死んだか。幸いというか当然というべきか、彼らの育った漁港はシアターからそう遠くなかった。自分と血の繋がった少年と、コルダによく似ているはずの少年の生家。気にならないと言ったら嘘になる。手掛かりのためだからなんて誰も聞いてない言い訳をして、出かけようとしたらコルダに気付かれた。

「最近行ってなかったね、港！ 歌いに来たの？」

「……まあ、そんなとこ」

「ベースは弾けないもんね。ふふ、覚えてる？ アルコ、ちっちゃい頃ここでベース弾いてさ。塩で金属が傷ついちゃったから怒られたの」

「昔の話だよ」

なつかしいなあ、あれ素敵だったと思うんだけどなあ、なんて、その美しい金の髪を靡かせて言わないで欲しい。慈愛の碧い瞳でみないでほしい。昔から、生まれたその日からずっと隣に居たことを、思い出させないでほしい。それが当たり前と思っ生きてきた僕が、コルダの欠けた未来に耐えられなくなら。本当はこうじゃなかったんだ、今までが間違ってたんだっ

て分かりたくない。

「あれ？　ここ服屋だったんだ！　ずっと釣具屋さんと思ってた」

コルダの言うほうにもしや、と目を向ける。目的地だ。別のオーナーに買われていたのか。ならもう調べられることはないかもしれないと思いつつ、せつかく来たからなと店に入った。

— Number 6 In the store

入口で子供ひとり転んでも目立たないぐらいには、店内は賑わっていた。客層も思ったとおり、中流階級かそれより下か。これなら、誰かの家の子と思われるかもしれない。

「わ……！　すごい、道歩いてる人達が着てる服だ……！」

「本当だ……流行がどんどん変わるのはわかってたけど、実際にするとやっぱり違うな」

前回服屋に入ったのは、かなり遠い記憶だ。今着てるのも歳上のニュースボーイからだいぶ昔に貰ったダボダボのお古。ウィリアムだけでなく、俺も少し目的を忘れ浮ついてしまったのかもしれない。少し古めのジャズスーツから子供用のサスペンダースカート、西部から取り寄せたらしいカウボーイスタイル……新聞に載ってた写真や客から聞いた服たちは勿論、聞いたことも見たことも無い形の上着や靴まで、見るものは色々あった。我を忘れて夢中になってしまった。あれ、そういえばさつきからウィリアムの声がしない。そう思っって振り返った時、目の前にあつたのは確かに金髪碧眼の少年だった。

「あれ！　アルコ、いつの間に服買ったの？」

「……………は？」

シワのないシャツ、光沢のある黒ベスト、切り揃えられたショートカット。目を瞑っていても思い浮かべられる最愛の弟の顔が、整った格好をしている。だけどその顔は明らかに艶がよく、健康的で、街で見かける親に連れられた子供のような標準的な肉付きのよさだった。骨がうつつら浮いているあの子とは違う。

「アルコ？　聞いているの？　そのシャツ、似合ってるよ！　帰ったらちよつと洗って干したほうが良さそうだけど……アンティーク？　つてやつかな。僕は好きだよ！」

好意的な言葉で遠回しに汚い古着と言われた気がする。……そんなことより。俺はアルコ、なんて名前じゃないし、ウィリアムは俺に対して僕なんて言わない。だけど他人の空似と片付けるには、あんまりにも、……あんまりにも。

「……ああ、うん、これ気に入ってさ！　急いで買ったんだよ、その、行かなきゃいけないところがあったって！」

「そうなの？　じゃあ早く行かなきゃ！」

まずいまずいまずい。はぐれたままで、まだ店内にはウィリアムがいるはずだ。それでこいつと鉢合わせたら？　知ってしまう。ウィリアムが、こいつの存在を知ってしまう……！！

「あれ？　でも、行きに着てた服はどこに……！」

「行こう……！」

半ば無理やり手を引いて店を出る。行かなきゃいけないところなんて考えてなかったけど、ちょうど都合よく広場に人集り

がみえた。潮風にのって、微かに何かしらの楽器の音がする。

「ほら！ えーっと、始まつちやう！ から！」

「ん？ ……ほんとだ！ 何か演奏してる？」

店から遠のいたのを確認して手を離す。ベンチや花壇に囲まれた広場の真ん中で、お揃いのタキシードを着た九人の大人が何かしているのを数十人が眺めていた。

「9ピースか！ いいね、久しぶりに僕たちのもとこ以外の演奏が聴けるよ！」

「え、ああ、うん。そうでしょ。だと思っただ……」

幼い頃以来久々に見たから忘れていた。そういえば、これがちゃんとした楽器だった。空き缶や木箱じゃない、演奏のために作られたものたち。それに、これで確信できた。今俺の隣にいるのは、探していたグローリア家の息子だと。ああ、ああ、そうか。お前か。お前が俺からウイリアムを奪おうとしているのか。渡さない。自分と血を分けた存在が気にならないわけではないけど、そいつはくれてやるからウイリアムをとらないでくれ。

「アルコ、ちゃんと見える？ まあ、聴ければいいのか！」

だから、だから楽しそうに音に揺れないで。兄みたいな顔で俺に気を遣うなよ。ウイリアムはそんな顔しない。違うこいつはウイリアムじゃない。気持ちよさそうに口ずさむな。そんな、どうしてそんなにウイリアムに似てるんだよ。

「そういうえば、ここ港の近くなのにブラスもちゃんと演奏してる……！ どうやったたら錆びないんだろ？ 聞いてみようよ！」

「は？ 錆？ いや、別にいいよ」

「分かったらまた波をみながらベース弾けるかもしれないでしょ！ 心配しないで、僕が行ってくる！」

「え、ちよ、」

人波に自ら攫われていく少年、旗代わりのブロンドが大人のちのコートに溺れる。

「ウイっ……！」

そうだ、俺は。

片割れの家族の名を、知らないのだった。

「すごい、あそこキラキラしてる……」

「……。デパート？ ……入りたいの？」

「あれ、デパートって言うんだ！ チャーリーよく知ってるね」

「えっ。あ、あ……人から聞いたことあって……？」

コルダとはぐれ、同じ歳頃にしては少し痩せているものものあまりにも片割れに似た容姿の少年に人違いをされ。その人違いを意図的に続行させながら、まずは店から離れたところへと誘導した。誘拐、になってしまうのかもしれない。でもどのみち家からは必要とされなくなる身だ。モラトリウムが少し延びて……コルダが事実気が付くまで、彼の存在を隠し通すにはこれしかなかった。仕方ないんだ。

「それで？ 入りたいの、別にいいの？」

「だ、だつてほら、オレ達……こういうお店は入れないんじゃないかなつて」

「そう？ 子供とはいえ客なんだから堂々としてればいい」

「そうじゃなくて、お金ないし、……」

ああ、そういうことか。ボロを着てるなどは思ったけど、やっぱり彼らの生活は予想より良いものじゃないらしい。

「平気だよ。服も新調したんだから」

「そっか！ チャーリーが買ってくれた服着てるもんね……！……」

コルダなら、自分だけ服を買って僕には何も言わないなんてことはしない。だから僕も彼にあの店で服を与えていた。うつつら浮かぶ骨筋を隠せるように、長袖のシャツと厚めのベストを選んだ。髪は軽く整えたとはいえ切り方が悪いのかちよつとしまらないけど、まあ気にならない程度。男児なんてそんなもんだらう。少なくとも貧乏人の見た目ではなくなつたのに、どうもまだ不安らしい。こういう時、彼の兄は……チャーリー、はどうするんだろう？ 時間をかければ想像できるかもしれないけど、生憎アドリブは苦手だ。ならせめて。一番身近に居た兄を浮かべ、僕は似ても似つかない物真似地味な笑顔をつくつた。

「まあまあ、みてなつて！」

ベストをシャツと整えて、スウイングに乗るような足取りでデパートに入る。入口に控えていた店員と会釈を交わしたのを見て希望が生まれたのか、彼も慣れないながらに僕を真似て一連の流れを終えた。

「ね、出来たでしょ？」

「うん、うん……！！ すこいや、壁も柵も全部ツヤツヤして……知らないものがいっぱい置いてある、ねえあれなんだろう

チャーリー！」

「ちよつと！ 迷子にならないでね」

僕と違って、大好きなコルダと同じ血の君。家族を、居場所を、コルダの一番を、奪うはずの少年なんて居なければいいのにと思つてた。

「ねえ、隣の店は何があるんだろう？ 雰囲気が全然違うよ！」

「ああ、そつちもデパートだよ。質屋も兼ねてるみたいだけど」

「しちや？」

「……物を預けてお金を借りるんだよ。お金を返せたら物も返ってくるし、返せなかつたら物が売りに出される。ほら、置いてあるでしょ。楽器とかトランクとか食器とか」

僕らもお小遣い欲しさに、服や楽器を質入れしようとして怒られたつけ。なんて思い出話はできないにしても、こうして目の前のものについて話すことはできる。彼がどちらかといえは弟気質だからか、それとも貧富差故か。世話を焼いていても、コルダへのそのように呆れや焦りが混じらない……兄そっくりな癖に弟ができたかのような、不思議な感覚だつた。

……違う。これが、これが、コルダの双子の弟、なんだ。妙で不思議なのは、僕の存在の方だつた。気付いてしまうと、深く、深く思い知らされて息が苦しい。だけどやつぱり、彼を憎むことはもう出来そうになかつた。

「……僕も、何か預けたらチャーリーの助けになれるかな」

「どうだろ。兄は望まないんじゃない、弟が身を切つても……」

……どこ行つた？」

この店は広く、柵が多い上に、人が多い。呼ぼうにも僕は彼

の名前を知らない。それでも探すだけ探してみようと、放っておけない君の搜索に動き出したのだった。

— Number 7 At the Harbor

黒髪の少年達は、金髪の少年を完全に見失ったようだった。やがて服屋に置いてきた片割れのことを思い出し、一度そちらを迎えに行こうと店へ向かう。しかし既に片割れの姿はなく、少年たちは数分の差で店を出、途方に暮れた。陽の沈みかけた港町の路面を、建物の影が大きく、大きく覆っていた。

「……は、」

「っ！……」

影よりも黒く神秘的な髪をもつ少年が、胸に夜空の黒を秘めた少年と対峙する。互いに睨み合い、慎重に数歩ずつ近付くと、ほぼ同時に駆け出し相手の胸ぐらを掴んだ。同じ遺伝子をもつ双子、共に胎内で過ごした相手。この世に生まれ落ちて以来、初めての再会だった。

「ハッ、十四年ぶりに会えたっていうのにつれないね兄弟？」

「お互い様だろ。君なんて最早血を分けた他人だよ」

「……ウイリアムをどこやった」

「こつちこそ、コルダの居場所を知りたいんだけど？」

一度でも自分が相手の片割れに危害を加えようと考えたのだから、相手もそのはず。それはこれまで双子として育ってきた故の思考かもしれないし、本能的に理解したものかもしれない。しかし少年たちにとって、血の繋がりは弟より、兄より重要な

ものではなかった。

「コルダ……ああ、あいつそんな名前なのか。で、あんたがアルコ。あいつなら見失ったから知らないね」

「見失った？ じゃあ一緒に居たんだから！」

「広場で演奏聞いてた時までは！ でもその後、あんたのために楽器が錆びない方法？ 聞くとかなんとか言ってる人混みに突っ込んでったんだよ。俺は悪くない」

「……！ コルダ……」

信用しているわけではないが、確かにコルダならその行動に出てもおかしくはない。押し黙った隙に、反撃とばかりにチャーリーは追及する。

「で、ウイリアムはどこやったんだよ。まさかその様子で知らないとか言うんじゃない？」

「……。……デパートに行った。併設されてる質屋ではぐれた。探したけど居なかった。終わり」

「……しちや？」

「あー、質屋っていうのは………つて君もかよ」

先程よりは幾分か雑に説明したのち、ああそうだ、チャーリーの助けになるかも、とかなんとか言ってたけど。とアルコが付け加えれば、チャーリーは深く溜息を吐き頭を抱える。

「弟の物売った金で喜ぶ兄がいるかよ！！！！ つつあー、情けねえ………」

「やっぱり？ 言うと思った。………君さ、ウイリアムにコルダのこと言ってるじゃない？」

「あんたは言ったの？」

「言うわけない」

「そうだろ。……はあああああつっ、なんつっだよもう、あんた、ほんとさあ……」

「なに？」

「……なんでそんなに、俺に似てんの」

馬鹿みたいな質問だ、とアルコは思った。だが……それと同時に、自分もその馬鹿げた疑問を抱いていたことに苦笑した。

「はあ、やめやめ。もう分かるもん。君がやったんじゃないかって」

「同感。なんなの？俺たちさっきまでほぼ知らないやつだったのにさ、顔だけじゃなくて思考回路までそっくりって、気が抜けるわ。」

「なんなのって、仕方ないでしょ。僕ら今まで血の繋がった家族に会ったことなかったんだから」

「いや、家族は……あ、そっか。あんたはそうだ。……なんか変な感じする。親と、俺と、あんた？これで家族？嫌だなこんな弟」

「僕だって君みたいな弟狂いの兄は願ひ下げだね」

「あんたにだったら狂わねーよ」

示し合わせているわけでもないのに、足りない歯車を見つけたかのように会話がするする噛み合っていく。二人にとつて初めての感覚だった。

「……分かってるんだ。彼がコルダ（弦）で、僕がアルコ（弓）なことぐらい」

アルコは俯き、胸ぐらから離れた腕が力なく揺れる。チャー

リーはそれを黙って目で追った。これが、ただの生き別れだったら。喜びの再会に涙を流せたのかも知れない。でも。

「弓がなくても、充分にジャズではやっていける。あれば少し違うことができるってだけ。いなくたっていい。………分かってるからこそ、僕はコルダから離れられない。弦を失った弓は、どこで何をして生きればいい？」

弟が泣いている。そう思ってしまった自分を、チャーリーはもう責めないことにした。取り違えた産院は確かに憎い。けれど、そんなものよりも大切な人が居た。……それがもうふたり増えた。なんだか、それだけの話な気がしたのだ。

「俺はウイリアムが大事で、お前はコルダが大事。俺はお前のことそーでもないしお前もそう」

「……おい」

「正直、あいつらが何を望むかはわかんない」

「！」

「でも、俺おとーと狂いだからさ。どのみちお前んとこにやりたくはないんだわ」

お前はどうか？月色の瞳に尋ねられたアルコの答えは決まっていた。ずっと、変わったことなどない。

「……僕だって、コルダの隣から追い出されたくない。誰にも渡さない。例えウイリアムにでも」

「やっばお前、俺の双子だわ」

鏡合わせの歪な笑みが浮かぶ。光を追いかけた月の影が、終にその黒で覆ってしまうような、そんな表情。手を繋ぎ、双子は光を探しに一步を踏み出した。

「あ、チャーリー！ どこ行つてたの！」

「探したよ〜アルコ。何してたの？」

「……………は、」

夜の港町を歩くうちに、双子の耳に届いたのはセイレーンをも負かすほどの美しいハーモニードだった。向かってみれば、そこに居たのは月光の髪を持つ双子の少年。見つけた。見つけたのは幸いだが、同時にこれは最悪の事態でもあった。

「なん、ふたり、一緒……………」

「広場の向こうにローストビーフサンドが売つてて！ 匂いにつられて入ろうとしたらちようど会つたんだ」

「すごく顔似てるねー！ ってなつて、もしかして生き別れた兄弟つてこの人なのかな！ つてなつたんだ」

「ちよつと待つて」

ウイリアムの口から告げられた言葉に二人して動転する。その様子を見て、金髪の少年たちは顔を見合わせ肩を疎めた。

「……………だつて、アルコの様子がおかしいから心配でさ。父さんと母さんに聞いたんだ」

「オレも。チャーリー、自分が我慢してオレのこと考えてくれること多いから何かあつたのかなつて」

「じゃ、じゃあ……………」

「無駄だつたのか、俺たちのしたこと……………」

二人が再会した今。グローリア家は本当の息子であるウイリアムを求めるだろう。そしてウイリアムも、大好きな音楽に触れられて裕福に暮らせる道を選びたいに違いない。黒髪の双子たちは慌てて互いの片割れを見つめた。嫌だ、行かないで、捨

てないで、離れたくない、想いが身体中を駆け巡り溢れかえりそうになった時、ウイリアムが静かに口を開いた。

「行かないよ」

「……………つ、へ……………」

「え、行かないつて、え？」

「僕だつて同じだよ。アルコと、大好きな弟と離れ離れになりたくない」

「でも、だつて、ウイリアム……………お前、ずっと音楽……………」

「好きだよ。でもチャーリーと一緒じゃないとやだ。何回スカウト断つたと思つてるの？」

「それはだつて、俺が……………そう言うように……………」

「もしチャーリーのこと好きじゃなかつたら、ウイリアムはとつくにスカウトにのつてニュースボーイを辞めてたと思うよ」

ね、とコルダが問いかければ、ウイリアムは深く、しっかりと頷いた。チャーリーは、己の狡さだと思つていたものが、実はそうではなかつたらしいことを知つた。

「……………コルダは？」

「うん？」

「コルダは、ウイリアムのこと欲しくないの？ きつと僕より才能もあるし、ステージに立つても双子だつてひと目で分かる。それにほんとは、」

「アルコがいなくなつたら、誰が僕のこと起こしてくれるの？」

「……………え？」

「確かにウイリアムとは気が合いそうだけど、朝起こしてくれ

る人も、譜読みに付き合ってくれる人も、無茶ぶりに応えてくれる人も、……サンドイッチ食べただけで笑ってくれる人も、僕にはアルコしかないんだよ」

アルコがいないと、僕生きてけないかも。その一言が、アルコの自尊心を、優越感を、愛を、執着を、汚い感情から尊ぶべき感情まで全てを満たした。

「だから……僕たち四人で協力して、ウイリアムがうちに見つからないようにしましょう！」

「おー！」

「そ……う、か。全員利害一致してるんだから、情報を共有しあえば、どうにか……」

「つてことは、これからも時々会うことになる？」

「あ、それなんだけどね！……たまにさ、僕とウイリアムで入れ替わらないかって話してたんだ！」

「「……………は？？？？」」

黒髪双子の声が揃う。

「こっそり入れ替わって、シアターで歌わせてくれるんだって！ね、いいでしょチャーリー！」

「い、いいも何も……！確かに前前の歌は上手いけど、こいつらプロなんだよ？そう簡単にできるわけ……」

「大丈夫！そこは僕がお墨付きしとくから！ちよっとレッスンすればきつとスーパースターになれるよ！アルコもいるしね！」

「……え？ウイリアムと僕でステージに立つの？その間何してんのコルダ」

「チャーリーと新聞売り！」

「は？！？」

「僕、チャーリーとも一緒に歌ってみたいなあ。昔ショーを観に行つた時楽しそうにしてたじゃない！」

「いいね！アルコのお兄さんなんだし、レッスンすれば伸びるかも！」

なんなんだろう、めちゃくちゃだ！二人は全く同じタイミングで、同じように思った。そして……全く同じタイミングで、声をあげて笑い出す。

「むちゃくちゃだけど、案外どうにかなるかもね。コルダだし」「また俺の予想を上回ること思いついて……いいよ、ウイリアムと離れずに済むならなんだっていい。せつかくにつつき医者共が取り違えやがったんだ！」

「入れ替わるぐらい大差ない！」

自分の命よりも大切なことがあった。孤児になろうとも手放したくない人がいた。そして今、新たに生まれた、離れ難い片割れたちがいる。誰がなんと言おうと絶対に、彼ら四人は双子なのだから。

無感情メンヘラ男子×無自覚束縛系

一人で、二人きり

清水綾乃

「有を監禁したい」

その日、恒樹は初めて笑顔を殺した。

閉塞感で目が覚める。勢いよく起き上がるうとする、金属の擦れる音とともに首根っこが引っぱられ、身体がベッドに引き戻されてしまった。

「あー、う、なんだ？」

首元に手をやると、首輪のつるりとした表面が指先に触れる。うなじに当たると冷たい金具の先には、ベット用のリードが伸ばされていて、簡素なスチールベッドの足に嚴重に取り付けられている。俺はゆっくりと身体をねじって上体を起こすと、ベッド脇に投げ捨てられていたスマホを拾い上げた。

『首、痛くない？ もうすぐ帰るね』

スマホのロック画面には、この部屋の家主である恒樹からのメッセージが一件だけ表示されている。受信時刻は三十分ほど前だ。

「よくもまあ平然と送れたもんだ」

俺はメッセージに既読をつけると、返信しないままスマホをベッドに投げ捨てた。

お互いが無事に内定を獲得し、夏休みも終わるからと飲み明かしたのが二日前のこと。ベッド脇に二人して突っ伏して、昔のことやこれからのことを柄にもなく真面目に話していたと思う。

恒樹とは高校のころからの腐れ縁であり、流れに流されて大学四年生になった今でも付き合いを続けている。当初は恒樹のことをそこまで好いていたわけでもなかったのだが、六年近く一緒にいる生活を送ってしまうと、離れようにもどう離れたらいいのかわからなくなってしまうた。

最初に恒樹と出会った時は、「薄気味の悪いやつだな」という印象しか抱いていなかった。恒樹はいつでも決まった形の笑顔を浮かべていて、愚痴やら悪口やらも言わず、うんうんと素直にうなずいては周りの友人たちの話を聞いた。誰にでも平等に優しくできてしまう恒樹が、俺には感情のない人形のようにみえて恐ろしく感じられたのだ。

しかし周りの友人たちはそんな恒樹をいたく気に入っていたらしく、どこへ行くにも必ず恒樹を連れてまわっていた。今思えば、思春期で不安定だった俺たちは、学

「有」

突然呼びかけられて思わず肩が震える。顔をあげると、恒樹がこちらをのぞき込むようにしてベッド脇に座り込んでいた。

「首、苦しくない？」

恒樹の細長い指が、合皮でできた首輪をからめとりながらゆっくりと俺の首筋を這っていく。俺をベッドに繋いでからというもの、恒樹はしきりに俺の首に触れるようになってきた。こすれてしまったり跡ができていたりしないかを確認してくれていると理解してはいるのだが、優しく慈しむような手つきはどうにもこそばゆくて居心地が悪い。

「くすぶつてえよ」

軽く恒樹の手をはたく。横目でのぞきみた恒樹の顔は相変わらず微笑んだままだ。何を考えているのか悟らせない、ロボットのようは無機質な笑顔をしている。

「……ごめんね」

恒樹はそう呟くと、キッチンへと消えてしまった。本当にあいつの考えていることはよく分からない。

しばらくして、包丁の小気味いい音と一緒に肉の

焼ける匂いが部屋に充満しはじめた。

その時、夕方のチャイムが鳴り響く。町のオリジナルだというメロディはどこか悲し気で、カーテンの隙間にゆれる真つ赤な西日がいやに胸を締めつけた。何かを忘れてしまっていて、それでも思い出すことができない。そんなむず痒さとわずかな痛みが身体の中を這うように広がっていく。

「なんか、放課後みたいだな」

喉の奥からせりあがってくる切なさを吐き出そうとして、何年も口にしなかったような言葉を口にする。喉の奥にわだかまり続ける切なさには酷くお似合いな言葉だった。

「放課後かあ」

キッチンの片隅で恒樹が唸る。一口しかないガスコンロの上で湯気をたちのぼらせていたフライパンには、重たいガラスの蓋がかぶせられていた。箸を握っていたはずの彼の指先は、いつの間にか火のついていない煙草を弄んでいる。

「懐かしいよね。有の家にみんなで集まって、騒いでさ」

高校生の頃は、学校が終わればそろそろと俺の家に集

まっつてゲームをするのが決まりごとのようになっていた。懐かしいといえば懐かしいのだが、如何せん集まる人間が騒がしいやつらばかりだったため、楽しい思い出ばかりではないというのが正直なところだった。

「楽しかった」

カチリ、と百円ライターが灯される。いたずらに燃やされた煙草の先端から、苦い煙が細くのぼっていた。

「まあ、そうだな」

「はは」

静かに笑う彼の横顔はやはり昔から変わらない。

彼と初めて会ってから暫くした後、珍しく二人きりで帰る日があった。俺は夕日を背中にしよって、長く伸びる影を追っかけながら馬鹿みたいなことを言っていたと思う。だけれど、俺がいくら頑張っても恒樹は一向に表情を崩す心配をみせないものだから、結局何気ない話をして帰るだけの放課後になったのだ。

わざとおどけてみせて、皆を笑わせる必要のない帰り道はその日が初めてだった。

今思えば、救いだっただのかもしれない。

「ご飯食べようか」

結局、恒樹は一度も煙草に口をつけなかった。

「今日はキャベツが安くつてさ。あんまり上手くはないけど作ってみたんだ」

箸やらグラスやらを細やかに用意しながら恒樹が言う。愉快な気分なのか、声の調子ばかりが弾んでいた。ローテーブルに置かれた大皿には美味そうな回鍋肉ののっかっている。

俺はベッドから起き上がると、そのままずり落ちるようにして床に腰を下ろした。俺に許されている行動範囲はリードが届く一メートルと少し。ローテーブルをはさんで恒樹と向かい合うには十分だった。

「いただきます」

「いただきます」

二人分の声が狭いワンルームに転がる。傍から見ればただ仲のいい男子学生が夕飯を囲んでいるだけなのだが、首にまとわりつく冷たい感触が監禁されているという現実を忘れさせてくれない。

しかしこんな状況でも腹は減るし、目の前に美味そうな夕飯を出されたら箸をつけずにはいられない。俺は油を吸ったキャベツとたれのよく絡んだ豚バラ肉を一まと

めにして、一気に口へと運んだ。出来立ての回鍋肉は、下手と語る割にはまとまった味をしていて美味かった。白米は炊き忘れたとかで食卓の上に用意されていなかったが、代わりに置かれた発泡酒はその一口だけで半分が空になった。

「美味しい?」

貼り付けた笑顔で恒樹が聞いてくる。やはり考えていることは読み取れない。

「んま」

俺がそう答えると、恒樹は表情を変えないまま頷いた。二人分の咀嚼音だけが響く。かつて俺の家に集まっていた連中は、今やもう連絡すら取り合わなくなってしまう。寂しいと思うのが普通なのだろうけれど、不思議とそういった気持ち湧くことはなかった。

「俺たちって何なんだろっな」

ずっと考えていたことが口の端から漏れる。俺たちの関係性は、学校という小さな社会の中の、友人関係というさらに小さな社会の中で形成されていた。だがグループが消滅してしまつてからは、果たしてどんな言葉に当てはめるのが正解なのだろうかと考えることが多くなつ

ていた。

「なんだと思っ?」

恒樹の言葉に顔をあげる。小首をかしげた恒樹の顔は、笑っているようで笑っていないかった。ぞわりとした怖気が首筋を這う。

「僕が一番知りたい」

頬杖をついて一心に俺を見つめる恒樹は、一緒に過ごしてきた六年間の中で一度も見せたことのない表情をしていた。例えるなら、蛇。

「どうして、僕を拒絶してくれなかったの」

恒樹の言葉に、俺は目を伏せた。回鍋肉を一気に口にいれる。

友達だから? と頭をひねってみても、妙な違和感がぬぐい切れない。彼の隣にいる日常があまりにも長く続いてしまったものだから、彼に対して抱く感情や彼との関係性にあえて名前をつけるようなこともしてこなかったのだ。

果たして俺は、恒樹の事をどう思っているんだろうか。頭の中をめぐる思考は、いつまでたつても正解の言葉に当てはまってくれない。

「……わかんねーよ」

俺がぼつりと言葉を落とすと、恒樹は何も言わずに立ちあがった。そして何を考えているんだか分からない表情のまま此方に向かってきて、すくと俺の隣に腰を落ちつけた。

「じゃあ分かってあげろ」

恒樹はいきなり俺の胸倉をつかむと、強引にキスをした。ぎち、と喉元に首輪が食いこみ、襲い来る息苦しさに思わずうめき声をあげる。何度もはじ込まれる恒樹の舌は熱くどろけていて少ししょっぱい。

恒樹は固いフロリングの上に俺を押しおすと、じり寄るようにして俺の身体の上に馬乗りになった。俺を見下ろす恒樹の表情は先ほどまで見せていたような作り物の優しい笑顔なんかではなく、心の底から憎んでいるような、それでいて愛おしむような、複雑な人間の形をしていた。

「僕の事、都合がいいって思ってるから拒めないんだよ」



酸欠でくらりと歪む視界の中央に、黒々とした影が浮かび上がる。歪んだ輪郭線は夕焼けの赤色に滲んでしまつてよく見えないけれど、その輪郭線を何故だか懐かしいと思う自分がいた。

「捨ててよ。皆みたいになさ」

声が震えている。まるで人間のようだった。

そつと恒樹の首筋に触れてみる。白く滑らかな肌の上を指先がなぞり、やがて首、顎、頬と伝つて半開きになつた彼の唇に触れていた。

「……変な顔」

人差し指で口角を引っ張ると、何とも言えない間拔けな表情が出来上がる。困惑したように眉毛を曲げるものだから余計におかしくなつてしまつて、腹が苦しいのにも拘らず笑うのをやめることができなかった。

「なんだよ」

「いや、なに、初めてみる顔ばかりでつゝ」

眉間にしわを寄せて睨みつけてくる恒樹の顔も、妙に間が抜けていて迫力が無い。それに加えて、俺の言葉の一つ一つに反応してコロコロと表情が変わっていく様子もなんだか愉快だった。

「笑顔以外にも表情があつたんだな」

「そりゃあ……僕も人間だし」

それはそうだな、と頷いてみる。当たり前のことを当たり前のように話しているだけなのに、どうしてか込み上げてくる笑いを抑えることができない。つられて恒樹も笑いだしてしまうものだから、もう誰にも止められなかった。

二人して床に転がって笑いあう。フローリングの冷たさが火照つた頬に心地いい。ひとしきり笑い終わつたころには夕日もすっかり沈んでいて、穏やかな夜の灯りがカーテンの隙間から零れおちていた。

「楽しいな」

口を突いて出た言葉はきつと本心の形をしている。都合がいいだとか、友達だとか、そんな面倒くさいことはどうでもよくなつていた。ただ、楽しいという言葉のみが俺たちの輪郭線を象つている。

交じり合わせた視線の先ではちみつ色の瞳が幽かに揺らぐ。少し気恥ずかしそうにはにかむ彼の表情を、俺はもつと見ていたかつた。

「捨ててほしいのに縛りつけるなんて、矛盾してるよね」





夕暮れ時の夢を見た気がする。真つ赤な三叉路の真ん中で、お互いがお互いにだけ向けた言葉を淡々と交わっていた。ただそれだけなのに妙に心地よくて、楽しくて、離れがたいという気持ちばかりが胸につのつていた。

じゃあまた明日、と最後に呟いたのはどちらだっただろう。痛む肩や腰を抑えながら起き上がったころには、すっかり忘れてしまっていた。

とうに首輪は外されて、ベッドの脇に投げ捨てられていた。リードは足元に力なく垂れ下がっている。朝起きた瞬間の閉塞感に悩まされることが無くなった、その一点については解放感を感じていたけれど、その一方では、すでに合皮の冷たい感触を名残惜しく思う自分がいた。

卓上のカレンダーは夏休みが終わった事実を告げている。テーブルに落ちる小さな青い影に、無情だな、なんて思うくらいにはナイーブになっていた。

投げ捨てられた首輪を拾いあげ、指先でもてあそびみる。冷たくて硬い合皮の感触が火照った肌心地いい。

「あ、」

寝ぼけた頭の片隅に妙案が浮かびあがる。そしておあつらえ向きに、首輪の鍵もリードと一緒にあって床に転がっているのを発見してしまった。

身体を小さく丸めて眠る恒樹に近寄って、そつと彼の頭を持ちあげる。起こさないように注意を払いながら彼の喉元に首輪をかけてやると、合皮の冷ややかな黒色が白い肌によく映えた。

「これで終わらないな」

思わず吐いた言葉は、やけに達成感や安心感に満ち溢れた音をしていた。どうしてこんな気持ちになっただのかは分からなかった。どろりと粘ついた何か胸の中を這っていて、『楽しい』とはまた違う、焼け焦げるような熱さを抱えている。

手のひらで覆った自らの口元は、笑っているような形をしていた。



スコープから見えるあの男には、きつと家族がいるのだろう。俺とは違つて。

仕事をする時に毎回思うが、だからと言つて弾を外すことはない。ターゲットである上院議員までの距離はおよそ一キロメートル。この近さなら弾丸の落ち具合を計算するまでも無いだろう。冬特有の乾燥した風が頬を撫で、睫毛に雪が落ちる。少し寒いが、去年のロシアでの仕事より幾分楽だ。あの時は手がかじかんで、とても仕事どころではなかった。もう雪国の仕事は断ろうかと真剣に考える程に辛かった。しかし、今が寒いことに変わりはない。どんなに簡単な仕事でも手を抜かず、準備を怠らな

ら教わつたことだが、今でも心掛けている。任務の後に毎回酒を奢ってくれる気前のいい人だったが、元気にしているだろうか。俺が脱隊後に殺し屋になつたなんて知つたらさぞ驚くだろう。まあ、自分自身では納得の展開だが、大勢で仕事をするより、一人で臨んだ方が成果も期待できるし、報酬も山分けしなくて済む。ここ数年が例外なだけだ。

大して面白くない昔話を思い出していたら、議員がレストランから出てきた。あまりにも待機時間が長いからといつて、少し気を緩め過ぎていたかもしれない。体勢を立て直して今一度スコープを覗く。だらしなく出た下腹を揺らしながら歩く議員と、その斜め後ろを静々と歩く少年。二人は時折言葉を交わしており、周りの護衛も気に留めていない様子から、普段も雑談

天才スナイパー×弟子

Aim

佐藤杏奈

をする仲なのだろうと容易に想像がつく。よくもまあ、あんな絵に描いたような気持ちの悪い親父と笑顔で会話ができるものだ。我が相棒ながら尊敬する。よく相棒とは、自分に無いものを持っている者同士のことだと言うが、あながち間違ひでは無いかもしれない。俺にあの愛嬌と人懐っこさは一生出せないだろう。

議員が用意されていた車に乗り込む瞬間、少年の左手が腰に移動した。やつと合図だ。何かを考える暇もなく、右手が勝手に引き金をひいた。恐ろしく速い筈の弾がスローのように見える。右回転のかかった銃弾が、真つ直ぐと議員の左胸に飛び込んでいく。あのまま議員の心臓を寸分の狂いもなく撃ち抜くだろう。しかし、最後まで油断しないのがプロだ。いつも通り、ターゲットの死を見届けるとしよう。スコープを構え直すと、直後に議員は後ろへ倒れた。周りを囲んでいた護衛も地に伏せており、雪で真つ白だった道はいつの間にか赤く染まっている。世界から自分以外の人間が消えてしまったかのように、少年だけがぼつりと立っていた。いつもの悪い癖だ。仕事が終わつた後はさつさと撤退しろと何回も言っているのに、十年経つても直らない。あいつが人を殺した後に感傷に浸るタイプでは無いことなんて俺が一番よく知っている。血の海の中心で一体何を考えているのだろう。少し気にはなるが、そんなこと俺の知つたことではない。仕事に支障が出なければ何だつていい。相棒なんて所詮そんなものだ。

一仕事終了後に、タバコを吸いながら飲む酒は格別だ。古

くて汚らしい家が瞬く間にニューヨークの洒落たパーに変わる。この時間のために望んでもいない汚れ仕事をやっていると言つても過言ではない。安酒に舌鼓をうっている、玄関のドアが軋む音がした。誰が入ってきたかなんて足音で分かるが、手が反射的に銃へと伸びてしまう。ハンドガンの弾数を確認する前に、リビングのドアが蹴破られたかのように開いた。

「ルーク、今回も遅かったな。終わったら早く帰ってこい」と、いつも言っているだろう。あとドアは静かに開ける。」

「僕にも色々あるんだよ。仕事はちゃんとやってるんだからいいじゃん。あとドアの前に荷物を置くマルコが悪いんだよ。」

血に染まったベストを脱ぎながら、ルークはそっぽを向いた。今年で十六歳になると言うのに子供っぽい性格なのは、俺が育て方を間違えたからだろうか。当時六歳程度の子供に殺しを教えた時点で、育て方も何も無いか。返り血を洗いに行くルークの背を何となく目で追っていると、カレンダーが視界に入った。そういえば、今月はあいつの誕生日か。と言つても、俺たちが出会った日を勝手に誕生日と呼んでいるだけだ。思い返してみれば、あの日も雪が降っていた気がする。

軍を抜けて二年、その日暮らしの日々が続いていた。宵越しの金は持たないのではなく、持てないが正しかった。それもそうだろう、生まれてこの方まともな教育も受けず、力だけで生きてきた二十二の男に務まる仕事なんてある筈ない。脱隊したのは暴力から逃げたからではないが、心のどこかで新しい人生に期待をしている自分がいた。しかし蓋を開けてみれば、

軍人時代と何も変わらなかった。いや、軍人の方がまだ良かったかもしれない。窃盗、恐喝、そして殺し。この三つが今の俺を支えている収入源だ。社会の底辺。今の俺にぴったりの言葉だった。が、どんなに惨めで虚しくても自害することはなかった。何故なのかは全く分からなかったが、毎日文字通り泥を啜って生き延びていた。

真白な雪がじわじわと足元を染めていく。ゆっくりと色を失っていく家々を横目に、行く宛もなく街を彷徨っていた。あんな風通しのいい家に帰るぐらいなら外にいた方が幾分まだ。それに、外にいたら思わぬ珍品が見つかるかもしれない。まだ見ぬお宝に想いを馳せながら歩いていると、裏道に黒いゴミ袋が落ちていることに気づいた。落ちていたものは皆のものだから拾っても問題ないと、死んだ婆ちゃんが言っていた気がする。生憎三日ほどまともな食事にありつけない。何か食べ物が入っていればいいが。

結果的に、それは今までにない貴重品だった。俺がゴミ袋だと思っていた物体は、体育座りをした子供だった。しかも、まだ年端もいかないような幼児が小さな体を縮こまらせていたのだ。かなり長い時間静止しているのか、肩に雪が積もっていた。この寒さの中、全く動かないということはもう死んでいるのでは無いただろうか。少々目覚めの悪い出来事だったが、正直に言ってしまう俺には関係ない。流石の俺でも食人の趣味は無い。今夜もまた霞を食うことになりそうだ。さっさと家に帰ろう。

裏道をぬけ、家までの道を歩いていると、どうもあの子供が気

になってきた。なぜあの子は一人で裏道に座っていたのか、そして本当に死んでいるのか。脳内にちらつく小さな後頭部に無性に腹が立った。見ず知らずの、しかも生死すら分からない子供一人にこんなに悩まされるなんて思ってもみなかった。何だか帰路がいつもの数倍の長さを感じる。こんな気持ちじゃ、家に帰ったって何も手につきやしない。仕方なく重い足をぐるりと半回転させ、裏道へと急いだ。

子供はさっきと全く同じ姿勢で座っていた。最初は死んでいないと思ったが、よく見ると肩が上下している。息はあるようだ。「大丈夫か?」

何も聞こえていないのではないかと疑ってしまうぐらい反応がない。寝ているのだろうか。

「聞こえてるか?おい。」

俺が肩に触れると、そのまま力なく地面に倒れ込んでしまった。触った体は異様に熱く、初めて見えた顔も赤く染まっていた。地面の雪と相まって、より一層赤く見えた。どうやら高熱によって気を失っているようだ。どうしたものだろうか。思わず曇天を仰いだ。

高熱を出している子供を、よく世話になっている闇医者のもとへ担ぎ込んだ。しかし、なぜ自分がそんなことをしたのかは分からない。気がついたら子供を抱えて走っていた。さっぱり意味がわからない。子供は嫌いなはずなのに。

あの時の行動によって、俺の人生は一変した。知らぬ間に共同生活が始まり、気がつけば一緒に仕事をするようになっていた。名前を与え、家に住まわせ、勉強と殺しを教える。まるで

親だか師匠のような役割だった。名前はチェスの駒であるルークからとった。意味は城や戦車というらしい。接近戦が得意で、頑固なあいつにびったりだ。我ながらいいい名前をつけたと思う誕生日がわからないと言うから、出会った日を誕生日にしようとして提案したらいたく喜んだ。しかし、いくら家族の真似事としても俺たちは他人だ。それを忘れちゃいけない。情はこの仕事において最も不必要なものだ。

「マルコ!起きて!こんなところで寝てたら、敵が来た時に一瞬でやられちゃうよ。」

目を開くと視界いっぱいにはルークの顔があった。いくら中性的な美少年だからって、寝起きに顔面のクローズアップはなかなかきついものがある。どうやらルークとの昔話を思い出している間に寝てしまったようだ。

「すまん、うっかりしていた。」

「おじさんだからもう体力無いんじゃないの?僕はもう寝るから、マルコもさっさとシャワー浴びなよ」

「ああ、そうする。おやすみ。」

「おやすみ。」

ルークは大欠伸をしながら寝室へ向かった。言われた通り、早くシャワーを浴びて寝よう。明日も仕事だ。

仕事はいつも通り順調だった。ルークが近づいて、俺がそれを補助する。十年間一緒に仕事をしてきたが、ルークがやらかし

たことはほぼ無い。人間である以上多少のミスはあるが、そのレベルだ。正確に急所を捉え、相手を一瞬で仕留める。一突き
の威力は低い、精度と速度は天下一品だ。最近すっかりやつ
ていなかったが、たまには手合わせをしてもいいかもしれない。
帰ったら提案してみよう。

そうは言ったものの、ルークがいつまで経っても帰ってこな
い。二人でいるところを敵に見られないように、仕事が終わつ
たら別々に帰るのが俺たちのルールだ。大体俺の方が早く帰る、
ルークはその三十分後に到着する。しかし、今日は仕事が終わつ
てからすでに三時間が経とうとしていた。いくら何でも遅すぎ
る。あいつの実力ならば追手なんて簡単に返り討ちにできるこ
とは知っているが、なぜか心臓の奥がざわついた。

探しに行こうか悩んでいると、玄関のドアが開く音がした。無
音に近い静かな足音、ルークのものだ。

「ただいま。」

「おかえり。随分遅かったな。何かあったのか？」

「まあちよつとね。この前、議員をやっただろ。そいつの仲間み
たいなやつに襲われてさ。少しだけ手こずったんだ。でもちゃ
んと撒いたよ。」

これは嘘だ。微かだが血の匂いがある。それにルークは嘘を
つく時に腕を組む癖がある。仕事に支障が出る可能性があるか
ら直せと何度も言ったが、いまだに直っていないようだ。だが、
なぜ嘘なんてつくのか。俺に言えないことは何なのだろうか。

「そうか。まあ、この場所がばれていなければ何でもいい。」

「うん、それは大丈夫だよ。」

「そうか、ならいいが。俺は先に寝る。明日も仕事だからな、寝
坊するなよ。」

「あんまり子供扱いしないでよ。おやすみ。」

ルークの顔はどこかほつとしたように見えたが、俺の考えす
ぎであることを願おう。あの発言が嘘だとしても、今の時点で
は話せないからだろう。それに、仕事に影響が出なければ裏で
何をやっていてもいい。不毛なことを考えるのはやめて寝ると
しよう。あんなことを言っておいて俺が寝坊したら、軽く一週
間は馬鹿にされてしまう。

この頃、仕事があまくいかない。原因はルークのミスだ。最
初はただの注意不足かと思つた。しかし、このところ仕事の成
否どころか、生死に関わるほどの失敗を連発している。今日も
外しようなが距離でターゲットを仕留め損ねていた。俺が咄
嗟に狙撃したから助かったものの、あと一秒遅かったら死んで
いただろう。正確さが売りのあいつにあるまじき失態だ。

夕方に仕事が終わってそろそろ二時間たつが、まだ帰ってこ
ない。仕事ではミスを連発し、俺には何か隠し事をしている、し
かも帰りの遅い日が多い。無性に心がざわつくのは、今日の仕
事が上手くいかなかったからだろう。明日に迫つたルークの誕
生日がやけに不吉なものに思えた。

しかし、何を企んでいるかが、俺には関係ない。

俺たちは他人で、ただの仕事仲間なのだから。

今からナイフの餌食になるこの人にも、きつと家族がいるの

だろう。僕と一緒に。

毎回思ってしまうけど、仕事に情を持ち込むのは厳禁だと教わったから、なるべく考えないようにしている。僕が刺して、マルコが撃つ。それ以外の要素は、自分の感情も含めて邪魔ではないのだ。僕たちにはできない仕事なんてない。とはいえ、僕もいつまでもマルコと一緒にいるわけにはいかない。名前も家も誕生日も、そして生き方さえもマルコからもらった。もらってばかりじゃ男じゃない。マルコはいつまでも僕を子供扱いするけれど、僕だって今年で十六歳だ。そろそろ一人で生きていかなないと。それが僕にできる唯一の恩返しだ。数年前から考えていたことだが、成人になるのもあつてやつと決心がついた。

「ルーク、明日も仕事だぞ。もうすぐ十六歳になるんだから、寝る時間ぐらい勝手にさせてよ。」

ほら、また子供扱いだ。マルコはどうやら、僕が殺ししか能のない子供だと思ってるらしい。あと数日後、僕の誕生日に独り立ちをすつて驚かせてやろう。三十二歳のおじさんにはちよつと刺激が強いかもしれない。衝撃で腰を抜かして怪我されても困るから、ちゃんと大事なことがあるとすつてから伝えよう。

今日も抜群のコンピネーションだった。僕がターゲットを仕留める瞬間に、マルコが護衛を撃ち抜く。僕の命はマルコにかかっているとすつても過言ではない。しかし、不安は一切ない。マルコの弾が外れるなんて、太平洋が干上がるくらい有り得ない

いことだ。それに、もし万が一狙撃に失敗して僕が死んだとしても文句はない。十年間、僕をここまで育ててくれた男のミスで死ぬなら本望だ。

「ただいま、マルコ。」

「ああ、おかえり。」

マルコはソファアに座つて、いつもの仏頂面で新聞を読んでいる。我が家では新聞をとつていないから、そこら辺に落ちていた物を拾つてきたのだろう。僕といい、新聞といい、マルコは収集癖があるのかもしれない。

「今日の仕事、よかつたぞ。」

「マルコもね。」

たまにこうやつてお互いの働きを褒め合う。短い言葉だが、僕はマルコから褒められるのが何より好きだ。生まれてすぐに実際に捨てられ、虫の息だった僕を生かしてくれた。僕にとつてのマルコは、師匠であり、相棒であり、家族だ。彼もそう思つてくれていると信じている。次の仕事でも褒めてもらえるように頑張ろう。活躍したら、独り立ちの件も認めてくれるかもしれない。

「次の仕事は明後日だよね？」

「ああ。明日は久しぶりのオフだ。どこか出かけるのか。」

「多分ね。マルコは？」

「俺は家にいる。外に行くなら敵に気をつけるよ。」

「分かつた。疲れたから先に寝るね。おやすみ。」

「おやすみ。」

欠伸を噛み殺しながら新聞を読んでいたけど、内容は頭に

入ってきているのだろうか。今度聞いてみよう。

本人は否定しているけど、マルコは朝起きるのが苦手だ。仕事に寝坊したことは無いが、休日は外が暗くなるまで寝ていることもある。今朝も起きたのは僕だけだった。でも今日に限っては都合がいい。マルコにとつては滅多にない休日だが、僕にとつては営業日だからだ。

ただ独り立ちを宣言するのはつまらない。何かもつと分かりやすく恩返しになることは何だろう。そう考えた時に思っていたのがプレゼントだった。しかし、仕事の報酬はマルコが管理している。一文無しには当然プレゼントを買う術なんてない。では、どうすればお金は稼げるのか。そう、仕事である。修行も兼ねて、少し前から一人で仕事を受けているのだ。今日も朝から仕事がある。これが知られたら何かしら文句を言われるに違いない。マルコの眠りの深さに感謝しながら、いつもより静かに玄關のドアを閉めた。

「おじさん、首尾はどう？」

「いらっしやい。言われた日には間に合いそうだよ。そつちこそ、支払いは大丈夫なんだろうな。」

「心配いらないうて。今日ちょうど集まったところだよ。」

マルコ行きつけの武器屋は、人のいいおじさんが一人で経営している。僕も数え切れないぐらいお世話になっている。今回のマルコへのプレゼントも、お金がない僕のために支払い期間をこれでもかと伸ばしてくれた。本当に頭が上がりません。

「独り立ちしても武器は絶対にここで揃えるよ。」

「嬉しいこと言ってくれるじゃねえか。たまにはお前もマルコを真似てスナイパーライフルでも使ってみたらどうだ？ちやうどあいつが使ってる銃が入荷したんだ。」

「遠慮しておくよ。近距離が一番性に合ってるし、最近目が悪くなつたみたいなんだ。」

「おいおい、大丈夫かよ。お前たちにとつて目は大事な商売道具だろ。気をつけるよ。」

「うん、ありがとう。」

視力の低下はマルコには黙っていた。それが原因で独り立ちに反対されては困るし、何より迷惑はかけたくなかった。まだ仕事に支障が出るほどではないから、気づかれていないだろう。明日から二人の仕事が続くはずだ。注意しないと。

「目のこと、マルコには言わないでね。」

「まあ、お前がそういうなら黙っておくよ。」

「ありがとう。それより、これお金。遅れてごめんね。」

紙幣と貨幣が一杯に詰まった巾着袋は、実際の重さより重量感があった。自分の稼ぎで物を買うことがこんなに緊張するとは思っていなかった。何だかすごく大人になった気分だ。

「しつかり受け取ったぜ。これだけの金額を一人で稼ぐのは大変だったろ。」

「まあね。でも、独り立ちの予行練習だと思えば楽勝だったよ。」

「そうか。渡すのは一週間後だったよな？家に隠しておくのも難しいだろうから、前日ぐらいに受け取りに来いよ。」

「そうだね、じゃあまた一週間後に来るよ。おじさん、ありがとう。」

「おう。マルコよろしくな。」

あまり長い時間出歩いているとマルコに怪しまれてしまう。早く帰ろう。心なしかいつもより足が軽い。この勢いのまま、マルコにプレゼントのことを話してしまいそうで不安だ。

一週間は実にあつという間だった。そして、僕の目が全くの役立たずになるのも一瞬だった。目の前が霧の中にいるみたい。にぼやけて、ピントが合わない。マルコが褒めてくれた正確無比なナイフの技も、すっかり使えなくなってしまった。以前の僕なら寝ていても仕留められる距離でも、今では当てるのが精一杯だ。今日の仕事でも目の前の敵にナイフが当たらなかった。マルコの弾があと一秒でも遅かったら、僕はこの世を去っていた。原因が何なのかは分からないが、恐らく病の一種だろう。流石のマルコも、今日の一件で異変には気づいているはずだ。しかし、話すことはできない。最後の最後で迷惑をかけるのは避けたい。

何せ明日は僕の誕生日であり、記念すべき独立の一日目だ。そして、人生で初めて家族にプレゼントを渡す日でもある。十六年間で最もめでたい日にこんな話題は似合わない。いつか僕がもっと大人になったら、酒でも持って話しに行こう。まずは明日のサプライズに集中しなければ。気がつけば、もう仕事が終わってから二時間も経っている。早く武器屋で代物を受け取って、家に帰らなければ。マルコが心配してしまう。

ルークが大失態を犯した仕事から、依然として帰ってこない。

最近の帰りの遅さははつきり言って異常だ。そもそも、近頃のルークの様子はおかしい。まず、仕事でのミスが多すぎる。俺たちの仕事のスタイルは一蓮托生だ。ルークがターゲットを刺す瞬間に合わせて、俺が引き金を引く。ルークがしくじれば、銃弾の方向で俺の居場所が割れてしまう。俺がしくじれば、ルークは多勢に無勢である。つまり、どちらかが失敗した時点で両方の死が確定するのだ。それなのに、最近のルークはやたら攻撃を外す。どう考えても変だ。その上、俺に対する嘘や隠し事も多い。この前の休日も、朝から一人で出かけていたようだし、不審な点が多すぎる。武器屋に行ったと言っていたが、メンテナンスに丸一日かかるわけが無い。しかし、なぜそんな嘘をつくのか。

新聞のクロスワード・パズルを眺めていると、突然答えが降りてきた。裏切りだ。

ミスが多いのは、不注意に見せかけて俺を殺すため。帰りが遅いのは、敵と密会しているため。嘘や隠し事は、俺に計画を悟られないようにするため。脳内でピースがカチリと合わさってしまった。その瞬間、胸の奥が煮え滾るような感覚を覚えた。心臓が、顔が、全身が焼けるように熱い。俺は騙されていたのだ。薄々気づいてはいたが、目を背けていた。しかし、こうして事実を突きつけられると、想像を遥かに超えた怒りが込み上げてきた。十年間面倒を見た子供に、自分が持ちうる全ての技術を叩き込んだ弟子に、何度も死線を越えてきた相棒に、俺は今の今まで騙されていたのだ。

心から湧き出る破壊衝動が、僅かに残っていた理性を投げ

飛ばした。持っていた新聞を破り捨て、座っていたソファを蹴り上げる。ここでよくうたた寝をしてルークに怒鳴りつけられた。机の上の物を薙ぎ払い、キッチン皿を床に叩きつける。ルークとの十年で誰かと食べる飯も悪くないと知った。家中を破壊するたびに、十年間が走馬灯のように蘇る。泡のように際限なく浮かんでくるルークとの過去はどれも鮮明で、腹立たしいほど穏やかだった。なぜこんなにも綺麗な記憶ばかり思い出すのだろうか。あいつはただの仕事仲間で、他人の子供なのに。それなのに、心臓が誰かに握りつぶされているように痛むのは何故なのか。今までに感じたことのない痛みを誤魔化すように風呂場の鏡を叩き割った。そういえば、毎朝この鏡で髪をいじっていたな。破片で血だらけの手よりも、胸が痛んだ。これでは本末転倒じゃないか。

我に返ると、家の中は敵襲にでもあったかのように荒れ果てていた。割れた窓から入ってくる冬の冷たい風が、知らぬ間に増えた傷口を撫でる。不思議と痛みは感じない。その代わりに、左胸がずきずきと痛んだ。ルークの顔が脳裏に浮かぶたびに、痛みはどんどん強くなる。頬が濡れているのは、窓から入ってきた雪のせいだと思いたい。

「マルコ、ただいま。」
 気づかないうちに帰ってきたルークは、リビングの惨状を見ると、口を開けて固まった。

「これ、どうしたの？まさか敵？血だらけじゃないか！早く手当てしないよ。」

ルークは焦った様子で、どこに散らばったかも分からない救

急箱を探し始めた。裏切っているなら、俺の怪我は千載一遇のチャンスのはず。手当てを優先するということは、本当は裏切っていないのではなからうか。神にも縋る思いで大団円に繋げようとするが、どうしても胸中の不信感が拭えない。

「あつたよ。ここに座って。手当てしよう。」
 「すまない。」

ルークは丁寧に応急手当てを施していく。包帯を巻くほんの短い時間が永遠に感じた。このままずっと黙っていれば、俺たちの溝が深まることはない。

「はい、できたよ。」

「ありがとう。」

「それで、どういう状況なの？こんなに家中ぐちゃぐちゃになつて。」

「ああ、ちよつと敵襲にあつてな。全員返り討ちにしたが。」

「ならよかつたよ。まあ、マルコが負けるわけないよね。」

俺と違って何の疑いも持っていない顔で、ニコリと笑いかけってくる。その笑顔を信じるべきか、今すぐにでも銃に手をかけるか、どうしても判断が下せず、思わず顔を背けてしまった。

「今日襲ってきた奴らはそこそこの手練れだったからな。お前がいけない時で助かつたよ。」

「そっか。」

笑顔が少しだけ萎んだように見えた。

「僕、マルコに黙っていたことが一つあるんだ。」

部屋の空気が一瞬にして重くなる。ついに来てしまった。良いことなら、そもそも隠す必要なんてない。ならば、これから

ルークが話すことは十中八九悪いことだろう。

「何だ。」

「僕、もうマルコと一緒に仕事はできない。」

ルークの言葉を聞き終わった瞬間、無意識のうちに体が動いた。ルークの腰元にぶら下がっているナイフと、滅多に使わないハンドガン奪う。後ろに一步、二歩と下り、相手の間合いから出る。この距離なら心臓を撃ち抜くなんて赤子でもできるだろう。しかし、理由も聞かずに殺すのは俺の美学に反する。

だから、ちゃんと肩を狙った。それなのに、気がついた時にはルークが床に倒れていた。なぜだ。俺はしっかりと急所は外したはずなのに。どうして弾が左胸を貫いているのだ。

「ルーク！おい、しっかりしろ。俺は殺そうとしたんじゃない、信じてくれ。」

「マルコ、いいよ。それよりこれ。」

ルークがズボンのポケットから何かを取り出そうとするも、もうそんな力は残っていないようだ。代わりに取り出してみると、それは拳銃だった。ルークが愛用しているデザートイーグルの色違い。横部には俺の名前が彫られている。

「これ、どうしたんだ。」

俺はとんでもないことをしてしまったかもしれない。それだけは分かった。

「いつまでも迷惑かけれないから、一人で頑張ろうと思つて。それは今までのお返し。」

浅い呼吸で何とか伝えようとするルークの肩を抱く手から力が抜けそうになった。今までのお返しだと。最近様子がおかし

かったのは、これを準備するためだったというのか。なら、俺はやはり取り返しをつかないことをしてしまったのではないか。ルーク、すまん。俺はお前のことを疑ってしまった。相棒なのに。」

「良いんだよ。マルコに殺されるなら未練はないから。」

ルークの体がどんどん重くなっていく。待つてくれ。

「マルコ、今までありがとう。」

もう少しだけ話をさせてくれ。

「愛してる。僕のたった一人の家族。」

望みも虚しく、ルークの目は完璧に閉じた。呼吸も聞こえない。心音もしない。体も重いままだ。やつてしまった。俺のことを唯一の家族だと言ってくれたのに、殺してしまった。ずっとルークがいなくても俺は生きていけると思っていた。俺たちはただの仕事仲間だと。しかし、それはどうやら勘違いだったようだ。腕の中の亡骸を見ると、涙が溢れ、嗚咽が止まらない。あまりにも愚かな自分に虫唾が走る。なぜ銃弾は肩ではなく、心臓を撃ち抜いたのか。そんな問題は簡単だ。銃に意志があるわけがない。俺が間違えたのだ。銃を抜つてきてもう何十年になるが、ミスなんてしたことがなかった。どうして人生で一番外してはいけない弾を外すのか。俺は本当に愚かだ。

悔やんでも悔やみきれないほどの罪悪感に押しつぶされそうになっていると、ルークが用意してくれていたデザートイーグルが目に入った。大きく黒い銃身に、名前の刻印、所々カスタムされているようだ。俺のために一生懸命選んでくれたのだから。一人で買物なんてしたことのないルークが、懸命に金を

稼ぎ武器屋の親父に相談している場面が目についた。俺に生きている価値はない。ルークがくれたこの銃で罪を償うことしか道は残されていない。

黒光りした銃を頭の横にびたりとつける。弾も確認したし、セーフティーも外してある。あとは引き金を引くだけだ。ルークがいなくなつた世界に未練はない。躊躇なく六十口径の弾を脳に撃ち込んだ。

はずだった。しかし、俺は生きていた。銃を見ると、弾が詰まっていた。装填し直して、もう一度頭めがけて打つが発砲されない。おかしい。銃はもちろん機械だから、誤作動なんてよくあることだ。だが、それにしても二発連続で詰まるなんて、人生で一度も経験がない。本体に異常も見られないとなると、原因が分からない。試しに家具に向けて撃ってみた。ただの発砲音と呼ぶには大きすぎるデザートイーグル特有の音が腹に響いた。そのまま、頭に向けて発砲する。弾が出ない。

「なんで死なせてくれないんだよ。」

どうやっても死なせてくれない拳銃に、つい声を荒げた。

「死なせてくれよ。俺は家族を殺したんだ。」

どんなに引き金を引いても、一向に弾は出てこない。まるで銃が俺を死なせまいと弾を食い止めているようだ。死は逃げたと言っているように。

「分かったよ。背負うよ。それが俺にできる唯一の贖罪だ。そうだろう？」

心なしか銃身が煌めいた気がしたが、光の加減だろう。

今日の仕事も簡単だ。あの車から出てくるであろう、資産家

の脳天を撃ち抜く。ただそれだけだ。腰元の銀のナイフと、漆黒のデザートイーグルが月明かりを受けて輝く。ターゲットがやっと車から出てきた。引き金に指をかける。仕事中に思い浮かぶのは、最期の日からずっとルークの顔だった。許してくれ。そう思いながら、スコープを覗き込んだ。

スコープから見えるあの男には、きつと家族がいるのだろう。俺とは違つて。

終

アイ

夜野白兔

まさか、こんな日が来るだなんて思わなかった。

「女の子のプレゼント選びを手伝ってくれだなんて、お前の口から出るとは意外だったぜ」

大型ショッピングモールを男二人で練り歩く。普通なら御免願いたい。二人きりなら女の子とがいい。が、今回は話が別だ。

「そうかな？」

「おう。俺、お前のこと妖精とか天然記念物の類だと思ってたからな」

隣にいる西古は口元を袖で抑えながら笑う。

「ふふ、なにそれ」

西古栄一（さいこえいいち）。こいつは大学の同期でよく講義が一緒になる奴だ。頭がいいし、テスト直前に講義レジュメを見せてくれるとでもいい奴。だが、ちょっと浮世離れしている。だって、俺が誘うまで、カラオケもボウリングも行ったことなかったんだぜ。それどころか、存在そのものを知らずに首を傾げていたし、本当にどんな環境で育てばこうなるんだ？

まあ、そんなだから、女の子の話とかもなかったし、それ系統の話に興味を示すこともなかった。だから、俺はこうしてテンションがあがっている。

「もちろん冗談！　じゃあ、真面目な話に行くか。その子、欲

「しいものとか、好きなものとかあるのか？」

「欲しいものは特になかった気がするな。そしたら、相談してないし」

それはそうだな。

「好きなものは、いちごとか甘い物だよ」

「かわいい、女子って感じだな」

「あとキュアキュア」

キュアキュアって、あれか。日曜の朝にやっているやつ。もしかして、オタク系か？

「なるほど。そういう女子とはあまり付き合いがねえな、俺」

「あー、なんかゴメン。慣れてないことに付き合わせちゃった？」

しよぼんと西古は眉をさげる。

「いやいや、大丈夫。俺は女の子のプロだからな！ どんな子でもバッチリ、喜ぶプレゼントを選ぶことができるぜ。だから、アドバイスの一つや二つや百個、期待しておきなつて！」

「そうなんだ。心強いなあ」

西古は柔らかに微笑んだ。こうして見ると、こいつもイケメンだよな。吹き出物とか傷がないから肌は綺麗だし、髭も生えてないから、清潔感がある。大体の女子にはそういうのが好まれていているらしい。

まあ、でも、俺の方がかっこいいけれど！

「おう、ありがとう。じゃあ、次。例えば、服とかアクセサリ系統のものをプレゼントするのってことになったとするじゃん。そのためにサイズとかを把握する必要があるんだけど、ど

のくらいわかるか？」

「サイズ？ 難しいな」

「だよな。じゃあ、それは除外で——」

「大きすぎて、百とか、百十センチだったかなあ……」

ぼそりと西古が呟いた。おいおい、マジかよ。そのサイズは幼児だろ。まさか、こいつ、ロリコンだったのか。

ああ、全てが繋がってしまったな。いちご、甘い物、キュアキュア、大きさ。こいつが飲み会で女の子に言い寄られたときも、講義で目の前に美女が座ったときも、ガツキーが結婚したときも反応が薄かったのは、そういうことだったのか。

「あー」

どうしようこれ。とりあえず、事実は確かめたい。でも、深くは聞きたくねえな！

「ところで、その子のどんなところが好きなんだ？」

「急に話が飛んだね。それはプレゼント選びに関係ある質問？」

眉尻を上げて、西古は笑った。

「いや、俺の個人的な興味。さつきまでの質問で大体固まったし、あとは店行って、色々やった方が良いと思ってよ。別に言いたくないなら、言わなくてもいいぜ」

「そうだね」

俺は生唾を飲んだ。

「ちよっと天然で、ふわふわしたところ。食べ物美味しそうに食べるところ。この間も、小さいのにいちごを口いっぱい、飛びだしそうなくらいに詰めていて、ニコニコして、かわいかったな。それと、朝が苦手なのに、日曜日はキュアキュアのため

に頑張つて起きるんだよね。かわいい。ああ、色々なことに挑戦しようと思えるところもいいよね。それ関連で、苦手な運動も始めてさ、ボールのヘディングね。最初は全く駄目だったんだけど、今は五回に一回くらいは成功するようになったんだよね。すごいよね！ それから——」

「オツケー！ わかった、もういい」

「え……」

捨てられた子犬のような表情をするな。ちよつと罪悪感沸くだろ。いや、俺のせいだけで。

「とにかく大好きつてことがわかったぜ」

小さい子だつていうのはもう確定だとしても、判断に困る。気づいたんだけど、あくまで女の子のプレゼント選びを手伝ってほしいと言われただけであつて、その女の子のことをどう思っているかは全く聞いていないんだよね。俺の脳内がピンク色だつただけ！

「うん、大好き」

そのはにかんだ照れ顔がなければ、余計な邪推をせずに済んだんだけどな。恋する乙女か？ まじで判断に困る。

そう話しているうちに、目当ての店に着いた。雑貨屋だ。一つずつ手に取りながら、見ていったが、結局、これといったものは決まらなかつたようだ。

「ごめんね」

「いいぜ、別に。当てはまだある」

しかし、どの店でもダメだった。俺の店候補はなくなつた。作

戦会議が必要だ。休憩がてら、ベンチに座りながら缶コーヒを飲む。西古は缶ジュースだ。

「どれも参考にはなつたんだけど、迷うね」

「悩め。大いに悩め。何のためのプレゼントかは知らねえが、そういうのが大事だと思うぞ」

「そういうのつて？」

「愛つてやつ」

ぱつちり左目ウィンク。決まつたぜ。

「なるほど。君は物知りで優しいよね」

西古は両手で缶を持ちながら、ちびちびと飲む。調子狂うな。「何だよ急に。褒めても何も出ねえぞ！」

「事実だと思うけど……、あ、そうだ」

いいことを思いついたと言わんばかりの笑みをこちらに向ける。

「友達がいらないんだよね」

「え、お前が？」

「いや、プレゼント渡す子。だからさ、友達になつてくれないかな。きつと、いい友達になれると思うんだけど」

俺が？ 幼児疑惑有りの、西古の知り合いと？

「うん。それが一番、喜ぶ気がしてきた。だから、僕の家に来ない？」

家にいるのかよ。もしかして、妹とかだつたりするのかな。こいつの身内の話とか一切聞いたことねえけど。うーん、若干の不安はあるが、興味はあるからなあ。

「いいぜ」

「やったあ。家に友達を招くの初めてなんだよね。ちよつと嬉しいな」

西古は軽やかに立ち上がった。

そして、俺は西古の家に向かうこととなった。バスを幾つも乗り継ぐ。ビルが立ち並ぶ風景から、しだいに建物が減っていき、最終的には木しかみえないような風景になった。降りたバス停は標識も待機用のベンチも錆びついていて、それ以外に人工物と呼べるものはない。夕日も相まって、何だか不気味だ。西古は入り口が無いような木と木の隙間に足を踏み入れる。おい、マジかよ。俺は呼び止めようとしたが、西古があつという間に前に進むから、走るしかなかった。

行く道は草や土が何回も踏み潰された跡があり、人の通った感触があつた。西古のだろう。しばらくすると、開けた場所に出た。そこにはガレージハウスがあつた。窓は全て板でふさがれており、屋根からは雑草がたくさん生えている。シャッターもツタで覆われていて開きそうに見えない。ホラー映画のセツトかよ。

西古は扉に手をかけて、こちらを向く。おいでと手招きをしてから、中に入った。俺はその後に続く。

「扉閉めてくれる？」

真っ暗になった。が、西古が蝋燭台に火を点けて、辛うじて西古は見えるようになった。

「あー、風情ある家だな。それで、その会わせたい女の子とやらはどこに？」

「ここにいるよ」

「だから、家のどこ」

「ずっと一緒だったよ」

西古はシャツめくり腹を出す。平らで筋肉や脂肪が無さそうな腹。そこを指さした。冗談なのか？ きよんとした顔をしていてわかりにくいんだが。

「おい、何を言ってる」

その時、腹が不自然に膨れ、皮膚が溶けた。

「……は？」

そして、出た。でかい蛆(うじ)だ。西古の腹に繋がってる。頭に太い触覚が二本。ピンクと白のしましま柄。あ、頭が丸く開いた。穴。いや、口。牙がいつぱい。これは。

「ば、化けも——」

銀色が飛んできた。喉に刺さった。何だこれは、メスか？ どこから？ いたい。また刺さった。何本、ある？ ダブっててわかんねえ。なあ、西古。

「あ……」

なんでおまえが、それもってんだよ。俺にささってるだろ。

「ごめん。だって、そんなこと言ったら傷ついちゃうから」

何で泣きそうなんだ？ 意味分かんねえ。

あたまでええ。天井がみえる。もうみえない。

「おはよう、おにいちゃん！ あれ、どうしたの？」

クソ虫め。西古に何かしやがったな。かわいい声しやがって

*

西古栄一。当時、十五歳。

学校から帰ってきた彼は、制服を着替えないまま白衣を羽織る。リノリウムの高い廊下を歩き、そして、No. 1というプレートが掲げられている部屋に辿り着く。彼が中に入ると、そこにはステンレス製の机がコの字に並んでいた。その上には太いバインダーやホッチキス止めの資料なんかが多量に積まれている。机に余白は存在しないほどにだ。そんな資料の中心には回転椅子に座った男がいた。

白髪交じりのオールバック。眉間のしわを固定するかのようになり、四角いメガネがかけられている。白衣のボタンをきっちり全部はめており、正面には真緑のシミがでかどかどついていて、腐臭が漂っている。

男は黙々と資料を読んでいた。が、栄一の存在に気がつく。見上げる男の顔はどことなく、栄一に似ていた。

「コンマ三秒の遅刻だ」

彼は右腕のデジタル時計を横目に見た。

「申し訳ありません。博士」

「今回の仕事を説明する」

博士と呼ばれた男は一つのバインダーを引っ張り出し、栄一に投げつける。栄一は黙ってそれをキャッチして、バインダーを開く。無表情で文字列を追う。

「お前が担当するのは検体I。軽い説明から入る。Iはマゴットロリデイウムという種族だが、これは便宜上、私が名付けたも

のだ。見た目が蛆とロイコロリデイウムに似ていただけであって、生態に類似性があるかはまだ判明していない。こいつらは非弱な生命体で、この世界に発生した時点で死ぬ。が、特定の環境下に置けば、生存ができる。具体的には気温が三十五から四十度。太陽光に触れない場所。空気、正確には窒素と酸素の混合物への耐性も低いから、そこも配慮が必要だ。どれか一つが抜けてしまうと死ぬ。この辺はいいだろう。お前の仕事には関係ない。お前は軽い世話と観察をしてくれ。このマゴットロリデイウムは奇妙な特性があり、機械計測ではエラー、記録機械も数時間後にはショートさせてしまう。だから、人間の肉眼での観測、紙での筆記記録しかできない」

栄一はバインダーを閉じた。博士は栄一からバインダーを取り上げ、用紙とペンのついたクリップボードを栄一の手に収める。

「前のやつはイカれて使い物にならなくなったから、お前にやらせる。ソフトは十六時以降、翌朝の七時までだ。お前がいないう時間は別のにやらせる。ああ、あと、くれぐれも余計なことには書くなよ。話した内容だとか、遊んだ、などということはない。求めていない。生態観察だけをしていてくれ。場所はNo. 1だ。質問の余地はない。さっさと行け」

「はい」

栄一は機械的に返事をして、部屋を出た。

そして、エレベーターに乗る。真っ白な四角い空間。低くなるような音が響いていた。栄一は表示灯の下矢印を見上げな

がら、到着を待つ。ゴトンという大きな揺れで、エレベーターが止まる。扉が開く。その先には、薄汚れたリノリウムの床と不安定に光る電灯。栄一は規則正しい歩調で先に進む。そして、No.12と刻印された曇りガラスの扉に辿り着いた。ちようどその時、彼の前の時間に担当していた、無精ひげの男性研究員が出てくる。栄一は軽く会釈した。が、男性研究員は栄一を見て、舌打ちし、そのまま通り過ぎる。

栄一はその後すぐに、No.12の扉を開けて入った。

「あれれー？ あれれー？」

黒板をひっかくような幼い女の子の声。だが、そこにいるものは、人間の姿をしていない。

全長、約一メートルほどの太い蛆の身体。その先端、頭部には、楕円形の触覚が二本生えている。それらには生肉のようなピンク色と黄ばんだ白色の縞模様がついていた。また、全身に粘々しい透明な液体がしたたっている。

「おばさんじゃない！ おばさんじゃない！」

検体Iは栄一に這い寄る。床に腐った卵の黄身のような跡がつく。動いたたびに、身体の下部が溶けているのだ。それを見て、栄一は急いで扉を閉めた。そして、用紙に記入を始める。

「なんで？ なんで？」

肉体…外気との接触により、一時的な融解。想定範囲。異常無。知能…簡単な言語を話すレベル。

「ねえ！ ねえ！」

栄一は用紙から顔をあげる。

「……もしかして、先程から僕に話しかけていたのですか？」

「そう！」

「何故？」

「え？」

頭部の口が丸く開く。鋭い牙が円状に並んでいた。

「わかんない！ なんで？ なんで？」

「僕に言われましても」

「あ！ おばさん。おばさん！ いないの！ なんで？」

「行けなくなつたそうです」

軽くそう言うてから、栄一は移動する。No.12の部屋は円形となっており、床に物は置かれていない。壁一面の棚に必要なものが収納されている。栄一はそこから、パイプ椅子を取り出し設置する。座って自分の腕時計を見た。時刻は十七時。今度は用紙を見る。

『食事は十九時。缶Aに入っているものを与えること』

栄一は缶が置いてある位置を確認し、視線を用紙に戻した。

「ねえ！ ねえ！」

検体Iは栄一の足元にいた。頭を彼の足にぐよぐよと押しつける。栄一は首を傾げた。

「あそぼ！ あそぼ！ おばさんいない、おにいちやんとあそぶ！ じよりじよりおじさん、あそんでくれない！ あそぼ！ あそぼ！」

「それは仕事には含まれていません」

「えー。いいでしょ？ いいでしょ？ おばさんはあそんでくれた！ だから、あそぼ！」

栄一は用紙を確認する。これには記入する部分だけでなく、細

かな注意事項や世話内容なども書かれている。彼は遊ぶというものが本当に業務に含まれていないかを確認した。しかし、どこにも遊ぶに関連することは書かれていなかった。

「だめー？」

検体Ⅰはぐちゃあど口を開く。唾液が糸を引いていた。

「……仕事に影響しない範囲でしたら」

少し考える間をおいてから、栄一は答える。

「やった！ やった！ すき！ おにいちやん、すき！」

栄一はその言葉に目を見開いた。

「おままごと！ おままごと！ する！」

検体Ⅰはべちゃべちゃと音をたてながら飛び上がる。その度に透明な粘液が辺りに飛び散る。

「おままごとって、なんですか？」

「しらないの？ しらないの？ おしえる！ おしえる！」

そして、栄一は検体Ⅰとの日々が続いた。もちろん、博士からの仕事も怠ることはなかった。しかし、隙があれば検体Ⅰと無駄話をし、遊んでいた。

「おにいちやん、おにいちやん！」

「ん、なんだい？」

栄一は柔らかに微笑む。

「わたし、そと、いつでられる？ わたし、びよーき？ ここ、

おいしやさん？」

「うーん、違うんだけど」

「ふせいかい？」

「でも、まあ。似たようなものかなあ。体質で出られない、みたいなものだし。うん、いつかアイちゃんが外に出られるように頑張ってみるね」

「やった！ やった！」

検体Ⅰは伸びあがって、喜んだ。

「そしたら、そしたら！ わたし、おそとでる！ こうえんはしる！ おにいちやんと、もつとあそぶ！ あとあと、かわいのおようふくきる！ いまのふく、あんまりかわいくない！」

栄一は首を傾げる。

「おててとか、あし、しんちょー！ おおきくなったら、かわいなおようふく、きられるかな？ あと、かみがたもかえたい！」
検体Ⅰは装飾品の類はつけていない。手足に該当する部位はついていない。髪の毛、体毛の類も生えていない。

「どんな髪型にしたいのかな？」

「ついでに！ いつも、いっぽんだから！」

栄一は持っている用紙にペンを走らせようとしたが、止めた。
「うん。きっとできるよ」

代わりに彼女に笑顔を返すのであった。

特記事項…検体Ⅰ。肉体に関する、自己認識が正確でない可能性有。

その翌日も栄一はいつも通り、No.12のあるフロアに向かっ

た。軽快な足取りで廊下を歩き、No.12の扉を開ける。しかし、彼は中の光景に絶句した。

身体の真ん中が不自然にへこんでいる検体I。尻の方に行くにつれ茶色く泥化しており、触覚が痙攣している。その目の前には縁に腐った黄身のような液体がついたパイプ椅子を持っている、無精ひげの男性研究員がいた。

「ピーピーうるせえ！ 蛆がガキみたいにはしやぎやがって！ どうして私がこんなのを観察をしないとイケないんだ！ 優秀なこの私が！」

そう叫んで、パイプ椅子を振り上げた。栄一は男性研究員の背後に飛びつき、そのうなじにペンを突き刺す。ペンは喉に貫通した。

「うがっ」

男性研究員はパイプ椅子を振り回し、栄一を吹き飛ばした。が、一回転すると床に倒れてしまった。血だまりが広がる。男性研究員は立ち上がろうとしたが、手足が滑った後、それきり動かなくなった。

その間によるめきながら立ち上がった栄一の目に、検体Iの姿が映る。

「アイちゃん！」

倒れている男性研究員を無視して、検体Iの元へ走る。栄一は検体Iを抱き起す。

「あ、あれ？ おにい、ちゃん？ へんなの、へんなの。ふわふわ、してる……。なぜかな……。なぜ、かな？」

しわがれた声だった。検体Iの泥化は進んでいた。

「こんな、じゃ。おそと、ずっと、ずっと、むり……」

「……外に出よう」

「はえ……？」

「大丈夫。僕がついているから、僕がずっと一緒にいるから。何も問題はないうん。うん、何も……」

しかし、次第に弱々しくなっていく。

「ずっと、いつしよ？」

検体Iは頭を起こす。その衝撃で身体の一部が崩れる。

「うん」

栄一はまっすぐ検体Iを見て答える。

「ずっと、いつしよ！ ずっと、ずっと、ずーっと、いつしよ」

……。うっ、あ……」

榮しげに言う検体Iだったが、口が縦長に開いて、下から溶けていく。しかし、ぎこちなく口下が持ち上げられ、泥化した部分や、溶けた箇所も引力が働いているかのように、元の形へと戻ろうとしている。

「アイちゃん？」

そして、検体Iは栄一の腹に頭を突っ込み、自身の肉体もろとも、栄一の服を溶かし、皮膚を溶かす。ゆっくりと筋肉に侵食し、骨を蝕む。内臓はじりじりと焼き切れ、栄一は痛みで目を見開いたが、すぐに笑顔になった。

「よくわからないけど、いいよ」

その言葉に反応してか、濁流のように検体Iは栄一の腹に収まった。栄一の服は綺麗な穴ができており、そこから見える皮

膚は跡一つなく綺麗であった。

「……前は留めておいた方が良いよね」

栄一は白衣のボタンを閉じて、立ち上がる。そして、顎に指を当てて、この後のことを思索した。

「報告が一時間たつても来なかったぞ。これは何が起きた」

その時、博士が部屋に入ってきた。

「男性研究員一名が暴走しました。男性研究員は検体Iの融解阻止のために処理、しかし、肝心の検体Iは処置が間に合いませんでした。結果、検体Iは完全融解しました」

栄一は機械的に述べる。博士は辺りを見回してから、堅く結んだ口を開く。

「そうか。では、役に立たなかったお前は倉庫送りだ。しばらく、研究所に足を踏み入れることは許さん」

「はい」

*

元検体Iことアイは欠伸をして起きる。

「おはよう、おにいちゃん！ あれ、どうしたの？」

風鈴のような声で尋ねながら、栄一に顔を向ける。

「何でもないよ」

涙目になっていた栄一は首を振りながら、そう答えた。

「起きたところちよつと悪いんだけど、目をつむっていてくれないかな？ 掃除を、掃除をしたんだ。土ぼこりが入ったら、痛くなつちやうからさ」

「そうなんだ！ わかった！」

アイは身体を栄一の腹に引つ込めた。

「僕がいつまで駄目だからね」

「はい！」

元気な返事で、栄一の腹が振動した。それを柔らかな顔で見た後、栄一は友人の死体に向き直る。栄一の表情が曇った。彼は死体に近寄り、しゃがむ。手を合わせて、目をつむった。強風がシャッターを叩く音が響く。栄一は目を開き、丁寧に死体に刺さっているメスを抜いた。そして、死体の首裏と膝裏に手を入れて持ち上げる。そのまま玄關に向かって歩く。扉は足で蹴り開け、栄一は家の裏へ回った。

裏の壁には使い古されたスコップが立て掛けられていた。そつと死体を置いた栄一はスコップで深めの穴を掘る。死体を納める。優しく土をかけて固める。栄一はその上に目印として、その辺りにある石を三つ重ねて置いた。アリが石の山を登っている。それを見守った後、栄一はスコップを元の位置に戻した。心なしか、栄一の表情は少し晴れやかなものになっていた。

「いいよ」

「わーい」

ずるりと腹の皮膚と布を溶かしながら、アイは出てくる。

「あれれ？ おそとにいたっけ？ おうちにいなかった？」

栄一は動揺した。

「……マジックだよ」

「すごい！」

アイが拍手するように触覚を動かすのを見て、栄一はほつと

した。

家の中に戻ろうと、栄一は振り返る。

「ああ、本当に素晴らしい」

栄一はそこにいた人物に顔をしかめる。

「……博士」

それは博士だった。博士は口角を上げながら、話を続ける。

「予想通りだ。完全融解にしては痕跡がなさすぎると思っ
た。あの大きさの個体ならば完全融解しても、約一リットルの残
留物質があってもおかしくないはずだ。蒸発する時間を計算に
入れたとしても、全くないというのは少々おかしい。まあ、誤
差の可能性もあるから、三十七体ほど同じくらいに成長させて、
試してみたが完全に消えることはなかった。が、代わりに興味
深いものが見られた」

栄一は苦々しい顔をしていた。

「マゴットロリディウムは瀕死の状態になると、本能で他の生
命体に入り込んで生き延びようとするようだ。残念ながら、こ
ちらで実験した七個体と七人の寄生者は死んでしまったが……、
こっちは残っていたようだ。実にいいサンプルだ」

「このひと、だれ？　なんかみたことある気がするー」

アイはぐにゆりと、頭を栄一に向ける。だが、栄一はそれに
答える余裕はなかった。博士を見たまま、小さく唇を震わせる。

「あの」

一方、博士はそんな栄一の様子を気にかげもせず、彼の手
首をつかむ。

「ついて来なさい」

そのまま強引に引つ張っていく。

「どうした？」

栄一は踏みとどまった。

「身体に異常があるのか？　やはり、検査が必要か……」

「気になっていたことがあるんですけど」

博士の眉が数センチほど上がった。

「……私に、か？」

「駄目ですか」

「……構わない。時間が惜しいから、手短にしろ」

「どうして今更？」

「時間のことか？　寄生という特性に気がついたのが遅かった
というのと、他個体で足りると判断したからだ。しかし、上手
くいかず、こつちなら、良い状態で残っているだろうという見
込みで——」

「それは聞きました」

「そうか？　話しかけた覚えはないが」

栄一の息が止まる。表情筋が固まる。

「僕のこと、どうして放っておいて……いや。父さん、貴方は
僕のことを何だと思っているんですか？」

「おかしなことを訊くな。今のお前は、検体Ⅰ、否、検体Ⅰ、
2だろう」

「その前は？」

「頭がおかしいのか？　使い勝手の良かった道具（じよしゆ）
だが」

言葉の真意を理解した栄一はポケットに手を入れる。中にあ

るメスを握りしめた。これは栄一が護身用に常備しているものだ。栄一は素早くメスを取り出し、博士の喉をかき切った。

「僕は……いいけど、彼女にその扱いはされて欲しくないや」

博士は瞳孔が開いたまま地面に倒れる。

「おにいちゃん、なにやってるの？」

栄一はメスを落とした。顔面蒼白である。

「ねえ、ねえ。へんだよ。さっきのひと、だれ？ どうして、たおれているの？」

アイは身体を伸ばし、栄一に頭を近づける。が、途中でピタリと止まった。

「おにいちゃん、もしかしてさ。もしかして。わたしって、ふうのおんなのこじやないの？」

素朴な疑問を訊くような言い方であった。しかし、栄一は傷口をえぐられたかのような辛さを感じた。

「あ、あの。えっと」

上手く言葉が出なかった。瞳がゆれる。アイは身体をひねりながら、自身を見ていた。栄一は止めるために手を動かそうとするが、指が震えるだけだった。

「ほんとだー！ よくみたら、ちよつとちがーう！」

が、栄一の予想とは裏腹に、アイは元気よくそう言った。

「……ショックじゃないの？」

「なんでー？ おかしはたべられるし、きゅあきゅあはみられるよ？ いろいろできるもん！ あ、うんどうはにがて……」

栄一は呆然とした。地面に膝をついた。

「……杞憂だったんだ」

ぼそりと呟いて、顔を俯かせる。

「もしかして、なにか、あるの？ あ！ わたしがちがうと、おにいちゃん、ずっと、いっしょにいられないとか……？」

アイは栄一の様子を見て、不安げな声を出す。

「そんなことはないよ」

栄一は顔をあげて微笑む。

「ちよつと、ビックリして、安心しただけ」

「ほんとう？ よかったー！」

アイは大口を開けて喜ぶ。黄ばんだ牙が露わになる。

「アイちゃん。よく聞いてほしいんだ」

「なあに？」

栄一は真剣な表情で彼女を見つめる。

「僕やアイちゃんはそうでもないけど、他の人はアイちゃんのことを見ると……かなりビックリしちゃうんだ。もしかしたら、悪口をいう人もいるかもしれない」

「そうなの！」

「うん。だからね、旅をしようか。遙か遠く、最果て、誰もいないようなところ。……まあ、キュアキュアが見られるように、電波が届く範囲だけ」

最後の言葉は冗談めかして言った。

「すてき！ すてき！ わたし、わるぐちすきじゃないもん！

いろいろなところいくのはすきだもん！ でも、おにいちゃんといられるのもっとすき！ キュアキュアよりすきー！」

アイは栄一の身体を揺さぶるほどに激しく動く。

「元気だなあ。うん、僕も好きだよ」

「おそろい！」

「おそろいだね」

ぬちゃつとアイは栄一の身体に張り付く。栄一は彼女を抱きしめる。

「——一生、一緒にいよう」

栄一は少しだけ抱きしめる力を強くした。

「うん！」

アイは跳ねのけるように元気に答えた。

「僕があげられるのは、僕くらいだからね」

「うん？」

「何でもないよ、こっちの話」

空は全てを覆い隠すかのように曇っていた。星の明かりすらない。ここには街灯もない。二人を照らすものは何も無い。栄一は腕を離す。彼は月光のように優しく笑った。

日付の変わる手前。今日は、栄一がアイと初めて出会った日であった。しかし、今、それは変わる。たとえ、何と呼ばれようとも、二人は二人であり続けるだろう。

叔母×姪

環夏
かんな

定直みなみ



私の、たった一人の叔母。

未だ若く美しい、明朗快活な女の人を「おばさん」などというひなびた呼び方をする気にもならず、私は中学校に上がっても彼女を、テルちゃんと呼んで慕っていた。商業の大学を卒業したテルちゃんは、親類の居る貿易会社に勤め始め、4年目になる。

真つ青な空に、積乱雲が立ち昇る。セオリー通りの季節が好きた。朝、庭に水を撒きながら、テルちゃんが言った。

「環ちゃんが行きたいところ、どこでも連れてったげるよ」

植木鉢から漏れた水を、乾いたコンクリートがしゅわしゅわと吸っていく。私は、夏が来た、と喜びに震える。走り出したような気持になる。

テルちゃんは毎年、盆明けから有給を取ってくれた。父が私に厳しく言う門限も、家の手伝いも免除されて、私はテルちゃんと夏を遊び倒すのだ。

「今年は何するん？」

庭にかけ降りると、テルちゃんがホースの先を私に向ける、ふりをする。白い歯を見せて笑う。

「どこに行こうかねえ」

テルちゃんがご機嫌だと、私も嬉しかった。軽い素材のサンダルはひたひた水を弾いて、私の足元を浮つかせた。

去年は二人で、別府の温泉に浸かりに行った。長い坂の温泉街を見て回って、公衆浴場で汗を流した。檜造りの広い浴槽が一つあり、妊婦さんからおばあちゃんまで、女性の裸体が犇め

く、錦絵のような温泉だった。テルちゃんは、地域の人とすぐ打ち解けて、彼女にひつついて私まで「福岡の美人さん」なんておこぼれをもらった。テルちゃんが、乗馬をしよう、と突然言い出して、その日のうちに夜行列車のチケットを買って、熊本まで行った年もあった。阿蘇の夏は涼しかった。草原を撫でる風が爽快だった。テルちゃんというと、どんな事でも素直に楽しいと思えた。

大人なのに、私と同じ目線で、悪だくみするみたいに、楽しいことを見つけてきてくれるテルちゃんが大好きだった。それは、夜遊びをしたがったり、恋愛を経験するような感覚に近くて、テルちゃんは、子供が作る秘密事を遂行させてくれるどころか、容認して一緒に面白がつてくれた。

二人だけの夏の計画。どこに行きたいか聞いてはくれるものの、予定を決めるのはテルちゃんの方で、私はそんなアヴァンチュールを、毎年とても楽しみにしていた。

テルちゃんがホースの先をぎゅつと持つと、水の軌道が伸びて、庭の奥の椿の植え込みまで届いた。青く厚い葉をつけた、私の背丈ほどの椿の木を、我が家では「輝子椿」と呼んでいる。テルちゃんが生まれたときに、私の祖父が植えたものらしい。長男次男と男が続き、その後流産を経験してようやく生まれた末の娘は、両親からも、二人の兄からも、大層可愛がられて育つて、今に至る。テルちゃんは、愛情を表現するのが上手かった。人に愛される運命をもって生まれてきたからだと思った。

テルちゃんは、お盆参りも行かなねえ、と思い出したように言った。

彼女がお仏壇に手を合わせているところなんて滅多に見なかった。信心深い人では無いようだったけど、テルちゃんはそれを埋め合わせるように、盆暮れと春秋の彼岸には欠かさずお墓参りに出向いた。テルちゃんの中学校時代の同級に、寺の長子が居た。我が時友家の墓はそのお世話になっていて、私も幼い頃からよく気にかけて貰っていた。

「精仁さん元氣やろか」

長男の小僧さんは……小僧といっても、テルちゃんと同い年なのだが、笑窪のかわいらしい、穏やかな男の人だ。こういう人がお坊さんになるんだなあ、という感じの。

「この前古本屋で会ったときは元氣そうやったよ」

テルちゃんは、大丈夫、と自分のことのように言った。蛇口を閉めると、ホースの中に残った水がコンクリートに広がった。テルちゃんはそれを踏みつけて庭から自室に上がり、会社に行く身支度を始める。

会社勤めをしていても、テルちゃんはどこか浮世離れた感じの女の人だった。

テルちゃんは三面鏡に向かつて髪を触る。肩くらいの長さの切り込まれた巻き髪は、寝起きでも、水にぬれても、くしゃくしゃ頭を搔けば、彼女の卵型の顔に合った形で纏まって格好良かった。耳の真ん中くらいまで長くつくられた前髪はゆるくカーブして、右目の端に降りている。鏡越しに目が合った。目は瞬くだけで感情を表現できてしまいそうな、見事なアーモンド形。瞳は茶色く透き通り、テルちゃんが私の顔をパレットのようにしてお化粧遊びをするときや、冗談事を耳打ちされたとき、

き、目の中の放射状の模様まではつきりと見える。

「障子閉めてえ」

私は部屋に上がり、庭に面した障子を後ろ手で引いた。部屋を閉め切ると、テルちゃんは腕を交差させて寝巻きを引っ張り上げ、脱ぎ捨て、シュミーズ姿になった。

肩は薄く、丸い胸やなだらかな腰回りは、何か神聖なものとして人の手で作られたもののように思えた。私はテルちゃんのやわらかい軀に抱きしめられると、救われる気持になるのだ。テルちゃんは糊のきいたシャツに、ヴィーナスの腕を通しながら言った。

「環ちゃんはいつまで、あたしと遊んでくれるかねえ」

「ずっとよ」

「ほんと？」

「テルちゃんが死ぬまでよ」

いつか、目覚めない朝があることなんて知らないみたいに、テルちゃんは言った。

「ながい事よろしくねえ」

永遠を唱えてはにかむ彼女を見ながら、私はいつまでテルちゃんが、一緒に夏を過ごしてくれるのだろう、と思っていた。テルちゃんと居るときの心地よい温もりよりも優先したいものができるなんて、想像ができなかった。テルちゃんは、私が成人しても、結婚しても、私を少女のように扱ってくれるのだろうか。同級の女の子と遊ぶよりも、テルちゃんと居る方がうんと楽しかった。テルちゃんの、愛嬌のある目や、よく動く四肢が、いつまでも、私の為にあればいいと思つた。

「まあ休暇の前に、お盆頑張ろうや」

テルちゃんは長い腕を上げ、窮屈そうに伸びをして、続けた。
「今年もこき使われるけえ」

テルちゃんは綺麗に焼けた腕に時計をつけると、ジャケツトを抱えて颯爽と出掛けていった、かと思うと、水筒忘れたわ、と、小学生みたいな理由で引き返してくる。わざとでしょ、と思う。笑ってしまう。パンプスを脱ごうとするテルちゃんを止めて、氷と麦茶でたっぶりの魔法瓶を渡した。

製鉄の町、九州北部の若戸港から、山口県下関市まで繋ぐ市営船がある。三菱の造船所で生まれた「くき丸」は定員270名の小さな観光船だ。乗客の多くは巖流島観光、その他は唐戸の市場、海岸に建てられた真新しい水族館、夏には納涼船として海水浴に赴く客が利用する。週末は殆ど満員になった。

我が家はその船内に食堂や売店をもっていて、長期休暇には私も店の加勢をした。一番の繁忙期は、やはりお盆の間なのがある。

売店の番をしたり、ホールで料理を運んだり。この小さな町の学校では、先生も同級の子も、うちの商売を知っている。

「お前、昨日船でアイス売ったろが、見たんぞ。」
陸で会った同級の男子は、首からケースを掛けた私が、船内でアイスクリームを売って回る真似する。

そういった揶揄いが、思春期の私には嫌でいやでたまらなかつた。働きづめの父は痲癩持ちで、そんな相談事はできず、きょうだいも居なかつたので、店の手伝いは私の夏の仕事とし

て決まったことだった。ぶすつとして働いていたから、父の雇った若いウエイトレス達にも評判の悪い、愛想の無い少女だったように思う。

売店の壁には、宮本武蔵、佐々木小次郎の逸話を綴る広告がぶら下がっている。30年以上前の決闘を見物する客で潤う商売。随分埃っぽい家だと思えた。

父の妹であるテルちゃんは、お盆の明けの日に会社を上がると、19時に出港する便に間に合うように帰ってきて乗船する。食堂が宴会客で賑わう夜間のくき丸は、もっぱら屋形船。火を絶やせない製鉄所のおかげで、三交代勤務明けの作業員がいつでも飲み屋を求める町だ。うちの船も例外ではない。お盆期間のテルちゃんは最終便まで乗って、帰ってくると、泥のように眠った。それでも翌日の昼間にはけろつとして、休日を謳歌しているから不思議だ。テルちゃんの言うには、家の加勢は『勤めている』という気がしないから、楽しらしい。

私は、テルちゃんの乗る夜のくき丸が、昼間のぼんやりしたやや時代遅れな観光船であるはずがないと思っていた。とって付けられたような食堂のシャンデリアは埃を被っているけれど、夜にはその絢爛が、食堂をレストラン・ホールにするんだ。煤けた絨毯を大理石にするんだ。そんな妄想をした。

人を雇っているとはいえ、兎に角家族で成り立っている商売だったから、気の許せる人手があるというのはそれだけで便利だったのだ。

盆明けのテルちゃんの休暇は、墓参りから始まる。祖父の

月命日にあたるので、初盆から、8月の16日にお経を上げてもらっていた。

町には寺院が三軒あった。一つ目は製鉄所の方面にある古寺。二つ目は学会が集うらしい、民家のような寺。三つめは、港近くの高台に墓地をひろげた禅寺。その禅寺は養泉寺と呼ばれている。寺の造り自体は質素で、本堂が一つ、離れが二つ。そこで年老いた住職と、その息子の若い僧侶が二人、暮らしていた。住職は足が悪く、座椅子を使わなければ経もあげられない。よって若い僧侶の弟の方が外の供養に出ている。兄の方は名を精仁という。心臓を患ってから、調子のいい日に時々大学に向く程度で、後は離れで養生しているそうだ。この精仁さんがテルちゃんの旧友で、盆明けの日には、さしてこちらから連絡をしなくとも時間をとってくれるような、融通が利いた。

テルちゃんは汗をだらだら掻きながら花束をぶら下げて、新しい日傘を差している。私は寺の階段を、一段飛ばしで上がっていく。石畳の階段が砂利道になった先に、本堂があった。

「ごめんくださいあい」

テルちゃんは、友人を遊びに誘うような明るい声で、離れの方に声を掛けた。

「はい」

すり足で出てきた精仁さんは、紗の着物に芥子色の袈裟を掛けている。長い布から覗く手や首に、深く筋が浮かんでいた。

「毎年、お世話様です」

精仁さんは合掌して、丁寧に頭を下げた。

長い袖丈が地に付かぬよう、胸の前で手を組む仕草はなよな

かで、彼を性別や年齢のようなものから切り離しているように思えた。

テルちゃんは精仁さんに視線を向けたまま、首だけでお辞儀をした。

「こちらこそ、ご供養お願いします」

彼は足袋を雪駄に吸い込ませるように、音もなく、ゆつくりと式台から降りる。

脹脛の真ん中から踝まで、綿の白い襦袢が覗いている。一見、体が厚く感じられるのは、着膨れしているせいのように、紗の下から降りる、体に沿った襦袢の、身幅の薄さに驚いた。

彼の容姿の変化をこわごわと見つめていると、テルちゃんは笑い声交じりで、精仁さんを激励するように、

「どうね体調は。大丈夫かね」

と言った。

「今日は大分良いですよ」

「晴れとるだけかねえ。毎日お天気やったらいいのにねえ」

彼は私を見ると、にこりと笑って頷く。精仁さんの虚弱が、彼の可愛らしい笑顔を奪つても、その顔立ちが肉が削がれるほど、美しさが開かれていくようであった。

時友家の墓に、市場で買った仏花を供える。花束には、菊、リンドウ、ホオズキ、季節外れの金魚草、ユリは雄蕊を切ってもらった。父が一番上等なのを買えと言うので、そうした。私は花立の壁面に、赤いBB団のようなものが張り付いているのに気が付いた。触ると、ころんと掌に落ちる。テントウムシであった。

「てんとう虫おった」

精仁さんは、階段の下から、感心したように言った。

「よく見つけたねえ」

お墓の生き物捕まえたらだめよ、と、テルちゃんは私を諭した。てんとう虫は目が覚めたように裏返ると、高く高く私の指先に登り、翅を開いた。今度は隣の墓の卒塔婆に留まった。

テルちゃんに裾を引つ張られて、見ると、精仁さんが線香をあげていた。彼が手首を揺らすと炎は消え、夏の高い空へ、細く煙が立ち昇る。読経の合図だ。私は精仁さんの後ろへ下がって、テルちゃんと並んだ。

毎年、精仁さんの読経を聴く度に、彼はこの響きを生み出すために生まれたのだ、と思う。喉の奥から発せられる音は、夕立のような重さをもって体を打った。その音の粒の一つ一つは肌を撫で、土と空に溶けて、自然の輪廻に返ってゆくのだ。精仁さんの読経は、蟬時雨の中で、音源を見失うほど拡散しているように感じられた。

テルちゃんの横顔を見上げると、黒髪のかせ毛が、夏の光に照らされて艶めいていた。瞳は、深く、深く、精仁さんの背中を捉える。彼がどんなに繊弱で、この世のもので無くなってしまうっても、テルちゃんの耳にはきくと彼の声が残る続ける。

私は、いつからこの墓参りが嫌いになったのだろう、と思う。テルちゃんは、とても感情に忠実な様でいて、時々、思いつめたような表情で立ち止まることがあった。子供には知らずまいと思っているのかもしれない。何にまずまっているのか、なんとか読み破ろうとしていた私は勝手に、益々疲弊（きへい）していた。そ

んな、努力で培ったテルちゃんへの敏さが気付かせたことだと思ふ。

テルちゃんから、恋をしている人間の甘やかな雰囲気が発せられていることに気付いたのは、中学校に上がったばかりの頃だった。

いつから、どうして、それが恋になったのかは、知る勇気がなかった。

墓参りの前夜、テルちゃんに夏の休暇の行き先の話を持ち掛けられた。今年は海にしよう、と、決まったことのように言われたので、昔、長崎の綺麗な海でテルちゃんと競泳したことなんかを思い出して、胸を弾ませた。今年はどんな水着を持つていこう。

「どうやって行くと？鉄道？バス？」

勢いのままに聞いた。テルちゃんは嬉しそうに、土井ヶ浜、と言った。

下関にある土井ヶ浜海水浴場は、工業の町の濁った海を避けて、この地域の人たちがこぞって浸かりに行く、緑青（ろくせい）の海だ。「くき丸」は盆を過ぎた時期になっても、土井ヶ浜へ向かう乗船客で一杯になる。

テルちゃんは続けた。

「精仁くんも一緒に行こうかと思っとって」

テルちゃんの瞳が揺れたのを見逃さなかった。とうとう言われてしまった、と思った。

この休暇は二人だけのものであったはずなのに。テルちゃんのぐらつく瞳から、小麦色に焼けた首筋から、恋愛の渦中にあ

る人間の放つ香りを嗅ぎ取った。夏の予定を提案してくれる大好きなテルちゃんが、私の知らない人になるうとしていて、いやらしかった。私なんかの慕情よりも、そちらの方が大事だった。

「はーん」

思わず口に出たのは、そんな言葉だった。

「デートみたいやねえ」

逢引の口実なんかにされるのはまっぴらごめんだ、と言いたかった。私の反応に気が緩んだのか、テルちゃんは、そうやねえ、と口元を綻ばせた。

「環夏、精仁さんとおると気使うわあ」

なるだけ嫌味に聞こえないように、和やかに言おうとしたら、声の上擦ってしまった。テルちゃんが、やっぱり環ちゃんと二人で行く、と言ってくれるのを待っていた。

彼女は困ったように首を傾げて、ねだるような声を出す。

「また昔みたいに、三人で仲良くしようや」

私のテルちゃんは、日傘なんか差さない。虫を捕まえたら、かわいいね、って言うってくれる。

私は、テルちゃんが大好きだ。精仁さんも良い人だ。でも、テルちゃんが男の人と楽しそうにしているところなんて、見たくなかった。私はもうテルちゃんにとって、「一番大切な子」ではないのかもしれない。テルちゃんが心から精仁さんを欲しているなら、私には埋められない穴だった。

「時友さんのところからは貰うなって、言われとるから、」

読経の後、テルちゃんが差し出した封筒を、精仁さんは断った。封筒には母の達筆で『お布施』と書かれている。

「住職さんから言われたの？」

精仁さんは小さく、うん、と言った。テルちゃんは驚いて、照れたように笑った。

「私、住職様にお礼しに行ってくる。」

二人の間に流れる親密な沈黙を飲み込んで、精仁さんは、書齋に居ると思う、と離れを指さした。テルちゃんは跳ねるように歩き出す。

状況が飲み込めないまま置いていかれた私に、精仁さんは口を開いた。

「僕の父は……」

精仁さんは、私に伝えるのにびたりとくる言葉を探すように喋った。

「……輝子さんが、僕に良くしてくれているのを知っているから」

私には、何か疚しいことの言い訳をしているようにも思えた。

私が黙ったので、精仁さんは話題を変えた。

「環夏ちゃんは来年、高校生かね」

私が頷くと、早いねえ、と声を漏らした。

「精仁さんは、大学楽しい？」

私はなんとなく話を合わせるように言った。精仁さんが長く大学に在籍して文学を専攻していることは、テルちゃんから聞いている。

彼は、ううん、とはつきり発音した。経を口にした時のよう

な鋭気は消え去っていた。

「本一冊読むんも、もう体が付いて来んとよ。」

畳が抜けそうなくらい積んであるのに、と、精仁さんは呆れた声を出した。

「古本屋に売つ払うつもりやけ、要るのんあつたら持つて帰つていいよ。」

「ありがとう。今度貰いに来さして。」

人の好意に曖昧な返事をしてしまった。精仁さんが大事にした本を受け取る資格が、私にあるとは決して思えなかった。出家を経験すれば、自分の命をそんなにも切り離して、他人事のように話せるようになるのだろうか。

「涼しいところに座ろう。」

離れの日陰まで、精仁さんを引つ張った。汗一つかいていない乾いた腕、てのひら。生きる機能を放棄した体に触れているようで、不気味だった。

私は、気が利かない。誰が見ても良い子ちゃんでありたいと思う一方で、相手に純粋な親愛を持っていないと気付けないことが沢山ある。もう、幼少の頃のように、彼に懐いていくことは出来ないと思った。

「来年も、再来年もお参りに来るね。」

「ありがとう。」

彼の体は冬を越せるのだろうか。そんな思いをかき消して、続けた。

「でも、海へは行きたくない。」

言ってしまった、と思つたし、言えた、とも思えた。私の、平

和な世界をかき回す凶悪な手を、掴んだ気分だった。テルちゃんに、慕うことを赦され、思い出したように甘やかされる日々が、ずっと続いて欲しいと切願した。

そして、精仁さんがこの世のもので無くなった後、今晩家に帰つてからでも、私はきつとこの言葉を後悔するだろうとも思つた。凶悪な手の持ち主は、紛れもなく私であった。

彼は、胸の合わせを撫でると、左襟を引つ張つて、そうやね、と言つた。

「精仁さんは、テルちゃんのこと、好き？」

病魔の巢食う胸が、紗の下で大きく膨らんだ。精仁さんはじめて口にする言葉のように、ああ、と少しどもつて、紡いだ。

「あの人のこと嫌いな人なんかおらんやろ。」

さつきまで、他人のことを話しているようだった乾いた声は、芯を持った。私は彼の言葉に、心から頷き、安堵した。テルちゃんが決して自分のものにならないことを、分かっている人なのだ、と。

テルちゃんも私も、海へは行かなかつた。その代わり、テルちゃんは休暇の最終日に「きょうの最終の便が港に着くまで起きとける？」と、聞いてきた。

父が帰宅した後、勝手口から家を抜け出し、二人で港まで歩いた。

「深夜に中学生が歩き回つたら補導だよ。」

テルちゃんがからかうように言つた。

「今は保護者と一緒だから、テルちゃんがショルイソーケンだよ」

きっぱり返すと、テルちゃんは、ああ、と声を漏らした。大人なのに。私は笑ってしまった。

券売係の青年は渡し場を消灯したところのようで、私たちだと分かると白手を振った。

「どうぞされました」

「ちよつと忘れ物して」

「待合室はもう閉めるんで、裏の柵から出て下さい」
彼は職員用の裏口をさした。

棧橋に出ると、待合室のシャッターが雷のような音を立てて下りる。私たちは目を合わせて笑った。

テルちゃんは鍵を出して、慣れた手つきで入り口を開けた。客が降りる度に船員が設置するベニヤのスロープは無く、渡場わたばたと船体の間には黒い波が渦巻いている。テルちゃんは長い脚で、よつ、と暗い船内に飛び込んだ。

「隙間氣を付けて」

入口の上枠を掴んだ彼女は、私に手を差し出した。躊躇していると、せーの、で飛んで、と言われた。

「せーの」

強い力で手首を引かれ、船内のゴム床に着地する。バランスを崩したのを手首から引き上げられて、なんとか立たせてもらった。

テレビのある一階客室を通り抜けて、二階に上がる。船室の窓の外には、眠らない製鉄所が放つ光が、海面を這うように

宿っていた。

工場の中には、銑鉄を輸送する貨物列車がはしっている。信号機の赤、まばゆく白い作業灯に照らされ、吐き出される煙は薄紫。光の粒を潜り抜け、夜の鉄道は立ち昇る。円柱型の、母体のような白いタンクが、太い管を咥え込んでいる。管は足場に囲われ、続く先は追えなかった。洞海湾を囲んで躍動し続ける工場は、この土地を侵食しているようだった。そして、この小さな町が製鉄所に生かされていることも、事実であった。

「綺麗やろ」

屈託なくテルちゃんが言った。目を細めると光が尖り、雲丹のように放射線状に広がって見えた。面白かった。

「うん、綺麗」

テルちゃんが二階の電気のスイッチを押した。

船尾側から先の方へ順番に灯りが点くと、赤茶色の絨毯の敷かれた食堂。

客の落とした煙草の灰や食べ物染みがついていて、年季の入った絨毯だったけど、目がちかちかする程明るいシャンデリアの下で見ると、そんなに汚いものでも無いと思った。オリエンタルな花柄も、高級感があっていい。

机の上にはメニューの札が立てられている。

「夜はテーブルクロスを掛けてるんだ。」

部屋の隅の台にはレコードプレイヤーが置かれている。無線機器のマニアだった祖父のものを、テルちゃんが面白がって手入れしているのだ。針を円盤の外側まで動かし、反対側の小さなレバーを下ろすと、曲が流れ始める。洋楽だけど、私でも

知っている。

「スタンドバイミー」

「せーかい」

機嫌の良いテルちゃんは鼻歌交じりで、ハグを求めるように両手を差し出した。この腕に抱きとめられるのが気持ち良い事を、私は知っている。テルちゃんの指先に、ひた、と触れた。

テルちゃんは右手を私の腰に回すと、左手を絡めてくる。顔が近いのが恥ずかしくて、思わず笑ってしまう。テルちゃんは鼻歌の中に英語の歌詞を織り交ぜながら、前に一步、右に一步、私を引く張る。私はぎこちなく、空いた左手でテルちゃんの腕を掴み、後ろに一步、左に一步。私の腰に添えられている柔らかい手が、指先でリズムを取ってくれる。足並みが揃わなくても、テルちゃんは凄く楽しそうだった。

「おひめさまゴッコみたい」

恥ずかしくて、ちよつと早口になった。

「昔、よくやってくれたよね。私がお姫様役で、テルちゃんが王様」

幼稚園児くらいの小さい頃、テルちゃんが寝室に来ると、私は口癖のように「おひめさまごっこして」とせがんだ。私がお姫様で、テルちゃんが王子様。腰に巻いたタオルケットを、ずるずる引きずりながら、ダンスパーティーをした。興奮と、憧憬。高校で演劇部に入っていたテルちゃんの王子様役の演技はいつも全力で、幼児の私を夢中にさせてくれた。

「なつかしいねえ。ブルースとか、チークダンスとか。流行ってたんだよねえ、あの頃」

テルちゃんは、あの頃の環ちゃんは可愛かったなあ、と幸福そうに笑って、今もやけどね、と言った。

テルちゃんの変化ばかりに目ざとく、見つけては裏切られたように悲しんでいた癖に、私はちつとも自分の変化に気付いていなかった。今の私は、恥ずかしいことがいっぱいある。男子の揶揄いが嫌で、テルちゃんからのスキンシップに戸惑ってしまふ、大人が恋愛しているのを、いやらしい、と思う。そんな思春期の真っ只中に居たのだ。

精仁さんが作っている寺の会報誌には『人を愛せば愛は返って来る』というような説法が綴られていた。私がテルちゃんに送っていたものは、彼女にとつて愛と感じられたのだろうか。いつまでもテルちゃんに甘やかされたい。テルちゃんに注目して欲しい。そう思う事だけが、愛だった。

「スタンド・バイ・ミー」と繰り返すフレーズがフェードアウトして、曲が終わる。

蓄音機の蓋を閉じながら、テルちゃんは言った。

「よう精仁くんも遊んでくれてたなあ」

「うん」

「精仁くんは、立派な人だよ」

テルちゃんは、思い出したように言った。私の心がかき乱さるのも知らずに、テルちゃんはたくさん精仁さんの話をする。

「立派って、どういうこと」

環ちゃんはまだ知らんかもやけど、と前置きされる。大人が大切な話をする合図だ。私は少し緊張して聞いた。

「精仁くんの弟は、精仁くんの病気が分かったときに、養子に

もらわれて来たんよ」

「そうなん」

「寺族が身内に寺を継がすのは、その家の財産を守るためなんだから。だから、精仁くんが亡くなられても跡継ぎに困らんように、養子を貰ったんだって」

夫婦なぜ子供を望むのか不思議だった。かわいいから、それが家族の完成形だと思っているから、老後の面倒を見て欲しいから。しかし、家の財産を守るため、というのはいつかなかった。あの寺にとって財産は、土地であり、建物であり、檀家であった。そのために、実の息子を一人、暗黙の了解のように、お払い箱にしたのだ。

「誰から聞いたん」

「精仁くん。」

テルちゃんは、食堂の椅子に腰かけた。

「でも、あの人、弟ができて安心したって、言ってた。」

「不思議やね」

「うん。不思議やし、いい人だと思う。」

私は素直に頷けなかった。

彼を優しい人だとは思えても、テルちゃんがなぜ精仁さんをごとまで気に入るのか分からない。彼は「かわいそうな人」でしか無かった。周りの人間に愛されて、自尊心高く生きてきた彼女は、相手との愛が均衡になることを嫌ったのではないか、など、二人の関係がどのように進展しているのか知りもせず、卑屈な憶測を抱いた。

明けの日からテルちゃんは会社に出向いた。私の夏は瞬くよ

うに終わり、8月の下旬から涼しい日が続いた。季節を移ろわせるのは商売人の役目だと思う。菓子屋には「御萩」の幟が立ち、生花店の切り花にはススキが入った。

早朝四時ごろ、母に揺すられて目が覚めた。

「養泉寺さんから電話があつて、テルちゃんが飛び出して行った」

嫌な予感がした。母も同じだった。

「私も行く」

母の言葉を待たずに家を出た。テルちゃんが精仁さんの寺へ行ったのなら、そこへ私も居なければ、という、なげなしの独占欲と不安で走り出した。

迷わず離れ上がる。二人がどこに居るか、直感的に分かった。黄ばんだ障子戸は開け広げられ、敷居を跨がず呆然と立ちつくす精仁さんの弟。部屋の中に見えるのは町医者横顔。寝巻きにカーデガンを羽織ったテルちゃんの、丸まった背中。その奥に敷かれた布団には、眠っているのか、こと切れているのか、分からない程安らかな顔の精仁さんが、じっと目を閉じて横たわっていた。彼の枕元で住職は俯き、合掌した。自分の心臓の鼓動が耳元でうるさい。声も出せなかった。

私が目にしたその瞬間に、精仁さんは、彼岸へ渡った。

あの日、海へ行かないと言った日、精仁さんの体が長くもたないことなんて、分かっていた筈なのに。私は途方もなく醜い、嫉妬の塊であった。身近な人間が死ぬと、普段は気にも留めないようなことを後悔する。遺体を目の当たりにして、精仁さん

が死んだのは私のせいだ、などと、思い上がった懺悔をした。

住職が家に伝えてくれた。母の手配でテルちゃんは会社を休み、その日の通夜まで泣き続け、じっと精仁さんの部屋に居た。精仁さんの死出の旅が近付いていることを、頭では分かっている。でも、いざその時が来ると体が付いて行かない。テルちゃんはさっと私が思っているより精仁さんと深く打ち解け合っていて、彼を体の一部のように感じていて、それを引き剥がされる痛みを耐えているのだ。

時間が経って周りが見えてくると、住職と弟は悲しむ一方で、ほっとしているようにも感じられた。身内だけで行きます、と案内された翌日の告別式に、テルちゃんは出席した。

目の縁を真っ赤にして、不安定でいるテルちゃんを見ると悲しくなった。明日にでも、テルちゃんは死んでしまうのではないか。テルちゃんも精仁さんのように、みるみる痩せて、ある日突然目覚めなくなってしまうのではないかと思った。母はテルちゃんに、食事を取ることを異常なまでに勧めるようになった。

テルちゃんにはきちんと出て、通夜の時のように人前で……少なくとも私の前で涙を見せることは無かった。丘の上の長楽寺は、傾斜を埋め尽くすほど彼岸花が咲き乱れる。そんな時期になっても、テルちゃんは時々ふと立ち止まって、私を不安にさせた。

秋も深まり、はじめて灯油ストーブを焚いた夜、テルちゃんの布団の隣に、私の布団を引つ張っていった。甘えん坊さんが来た、とテルちゃんは枕を近付けてくれた。

「テルちゃん、」

「どうしたん」

「テルちゃんは、死なんとなって」

「まだまだ死なれんよ」

「うん」

念押しするように頷いた。

「こんな可愛い子残して死ねんやろうもん」

テルちゃんは、ちよつとだけ笑って、私の冷えたつま先を腿ではさみ込んだ。

いつでも優しさを注ぎ込んでくれるテルちゃんが、どんなおあばちゃんになるのかを、私は見届けなければならないのだ。人の死と向き合った彼女の言葉は実直で、心強かった。

きつと精仁さんの生前の思い出は美化されて、テルちゃんの中に残り続ける。しかし、変化し続けられるというのは、それだけで幸福なのかもしれない。テルちゃんが旅発つとき走馬灯に見るような思い出を、これから沢山作っしていこう。それだけで、私は生きていけると思った。もし、テルちゃんが将来よその男の人に惹かれても、私が姪であるという、生まれ持った運命は変わらない。

テルちゃんの中には、間違いなく、精仁さんが生きています。私も生きています。

タイの国土は、ゾウの横顔のような形をしている。テルちゃんはその国のことを、仏教徒の多い良い国だ、と手紙に綴ってくれた。

私がこれまで生きてきて、読みつぶした、と言える本は一冊だけだ。本といつても学術書で、木の根に埋まって微笑む仏像や、夜空に立ち昇る無数の灯笼などの異国の写真も載っていた。バンコクに一番近い港は「Khlong Toei」と記載されている。クロントイ、と、私は口に出す。東南アジアの文化を研究する学科に入った。私は、ハタチになった。

テルちゃんは今、ゾウの下顎にある港で働いているらしい。らしい、と言うのは、テルちゃんの旅立ちが本当に突然だったからだ。左遷なのか、自ら志願して行ったのかも分からなかった。三年前、外国に転勤するかもしれない、とテルちゃんが言ったとき、私の父も母も、血相を変えて彼女を止めた。

精仁さんの亡くなった翌年に、テルちゃんは女の子を産んだ。難産だった。日付が変わったばかりの6月の16日。その朝を、昨日のことように思い出せる。保育器を覗いたとき、生きる希望だ、と思った。父は兵隊さんのように両手を掲げ、「万歳」と言って泣いた。私も泣いた。当時は意外だと思ったが、両親は妹の未婚での出産に眉を顰めることもなかった。それどころか父は、文具屋に駆け込むと、上等な半紙を買ってきて『命名晴子』と何度も書き直して、一番きれいなものを居間に貼った。

自分が思い通りに選べる世界程、醜いものは無いと思えた。この子が、精仁さんとテルちゃんの愛欲の結果だとしても、この町で二人が出会わなければ、私は晴子ちゃんと出会うことも無かった、と壮大なことを考えた。

「環ちゃんが生まれたときも、こんなちっちゃかったんよ」
大仕事を終えたテルちゃんの声は枯れていたけど、その言葉

は私の耳に甘く残った。私は偶然、テルちゃんの姪で生まれた。そう感じて初めて、変化の苦しみを他人のせいにせず、自分で引き受けることができた。昔のテルちゃんも、小さな私を見て、希望だと思えただろうか。

今年、「くき丸」は長崎の港に買収される。九州と本州を結ぶ海上橋が完成したことで、利用者が流れたのだ。父は兄妹の貯金と市からの補助で、市場に食堂を構えるそうだ。

周りの人間が抗っても、止められない変化が沢山ある。私はそれを一つ一つ受け止めていくしかなかった。

私が読みつぶした学術書を広げて、ハルちゃんはゾウの顎を指さした。

「ハルちゃんのおかあさんは、ここにいるんだよ」
「そうだよ」

頭を撫でると、彼女は弾けるように笑って立ち上がった。座った私の肩を、ぐらぐら揺らすハルちゃんは、今年五歳になる。汗で頬に張り付いた髪の毛を、耳にかけてやる。彼女は、おひめさまごっこして、と腕を引く張った。

私はようやく、愛されることが子供の役目である、と思えた。テルちゃんは人に愛されている自覚をもって、少女で居られたのだ。前しか見ない無責任な魅力が、今でも私の胸を翻弄することがある。テルちゃんとの記憶を思い出すと、年齢なんてものを軽々と飛び越えて、小さな頃に戻ってしまうような気がした。

テルちゃんから誕生日に届いた小包には、社員寮の番地が書かれていた。私は異国の港へハガキを送った。毎日ハルちゃん

のことを書いた。好きなことについて書くのは際限がなく、手紙のネタは尽きなかった。

小さな手を繋ぐ。口ずさむのは決まって、昭和のブルース。受け取った愛を、教えてもらった自由を、私は決して忘れない。

師匠はハッキリ言つて、面倒臭い。

前多洋秀

師匠は天才だ。

あらゆる魔術を極め、いかなる権力に従うこともない。力を持つ自分勝手なので厄介者扱いされて世界の果てに住むことになった。

「ぐ。へ。へ。へ……！」

師匠はハッキリ言つて、可愛い。

奇怪な鼻歌を口ずさみながらご機嫌に錬金窯に菓草をぶち込んでいく。かき混ぜるたびに摩訶不思議な瑠璃色の髪と極東の魔術で作った額の防腐札が揺れ靡く。

「ふむ、できたぞ我が弟子よ。ぜひ試飲したまえ」

主張の激しい尖がり耳をピコつかせて、師匠が俺を見上げる。小さな手から渡される謎のポーシオン。立ち上る甘ったるい異臭。魔術書だらけの部屋に充滿する紫の排気煙。

「……これはなんですか？」

「素晴らしいだろう。一滴で人間をメロメロにしてしまう惚れ

菓だ。飲んだら死んでも治らないぞ？」

「治らないぞ？ じゃないですが」

「ほら、我は例えるなら世界樹に咲く一凜の花だろう？ その唯一無二の魔力、世界を魅了する傾国の存在……！ 文字通り高嶺の花……ッ！」

「最果ての地に咲く未確認植物だと思つてました」

普通の人間であれば、きつとこんな、魔王へ捧げるフルートがごとき煮沸音をあげながらぼこぼこ形状を変ええる真っ赤なジェル状物質なんて投げ捨てる。

だが俺は聞くほかありません。師匠は師匠で、育ての親も同然で、放置すると国を傾けるような存在でした。

「だがこの薬があればそうした届かぬ花に対して手を伸ばす勇氣と無謀を得られるわけだな？ そして死んでも治らないから我のようにアンデットになつても安心」

「得られるのは色欲と汚名では？」

「喧しい我が弟子い！……うう」

大袈裟に涙ぐみながら師匠は林檎を手取る。

「我が弟子の背がこれぐらいだったときはママ、ママって人懐こくて愛らしかったというのに……！」

「変な記憶造らないでください。そんな身長だった時代はないです。……それにいい加減その話はしないで言って言ってるじゃないですか。もう子供じゃないんです」

師匠の話を断ると最近はずぐこれだ。子供の頃の話をして、無理にでも俺を子供扱いしようとする。

もう成長期もなければ、師匠のおかげで魔術の知識も師匠の弟子を名乗れる程度には蓄えているのにまるで認めてくれない。

「……ふん、子供じゃなくなったから街で夜遊びを覚えたのか？ 我が気付いていないと思うのか？」

「街に行ったのは事実ですけど夜遊びじゃないです」

「じゃあ、なんだ？ 言ってみるがいい。我が弟子い、言えないやましいことなら罰があるな。言いたくないならほら、脚をマッサージしてくれたまえ。キョンシーの方法で不死になった所為か関節が痛むんだ」

師匠はあどけない体つきに不釣り合いな、大人びた笑みを浮かべてスリットから脚を伸ばす。そのままゲシゲシと足先で小突いてくる。

「い、言えませんが……！ けどマッサージも絶対にしないでくださいね？ ……少し修行したいので滝を作ってください」

俺は——逃げた。街に行った理由は師匠に明かせない。けど

もう子供じゃないんだ。マッサージなんてできない。師匠は師匠で、育ての親でもあったけれど、それ以上に同じ魔術趣味で綺麗で、可愛らしくて、ずっと知っている人だ。

最果ての大陸の密林を駆け抜けて、師匠にもバレない距離まで離れてから今日の不満を叫ぶ。

「師匠のッー！！ クソボケ！！ なんなんですか最近の服は！」

あくまで師弟関係。どうせ師匠はそう考えているから文字通り死んでも子供扱いしてくるだろう。間違っではない。俺は師匠を敬愛している。師として尊敬している。その関係こそ尊うべきもので、子供じゃなくなってしまった想いは。

「……ああ、くそ！」

滝に打たれて水に流す。——あつ、今上手いことを考えた気がする。



「うーむ……。やはり飲んではいくれないか。死後も継続するというセールスポイントでは弱かったのだろうか」

悶々と思考を巡らしながら我が弟子の衣服に顔をうずめる。——こんなところを見られたら師匠としての体裁が保てなくなるが幸い我が弟子はだいぶ遠くまで離れていった。

「スー……フー……」

悪癖だ。真面目で勤勉な我が愛弟子。ほんの数年前までは息子がいればこんな感じかと思えていたのに。

「うがあああああああ！ 我を差し置いて王都に夜遊びなど覚えおつて！ それとも女か……？ いっそ街を滅ぼしてしまいたい……」

でもそれをすると二週間は口を聞いてくれないだろう。

「最近は何も気にしているというのにまるで気づかない。お母さん程度にしか思われてないとすれば私の服はむしろ不快……嗚呼、考えたくない」

もういっそ感情を吐露してしまえば。

——否。師匠だぞ。こういうのは弟子から言うのが道理だ。

というよりすごく恥ずかしくて言えたものじゃない。

「嗚呼、でも夜遊びだけは許さん。変な女に騙されてるなら分からねば」

師匠こそ一番。師匠こそオンリーワンだと。

「……そうだ！ あるではないか。ナウでイケイケな方法が」

——合コン。

「他の女と我を並べればより一層我しかないと理解できるだろうなあ……くくく。それに我が他の男に取られるとなれば、フ。ふっふっふっ！」

思わず零れる笑みに閨属性が混じる。思い立ったがなんとやら。準備に取り掛かるためにすぐに近隣国へ鳩を飛ばすことにした。



「……というわけで合コンをするぞ」

背中が大きく開いたドレスを着たかと思えば、師匠は目を爛々と輝かせてそんなことを言った。

「は？ どういう訳なんですか？」

師匠が突拍子もないことを言うのは飛蝗が跳ねるぐらいの頻度だが今回は飛蝗がバタフライをするぐらい理解が追いつかなかった。

「なあにちよっとした余興のようなものさ。周辺国を脅したら快諾してくれたとも」

「周辺国を脅したら快諾？」

言及しようとしたが無視された。前髪を掻いて、なんとでもないように俺の顔を見上げてくる。華奢な手が伸びた。

「ヒールが慣れないんだ。目的地までエスコートしたまえ」

フラつく足。すぐに手を取った。……弟子だとか師匠だとか関係なく、拒否できるはずがない。師匠は満足気に鼻で笑う。

「我が弟子にはいつもこれぐらい素直に親切でいて欲しいものだな」

「師匠が穏やかでいてくれれば俺だってそうします。……それで、目的地は」

「少し離れたところにちよっとした屋敷を建てたんだ。そこまで向かう。他の参加者も来ているだろうからな」

——屋敷とやらには既に数名が集まっていた。皆、大陸の最果て、密林に突然生えたまともな建物を見上げていたが。師匠の姿が見えると全員が臨戦態勢に入る。ビリビリと肌をヒリつかせる警戒と敵意。

「あう……」

師匠が気配に当てられて俺の背中中に隠れた。この中の誰よりも力を持つ存在だというのに。仕方なく俺が話をつけに行く。

参加者は五名。とりあえず見た目から判断するに男性が侍、勇者、騎士。女性が司祭、それと……斥候だろうか。

「……合コンの参加者ですか？」

「えっと、あなたは……？ 魔女ですか？」

司祭がズレた質問をしてくる。俺は男だ。

「いえ、男ですが。まあ、魔女の弟子みたいなものです。魔女は俺の後ろにいる方で」

師匠は引き気味に何度も頷く。あどけない相貌に刻まれる不安の影。最果ての魔女を警戒していた参加者はどこか気が抜けたようにも見えた。

奇妙な警戒と沈黙のなか、全員が屋敷に入り席に着く。

師匠が指を鳴らすと、使役する不定形の錬金生物がてけりりと鳴きながらテーブルに食事を並べていく。

司祭がおぞましいものを見る目で従者を凝視していた。

「……………」

冷や汗が流れ落ちた。時計の針の音だけが嫌に響く。……誰もしゃべらない。名乗らない。まるで対魔術師呪文を受けたみたいだ。沈黙。そう、誰も、何も喋れなかった。

相席になった師匠へアイコンタクトを取る。——相互の魔力干渉の同意。遠隔会話（テレパシー）の魔法を繋げた。

（重てえ……！ 師匠？ な、なんで誰もしゃべらないんですか？ 師匠が集めたんですよね？ 師匠が企画したんですよね！？）

（わ、我に人脈などないから集めたのは国だぞ！？ こやつらなど顔も知らぬ！ ただ合コンをしたいから国で誇れる人材を各国最低一人寄越せと）
（なんて条件寄越してるんですか！？）

師匠は我悪くないもんとばかりに涙ぐんだ目で睨んでくる。キョンシーになった所為でギザついた歯を軋ませていた。

（……泣かないでくださいよ）

（我だって本当は自己紹介とか格好良くしたいんだが、我が弟子……い、以外の者とろくに会話もしなかつたせいだな？ ……最初の一言が全く分かんのだな？）

（俺だって合コンの一言目なんて知りませんよ……！）

「……………」

誰か喋ってくれないものか。祈るように参加者を一瞥すると、居た堪れない空気の中一人が立ち上がる。

「まずは自己紹介しねえか？」

勇者だ。勇者は見た目だけではなかった。勇氣ある者であった。思わず感動して彼の手を握る。

「あなたは勇者だ」

「いや戦士……。まあ、気持ち的に勇者やってもいいけどな！ つてことで、戦士じゃなくて勇者名乗ります。オレサマ勇者でーす！ 趣味は鉱石採掘。国王様より我が国最強の男だなんて言われちゃってちつと荷が重いのが最近の悩みっすね」
勇者はさわやかな笑みを浮かべて。流れができてしまえばあとは簡単だった。

「んん！ 拙者は極東より派遣された侍でありますぞ。此度は

最果ての魔女殿を見れると聞いて来た次第。好きなものは強者と剣を交えること。そして男女がイチヤつく様を見届けることでありませぬ」

落ち武者が特徴的な言葉遣いで紹介を終える。

「んん！……今失礼なこと考えなかったか？」

——そんなことはない。次の人、全身甲冑だった男が兜を外した。整った相貌。見目麗しい美男だ。

「おでは銀弾十字騎士団総隊長の騎士だどす。今回はこげんな大物ばかりで、どーも肩身が狭いっだ！」

（我が弟子い……。我は生まれて初めて、おで口調なのにデブじゃない奴を見たぞ）

（奇遇ですね。俺もです。太ってたら肩幅は広いじゃないですか。とかツッコミ入れられるのに）

沈黙の空気が消えて緊張も薄まったのか、師匠は意気揚々と立ち上がった。ピコつく耳。珍しく袖から手が出てくる。

「そして我こそ、立てば——」

（迷惑）

「座れば——」

（厄介）

「歩く姿は——」

（国際問題）

「ええい、我が弟子い！！ テレパシーで余計な茶々を挟み……、なんなんでもないです。えっと、……最果ての魔女だな？」

テレパシーのやり取りは俺達二人しか聞こえていない。訴え

は空虚で、師匠のしたり顔はすぐにふにやついた。俯くと額の防腐札が揺れる。

着席と同時にテーブル下で俺に足を踏みつけ騷り出した。

（冗談でした。怒らないでください）

（格好良くキメようと思ったのにどうして邪魔をするのかね我が弟子い。……そんなに私の合コンが不服かね）

（……そりゃあ不服ですとも。このあと世界中に謝罪をいれなくてはなりません）

本当はそんなことどうでもいい。師匠が合コンで自己紹介をするのが納得いかなかっただけだった。そもそも合コンなんてものを企画したこと自体、……あまり賛成できない。師匠が男女の出会いを求めている？ それとも俺の出会いの場を用意しようとしている？ ……わからない。どっちも嫌だ。

次に司祭が立ち上がった。立ち上がってから困ったように視点がぐるぐると回り出す。

「……オレサマ、拙者、……おで、我。うう……」

困ったようにそんなことを呟いて、けどすぐに開き直った表情で笑みを浮かべる。

「ソ、某は……」

「変な口調で自己紹介しないとイケないとかじゃないですよ」

「………あ、え、え？ ……ソーなんです。その、わたしは司祭です」

司祭は顔を真っ赤にして涙ぐむとそのまま着席してしまっ

た。「我が弟子はそういう子に付け込んで夜遊びをするのが最近の

趣味なのかね？」

「だから夜遊びではないと……」

「うひょー！ 最果ての魔女殿が嫉妬の炎を燃やしてるでありますよ。やつぱり——」

侍が余計なことを言うと同時、師匠の鉄山靠をもちに受けて吹き飛んだ。突き抜ける衝撃と轟音。椅子が四肢をばら撒いて宙を舞う。

「魔女ツ？ 魔女とは……？」

「魔法も使えるぞ。火の魔法は得意だからな。我に掛ければ魂ごと燃やす救済の火を灯すことも容易だ」

「地獄の炎ですよねそれ」

「そんな物騒なものは使わん」

——魂ごと燃やすのは物騒ではないのか。

にわかな疑問が晴れることなく、残りの一人、斥候の少女が立ち上がった。

「帝国より優れた者が集まる秘密の会があると聞いて参上した斥候です。ワタシは魔王討伐の協力を募るためにここに来ました。アットホームで、賃金もいいのでぜひ来てくださるとうれしいです。それで、そちらの方は？」

「ああ、言い忘れてました。俺は魔女の弟子です。子供の頃に彼女の家に捨てられて、育ててもらいました。師匠はその、人付き合いが苦手な常識もなく色々大変ですけど……良い人です。まあそんなぐらいい」

途中で恥ずかしくなって慌てて着席した。師匠がご機嫌にニヤついて全員が自己紹介を終え、……再びの沈黙。

（師匠、何か話題はないんですか？ 師匠が合コンしようと思っただけですよ）

（そうだが、そうだがあ……！ 我は合コンを詳しくは知らぬ。そ、それに我が弟子以外と会話なんて全然してないから緊張して言葉が出ないんだあ！）

（師匠………なんでこんなことしようとしたんですか）

（い、言えない！ 我それだけは言わないぞ……）

師匠は黙り込んでしまった。いや、俺がなんでもいいから言えればいいんだ。師匠ができないことをフォローするのが俺の役目。

「まずは——」

「黙ってるのも気まずいのでまず合コンの認識合わせからしないスか？」

勇者が切り出す。人怖じする様子はなく、師匠とは正反対の人間だった。

「やはり勇者は勇者だな。我はこういうことは詳しくないゆえ助かる」

俺のことはまるで褒めない師匠が勇者のことはすぐに褒めた。実際、勇者が最初の自己紹介を進めてくれて助かったのだが、どこか釈然としない。

「んん！ 弟子殿もしかして妬いておい——」

並足を揃え踏み出し、侍が余計なことを言う前に鉄山靠。幸い二回目ともなると誰も気に留めなかった。

「師の技が寸分狂いなく弟子に引き継が……ぐふっ」

「いい感じに人が吹っ飛びましたし、勇者さんの言う通り俺も

合コンの定義を再確認したいです。正直合コンなんて名目ですけど、このうち何人ぐらいが合コン……つまりは男女の出会いの場を求めてきたのですか？」

吹き飛んだ侍を引きずって、着席させると、勇者がぶるぶると震えながら挙手をした。

「オレサマはさつきも言った通りッス。国王に命じられてなんすけど、最果ての魔女さんが参加者を送らないと国に隕石を降らせるとか言ったみたいなんで、来たっス」

師匠が気まずそうに視線を逸らす。

（国家存亡の危機を合コンごときで起こさないでください）

（違う！ 我は合コンのために隕石を用意したわけではなく、……その我が、ああもう！ 言わせるなよ！！）

言わないと師匠の考えなんてまるでわからないのに。

「おでは魔女が男女の出会いを求めて世界中の強者を集めんと聞いた陛下が、魔女の力が他国に渡んだらパワーバランスが崩れゆーがて。それを妨害しに来やしただ」

「随分素直に明かすんですね」

「あんだ、看破の魔法使ってるだで。嘘を付くメリットがないだ」

訛りは激しいが彼も実力は確からしい。というかこれは合コンではなく国家間レベルのせめぎ合いになってるのではないか？

「斥候さんはさつき聞きましたし。侍は置いておいて、司祭さんへ？」

「ええと、わたしもお二人と似たような理由です……。最

悪なことが起きれば魔女を始末しろと」

合コンに抱える使命があまりに重すぎる。

「魔女様は……その、どうして合コンを企画されたのでしょうか。……世界中が不安と混乱を抱えています」

合コンが抱える感情ではない。

師匠は云々と唸り、牙を軋ませながら瑠璃髪を掻いた。ジツと赤い双眸が上の空を見上げる。……嘘をつくときの表情だ。生憎、看破の魔法は師匠に教わったもので真実を見ることは叶わない。

「我はこの地にずっといるからな。時として世界の人間を見てみたいと思ってな。我に見合ういい男がいれば……その、やぶさかではないんだが」

恥じ入るように尖った耳が朱に染まる。——考えると苛々した。胃が締め付けるように痛む。

「はは、師匠のことを受け入れる男がいるとはそうそう思いませんけどね。普通の人なら三日で逃げます」

「………我が弟子い。そんなことを思っていたのか？」

「ええ、耐えられる人がいるとは思いません」

言い切ると、師匠は拗ねるように前髪を弄り始める。ジツと、鋭い睨目が向けられた。

「ハッ、我が弟子の辛辣な物言いに耐えられる輩がいるとも思えんがな」

「師匠以外には普通に接しますよ」

こんな言い合いをするつもりはなかったのに。苛立ちをぶつけてしまうと険悪な空気が広がっていく。

「あ、あの！何かあるとわたし、殺さなきゃいけないとなっちゃうんで……その、合コンっぽいことをしません？帝王ゲームとかどうでしょう」

「……すみません。皇帝ゲームは知っているが帝王ゲームとはなんでしょうか？」

と、斥候が尋ねる。司祭はじやらりと適当な免罪符を見せた。

「帝王の絵が描かれた札を取り合うんです。手に入れた強者が好きな命令を敗北者たちに行えます」

——そんな物騒なゲームは知らない。

「名前が似てるから同じものかと思ったが違うのだな。皇帝ゲームはくじで皇帝を決めるんだ。それから番号で命令対象を決める」

「そちらにしましょう。この面子で帝王ゲームとやらは間違いない。死者が出ます」

司祭の持っていた免罪符を使ってくじ引きが行われた。信仰の欠片もないやり取りだ。

「皇帝は誰ですか？」

「んん！拙者でありますな！」

あれが皇帝になればやはり神はいない。もしくは神罰の類が降ったかもしれない。唯一色恋沙汰を目的に参加している侍は、酷くご機嫌に命令のないようを熟考し、声高らかに命じた。

「三番と五番はの中で好みの人の膝に座るでありますよ！」

激震が走った。仮に誰かが師匠の膝に座ったら？——鉄山靠では済まされない。逆に師匠が誰かの膝に座ったら？い、

いや、師匠の自由なはずで。俺がとやかく言う権利はない……

ないが。

バレないように師匠を注視する。なぜか目が合ってしまった。俺達は互いに首を横に振る。騎士が勇者の膝に、司祭が斥候の膝に座った。

「よかった……」

安堵してしまった。心臓が強く脈打っている。

「い、いやあ。オレサマやっぱモテモテだなあ……。ただ一回トイレに行きたいかなあなんて。別に戻ったらこの状態で再開していいから。ね？」

勇者が必死に笑顔を浮かべる。師匠も反対せず、王様役だった侍も冷めた表情だったが許可をしてくれた。

「弟子殿も連れトイレに行きますぞ。これは皇帝命令であります」

「いや命令は番号で行う——」

侍が俺の襟を掴んで無理矢理体を引きずっていく。——強い。抵抗しようにも力を入れることができない。首に触れた僅かな指が四肢を縛り付ける。抵抗もできずに、洗面台まで向かわされるハメになった。

「つと、力ずくで悪かったでありますな」

侍は拘束を解放すると、鏡の前で落胆するように大きなため息をついた。

「はああー……。くっだらねえ茶番でありますなあ。最後の魔女が合コン！ てっきりワンチャンありかと思っただけに」

勇者が怪訝な眼差しを向ける。

「魔女は男女の出会いを求めているわけではないってことスか？」

「拙者らはとんだごっこ遊びのために呼ばれたとしか」

侍が俺を睨む。一瞬の敵意。それから呆れが混じり、鼻で笑った。

「んん！ 勇者殿、騎士殿、穩便に事を済ませるなら拙者らは合コンから離れるべきでありますぞ」

侍が二人の肩に腕を置くとか何かを囁く。魔法で盗み聞きしようとしたが、間に合わなかった。

勇者と騎士は一瞬見合うと、首を横に振った。

「それはできねえ。国の命令がある」

「おでは魔女の同行を見張る義務があるだ」

「頭が固いでありますねえ！ なら拙者と少し遊戯と付き合うであります」

侍は不意に刀に手を置いた。口角を吊り上げ、目を見開いて獐猛に笑う。殺意がなからうが、国家の存亡が関わる二人には冗談で済まされぬ。否応なくトイレを前に剣と槍が抜かれる。

「な、なんでこんなことをするんですか？ 師匠は確かに危ない発言はしますけど、本当に隕石を落としたりはしませんし

……皆に戦う理由は」

「弟子殿は目が合った理由でも考えるべきであります。さあ、戻って皇帝ゲームの続きを。拙者は好きなものに従うだけ」

三人の鋭い殺意が巡るだけで鏡に亀裂が走った。俺一人では止めようがない。師匠の力が必要だった。

「ッ、嗚呼もう……。だから合コンなんて反対だったんだ」

疾駆した。テーブル席に慌てて戻るとなぜか師匠しかいない。「……っ？ 司祭さんと斥候さんは？」

「すぐ他の女の話か。我が知ったことではない。二人とも急に我のことを馬鹿にするように笑ってから魔王を討伐してくるとか言って帰ったぞ」

はあ、と。ため息を漏らして師匠がテーブルに腰掛ける。白いドレスが危なげに揺れた。

「こっちはこっちで大変なんです。あの三人が何故か斬り合いを始めて。あいつら下手に強いせいで俺一人じゃ止められませぬ」

師匠は頭を抱えた。俯いて、目をぐしぐしと拭うと拡声の呪文を呟く。

「もう合コンなんてしなくていい！ 魔女が帰って良いと命じよう！」

玲瓏とした声が周囲一帯をビリビリと震わせる。師匠はもう一度溜息をつくとき、これでいいだろうとばかりに俺を見詰めた。

「……計画とはうまく行かんものだな。魔法や仙術、武術であれば己の身が全てだというのに。人がかかわることは我はてんで駄目らしい」

小さな手が苛立つようにドレスを握り締める。

「はあ……。分かり切ってたじゃないですか。なんで合コンなんてしようとしたんですか。突然」

「………言わん。こんなドレスを着たのも馬鹿だった」

師匠は顔を歪めると自身の胸倉を掴み、腕力にものを言わせてドレスを引き千切るうとする。

「何してるんですか師匠ッ!？」

慌てて師匠の腕を掴んだ。逆に掴み返され、そのまま地面に投げつけられる。背から痛みが突き抜けた。けどそれ以上に、師匠の表情が頭から離れない。突き刺すように痛む。

「っ痛……。わかりました。俺は師匠に隠してたことは言いません。だから服を破かないでください。あと、こんな状況で明かすことになった事に怒らないでください。……ああ、もう最悪だ」

愚痴を漏らさずにはいられなかった。押し付けるみたいに、街で買ったものを師匠に手渡した。

「……簪です。最近、服に拘ってたようですし似合ってるんじゃないですか？ 知りませんけど」

本当はこんな状況で渡すつもりじゃなかった。

「これを買うために街に出ていたのか？ けどなぜ夜なんだ」

「着くのが朝だからですよ。遠すぎるんですよここから。なんでそんなもの用意したかとか、聞かれても言いませんからね。明かす内容に含んでないので。後悔してください」

師匠はしばらく黙っていた。空気を讀んだかのように屋敷を静寂が包み込む。それから、ぎゅっと簪を握って。すぐに頭に着けてくれた。

「……我が弟子い、似合うかね？」

テーブルから降りるとくるりと一回転。靡く瑠璃の髪。揺れる白いドレス。簪が金に煌めく。防腐札が取れかけて、慌てて額に張り直していた。

「ドレスとは似合いませんね。極東の品ですし」

「そこはお世辞でも褒めたらどうかね？」

「正直に言ったほうが面倒臭くないと学びましたよ。今回で」

「その癖に結局理由は言わないじゃないか」

「師匠も言いませんし。言う義理はありませんよ」

不服を物申す緋色の視線。ギザついた歯の隙間から溜息が零れる。

「まあ、満足した。戻ろぞ我が弟子い」

「え、あの。合コン参加者は……？」

「知らん！ 盗み見をする輩など金一封でも渡して黙らせればいい！」

手を引かれた。不死の術の代償の所為で小さな手に熱はない。エスコートとはなんだったのか、慣れた様子でヒールを鳴らしていく。

師匠は天才だ。天災でもあって。気難しくて、力を持つ自分勝手。

「せっかくだ。このまま密林を散歩しよう。奴らから逃げるついでにな」

満面の笑みを浮かべ、風を切って走り出す。後を追うのがやっとならなくなった。

師匠はハッキリ言って、可愛(めんどくさ)い。

察しが悪くて、俺以外ならきつと三日で逃げてしまっただろう。

先輩を救うことができないのは、
わたしがその立場にすら立てていないからです

渡部愛梨

先輩は、わたしの神さまでした。

「きみは僕のために死ぬるよね」

「頭のネジ、探してきてあげましようか？」

そこはき、元氣よく先輩のためなら死ぬますって言うところでしょう。まったく、なんて文句を垂れた先輩に、これ見よがしに大きいため息を吐きだしてやった。

太陽に照らされた大学の日陰。北校舎の二階、大して日も当たらないベランダに作られた形ばかりの喫煙所で、先輩は今日もぶかぶかと煙を燻らせていた。

自身の腰あたりまでしかない柵に肘をついて、健康に悪い煙を吐いては吸うのを繰り返している先輩の隣に立てば、なぜか鼻で笑われた。スマートフォンに『はやく来て』なんて通知が来ていたから、せっかく走ってきたというのに、まったく人使いが荒い。

「ああ。きみにまで見捨てられたら、どうやって生きていけばいいの」

「知りません。勝手に生きてください」

「釣れないな、可愛くない」

うるさいです。と返せば、あからさまに無視された。お気持ち程度に染められた先輩のまだらなブラウンヘアが風に吹かれて揺れる。くるくるふわふわと纏まりなくワックスで遊ばせている髪からは、就活真つ只中の四年生が本来醸し出しているはずの清潔感は一切感じられなかった。

しばらくして、先輩がこちらを一切見ずにまた煙草を吸い始めたのをいい機会だと言わんばかりに見つめてみれば、つぶらな瞳を鋭く細めて睨まれた。この世の混沌をすべて煮詰めて吐き出したような深い黒色が、わたしの瞳に焼き付く。その端で揺れた罪もなにも背負ってないのに、そこはかとなく業を感じてくるくたびれたトレンチコートはこの季節には少し暑そうに見える。

「ねえ。それより、いつまで敬語使ってくるの？」

「敬語の方が先輩、後輩っぽくて好きなんです。だからと言って、わたしが可愛いかわ愛くないかを決める権限は先輩にない

はずなんですけどね」

「どうせ明日には、やっぱり先輩に生きてほしいから死にますとか言ってくるくせに」

「いや、そもそも。わたしが死んだら、だれが先輩の面倒見るんですか？」

本日二度目の無視。先輩はいつもそうだ。都合が悪くなると、こうしてわたしの言葉など聞こえていませんでしたタイムに入る。今日は相当ご機嫌が斜めだったらしく、目も合わせてもらえない。わたしだって、ただ言うことをなんでも聞く操り人形みたいな後輩になる気は生憎なかった。二人の間に流れた束の間の静寂に、仕方なく先輩が吐き出す煙の消えていく先を見上げ眺めてみれば、薄付きの青が眩しい空には無数の白いうろこ雲が浮かんでいた。耳を澄ましてみても、蝉の声は聞こえない。心なしか涼しく感じられた風にはすでに湿気などなく、思いきりよく吸った空気の思わぬ乾燥具合に咳が出ってしまった。

「なに、風邪？ 絶対、うつさないでね」

ポケットからおもむろに出した消毒用アルコールを顔に軽く吹きかけられて、目元に力をこめて先輩を睨みつける。これが精一杯の抗議。彼はいつも香水瓶にアルコールを入れて持ち歩いていた。彼曰く『死にたいときに嗅ぐんだ。病院の匂いを纏っていたら、死に神が間違つて僕の命を狩り取りにきてくれるかもしれないでしょ』だそうだ。周りの人は理解出来ないと言うけれど、先輩は行動がとんちきなだけで言うことは割と的をいっていたりする、不思議なひと。まあ、彼の魅力だとかそういうものはわたしだけが知っていれば、それだけで世界は満た

されるから。別に、他の人は理解出来なくていいし、知らなくてもいいけれど。

「あんまり就職活動してないのに、そういうところだけ気にするんですね」

あ、地雷踏んだ。と思った時にはもう遅く、次の瞬間には隣からなにやら先っぽが尖ったもので頬を軽く刺されていた。「嫁入り前の女の子の顔に傷をつくって許されると思ってるんですか？」と抗議しても、先輩は無言でわたしの頬をキズモノにしていくな。

「そっちこそ、就活うまくいってない先輩を煽って遊ぶのはたのしい？」

「あ、一応やっていたんですね」

「……やっぱりきみ、僕のために死んでよ」

見下ろしてぐる視線が心なしか冷たい。煙草が先輩の薄い唇から離れて、その先がわたしの瞳に向いた。近くで見ると意外と煙は白色とは言い難いほど濁っているんだな。とか危機感よりも先に感想が出てくるところが好きなのか、わたしの表情を確かめるよう覗いてきた先輩は満足げな笑みを浮かべていた。その間にも本来空へ昇るはずだった煙がわたしの瞳を刺激してきて、正直とても鬱陶しい。潤いが売りのコンタクトをつけていたからいいものの、ほんのり沁みたのか鈍い痛みが襲われて瞬きをしながら「いや、早く煙草どけてもらえませんか？」と睨みつけても無視された。

「で、今すぐここから落ちて死ぬ？」

視界の端で、わたしがここへ着く前から彼が作っていたので

あろう紙飛行機がゆらゆらと揺れていて、つい先ほどまで自分の頬を傷つけていたものの正体を知った。飛行機の翼の部分に不自然に印刷された『〇〇株式会社』や『今後より一層ご活躍される事をお祈り申し上げます』の文字。それだけで、先輩が一体なんの紙で飛行機を折ったのがわかってしまった。と同時に、わたしがどれだけ殺傷能力の高い地雷を踏んでしまったのかも、ようやくちゃんと理解することが出来た。

「ちよつと、先輩。不採用通知で紙飛行機つくるの、やめてもらつてもいいですか？」

それでも、今更認めるのは気が引けて頬を膨らましながら抗議をすれば、目の前に向けられた煙草の先が引っ込んで、かわりにまた飛行機の手で頬を刺された。

「失礼なことを言つても謝らないの、強情だよ。僕がこれまで教えてあげたこと、忘れちゃったのかな」

「忘れないですよ。先輩はわたしの憧れですから」

「偉いね。お酒飲めないから、きみは酔っている僕のこととも忘れられないもんね」

「別に先輩が言ってくれたら、飲みますよ」

「口先ではきみたいになんとでも言えるんだよ」

たしか、彼は友人が入っていたサークルの先輩だった。遠巻きに教えてもらうまでは、一切接点がなかったからか名前はもちろん顔すら知らなかった。彼はわたしの二つ上の三年生で、特別取らなくてはいけない授業もないようで講義時間になっても教室に顔を出すことはほとんどなかった。隣の席で授業を受ける以前に、同じ教室で受けられるだけで奇跡みたいな遭遇率。

その中で一度だけ、期末レポートの提出だったかの時。たまたま近くに座っていた印刷したレポート以外なものも持っていない彼に「レポート提出届とペン、貸して」と声をかけられたのがファーストコンタクト。一方的に知っていたわたしからすれば、フォースコンタクトみたいなものだったけれど、互いに認知したと胸を張って言える出来事はこの時が初めてだったと思う。それからはなにか特別なことがあったと言うわけでもなく、相互フォローというゆゑの上で薄く繋がっただけの関係性で、先輩が語るあらゆる理論を惰性的にいいねする日々。最初のうちは感銘を受けるような言葉もなく、既読感覚でタイムラインに先輩のツイートが表示される度に、無色のハートを赤く染めるパイトみたいな気持ちでいいねをしていた、はずだった。

「そんなこと言っていますけど、今日もちゃんと先輩に連絡もらつてすぐ来ましたよ」

「いつもより、五分遅かったじゃん」

「そういうの、屁理屈って言うんですよ」

けれど、変わっていったのはいつからか。お酒を限界まで飲んで吐いたとか。目の前で初恋の女の子が別の男に持ち帰られて絶望しているとか。夏の終わりって無性に死にたくなるとか。エナジードリンクって何杯飲んだらカフェイン中毒で死ぬるか実験してみた、みたいな目を離したら消えてしまいたいような先輩のツイートが打ち上げられては消えていく花火のように見え始めた。その儚さが色を失ってしまう前に、今の彼とちゃんと会って話しておきたくて、友人に先輩をちゃんと紹介してもらうことにした。紹介する前の友人からは散々「あのひと、少

し変わっているけどいいの？」と確認された。けれど、それでもいいと首を縦に振ってからは、先輩の時間割を把握して休み時間は必ず会いに行くようになっていた。

「きみて、強情。全然引いてくれないし、うるさいし」

そうして毎日接点を作りに行つて、一か月と少し経つた頃、『マルセル・シュオツプ全集』が愛読書だということを知つた。全九三三ページの本を貸し付けて『これをぜんぶ読まないじゃ僕を理解できないよ』とか言外に読めと圧をかけてきたくせに、実はその中に収録された世紀末文学の短編『大地炎上』が好きなだけなところとか、本当に勝手だなと思つた。あ、そうだ。まだそのマルセル・シュオツプの本を先輩に返してないんだつた。借りパクは万死に値すると貸してもらつた時に聞いた気がするし、思い出せてよかつた。危うく命を失うところだつた、次会う時まで返さなくちゃ。

「でも、本当は先輩も強情なわたしの方が好きなんだつて知っていますよ」

そうだ。たしか、あの鈍器になりえない重さの本を貸してもらつたあたりから、先輩からたくさん連絡が来るようになった。頻度で言えば、毎日。三六五日分のお呼び出しメッセージが今のわたしのスマートフォンには溜まつている。それは幸せと呼ぶにはすこし歪な形をしている気がした。

そんな、どこか上の空のわたしが気に入らないのか、つまりなそうに空を仰いだ先輩。

「お祈りメールも十通溜まつたら、お焚き上げできるシステム導入されたら素敵じゃない？」

「ちよつと。急に話を変えないでもらつてもいいですか？」

「先に話を変えたのはそつちだから、おあいこでしょ。それに僕は話を戻しただけだよ」

「じゃあ、聞いてもいいですか」

なにを？ と視線を下げ首を傾げた彼にそつと今度は地雷を踏んでしまわないように慎重に、それでいて大胆に口を開く。

「どうして不採用通知で紙飛行機なんて作っているんですか？」

「そうやつてきみはまた僕の傷を抉つていくんだね」

いや、別に今回は地雷を踏みたくて踏みぬいたわけじゃないですよ。と挽回をさせてもらえるわけもなく、どうしたものかと眉頭がくつつかんばかりに顔をしかめ、抱えこんだわたしの頭を軽々と先輩の手が撫でていつた。秋空の下でずつと煙草を吸っていたからか、あたたかくはないけれど、わたしよりは大きな手のひらは不思議と安心感があつた。

「理由は特にないけど。空に飛ばして忘れたいから、かな」

「ちよつと意味わからなくもなくなかないです」

「なに。急に素直だね」

「わたしは一応、先輩の共犯者ですから。先輩が悪いことをしたい、もしくはさせたいのなら、お手を汚させる前にわたしがやつてやりますよ」

先輩に比べれば、お酒もエナジードリンクも煙草も嗜まないけれど。いや、そもそも大学生だからといって、まだ未成年のわたしにはどれも法律的には許されていないのだから当然か。

「本当にきみは、口だけは達者だよ。結局、一度も僕の『死

ね』には従わないのに」

「え、先輩。死人に口なしってことわざ知らないんですか？」

「別に僕は、きみがいなくても困らないよ。またきみみたいな子を探せばいいけども」

「わたしのかわりが出来るほど、先輩のことが理解できる後輩がこの世界にいるといいですね」

「言うて、きみも僕のことそこまで理解出来てないけど」

そんなことないですよ。と返そうとした唇を動かさなかったのはわたしの理性。本当に彼のすべてを理解出来ているのか、と問われたら、言ってしまうえば他人であるわたしが正確に「はい、理解出来ています」なんて解答できるはずがなかった。

「じゃあ、はい。僕の唯一の共犯者を騙るなら、きみもたくさん紙飛行機を作ろうね」

そう不採用通知を渡されたら、わたしは折らずにはいられない。どれもこれも似通った文面で、会社名と日付以外に違いなど見いだせなかった。

「第一、まだ紙でくるなんて古い会社ですね。今はお祈りメールが主流ですよ」

「当然、お祈りメールで来る会社もあるさ。でもね僕は古くさい会社が好きだから、あえて紙で来る所を選んでるんだよ。だって、たくさん紙飛行機を飛ばせて楽しいでしょ？」

わかる？ と諭される。まったくわからないわけでもなくて、半端に首を斜めに傾けた。久しぶりに折った紙飛行機は船頭が不格好に潰れていた。中高生の頃に点数の振るわなかったテスト用紙で作った紙飛行機の方がまだしっかり飛びそうな形をし

ていて、時の流れを感じずにいられたかった。それよりも以前、小学生の頃は各々の渾身の紙飛行で滞空時間を競うことに命を燃やしていたのも懐かしい。

「ね、きみはアルティメット紙飛行機の作り方憶えてる？」

「いや、そんなタサイ名前の紙飛行機を作った憶えはないです」

「え、ジェネレーションギャップなんだけど」

「たつた二年でジェネレーションギャップもクソもあつて堪りますか」

「そう？ 意外とあるものだよ。きみの頃のプリキユアつていつの子？」

「わたしは三か四代目のプリキユアの、えーっと、あの五人いた」

「あ、僕。そもそもプリキユア見てなかったから、わからないや」

「は、もしかして。ふざけてやがりますか？」
今度は先輩が首を半端に傾けた。肯定とも否定ともとれない角度。

「なんかムカつくから、この紙飛行機お焚き上げしてもいい？」
「流行り的には地球を汚すなって勢力が強いんで、そろそろ怒られますよ？」

「あ、もちろん。火をつける役目はきみね」

「知ってます？ 日本では放火の罪って重いんですよ。逮捕されれば、殺人罪と一緒になんです」

知っているよ。と言わんばかりに、つい先刻まで煙草を挟んでいた指先で掴んだライターをカチカチと言わせて、火をつけていた。小さな炎が風にあおられて揺らめく。ゆらゆらとした

炎が煙草の残り香をパチパチと音をたてながら焼いていく。

「別に、僕は必ずやれと言っているわけじゃないでしょ」

「本気にする方が悪い理論ですか、それ」

「まあ僕は紙なんかをチマチマ燃やさなくても、このアルコールを燃やせば鬱憤くらい晴らせるからいいけど。きみは僕に命令されないと、苛ついても物を燃やせないもんね」

「趣味の悪い冗談はよしてください。わたしは先輩と違つて苛ついても物を燃やすなんて、物騒なことはいけませんよ」

なんか今日のきみ、ノリ悪い。いつもなら僕の言うことならなんでも、馬鹿みたいに『はいはい』聞いていたのにね。そこが面白いから、きみに構つてあげてたつて分かる？ あ、わかつていたら、わざわざ神経逆撫でてくること言つてこないか。ねえ。まだ僕のが好きなら、紙飛行機飛ばしてみてよ。ここから、そう目に見える証拠を出して。

またぶつくすと文句を垂れた先輩に深く息を吐き出せば、彼自身すら癩癩のやり場に困つているのか、苦々しい顔をしながら煙草を啜え直していた。

「先輩。紙飛行機を飛ばすのなんて、今更流行らないと思ひますよ」

「なら、流行りに乗れば僕のもとに採用通知が来ると思う？」

「……来ないですね」

今度は機嫌を損ねてしまわないように。細心の注意を払つて、先輩の望む後輩が答えるのであろう答えを口に出した。

「正解。よくわかっているね、お利口さん」

またそうやって、頭を撫でる。今度の撫で方は、完全に子ど

も扱いで気に喰わない。

「地球を汚すのは流行らないつて前に教えてくれたのは、先輩じゃないですか」

「ああ。うるさい、うるさい。じゃあ、紙飛行機を飛ばして資源ごみにするのはやめよ。かわりにきみが僕の煙草に火をつけよ」

わたしの身長にあわせてかがめられた腰の分だけ、普段わたしが背伸びしていることを思い出す。ただでさえ薄暗いこの場所は、夜が来るのが早い。互いの顔や手元が見えにくい中、手渡されたライターで灯りをともした。軽く持っていただけなのに場所が悪かったのか、親指の腹が焼かれて熱い。それでもなんとか、先輩の口元に啜えられた煙草の先に火をつけた。ぼうつと薄暗闇に浮かんた先輩の橙色に染まった顔は、あまり嬉しそうには見えなかった。これまでも先輩に横柄な態度を取られることはあつても、絶対にわたしに煙草やお酒を強要ないところが好きだった。だけれど、そこがわたしを不安にさせる。

いざという時に、わたしの知らないところで勝手に死んでいそうだから。

「先輩、わたし二十二歳つてもっと大人だと思つていました」

想像と違つた？ と首を傾げられて、わたしがつと頷けば、先輩は煙を吐き出しながら、無邪気な子どもみたいに目を細め、歯を見せて笑つた。

『ムカつく、後輩なら僕のところまで酒を買つてくること』死んでよ。僕のために』『やつぱり僕のいないところで死なない

で』『もうきみしかない』『だれも僕の話なんて聞いてくれない』『企業は上つ面の取り繕った僕も、取り繕わない普段の僕も』『所望じゃないみたいだ』『きみは世界からいらないうって言われたことある?』『もうなんでもいいや』『はやくきて』『いつものところ、僕の煙草が尽きる前に』

十七時。怒涛の連絡にバイト中一度も開いていないはずのスマートフォンが十パーセント近く減っていた。既読マークをつけただけで、個人的に教えてもらった携帯の番号が初めて液晶画面に表示され、嬉しさと不安定なメッセージに込められた負のエネルギーに感情が丸められたティッシュみたいに汚く、ぐしゃぐしゃになった。それでも、なんとか気持ちを落ち着けて電話に出る。

「きみさ、煙草の味って知っている?」

「なんでですか急に、電話切りますよ。そもそも煙の味なんて吸わないから知りませんよ」

「ちがう。本当に食べている、ムシヤムシヤって。…ああ、思っていたよりも苦いね」

なんか吐き気がするなあ。に続けて、ウツと低く嘔吐く音が聞こえてきて、気が付いたら走り出していた。先輩と一緒に紙飛行機を作ってから、まだ一ヶ月も経っていなかった。バイト先から大学までは、徒歩二十分。走れば、遅くとも十分で学校に着ける。幸い今日は厚底のスニーカーだ。ヒールに比べれば、走れないこともない。とりあえず、目の前で点滅していた青信号を走り抜けて、スマートフォンで『煙草 食べた 対処』と

調べながら坂道をのぼる。その中で目に入った情報を電話の向こう側に伝えた。

「絶対、水とか牛乳とか飲んじゃ駄目ですからね」

「偉いね。ぼくのために必死になってくれるんだ」

はあ、はあ、と懸命に走っている息の音や、靴音がはいってしまるのは恥ずかしくても腹を括った。

「当然です。先輩とちがってわたしは、先輩が死んじゃったら生きていけないですから」

「ああ、なんか煙草が急に美味しくなってきたな」

「ちよつと、また食べたんですか? 今すぐ吐き出してください」

口を動かしている間にも、一歩でも多く走り続け決して足を止めなかった。そのおかげか、ギリギリ視界に入るか入らないかの瀬戸際に大学の校舎の一部が見えてくる。そのままスピードを落とさずに裏門から大学の敷地内に入る。警備の方に軽く会釈をして、北校舎の二階へ向かった。階段を登りきって、廊下を進んだ突き当たり。ペランダに出ると、先輩はいた。

「で、のこのこ来てくれたってことは、きみは僕のために死んでくれるんだね」

目の下の隈がいつもより濃い。ひんやりとした空気に息を吐けば、白く染まる季節。先輩の不採用通知を紙飛行機にしてから、すでもうひとつの季節が終わりを迎えようとしていた。

「あの…煙草、食べたんですよね。大丈夫ですか?」

「なんかきみの顔を見てたら、楽しくなってきたから。たぶん、大丈夫」

「それ、煙草を誤飲した時の中毒症状『興奮』ですね。柵にも寄りかかって、安静にしてください。……って、言ってる側から煙草に火をつけて、馬鹿なんですか？」

言葉が荒いきみは新鮮だねえ。と意識がふわふわしてきたのか、呂律も足元もおぼつかない先輩に指を指され、「やめてください」と形ばかりの注意をしてから駆け寄って、彼の肩の下に自分の肩をいれて支えてやる。するとすぐに、全体重を預けてきた先輩は荒い息の中、口を開いた。

「ねえ、しんでよ。だいすきなぼくのために」

朦朧とした意識の中でも、そんなことを言うんだと呆れを通り越して、感心した。胸の奥がほのかに温かくなって、この感覚が愛おしいのかな。なんて肩にいられた腕を背中まで伸ばしてみる。先輩の背中も思ったよりも広く感じた。太平洋とまではいかないけれど、瀬戸内海くらいはありそう。やっぱりずっと外いたせいで温かくはないけれど、彼の体温ははつきりと感じられた。

「うーん、そうですね。ひとりで死ぬのは寂しいし、先輩だけ死んじゃうのは哀しいので。わたしと一緒に先輩が死んでくれるならいいですよ」

「……はかじやないの。本当に僕が好きなら、僕のためにきみが死ねって言うてるのに」

「そもそも愛の計り方が面倒くさいですよ、先輩は。一緒に死んでみたら死んだあとも先輩のそばにいられそうですし、永遠に先輩に好きって言えるの、とっても素敵じゃないですか？」

「一緒に死ぬって、なにそれ。そうゆうことが聞きたいわけじゃ

ないんだけど。僕のが好きなら今すぐ目の前で死んでみせてよ。それが愛でしょ。僕への好きとか愛を証明しろって言うてるの」

たまに苦しげに咳をしたり、肩を上下させて呼吸する先輩の背中をさすってあげても、彼の口から飛び出すのは鋭利な言葉ばかりのため息を吐く。

「愛とはなにか、について小学生からやり直して考えた方がいいですよ」

「……でも出会った時にさ、先輩のためならなんでもします。地獄の果てまでだって追いかけますから、覚悟してくださいねって言ったのはきみだよ」

「脅しですか、それ」

「きみの覚悟は、嘘だったの？ それとも、きみも僕のことを見捨てるの？」

覚悟なんてとつくに出来ているのに。いつもわたしの背中を押さずに、死ねと命令らしく言ってくれなかったのは先輩だ。わたしは先輩のためなら死ぬるのに。今日までなんだかんだ、死なせてくれなかったのは先輩だって、わかっていますか？ と問うたところで、先輩は黙るだけだって知っているからにも言えなかった。相変わらずわたしに打ちつける風は冷たい。

「もしかして。今更、怖気づいているの？」

「そういうことじゃないですよ」

「じゃあ、なに？ なんて都合が悪くなれば、わたしの言葉など無視するくせにちゃんと聞き返してくるところに小さなやさ

しさを感ぜずにはいられない。だから、吐き出した。

「先輩、本当にわたしだけで死んじやっていいんですか？」

ずっと言えなかつた、先輩への本音。

「先輩がもう一回、死ねって命令するならわたしは死にます」

ほら、やっぱり先輩はなにも言わない。もともと静かな喫煙所を包む深い静寂。

「だけど、先輩はわたしがいなくなつて寂しくないんですか？
ダイレクトメッセージを返してくれる友人や、人肌恋しくて呼び出してすぐに駆けつけてくれるひとはいますか？ 電話で助けを求めて、わたしみたいに私生活を投げ出してまで走つてきてくれるひとはいますか？ いるのならこのまま死んでもいいです。だって、ただの自惚れだったわたしの出る幕ではないでしょう？」

「きみつてたまに聴くて、本当に可愛くない」

大きく吐き出されたため息。その最後には、わたしと同じように呆れたように鼻の奥から漏れた笑い声がつけられていて。その答えを、わたしは勝手に肯定と捉えた。きつともう、中毒症状で放つておいても先輩は長くは持たないように見える。視界の端で震えている手足が痛々しかった。

「じゃあ、最後に全部盛大に燃やしちやいましょうか」

「ぜんぶつて、なにを？」

「世界のぜんぶです。先輩の気に入らないものは、ぜんぶわたしが燃やしてあげますよ」

「いいの？ 殺人より放火のほうが……」

「いいですよ。どうせ、わたしたちこれから死にますし。町で

も大学でも火の海にしてやりましょ」

「最期に、つてことか。それよりちゃんと読んでいたんだね、あの小説」

偉いですか？ と彼の背中を抱きしめながら問えば、先輩の震えたままの腕がそつとわたしの背中をかるく叩いてきた。気持ちだけで抱きしめられた気になつて、至んだ笑みが漏れる。

「偉いから、最期は手を繋いで随ちてあげるね」

「先輩つて意外と、甘やかし上手ですよ」

そうかな。と笑つた声はもう、ちゃんとした言葉にはなつていなかったけれど。わたしだから、先輩ならそう言つたんだなつてわかつた。だから、彼の腕を肩に担ぎ直して、わたしたちはベランダにある柵の近くまでゆっくりと歩いた。薄暗闇に浮かぶ先輩の顔を何度も確認しながら、一步一步確実に進んだ。道中、彼のトレンチコートの内側にしまわれていたすべての煙草と不採用通知を引つ張り出して、ライターで火をつけ校舎の窓へ投げつけておいた。それから振り返らずに、柵の前まで歩く。先輩の腰までしかないベランダの柵は、死ぬと覚悟を決めた人間が越えるのにはあまりにも低すぎるように感じた。一気に肩にのせていた先輩の体重が重たくなつて、潮時を知る。

「それじゃあ、行きましようか。燃え盛る世界で、わたしたちは二人沈みかけの小舟で逃げ出しましょう。……ささつと滅んじやえばいいんですよ、先輩のいない世界なんて」

先輩はわたしの言葉に『そうだね』と頷いたような気がしたけれど、結局確認するよりも繋いでいた手が勢いよく下に引つ張られる方が早かつた。

目を覚ます前にツンと鼻にくる消毒液の匂いを感じ取って、自分が上手く死ねなかったことを察した。毎日飽きもせずアルコール液の香りを嗅いでいた先輩に「そんなに病院の匂いが好きなんですか？」と聞いていたのは、他でもないわたし自身なのだから。

きっとわたしが生きているのなら、先輩だって同じように生きていくはずだ。意外と死のうとした時に限って、人間は上手く死ねないものなのかもしれない。先輩に死ねと言われたから死のうとしたものの、もう一度先輩と新たな人生を作り直してみるのは素敵だ。この世でわたしひとりだけが先輩の前世の恋人面をできるようにするのだ。そう考えると、わたしたちが死ねなかつたのは不幸なことではないような気がした。そんなことを思っていたら、今こうして目を瞑ったままでいることが焦れつく感じられて、勢いをつけて重たい臉を押し上げてみた。あわよくば、先に起きていた先輩に「おはよう。死に損なっちゃったね、二人とも」なんて隣のベッドから挨拶をされたらいいのに。そんな一抹の期待を抱いていたわたしの目に映ったのは味気ない白い天井だった。

目が覚めてから数日が経ち、なんとか身体を起こせるようになってから、意外とわたしたちの心中未遂が波紋を呼んでいたことを知った。小さくもニュースにはならなかったわたしたちの心中事件は、ネットだけをざわつかせていたらしい。#練馬大学生心中事件　なんて大層なハッシュタグとともに『死体とか、はじめて見た』投稿された眩きに添えられていた画像はた

しかに先輩だった。真っ白なキャンパスを汚すように高いところからわざわざ筆を振って垂らした絵の具みたいに広がった、ビシャツなんて効果音がつきそうな赤色というには少し黒のコントラストがきつい鮮血の中で、先輩はなぜかわたしの頭を抱えるようにして眠っていた。まるで、大切なものを守るように抱き抱えていて信じられなかった。それに、燃やしたはずの大学はぼやにしかならず、今は普通になにごともなかったかのよう

に授業を再開しているらしい。ぼやの原因は煙草の不始末と先輩に罪が擦り付けられていたのも納得がいかなかった。「先輩と死んで永遠に一緒にいたい。なんて不相応なことを考えたから、バチが当たったのかしら」

わたしの神さまはわたしだけを残して死ぬはずがないのに。どうして。どうして、真っ赤な血はわたしの頭から流れているのではなく先輩のくたびれたブラウンヘアを染めているのですか。え、わたし言いましたよね。先輩がいないとわたしは生きていけないって。なのに、どうして守ったんですか。仲良く死にましようって意味で、一緒に喫煙所を燃やして後戻りできる場所を消してから飛び降りたんですよ。なのに、馬鹿なんですか。わたしの頭なんて抱えちゃって。安らかな顔で逝くなんて、許さないです。どこにいるんですか。先輩。本当は隣のベッドにいるんですよ。はいはい、わかっています。わかっていますよ、一度死んだふりをしてから生き返るのが神さまのセオリーですもんね。そうやってわたしを魅了していく作戦ですか？　そうかんたんにわたしは騙されません。だって退院すれば、家に帰れば、学校の喫煙所にいけば先輩はそこにいるはずですよんね。

そんな考えが頭に浮かんで消えて、壊れていく感情を制御出来なくなっていく。

「この病室の患者さん。目が覚めたのね、良かった。元気になったら、あの子を命がけで守ってくれた彼にどうか花を手向けてあげてくださいねって伝えてあげなくちゃいけないのが心苦しいわ。それにしたって、あの大学のペランダの柵、老朽化していたんですってね」

なんて看護師さんたちが廊下で囁きあう声が聞こえても、わたしには関係ない。

……あーあ、はやく退院して。まだきつと先輩の香りがするマルセル・シュオツプ全集に顔を埋めたい。あと、あのSSRの写真を印刷しちゃおう。それで、いつまでも抱きしめてもらうの、先輩に一生。それが、いつそ燃やしてしまおうか。それで本当にわたしたち以外の世界なんて滅ぼしちゃいましょうか。ああ、それが黒魔術でも使って生き返らせます？　なんてどこかで生きているはずの先輩にはどれも関係ないですよ。でも、本当はわたし知っているんですよ。先輩が隣のベッドにも、学校にも、この世界のどこにもいないことを。

「けど。まあ、もうどうでもいいか……滅んじやつたし」

ねえ、わたしを置いていったひどい神さま。わたしは先輩が命令してくれなきや死ぬことすらできないって、知っていましたか。だから一生、死んだって花なんて手向けてあげない。

クラスメート×クラスメート

一つの答え

1・クラスメート

友達とは何なのか。そう聞かれて明確に答えられる人はどれほどいるのだろうか。説明するようなものじゃない、と言われればその通りかもしれない。だからといって、どこからが友達でどこからが友達じゃないのがわからないのはどうなのだろう。人間は時によつて、人によつて態度を変える。友達かそうでないか、なんていうのはその最たる基準なはずなのに。

「君、ミズキの隣の席だよ、ちょっと私忙しくてさ、これ、今日中に返しといて欲しいの！頼んだよ！」

帰りのホームルーム後しばらくして、慌ただしく現れた女子はその台詞と教科書を残して慌ただしく消えていった。この間わずか、と表したいほどには早く、こちらが何かを発する前に立ち去ってしまったわけだ。

「どうしたもんか」

ただ代わりに教科書を返すだけなら問題はない。しかしその当の本人であるミズキが帰宅済みであり、尚且つ今日中に返さなければならぬとなると話が違ふ。

友達であれば今すぐに連絡したり、まあ最悪本人に直接渡しに行つてもいい。では果たして俺とミズキはどのような関係だろうか。

親友、はまあないとして。友達、も流石に違ふ気がする。同じ委員会でもなければ同じ部活でもない。そもそもミズキは帰宅部だし。そうなると俺とミズキはやっぱりただのクラスメートで、基本的に席が隣だけの、それ以上もそれ以下もない関係なわけだ。

「おい、そろそろ行くぞ」

部活仲間にせかされて、時計を見る。部活開始時間の五分前。部室で着替えることを考えるとかなりまずい時間だった。

「やっぱ、悪い、すぐ行く」

小野寺隆征

机に出していた教科書類やプリントを急いでかき集めてバックに入れる。こういうときに限ってチャックが引つかかるのもどかしい。もたつきながらもなんとか準備を終えて教室を飛び出す。

「間に合うと思うか？」

「間に合わなかったら外周十周だぞ。何としても間に合わせろ」

「だよなあ」

頭に巡るのは怒鳴る顧問や長引いた掃除への愚痴の数々。いずれにせよそれらは部活に遅れてしまう焦りから生まれるものだ。先ほど手渡された教科書のことや、それもまとめてバックに突っ込んでしまったなんてことは、驚くほど簡単に頭から抜け落ちてしまっていた。

2・共犯者

部活を終え、悴^{かじ}んだ手で着替えをすました頃には空はずつかり暗くなっていた。少し前までは騒がしかった部室にももう人影はなくなり、コンクリートの無機質さが冷気を運んでくるように感じる。吐き出した息がゆらりとこのぼるのを見て、手袋を置いてきたことを後悔した。

学校から家まで大体徒歩二十分。少しでも暖を取るべく、部室の戸を勢いよく締め走り出す、というのは悲しいことに部活後の体力では難しい。しぶしぶポケットで申し訳程度のぬくもりを感じながら、ゆっくりと部室を後にする。今日は施錠をしなくていいのが唯一の救いだ。

とはいえ、本当に冷える。いつそバスにでも乗るか、と思っただがどうせしばらく待たなければいけないし、わざわざ金を使うのも勿体ない。そんなことを考えているうちにバス停を超え、結局そのまま歩いて帰ることにした。

いつも通りの帰路をいつも通り歩いていく。少し違うのは、いつもより人気がないことだろうか。大通りから狭い路地に移ると、それがより顕著になる。それほどまでに今日は寒いということか、それとも偶然か。どちらにせよ、そこには冷気と静寂のみが漂っていた。

だからこそ、よく聞こえた。聞こえてしまった。

「けほっ」

半ばぼうっとしていたから、自然に視線は咳き込んだのが聞こえた方へと移る。そこには片手にたばこを、目元にサングラスを装備して気まずそうな表情を浮かべているミズキが居た。いや、サングラスをかけているのだから本人かどうかはわからない。けれどそんなことは関係なかった。例えミズキだとしても見て見ぬふりをするだけだし、他人ならなおさらだ。それにより。

「ねえ、今見たよね」

本人から話しかけてくるならそれはもう誤魔化しようがない。

「なんのことですかね」

「いや見たね、完全に目あったもん」

「気のせいじゃないですか」

「頼む、学校に愚痴るのだけは勘弁してくれ」

思わず溜め息が漏れる。流星にそこまで言われてしまえば、

何も見えない体が続けるのは無理があった。正直、見ていたという事実があつて困るのはミズキの方はずなのだが、空気を読むのが苦手なのかなんなのか。いや、あまり関わりがないから知らないだけで、普通に話を聞かない人種なのかもしれない。それとも、純粹にチクられるのが怖いだけか。

「わざわざそんなことしないって」

こいつは疑わしいと言わんばかりに睨まれる。相手が不良か何かならともかく、ここで俺が嘘をつく理由もないだろうに。

「あ」

今更になつて、部活前のことを思い出す。あのまま忘れてバックに入れっぱなしだったのが、偶然とはいえこうなるなら結果オーライだろう。

「ちよつと待つてな、そういえむぐ」

ミズキの教科書を取り出そうとバックを探っていると、いきなり口に何かを押し込まれた。反射的に閉じた口の感触と臭いでそれがたばこであることに気づいたと同時に、目の前が一瞬真っ白になる。

「これでよしっ」

「は？」

「ふふん、これで君も共犯者だ。くれぐれもチクつたりしないように」

そう誇らしげミズキが掲げたスマホには、たばこをくわえた間抜け面の男が写っていた。なるほど保険をかけておきたかったようだが、そこまでする必要が果たしてあるのだろうか。仲が良いでも悪いでもない微妙な関係じゃなければ叩くくらいは

していた自信がある。そうでなくとも怒鳴るくらいは許されるだろう。しかし、部活終わりというのもあつて精神も体力もそれなりに疲弊していたため、もはや反応するのが面倒だった。「そんなことしないって。後これ、友達から返しておいてくれっ」

「あ、ありがとう」

「じゃあ、そういうことで」

結局、こういうトラブルの原因にはなるべく関わらないに越したことはない。後でクラスのやつに何言われるかわからないし、場合によっては。

「……」

路地に二つの足音だけが響く。何でついてくるのか、と口にかけてやめる。そういえばミズキの家もこつちの方面だ。だから同じ方へと歩いていくこと自体は不思議じゃない。

「帰ることにしたのか」

「許される範囲の自由を謳歌するのが私のモットーだから、たばこなんてものは見つかった時点でヤメヤメ。体にあわないみたいだし」

「たばこは体にあわないものだろう」

「偏見でものを言うのはおススメしないよ。体に有害だからといって体にあわないとは限らない。まああんなむせるようなもののが良いのかは結局わからなかったけど」

「ちゃんと種類選んだか？ 初めてなら吸いやすいやつを選ばないときついらしいぞ」

「へえ、意外と詳しいんだ。もしかしてさっきのが初めてじゃ

「なかった？」

「聞いたただけだよ」

「友達に？」

「まあ、そんなところ。言っとくけどそいつも吸ってるわけじゃないからな。ましてや自分が吸ったやつを他人に吸わせるなんて」

「あれ、もしかして間接キスとか気にしちゃうお年頃？」

「そういう問題じゃないだろ」

「そんなくだらない言い争いのようなことをしているうちに家に着く。「じゃあ」と手を振って玄関のドアノブに手をかける。

「ああ、そういえば。その教科書今日中に返してって言われたんだけど何で？ 明日ってテストとかあったっけ」

「大丈夫個人的な話だから。じゃあね」

「がちやり、と鍵が開く音が鳴る。何か引つかかるような。

「ただいま」

「そんな小さな戸惑いは、家に上がった時にはもう忘れていた。

3・悪友

部屋の外から聞こえる物音で目を覚ます。ベッド横の机に腕を伸ばし、手探りでスマホを掴んだ。まだ少し眠気の残る目元を精一杯開きながら画面を確認する。午前十時。学校かもしくは部活があれば遅刻する時間帯だ。しかし今日は休日で部活も休みなので何も問題はないけれど、別の問題がスマホの画面にはあった。

「何だこれ」

何十件ものSNSの通知。十数件であれば部活の連絡としてあり得るが、ここまで積み重なったのは見たことがない。個人間のやりとりを考えたとしてもここまでの件数はいたずらレベルだろう。

「何がしたいんだこいつ」

通知をタップして現れたのはミズキの三文字。全部が全部、というわけでは流石になかったようだが、それでも大半の通知はその一人によつてなされたものだった。

「送られてきていたのは大体『おはよう』や『起きてる？』といったものだった。それだけなら距離感間違えてる人なんだな、で済ませることが出来るものの、どうしても見逃せないものがある。ちらほらとあるようだった。

『今日十二時頃に上に送った地図の場所に来ること。学校がないのは当然として部活もないはずなので来れるはず。来なかったらこの写真をクラスグループに投稿するのでよろしく』と細部はともかく大体このような内容のものと、前に撮られたたばこの写真が添付されていた。

あれから約二週間。流石にあの出来事を綺麗さっぱり忘れるはずもないけれど、ここにきてその写真が悪用されるなんてことは考えてもいなかった。そんなことをしてくるようなやつとは関わりたくないのが本心だ。本心なのだが、冗談だったとしてもあの写真がばらまかれると言われてしまえば悩む余地がない。あれが冤罪だったとしても、教師陣がどこまで信じてくれるかわからない以上、停学を賭け金にするのはあまりにもリスクが

高い。履歴を証拠にするのも手だった、既読がついたのに気づいて削除しやがった。

掛け布団をはねのけて飛び起きる。こんなメッセージを飛ばしてくる相手だ。十二時頃とっておきながら少しでも遅れたら写真投下、なんてことが有り得ないとも限らない。だったらさっさと要件をすませてしまいうに越したことはないだろう。

パジャマを脱ぎ捨て、めったに着ない普段着に手を通す。

「ちよつと出かけてくる」

「あれ、あんた昼は？」

「食べてくる」

家中を駆け回り準備をすませ、そのまま玄関から駆け出した。地図を見るついでに時間を確認する。十二時までにはまだ一時間程度の余裕がある。その上目的地も一応徒歩圏内だ。とはいえ、何も食べていない寝起きの体では少々辛いものがある。ただ、このためにコンビニで腹ごしらえ、というのも何か癪だった。

何か食べてから出発するんだって、と多少の後悔をしながら歩くこと三十分弱。地図アプリからではわからなかったが、目的地はこじんまりとしたカフェのようだった。

そしてそのカフェ唯一のテラス席にやつは居た。

「お、思ったより早かった。ほら座って座って」

早かったじゃないんだよ。そう叫んでやりたい気持ちもあつたが、どう考えても店の迷惑だし、生憎外でそんなことが出来る勇気は持ち合わせていない。そもそも叫んだところで響くような気がちつともしなかった。

「それで、脅された挙句こんなところに呼び出された要件は？」

「嫌だな、凄まないでよ。どうせそこまで怒ってないでしょ」

馬鹿にしたような台詞に、本来は怒るところなのだろう。なんとなくそう思いつつも、心の中に怒気なんでものはほとんど生まれなかった。その理由は考えるまでもなく、ミズキが言った通りそもそも怒ってすらいなかったからだ。

いや、怒っていなかったわけではないだろう。でも、それはどちらかというところとポーズに近いもので、人に怒っているか聞かれれば、そうではないかもと答えるくらいのも代物なのだ。

「で、要件だつて。まあ空腹みたいだし食べながらにしようか。奢ってあげるからさ」

これメニューね、と差し出されたのをそのまま受け取り、広げる。ミズキは変な奴だが、自分も他の人からすれば大概なのだろう。会って数分だけれど、どうも今日のミズキに対しての調子がおかしい。

「決まった？」

その声で目の前の風景がようやく視界にうつる。声をかけられてからメニューをめくるのも申し訳ないので、そのまま目に入ったオムライスを注文した。どうやらこここのオススメらしいし、オムライスであれば失敗もないだろう。

「さて、料理が来るまで時間があるけど何を話そうか」

「何で呼んだかじゃ駄目なのか」

「それは食べながらにするって話しだろ」

「なんだそれ」

不満気に返事をしつつも、どこか納得している自分がいた。一

見おかしいように思えて、そんなに難しいことでもない。単に『言ったからにはそうすべき』というだけの話で、それを理解してしまっただけの基盤が自分にはあるのだ。

一方で、素直に領けない気持ちもある。これは飽くまで自分の話で、人が聞けば首をかしげるようなものなのだから。それをさも当然の理論であるかのように突きつけるミズキには、今までにない得体の知れなさがあつたからだ。

「何だ、じっと見つめて。もしかしてオレに惚れた？」

「冗談はもつと盛り上がる奴に言ってくれ」

しかし惚れる云々はともかくとして、ミズキは中性的で整った顔立ちをしている。そんな冗談を飛ばすくらいには経験があるのかもしれない。

「まあ惚れられても困るけどね。今はカレカノいないとは言っても募集中ってわけでもないし」

「今は？」

「そこら辺はまあ好きに受け取ってくれたまえよ、つと来たみたいだね」

ことり、と目の前に皿が置かれる。どちらかというと辺鄙な場所にあるから、あまり期待はしてなかったが予想以上に美味しそうだった。ただ、よくよく考えると朝から何も食べていなし上に運動しているのだから、しっかりとした料理なら何でも美味しそうに見えるしてしまうかもしれない。

まあそんなことはどうでもいいのだ。

「じゃあ話を始めようか。ただ、要件だけいきなり言っても理解しがたいだろうし前置きを挟もうか」

「前置き？」

「そう、前置き。例えばだね、君が食べてるそのオムライスはこの店のオススメメニューなんだけど、なんでかわかるかい？ ああ、考えるだけにして食べていいよ。しばらくしたら勝手に喋ってるから」

オムライスがオススメな理由。それは純粹にオムライスがこの店の料理で一番美味しいからだろう。飽くまで店長目線というのが入るだろうがそこは大した問題じゃない。であれば何で美味しいのか。素材の味？ それだったらたまごサンドとかでも構わないだろう。わざわざ聞いてくるのであれば、もつと明確な理由があるはず。

「正解は店長の得意料理だから。まあこの店の場合、っていうのがつくけどね。どちらにせよオススメっていうのは、万人に対してその店が出せる最も自信のある料理なわけ。当然だつて？ まあそうだろうね。敢えて問うまでもないかもしれない。じゃあ問いを変えようか」

一呼吸。

「もし君が店を出すとしたら、何をオススメメニューにする？」
それこそ聞くまでもない。

「答えはこうだ。『オススメに出来るほどのものはない。』君が料理が得意な場合は違うかもしれないけど、そうじゃないのは調理実習でわかってるし。でも店を開くまでに期間があつたらそうとも限らない。何度も何度も試行錯誤して、斬新で美味なメニューを生み出せる可能性はある。でも今は無理だ。だって経験と時間が足りない」

よくわからない仮定と問いに頭がこんがらがる。つまり何が言いたいのだろうか。

「まあようするに。経験したことがないものに自信が伴わないのは当然で、人生全体で見たときに経験なんてものはしたもん勝ちなのさ」

「何がようするになんだよ。結局要件ってのは何なのさ」

話を聞いている間にオムライスは消え去り、スプーンを置きながらミズキの方へと向き直る。

「まあまあせかすなって。君が食べ終わるのを待ったっていうのもある。ここからがようやく本題さ」

思わず息をのむ。ミズキの纏っていた曖昧な雰囲気、急に明確に、鋭く重いものになったように思えたからだ。

「これから毎日罪を犯そう」

「は？」

人間は極度に理解できないものと出会ったとき、こういう反応しか出来ないんだな、なんて的外れなことを考える。それほどまでにミズキの言ったことは意味がわからず、同時に理解しようとも思えなかった。

「よし、よし、わかったから黙ってスマホを取り出すのは勘弁してくれ。いいか、指を動かすなよ。三回動かしたら全力で走り出すからな」

「それ何の脅しにもなっていないぞ」

雰囲気に戻ったミズキに毒気を抜かれ、息を漏らす。ここにきてそこそこの時間話し合ったわけだけれど、ここに呼ばれた当初から抱いていた疑問は結局解決していない。それどころか

増えている。

「で、結局何なのさ」

「仕方ない、わかりやすく説明しよう」

「最初からそうしてくれ」

「過程が重要な。君動画飛ばしてみるタイプかい？ だってそんなことはどうでもいいんだ。まあつまりだね、我々はまだ未成年なわけじゃないか。でも未成年っていう期間に限られていて、その期間だから許されないし、その期間だから許されることもあるわけだ。それを今のうちに経験しておこうぜってわけ」

「つまり物語のような青春を送りたいと？」

「それはちよつと違うけど、まあ理解できるならそれでいいよ」
理解出来ないけれど、まあ納得はした。この前たばこを吸っていたように、ミズキは未成年の時間を使ってしか出来ないものを出来るだけ体験しておきたいのだ。ただ、罪を犯そうという発言の通り、ミズキのやりたいことは本来やってはいけないことの方に比重がよっているのだろう。それに加担するのは素直によろしくないと思うし、チクリこそしないけれどたばこを吸うなどの行為を自分でやるのは純粹に嫌だ。

「大丈夫大丈夫、精々ばれても少年院まではいかない程度のことばかりさ。そのラインはしっかり見極めるし、やりたくないことなら拒否してくれて構わない。まあ何だ、損はするかもしれないけど損だけじゃ終わらせないことを約束しよう」

「そんなカツコつけていっても要するに犯罪の片棒を担がせて話しだろ」

「違うって。上手くやれば誰の迷惑にもならないが最低条件。万

引きとか許されない犯罪をしたいわけじゃないんだ。な、騙されたと思って一回やってみようぜ、一回だけでいいから」

「その誘い方が既に嫌なんだから」

「そうは言わずにさあ」

「わかった、わかったから」

4・恋人？

結局、話を聞くだけ、一回試してみるだけといった形で引きずり込まれてからしばらく経った。なんだかんだで不良とまではいかなければ、しっかりとめなことをして、何回かはしっかりと叱られた。ただ、学校生活がそんなに変わったわけではなかった。むしろ驚くほど変わらなかったといってもいい。なるべく学校側にはばれないようにやってきたとはいっても、教回には叱られているし、反省文を書かされたこともある。けれど、教師を含めて周りから素行不良であるとか、頭のねじが外れた奴らだとか、そんな風に思われている節はなかったのだ。しかし考えてみれば、ミズキと一緒にやってきたのは良い意味で『その程度のこと』だったわけだ。叱られてしまっているのだから、誰の迷惑にもならないという目標は達成できなかったことになるけれど、それはそれで楽しかった。そんなことを言っていないとわかっていても、そう思ってしまうほどに充実していたのだ。

『騙されたよ』

『何のこと？』

『さあね』

そんな仲にこそなったものの、基本学校内、正確には学校関連者が目にしやすいた場所ではメッセージでのやりとりが基本になっていた。どうも基本的に目立ったり変な噂が立つのは嫌だそう。あんなことをするのに本当に変わってる。

『じゃ、また後で』

それに付き合ってる自分も、まあ、大概だろう。

ホームルームが終わって、教室から人が散り、廊下に集まってまた散っていく。クラスに残ったり部室棟へと向かったりする人が居ないテスト前期間ならではの風物詩といってもいい。その中で俺とミズキは当然のように別々に下校する。

そして、数十分かけてまた落ち合う。それだけ聞くと馬鹿らしい無駄な行いで、テスト前にやるようなものじゃないかもしれない。事実として否定はできないし、するつもりもなかった。なんならこれから河川敷で喧嘩といった、それ以上のことをやるうとしていたのだから。

「こういうのってもつかつい男同士でやるものじゃないのか」

「そういう偏見はよくない。というかそもそも現代でやるようなものじゃないし」

「違ういや」

「じゃあやるるか」

「そうやって俺らは殴り合った。といっても本気で殴れば怪我をするし、怪我をすれば他人に迷惑がかかってしまうので本気の喧嘩は言葉の上でだけだった。それでもポーズだけだとはいえ殴ったし、殴られた。拳も殴られた場所も、それなりに痛くて、やはりおおよそテスト前にやるべきことじゃなかった。」

結局、中途半端に体力を残して芝生の上に横になる。それでも頭上に満点の星空でも広がっていれば様になったかもしれないのに。

「一等星すら見えやしないな」

「プラネタリウムでも行く？」

「そういうことじゃねえっての」

「冗談冗談。じゃあ、そろそろ仲直りといきますか」

「といってもどうするよ。真剣な喧嘩でもなければ疲れ果てるわけでもないし」

いろいろな面倒を避けたいのだから、これはどうしてもごっこ遊びになってしまう。ただ、物語でありがちだとはいえ、ごっこの上で仲直りするのは奇妙に尽きる。

「じゃあ、そうだね」

隣でミズキが立ち上がる気配を感じる。何を考えているのだろうか、とそちらに目をやろうとして、自分の視線を見失った。そして気づけば、目の前のミズキが遠ざかっていくところだった。

「これでどうかな」

どざり、とミズキが横に腰を下ろす。いつまでも寝転がって

る俺は間抜けに見えるだろうか。ミズキの顔を眺めながら、少なくとも自分では間抜けなように思えた。

「初めてのキスの味は、なんてのも河川敷での喧嘩と同じくらい物語적이다よね」

「確かに、緊張で物の味がしない、なんて話があるのにそんなもの味わってる暇ないよね」

「恋愛物の主人公は鈍感だからこそなのかもな」

「確かに、僕らとは違うものね」

いつものような会話を交わしながら、ふと気づいた。

「そういや一人称を変える理由って聞いたことあるっけ」

「聞かれたことも話したこともないね。そこに踏み込むかい」

「聞いちゃまずかった？」

「いや別に。これも経験の一つってだけだから」

なるほど、聞いてみれば案外単純だ。確かに、私や僕、俺なんかにはそれぞれのイメージがあるけれど、それを日常的に自分で使うとどうなるのか、というのは気になるところではある。

「それで、経験してみようか？」

「別になんてことないよ。結局、ポーズだけじゃわからないことも多いね」

「だなあ」

いつかに聞いた話、『罪を犯そう』発言より前から俺に目を付けていたらしく、その理由がポーズだった。ポーズというのは言い換えれば『フリ』だ。周りがわかっている『フリ』、友達と仲良くしている『フリ』、人生を謳歌している『フリ』。日常の中で誰しもがやっていることだけれど、それをずっとやってい

るような奴だったから、ということらしい。

ミズキに言わせれば中身が空っぽで不自由そうなやつがいたから耐えられなかったそう。今から考えれば、教科書の件からたばこに至るまでは仕組まれたものだったのだろう。あんな人気がないところで丁度俺が通った時に咳き込むなんてのは話が出来すぎている。

思えば、この関係はあの時から始まったのだ。そう考えると、少し疑問が湧いてくる。

「なあ、俺が告白したらどうするよ」

「んー、断るかな。お友達から始めてくださいって」

「じゃあ今は何なのさ」

「なんだろうね。友達はこちらまでいかれた仲じゃないだろうし、悪友っていうのも通り過ぎた感じがするし」

「じゃあ盟友？」

「近いけど違う気がする」

ミズキがぐぐつと体を伸ばしながら息を漏らす。

「そうだなあ、僕たちは——」

5

時間が経つにつれざわめきだす教室。いつもと変わらない、日常の一幕。

「おはよう」

「おはおう」

大きく口を開けているところに声を掛けられる。別に珍しいことではないが、純粋にタイミングが悪く、間抜けな返事になっ

てしまう。

「そういえばさ、一つ聞いていいか」

「嫌だって言ったら？ いや冗談だって叩くな脳細胞が死ぬ。で、何さ？」

「お前、ミズキとどういう関係なんだ？」

「あー」

いくら見られないような場所を選んでも、ずっと隠し続けるのは無理があったようだ。どこで何をしていたときに見つかつたのかは知らないが、まあこういうこともあるだろう。

さて、問題はここでどう返すべきだが。下手に誤魔化したりを開けたりすると後で面倒なのは目に見えている。中学生や高校生という生き物はそういうので騒ぎたいものなのだ。しかし勘違いされようが騒がれようが。

「俺たちはそういう仲だよ」

それを含めてご想像にお任せする。それがあの日に決めた、二人の答えだった。

少女×フェチズム

「通知音とともに光る液晶が眩しくて目がさめると、間宮くんから「帰ります」とメッセージが来ていた。時刻を確認するとまだ五時前で、カーテンの隙間から見える空の色も暗かった。一人暮らしを始めたばかりの彼の部屋には、生活する上で必要最低限のものしかなかった。

二人で横になって少しスペースが余るくらいベッドと、低い丸テーブル、ブルーレイレコーダーとカメラなどが仕舞われている収納付きのテレビ台と、薄型のテレビ。今後実家から持ってきた服で埋まるのだろうが、まだすかさずかのクローゼット、壁際にある黒くて線の細いハンガーラックには彼の服が数着掛かっている。

そんな生活感の薄い彼の部屋の中にいるわたしは、彼から特別だと思われているのかな、なんて考えながら体を起こし、広

夢うつつ

宮澤優香

くはないけれど清潔なキッチンで二人分のコーヒーを淹れる。コーヒードリッパーはわたしが彼の家に持ち込んだ。キッチンに飾っておけば少しはおしゃれな感じになるんじゃない、と適当に買ってきたものだったが、ゆつくりと時間をかけて湯を注ぎ、香ってくるコーヒートの濃い香りが案外良いもので、それ以来二人分のコーヒーを用意して彼の帰りを待つことが増えた。

「コーヒー、ブラックで飲めないんだよね」

出会った頃にそう言っていた彼は、初めてわたしが淹れたコーヒーを、まずは何も加えず一口飲んで「苦っ」と言ってからコーヒーフレッシュやシロップを二、三個いれて、渋い顔をしながらも飲み干した。

「無理しないでいいのに」

「無理してるんじゃない、あなたが俺のために淹れてくれた

ものを残したくないだけ」

「可愛い人だな、と思った。ふたり分のコーヒーカップが並んでいるのを見ると、彼の隣にしていることを許されているような気になった。

「コーヒーをキッチンに置いたまま、洗面所で歯磨きと洗顔をし、顔を洗った。顔に化粧水を塗り、保湿をしてからブラシで丁寧に髪を梳かした。

化粧ポーチからパウダーやリップを取り出し、軽く顔を整える。これでいいかな、と思っていたらドアが開く音が聞こえた。

「ただいま」

「おかえりなさい」

洗面所を出て彼を迎える。

「起こしちゃってごめん」

夜の匂いを纏っている彼が、わたしを見て微笑む。

「コーヒー淹れたよ」

「うん、いい香り。ありがとう」

荷物を置いて、上着を脱いだ彼と並んでキッチンに立ち、ふたりでコーヒーを飲んだ。お互いに何も話らない静かな時間。やっぱり苦かったのだろう、彼はコーヒーフレッシュを二つ入れる。わたしはコーヒーを飲み終えてカップを流し台に置いた。「シャワーしてから寝る。あなたも二度寝したら？」

彼の普段の一人称は「俺」なのだけど、時々自分のことを「わたし」と言ったり、わたしに対して「あなた」と言ったりすることがある。わたしは彼のそういうところが結構好きだ。

さっき顔を整えたばかりなんだけど、と思いつつ、寝足りな

いと思っていたのも事実だったので、わたしは「うん」とだけ言っただけでベッドに飛び込んだ。カーテンの隙間からは陽が射し込んでいる。ブランケットをかぶって目を閉じた。シャワーの音を聞きながら、目を閉じると、夜と朝のあわいを泳ぐ空想をしているうちに眠ってしまった。

間宮くんのことを愛おしく思う。それなのに、いま、夢の中でわたしが焦がれているのは（下の名前も臍げになってしまった）藍沢くんだった。彼の現在をわたしは知らないし、大人になった彼と恋がしたいと思っているわけでもない。

ただ一つ言えるのは、わたしは綺麗なかたちをした彼の鎖骨が本当に好きだったということだ。十四歳の初めての恋を、今日も夢の中でなぞっていた。

わたしたちのクラスは五時間目に体育を控えていたのだが、その日はどうにも身体を動かさそうという気が起きなかった。給食の後、クラスメイトが更衣室や他の教室へ遊びに行くなか、わたしは小説を読みながら時間を潰していた。午後一時の暖かな日差しが、明かりのついていない教室に、文字がはつきりと読めるくらいにちょうど良い光をもたらしてくる。校庭で遊ぶ生徒の声、カーテンが風を受けてふくらむ音がわたしの眠気を誘った。この後の授業は体調不良を装って保健室で過ごすかなど考えつつ、わたしは腕を枕にして目を閉じた。

その直後、着替えを終えた男子の数名が教室に戻ってきた。このまま起き上がって「なんでまだ着替えてないの？」と言われる

のも面倒だったので、わたしはその場を動かずに眠ろうとしたが、手を叩いて笑う人、笑い声の大きい人などがおり、中々眠りに落ちることができなかった。眠るのを諦めてぼうつとしてみると、「野球拳しようぜ」という声が聞こえた。仮にも、眠っている（ように彼らからは見えているはずの）女子がいる教室でそんなことをしようというのか。半ば呆れつつ、彼らが教室を出て行くタイミング、もしくはわたしが教室を抜け出せるタイミングを伺っていた。

男子たちは、お互いのからだを見せ合うことに不満や疑問を抱かないのだろうか。わたしは女の子同士で簡単に抱き合ったり、身体を触り合ったりすることにも若干の抵抗を覚えるというのに。やかましい音頭を聞き流していると、低く、掠れた声で「やめろよ」と言うのが聞こえた。心の底から抵抗しているわけじゃない、楽しい空気を壊さない声音だった。なんだ、勉強のできる藍沢くんもこんなくだらないことに付き合うような人だったのか、と少し落胆した。こんなばかばかしいやり取り、無視してとつとと保健室に向かえばよかったのだ。わたしはゆっくりと顔を上げた。わたしの視線の先で、藍沢くんの筋張った鎖骨の窪みが、暖かな日差しを飲み込んでしまうくらい影を作っていた。

保健室までふらふらと歩き、「体調が悪いので休ませて欲しい」と伝えると、保健医は気だるそうに体温計を差し出した。熱を測り、記録用紙に学年と名前、症状、体温を記入する。保健室に来慣れるというのもおかしい話だが、保健医が特に言及せ

ずに休ませてくれる限りは利用し尽くそうと思っている。慣れたものだ、と脇に挟んだ体温計を確認すると今日は珍しく微熱があった。

保健室のベッドを罪悪感なく利用できる日が来るとは。そんな思いとは裏腹に、わたしは普段なら気にならない自分の胸の鼓動がうるさくて、ベッドに横たわってからも中々寝付かなかった。

藍沢くんの鎖骨が美しいことを、わたしは知ってしまった。明かりの点いていない、晴れた昼下がりの教室。あの空間は藍沢くんの首筋から鎖骨のあたりまでを美術品のように展示するために用意された舞台装置なのではないか。彼の首筋の、薄い皮膚に指を沿わせてみたい。影を宿す窪みに水を注ぎ、滴る雫のひとつひとつがきらめくのを見つめていたい。

わたしはこの時、恋心を抱く以前に、彼の身体に触れてみたい、見つめていたいと強く思った。

彼の鎖骨を目にした日から、わたしの視線は無意識に彼（の首元）へ向くようになっていた。正直、学ランやシャツのせいで鎖骨を見ることは叶わなかったが、時々ではあるものの彼の首筋を拝むことはできた。

そもそもわたしと彼にはクラスメイト、という以外の接点がなく、わたし自身も彼と何を話していいかわからなかったので積極的に話しかけようとしなかった。それから徐々に彼の首元だけじゃなく、全身を見るようになった。さらさらとした黒髪に奥二重の目元、少し焼けた肌、背丈はわたしと同じくらい

で、鼻筋が通っていて唇の下にはほくろがあつた。

彼を見ていてわかつたことがいくつもある。目立つ男子の意見には否定も肯定も明確にはしないが同調はすること、周りの動き方に合わせて己の身の振り方を考えているということ、特別親しくしている女子は、取り敢えずこのクラスにはいないこと。

「美結は好きな人とかいないの？」

バスケット部の滝原くんのが好きだというクラスメイトの千枝は、滝原くんと目が合ったとか、どうやったら会話が続けるのか、などとわたしに恋の話をしてくる。わたしはそうねえ、と呟いて藍沢くんのことを思い浮かべた。彼をなんとなく目で追っているのは事実だが、それは再び彼の美しい首元を見たいという欲があるからで、興味が無いと言ったらそれは嘘になるけど、好きな人と言うのも違うような気がした。

「ちよつと気になる人ならいるかな」

わたしが素直にそう言うのと、「どんな人なの」と千枝は目を輝かせて詰め寄ってきた。

「内緒」

「私は美結に何でも話してるのに！」

むくれた千枝の幼気な表情が可愛らしくて笑みがこぼれる。

「ヒントをあげる。……その人の背丈はわたしと同じくらいかな」

「美結のいじわる。そんな男子いっぱいいるじゃない」

鎖骨の綺麗なひと、と言おうか迷つてやめた。本人もさして気

にしたことがない魅力に気付いているのはわたしだけでいい。仲のいい千枝にさえも教えたくなかつた。

夏休みに入ってからわたしは一度だけ商店街で藍沢くんとして違つたことがある。藍沢くんもわたしのほうを見たので軽く手を振ってみると、彼も片手を上げて小さく振り返してくれた。

「こんにちは」

「どうも」

交わした言葉はこれだけだった。藍沢くんは「シャツにジーパン」というラフな格好だった。首元が開けている服を着た彼を拝めるなんて、夏というのはなんてありがたい季節なんだろうと思つた。首筋に流れる汗がてらと光っているのが見えて、わたしは生唾を飲んだ。これが、彼に対して欲情していることを自分が認めた瞬間だった。

わたしたちは二学期に同じ図書委員会に所属することになった。委員会決めの時、わたしが挙手をした後に藍沢くんも名乗りを上げていた。周りの子が面倒臭そうだからと検討することすらしなかつた図書委員に、まさか彼が立候補するとは思わなかつた。

図書委員の主な仕事は本の貸し出しと返却の受付、それ以外の仕事は主に班に分かれて行うことになつていった。わたしは藍沢くんと同じ班になりたくて、彼が選ぶものに立候補しようと考えていた。

クラスごとに隣り合つて座っているので、その時初めて藍沢

くんの隣に座ったわたしはとても緊張していたが、緊張が彼に伝わらないよう、平然を装っていた。

それぞれの班の仕事に関する説明を担当の先生がしている時に、藍沢くんの方から話しかけられた。

「依田さんはどれかやりたいのある？」

藍沢くんが、わたしの名字を知っていた。クラスメイトなのだから、ろくに話したことがなくたって名前くらいは知っているものだろうと頭では理解していたが、名字を呼ばれただけで簡単に頬が緩みそうになった。いちど唇をきゅつと結んでから「書架整理かな」と図書室内だけで仕事が済みそうなものを選んで答えた。

「へえ。じゃあ俺もそれにしようかな」

そう言うて前を向く彼の横顔を、わたしはまじまじと見つめていた。わたしの視線を受けてか、彼がこちらに視線を寄越した。わたしは恥ずかしくて目を逸らしたかったのだけど、彼の黒い瞳がゆれるのを見逃しなくなるとじつと見続けてしまう。彼の瞳にわたしの顔が映っている。そしていま、わたしの瞳にはきつと、彼の顔が映っている。見つめ合ってから、目を逸らすタイミングを失ってしまう。次第に眉間にしわが寄り、睨みつけるような表情になってしまったのがわかる。わたしは急いで彼と真反対にある窓の方を向いた。すると、笑いをこらえているのだらう、くつくつと喉が鳴っているのが隣から聞こえてきた。わたしはもう一度彼の方を見た。彼は少し下を向き、口元を手を当てて、肩を小刻みに揺らしていた。

「依田さんって面白いね」

内緒話をしているときみたいな声でそう言った。

いつの間にか先生の話は終わっていた。早速決まった委員長が言うには、ホワイトボードにずらっと書かれた班の一覧から立候補したい班の下に名字を記入することになっていた。

名前を記入するために席を立とうとしたら、通路側に座っていた藍沢くんに止められた。

「俺が依田さんの名前も書いてくるよ」

そう言うて立ち上がった彼に、わたしはありがとうと言ったつもりだが、それがちゃんと声になって彼に届いたかはわからない。

藍沢くんが書いた依田・藍沢の文字が、ホワイトボードに書かれているどの文字よりも色濃く見えた。いま見えているものを残しておきたいな、と思った。実際にはカメラもスマホも学校に持ち込んではいけなかったからデータに残すことはできなかったのだけれど。わたしは幾つ年を重ねてもいま見えているものだけは忘れたくない、と瞬きもせずじいつと見つめて脳裏に藍沢くんの筆跡を焼き付けようとした。

図書委員としての活動がわたしと彼の距離を急速に縮めることになった。同じクラスの委員なので受付を担当する時間も、放課後の書架整理の時間も一緒に過ごした。放課後に図書室を訪れる生徒は少なく、来たとしても本の返却をする人ばかりで、わたしたちは静かな部屋で作業をしつつ、声のボリュームを気にする必要なんてない時だってわざわざ声を潜めて、お互いが読んだ小説や漫画について話をするようになり、時には好きな

本を貸し合うこともあった。それなのに、教室では不自然なくらいに、目が合うことも、声を掛け合うこともなかった。一人でいる時は優しく接してくれるのに、他の人が一緒にいるとそういう素ぶりを全く見せないのが不思議だった。わたしと親しくしているところを誰かに見られるのは嫌なのだろうか。

冬休みが始まる直前、最後の書架整理の日。いつものように他愛ない話をしながら作業を終えると、藍沢くんが咳払いをしてからわたしのそばにきて、両の目を見据えてきた。ああ、告白されるのだろうか、と感じた。わたしと彼を取り巻く空気が熱を帯びているのがわかった。

「依田さんのことが好きです」

告白されるのは初めてのことだった。好意を寄せている人が、わたしのことを好いているという事実が目眩がしそうになる。

「わたしも、藍沢くんのが好きです」

お互いの好意を確認して、それから何になるのだろうか。わたしは自分が恋愛の最中にあることによく気が付いたばかりだった。お付き合いをするとなれば、今後は彼の鎖骨を見ることも、首筋に触れることも許されるのかもしれないと少しだけ期待した。

恥ずかしそうに鼻先をこすり、「緊張した」と呟いてから一呼吸置いて彼は話を続けようとする。

「それで」迷いを含んだ声色だった。

「……まだみんなには言っていないんだけど、依田さんには話しておかなくやいけないことがあって」

「実は俺、冬休みが明けたら転校するんだ。父さんの転勤で、京

都に引越すことになって」

藍沢くんは父親とふたり暮りで、近くに頼れる親戚もないのだと言った。わたしは「そう」としか言えなかった。

「離れ離れになる前に、伝えたかった」

付き合おう、とは言ってくれないのか。遠距離恋愛なんて少女漫画や恋愛ドラマでしか見たことないけど、そういう選択肢だってあるのに。

「えっと、それで、依田さんにお願いがあって」

「うん」

「冬休み、俺とデートしてくれませんか」

「うん……えっ」

デートの誘いを受けたのだから初めてだった。女の子とふたりで遊んだ時にデートだね、なんて言ってみることはあったけれど、それとは違う。恋人ではないけれど、お互いに好きあっている者同士で、デートに行く。

「いいよ」

チャイムが鳴り、ふたりで一緒に学校を出た。わたし達の帰り道は反対方向だったので、校門を過ぎたところで「またね」「うん、連絡する」と言っ別れた。わたしは家に着くまで、藍沢くんのことを考えていた。もう少し、早く彼と関わってあげよかった。冬休みに出会う彼の私服姿は見てみたいと思うし、異性と出かけるのも初めてなので緊張もする。それでも、やっぱりわたしが一番惹かれていたのは彼の顔よりも何よりも、鎖骨だった。せめて夏だったなら、首元のすっきりとした服を着た藍沢くんを沢山目に焼き付けることができたのに。

「美結さん」

わたしの名を呼ぶ、くぐもった声が聞こえた。ゆっくりと目を開ける。目の前にいる間宮くんの肌は白く、首元が大きく開いたグレーの→シャツから覗く胸元や首筋の所々にほくろがある。

「間宮くん、おはよう」

わたしは瞬きをして、彼の切れ長の目を見つめる。

「藍沢くんってだれ」

間宮くんは不機嫌そうな声で、わたしがかつて好きだった人の名前を言った。なんで、と言いかけて、自分がさっきまで藍沢くんの夢を見ていたことを思い出した。眠りながら彼の名前を呟いてしまったのかもしれない。

「ええと、わたしが昔好きだったひと」

「そう」

付き合ってたの、と聞かれて、うーん、と唸る。わたしたちは好き合っていたけど、恋人同士ではなかった。結局、冬休みの一回きりのデートでわたしと藍沢くんは手を繋いで街を歩き、別れ際に初めてのキスをした。乾燥した唇の感触と、直前までふたりで飲んでいたキヤラメルラテの香りがしたことは覚えていた。藍沢くんが京都に行つてから、メールや電話でやりとりしていたが、徐々にその回数は減った。一回くらい、首まわりの写真をねだっておくべきだった。藍沢くんはわたしにとって過去の美しい思い出しかない。

「あなたが初めて恋をした相手は俺だと思ってた」

わたしが間宮くんと出会った時に処女だったからそう考えているのであれば、なんて短絡的なんだ、と思う。でも、嫌いだはない。二つ年下の男の子が、わたしのことを思つて不貞腐れているのは見ていて気分がいい。

わたしと間宮くんが出会ったのは、わたしが大学生の頃、カフェでアルバイトをしていた時のこと。暑い夏の日だった。間宮くんが着ていたシャツのボタンが大きく開いていなかったら、こうしてベッドの上でくっついて話している今の私たちはいなかった。

レジの前に現れた彼の白い肌と、ちらりと見えた鎖骨の窪みに流れる汗を見つめてしまった。視線を徐々に上げると、目の下、縦に二つ並んだほくろが目を惹く、端正な顔立ちをしていることに気づいた。わたしはこの時、このひとを逃したくないな、と思った。きつと、いま自分に起きているこれこそが一目惚れというのだろうと思った。

今その時を振り返ってみても、自分の行動力に驚く。そのあとすぐにシフトが終わり、慌ただしく身だしなみを整えてから、アイスコーヒーを持って間宮くんを探した。本を読んでいる彼を見つけて隣のテーブル席に座った。顔立ちと醸す雰囲気が大人数びていたが、よく見ると彼は制服姿で、スクールバッグをそばに置いていた。高校生に声をかけるのは犯罪になってしまわないかと内心怯えつつ、いつもカバンの中に入れてある、何度も読み返している小説を取り出し、読んでいるふりをした。

「わたし、あなたの鎖骨を綺麗だと思ったの」

笑われてもいいから、正直に伝えようと思った。

「俺の鎖骨？」

骨ばった細長い指で自分の鎖骨をなぞる彼を見て、わたしはふふ、と笑う。

「そう。初めて好きになったひとも、鎖骨の綺麗なひとだった」
かたちが似ていたわけじゃない。肌の色も、質感も違う。

「その小説面白いですか、って声掛けてきてくれたのに、まさか鎖骨が目当てだったとはね」

彼は楽しそうに笑った。

「似てると思ったの」

わたしは彼に伝えるべきことを、言葉を探りながら発音する。
「似てると思っていたんだけど、思い返せば返すほど、あなたと彼は全く似ていなくて。わたしはあなたと出会うまで、その人の鎖骨がいちばん綺麗だと思っていたし、その人のことが好きだったんだけど。今はもう、どうしてその人のことをずうつと想っていたのかってくらいあなた自身の魅力やわたしにかけてくれる言葉のすべてが愛おしいよ」

こんなことを伝えるのは初めてだった。

「嬉しいね。俺も、あなたのことが愛おしいよ」

わたしは間宮くんの過去については聞かない。女性の扱いに慣れているし、きつと他の女にもこんな表情を見せたことがあるのだろう。わたしは緩く微笑む。

「それじゃあ、俺とあなたで、終わることのない最後の恋をし

よう」

ラブソングの歌詞か、古風な恋愛映画に出てきそうな台詞を恥ずかしげもなく披露する彼に「ばか」と言っつて小突いてやりたいと思うのに。真剣な眼差しと声色に、身も心も疼いてしまふ。わたしはたまらなくなつて、この熱が、想いが、すべてあなたに伝わればいい、と思つた。彼をきつく抱しめ、笑みをたたえようとしている薄い唇に、そつと口付けをした。

こんなに幸せを感じられる日々がずうつと続くとは思わないけれど、いま、わたしの心と身体は満ち足りていた。交わした言葉と、触れ合っている温度、夢のようなこの瞬間が夢ではないことだけで十分だった。いつか終わるかもしれない。でも、それは今じゃない。夢と現実のあわいをゆらゆらと揺れているみたい。現在に、わたしは溺れてゆく。

女性×女性

『あなたのはじまりの物語』

片栗粉たくぞう

私は読んでいます。あなたの物語を。
あなたは読んでいます。私の物語を。

「わたしの物語は誰のものなの？」

幽霊のような物語に囲まれながら、あなたは退屈そうに言った。ベッドから上半身だけ起き上がらせて、白い包装紙にくるまれたハンバーガーを手を持っている。

「あなたの物語は、あなたのものよ」

ありきたりな言葉を私がまとうと、すぐに顔をしかめるのがわかった。「そうかなあ」と不満げな表情を前面に押し出して、あなたは物語を読み解くように包装紙を開いていく。紙の擦れる薄っぺらい音が響いて、大きなハンバーガーが顔を覗かせた。「だつてさー。このハンバーガーもきつといつもみたいに美味しいって思うだけどもん。物語なんて感じないよ」

あなたは無数の物語が挟まれたハンバーガーを口にする、

「あまい」と零す。色の薄い唇にはケチャップを付けて、オシャレな言葉で不慣れた化粧をしたみたいにあどけなさを忍び込ませる。私が無地のハンカチを取り出して口元を拭おうとすると、あなたは懐いた猫のように顔を寄せ、ハンカチをつまんだ私の手の甲に小さな頬をあてがった。言葉が体温を告げる。私はあなたの顔を離し、唇のケチャップを掬い取る。あなたが手に持っていた食べかけは真っ白な衣服の胸元を掠めてしまつて、はらうような赤色の線を引いていた。その傷のような染み以外に、何も物語はない。でも、服に付着してしまつた物語は簡単に消せない。

私は小さく嘆息すると、「あとで着替えね」と言いながらあなたの服の汚れもハンカチで拭う。あなたはようやく赤い染みに気付いたみたいで、「あつ、ごめんなさい」と畏まっていた。「気にしないで」と言うと「じゃあ気にしない」と返される。切り替えの早さは、私とあなたに共通する。パーソナリティだ。

「でも」私は椅子に腰かけなおして話題を揺り戻す。「あなた

はそのハンバーガーを食べたときに美味しいって思ったんでしょ？ だったらそれは、あなたとハンバーガーのあいだにある物語よ」

「えー。ハンバーガーの物語って、なんか嫌」

「そんなこと言っても、ハンバーガーだって言葉なんだから」

「そりゃあね」

あなたは十分に物語を堪能したのか、半分以上を残した齧りかけのハンバーガーを包みなおすと、ベッドの横にあるテーブルに痩せ細った腕を伸ばそうとする。私が代わりに受け取ってテーブルに載せたら「ありがと」と言われた。ついでに両手を重ねて握手もされる。「なんだか人肌恋しいの」とは数日前のあなたの弁で、一か月前からすれば想像もつかないほど打ち解けられたとは思っていた。

改めてベッドに向きなおると、レースのカーテンから漏れ出る光が視界のなかで明滅した。カーテンがそよ風に揺れるたびに姿を現す淡い光が、物語を取り込まないあなたの臃げな身体に重なる。居たたまれなくなつて、私は本題を切り出そうとした。

「それで」

「あー」

あなたはいつものように、わざとらしく続きを遮る。

「どうしても考えなきゃいけない？」

「こればかりは、あなたの問題だから」

「でも、本当にわかんないんだよ。わたしのなかにある物語が」
雲が日差しを覆ったのか、カーテンを逃げ回っていた光が

ふっと消える。あなたが見せる瞳の翳りは、初めて話した日の記憶を否応なく思い出させた。

初めて読んだあなたは、実体のない物語に囲まれて、自分自身までもが不安定な存在のまま揺らめいていた。

「えっと、よろしくお願ひします」

「ええ、よろしくね」

あなたを構成する無数のパーソナリティは、色白で髪が長く、私と同じぐらいの背丈をした、目元だけに幼さを残す少女を形成していた。恥ずかしそうに俯くあなたに愛想よく笑顔を浮かべる私は、かなり厄介だなど、あなたに気付かれぬようカルテに視線を落として、眉間にも皺を寄せる。

私が物語を修正する仕事に就いてから五年経つが、あなたのように物語のなかに自らを持たない人間は初めてだった。人類が肉体的損傷のない言語世界に逃避してから幾年が過ぎ、元素は言語に置き換わった。この世界を構成している無数の言語はあらゆる概念に意味を与えて、物語を織りなしている。意味を有した物語は感覚に伝わり、物語を積み重ねた塔は人間になる。人間は言語の集合体であり物語であり、物語を読むことで人間はお互いを知る。物語として存在する人間は、幾多の経験を経て自らの物語を綴る。現に私も、無数に存在するパーソナリティを言語によって記述され、いまなお膨らみ続ける物語のうちの一ひとつだ。

一方で、成長に伴って矛盾した物語を抱えるようになる人間も時々現れる。病院を訪れる患者を不安定な存在にしている欠

陥を修正するのだが、これまでの私の仕事だった。多くの場合は
 時制が乱れていたり、物語に不整合が散見される程度だから、
 それらを修正して在るべき物語に整えればいい。ただ、あな
 たは違った。あなたを形作っている物語のすべては架空の物語
 だった。しかも、あなたの場合は架空の物語のなかにあなたが
 存在しなかった。あなたの物語には兄や弟、見知らぬ女と機械、
 あるいは先輩と後輩のように、あなたではない誰かの物語が雑
 多に詰まっていた。あなたをあなたたらしめているのは無数の
 パーソナリティを記述している言語のみで、周りには幽霊のよ
 うな物語がまわりついている。あなた自身の物語が存在しな
 い以上、架空の物語を丸ごと修正して、あなたの物語だけを残
 すのもできない。

だからあなたも知つての通り、私はあなたの物語を知る必要
 があった。あなたの望む物語を把握さえすれば、それを基にあ
 なたの物語を創り上げることで欠陥を修正できる。あなたを保
 つまま、膨大な数の物語が混ざって何者かもわからない、
 不安定な存在から脱却させられる。

私があなたの望む物語を知る過程で、あなたはあなたを形
 作っていくのではないかと一縷の望みも抱いていた。でも、あ
 なたが綴っているはずの物語は意味を伴わずに、掌にかき集め
 た水のごとく零れ落ちていった。意味を喪つた物語はシチュ
 エーションの骸と化して、もはや誰にも読むことはできない。
 私にも、そしてあなたにも。

私は毎日、自らにまつわる物語を留めておけないあなたと会
 話をする。私とあなたのあいだに物語は存在しない。少なくとも

もあなたを構成する物語のなかに私はいない。あなたは私を読
 んで、そこから自らの物語を類推する。

一方的に堆積していくのは私だけが抱える、あなたとの物
 語だ。

「どう、元気？」

私が様子を見に顔を出すと、ベッドの上に設けられたテーブ
 ルで絵を描いていたあなたは満面の笑顔で「もちろん！」と答
 えてくれる。この部屋に來た当初と比べるとあなたは随分明る
 くなっていた。私もあなたと繰り返し話す会話に励まされ、それと
 同時に、引っかけ傷のような新たな物語を読んで一抹の不安も
 抱いていた。誰かの物語を身にまとうたびに、あなたはあなた
 ではなくなっていく。まだ時間に猶予はあったが、あなたには
 あなたでいてほしい。そう思うと、急かさずにはいられなかつ
 た。

「どんな物語にしたいか、決まった？」

あなたは笑顔をひっこめると気まずそうに俯く。口を結んで
 シーツを両手できゅつと握る、全身で縮こまった姿を見るたび
 に私は苦しくなっていた。もちろんこれは、私のせいだ。

「……ううん。まだ」

「どんな物語が好き、みたいなのはある？」

「わかんない。わたしの物語に、本当のわたしは一人もいない
 から」

言葉もなくして目を泳がせると、ケースに収まった色鉛筆と一枚の白い画用紙に目が留まる。描かれているのは夕焼け空の下を歩く男性と女性で、空を横切る濃淡様々な赤色の線たちが、画用紙の上にグラデーションをつくっている。少なくとも私とあなたではない。あなたはよく絵を描いていたが、描いているのはいつも、あなたを構成している物語の断片。つまり、あなたの存在しない物語だった。

「毎日あったことを、絵として残してみるのは？」

私の提案にも、あなたは首を横に振った。

「だめ。知らないわたしが描いたみたいと思っちゃうから。身近な人ほど、描けない」

「そっか」と呟いて椅子に落ち着くと、お互いに黙り込んで奇妙な間が生まれた。何もない空白の時間ですら意味はうまれて物語の一部として取り込まれる。五感が意味を通じて五感となり、意味が五感を通じて意味となる。

沈黙に耐えかねたように、「て！」と唐突に言われた。「手出して！」

握手するように片手を差し出すと、あなたは両手でそれを包み込む。そして手繰り寄せて、私の手の甲を頬に押し当てる。いつもの所作を私は為すがままに受け容れる。

あなたは目を閉じて安らかに言った。

「こうしてくっつくことあったかいの、不思議」

「どーして？」

「わたしに物語なんてないのに、ひとりなのに、誰かといると幸せに思えるから。たぶん毎回、あったかいつて感じてる」

「私はあなたの体温、いつも温かく思ってる」

「え、ほんと？」あなたは私の手を掴むように握ったまま、頬から離れた。

「本当。毎日されてるもの」

私は頷く。もう片方の手をあなたの手に重ねて、今度は私が握る格好。丸みを帯びた肌から温かさが伝う。あなたが温もりに備わった意味を喪つてしまつても、私は憶えているから。あなたを物語として強く刻みつけるため、祈るように包んだ両手の力を強くする。

「握られるのも、いいかも」

あなたが私の手をまじまじと見つめて呟くから、私は恥ずかしくなつて手を離れた。呟いていなかったらまだ続けていたかもしれない、なんて露知らず、不貞腐れた顔をしているあなたに向けて、私は言った。

「私のなかに、あなたはいる。だからあなたはひとりじゃない」

「でも、わたしのなかに先生はいない。そんな物語は寂しいよ」
「……私が、あなたの望む物語を創るから。あなたを確かに存在させるから。したらあなたも物語を綴れるようになる」

言葉に力を込めすぎたかもしれない。無意識にシートの上に手を置いている私がついて、息を呑んでいるあなたがいる。再び重なる。温度には意味がある。世界を取り巻くあらゆる言葉が、私とあなたに意味を伝えてくる。

「わたしの物語って、やっぱり全然わかんないけど」

気付いていなかったかもしれないが、そのときあなたは涙ぐんでいた。

「でも、わたしの物語にわたしがいて、先生がいたら。きつと毎日うれしい」

手術台の上であなたは仰向けに横たわっていた。目を閉じ、苦悶の欠片も浮かべることなく意識を奥深くに眠らせている。綺麗だ、と純粹無垢な気持ちになる。私はそれを見下ろして、傷ひとつない頬に片手をそっと添える。

あなたは最後までなんの物語も望まなかった。まるで私にすべてを委ねるみたいに、頑なとして「わかんない」を繰り返した。あるいは本音だったのかもしれないが、そのときの物語を持たないあなたにも、当然ながら私にも真実はわからない。彼女は私を信じてくれた、ただそれだけだった。

そして期限が訪れて、私も決断した。

あなたの周りを揺蕩う架空の物語をすべて修正して、あなたの物語を創る。物語の基盤にするのは、私が堆積してきた物語だ。でも、そこに私の面影は残さない。私のなかにいるステラだけを鮮明に描き出す。私とあなたのあいだに物語は存在しないのだから、私の感じた温もりは私の温もりでしかなく、部屋で過ごした一方通行な物語は、共有してはいけない。

あなたの物語はあなたのものだ、私は心に決めていた。

あなたを読んでいくと、あなたではない物語が何重にも立ち塞がっている。

たとえば少女と少女がいる。父親と子どもがいる。男と男がいて、犬と猫がいる。私はあなたのいない物語を線で打ち消していく。なぞった跡には紅色がじわりと染む。全身を覆う物語たちを赤で上書きする。亡骸となった数多のシチュエーションを八つ裂きにして、あなたの白い肌にはおびたらしいほどの赤色が滲んでいく。私は一心不乱で物語を修正していった。膨大な量に疲労をにじませながら、物語を修正するたびに私はその物語の奥行きと複雑さに目を見張る。それは紛れもなく物語だった。ただ、あなたがそこにいないという一点を除いて。だから私は躊躇うことなく、あなたを読んで線を引く。幾億にも絡まった紐のような赤い染みがあなたの身体を分解する。あなたを構成する物語の主人公は、あなただ。

だが、ほとんどの物語を修正し終えたところで私は固まった。次に読み始めた物語は、それまでとは違った。

物語には、私とあなたがいた。

その物語のなかで、私とあなたは同じ制服を着ている。同じクラスにいる。手を繋いで帰っている。喧嘩している。一緒に暮らしている。同じ化粧品を使っている。駆け落ちしている。アイスクリームを半分こしている。机を合わせて一緒に弁当を食べている。時制の乱れるシチュエーションは奔流して、未来と過去が混ぜ合わせるように交錯する。そのなかに等しく私とあなたは存在していた。私のなかにはない、私とあなたの物語だ。

ただ、それはあなたが意識の海の底に創り出していった架空の物語に過ぎず、私にとっては修正の対象だった。私は線を引

いて闘おうとする。あなたの華奢な身体に始まりの点を置き——そこで手を止める。滲むように広がる点は、彼岸花のように禍々しく咲く。

あなたを読んでいる私の頬から、水が滴るように一筋の汗が零れた。

この物語は一体、誰のものなのか？

自らの物語を持たないあなたの、初めての物語。それはあなたの理想が生み出したもう一人のあなたであり——物語だ。たとえ私のなかには存在してはなくても、あなたを構成する物語として存在している。だが、実際のところ私とあなたは同じ制服を着ていない。年齢も異なる。奔流したシチュエーションはつぎはぎの出鱈目だ。ただそれは私だけの物語を基に決めた真実であり、あくまでも私が見出したあなただけの物語だ。

それと同様に、私だけに積もっているあなたとの物語が真実であると、誰が決められるのだろうか？ 真実だと思うのは私だ。だが、真実だと決めるのは私ではない。私があなただけの物語を偽りだと決めるように、あなたは私だけの物語を偽りだと決めるだろう。であれば物語は、誰のものだ。私とあなたのあいだにある物語を決定するのは私ではないし、あなたでもない。

私あるいはあなたの物語を物語にするのは、自分自身ではなかった。

あなたは小さな呻き声を漏らした。赤い染みは街中を埋める花畑のように身体を侵食している。あなたを構成する物語を縦横無尽に線が飛び交い、先を尖らせて跳ねる。あなたという

存在が限りなく薄まっているいま、負担は大きく長い時間はかけられなかった。あなたの物語に介入する覚悟を決めなければいけない。手術台の上であなたは悶える。苦しさを宿した眉間の皺にも物語は詰まっている。それは眠っているあなたには認識できない、私だけが読める物語で——そうか、と私は気付く。

脳裏をよぎったのはハンバーガー。物語を頬張るあなたの満足そうな顔……。きつと最初から、あなたという物語に物語を見出すのはあなたではなかった。たとえあなたがハンバーガーを食べても、あなたは甘いつか思わないように。ハンバーガーを食べることでまた綴られていく物語を読んで、「ハンバーガーを美味しそうに食べるあなた」と意味を見出すのは私だ。同じように、私とあなたの物語を読むのも第三者だ。私とあなたにとつては、それぞれがお互いの物語を抱えている、それだけが事実。たとえ物語が真実だとしても偽りだとしても、私にはあなたの物語があつて、あなたには私の物語がある。私には私の物語があつて、あなたにはあなたの物語があつた。

「わたしの物語は誰のものなの？」……あなたが投げかけた問いの答えはきつとあなたではなかった。あなたの物語はあなたではないすべてのものだ。それでも、あなたにはあなたの物語を守る権利がある。なぜなら、あなたは物語だから。物語はあなた自身だから。物語を通じてあなたを知ること、私は初めてあなたを愛おしく思える。あなたは私の物語を読んで、そうやって私とあなたの物語は一目ずつ編まれていく。私だけが抱える、あなただけが抱える物語はその出発点に過ぎない。

もう迷いはなかった。瞬きと同時に大きな息を吐く。私の

物語に在るあなたを臉の裏に描き、これから先、無限大に広がって行くあなたの物語を思い浮かべる。そのなかであなたは微笑んでいて、私も微笑んでいる。

そしてあなたの白い肌に言葉を這わせて、新たな物語を創り出す。

手術後の経過は順調だった。物語に重大な欠陥は見当たらず、あなたの存在は確立された。あなたはあなたの物語を、胸の奥に秘めて守っている。

私が顔を出すとあなたは描きかけの絵から顔を離し、嬉々として生きているシチュエーションを語った。窓から差しこむ橙色をした日差しは温かさや、外から聴こえる鳥の黄色いさえずり、室内に漂う水色の甘い空気をあなたと共有している。

「このガム、わたしのお気に入りなの」

あなたは包み紙にくるまれたキシリトールのガムをかざして、まるでエメラルドを手にしたみたいに言った。

「毎日噛んでるの、読んでるから知ってるわよ」

「だってうれしいんだもん」

無邪気にはしゃぐあなたは紛れもなくあなたで、それが私にはうれしかった。一方、あなたが私の手の甲を柔らかい頬にあてることなくなくなって、それが寂しくもある。ただそれは、あなたが独りではなくなった証左にほかならない。

行き場をなくした藤元の手をじいっと見つめていると、あな

たの視線も私と同じところに寄せられているのがわかった。

あなたは腕を伸ばして、私の手の上に温もりをそっと被せる。同じ温度を共有して、あなたは意を決したように言う。

「……わたし、先生と友だちだったと思うの」

あなたの瞳に私の瞳が吸い寄せられる。かち合った双眸は、私とあなたに新たな色を与える。

「いまは違うの？」

「わかんない。この物語はわたしだけのものだから」

首を横に振るあなたに、私は告げる。

「それなら、今日からなればいい。きつと私たちは友だちよ」

「わたしたち」とあなたは目を輝かせて、言葉を宙に浮かせるように繰り返した。「わかった。それじゃあこれは、わたしたちの物語」

「ええ。あなたの物語。そして私の物語でもある」

あなたは私の手を握って応えた。私はあなたを読む。そこには私とあなたの物語が存在している。色鉛筆はテーブルの上に散らばり、白かった画用紙には、小さな部屋で手を繋いでいる私たちが描かれている。

そして私たちは読んでいる。私たちの物語を。

白球を追いかけて

鹿志村直人

白球を追いかけて

鹿志村直人

白球が少女たちの間を駆ける。それは一種のコミュニケーション。ネットをボールが超えることに挟んだ向こうにいる二人を知る。じゃあこちら側にいる彼女は？

彼女がどんな顔をしているかわたしにはわからない。

ゲームカウント2―3。ポイント2オール。2ポイント先制ブレイクからの仕切り直し。サウスポールの体から逃げるように跳ねるアンダーサーブは何度か経験してきたけれど全中経験者は伊達じゃない。ネットを越えた瞬間、急速に落ちるボール。低めのボールを何とか横に逃がす。少しでも下がって構えていた前衛が一瞬わたしの視界を塞ぐ。次に視界が開けると相手後衛は既にラケットを引ききっている。

「キョーコ！」

直後強い縦回転を伴ったボールがキョーコの足元に叩き込ま

れる。跳ね上がった直後を綺麗に早めのテンポで打ち上げる。サービスマインからのハーフボレー。緩やかな弧はわたしたちに立て直す時間を与える。

（クロス？ それともストレート？ キョーコはどう動く？）

仕切り直し。しかしここで攻撃の手を緩めるような相手ではないことはここまでの5ゲームで身をもって教えられていた。背中を向けたキョーコの表情は読めない。縦に引かれた二本線の間ベースラインギリギリ。直後、キョーコの体が少しだけ左に揺れる。焦っているとしか思えない勝負になっていない勝負。相手後衛が右足を大きく踏み込んだのを見て私は走り出す。

サウスポールの繰り出すクロス寄りのストレートがキョーコの真横を通り過ぎる。

弾丸で打ち抜かれたような音が響き、跳ね上がったボールはわたしのラケットの一步先を貫いていった。

「ゴメン」

キョーコは一言謝るとわたしが何か言う前にポジションにつ

く。わたしが打ち負けたから、彼女にらしくないミスを誘わせてしまったと反省するのは後だ。まずは取り返す。

「スリーツ」

無慈悲なコール。相手高校の応援が静かになる。同時に「勝てる？ 勝てる？」という観客の期待が聞こえてくるようだった。

強豪校のわたしたちはここでは巨人、ジャイアントキリングは聴衆の期待するところだ。彼女が返せるかどうかにまずは懸かっている。深く落ちたボールがキョーコから逃げるように跳ねる。まずは打ち合ってキョーコの出やすいタイミングを作る……。

速いテンポのロブ。相手前衛の頭を少し超えるようにボールを打ち上げる。その軌道上に直後相手前衛が割って入る。マズイ、と思った。足はまだ動きださない。全てがスローモーションで動く。キョーコは、わたしはどんな顔をしているんだろう。見えるのは相手選手の顔だけだ。読んでいたのだろう。徐々にその顔に喜びの表情が浮かび上がる。キョーコの足元に叩き込まれたボールはそのまま通り過ぎ誰もいないコートの上側でもう一度跳ねる。

県予選決勝リーグ。団体戦績2-1。わたしたちの高校の敗北。

しばらく隣のコートを見ていると残りの学校の結果も出揃う。遅れて私たちの試合の結果を知ったのか試合を終えた選手が大きな声を上げる。

そしてわたしたちの春の大会が終わった。

大敗から一週間が経った土曜日。天気は雨だが筋トレなどの屋内練習にミーティングなど強くなるためにやることはたくさんある。

「校内戦を行う」

田村さんの突然の発表に教室内がざわつく。部長であるわたしは田村さんからプリントを受け取ると一束をキョーコに渡して部員たちへ適当な枚数を回していく。キョーコも同じように一年生の集まる一角に回していく。

「静かに」

顧問の島田先生が睨みを利かせると音楽の合奏のようにしんと静まり返る。三年の学年主任を務める彼女はその厳しさから女帝と生徒の間で噂されている。それは同時に彼女の大人の女性らしいかっこよさを象徴したものでもあり、彼女の授業を数学の授業を取る一部の生徒からは男女共に人気を得ている。

「田村コーチ、続けてください」

「ありがとうございます島田先生。えーそうですね。まずは読んでもらって」

田村さんと目が合う。体育大に通っているという彼は爽やかな笑顔で浮かべる。その視線がキョーコの方にも向く。不思議な予感が出てプリントを読み進めていくと周りからも驚きの声がか聞こえ始める。

「今回はペアの見直しも兼ねている」

ペアの見直し。それ自体は定期的に行われている。特に春先に入った一年生の中には強豪校でテニスを続けるだけのことも

あつて有望株は何人かいる。それらと既存の部員との新しい可能性を模索するためというなら納得もできるだろう。しかし、今回のように大規模、ましてや三年生のペアまで巻き込むというのは異例だった。

「先日の大会、悔しかった人は手を上げて」

キョーコの方を見て手を上げる。小さく手を上げた彼女の表情はあの時のゴメンと重なった。

「試合に出た人出なかった人、それぞれに違った悔しさがあると思う。そしてこの一週間悔しさは悪い方向に働いていたと思う。何となくそれはわかるよね」

「あたしとミチのペアも変えるんですか？」

「そうだ」

キョーコの質問に島田先生が即答する。島田先生は一度田村さんを見てそれからわたしとキョーコを見た。

「落ち込む気持ちはわかるがこのままだと夏の大会も負けるぞ？ 田村さんと相談した結果、ここで一度ペアを見直す方がいいかもしれないとなった。私はテニスに関しては疎いですが今の君たちの部活に取り組む姿勢はあまり好ましくないと思う。特に部長、副部长。キミたちがそんなんでどうする？」

女帝の顔に優しい笑みが浮かぶ。この試みがわたしとキョーコのためにあるのだと言っているようだった。

「各自、大変だと思うけどこのスケジュールに沿って練習を進めていってくれ。ボクの来れるスケジュールも書いてあるから気になることはその時にでも。それじゃあ解散」

二人分のラケットケースが作る不規則な音が気持ち悪くて歩幅がわからなくなる。そんなことを気にせずキョーコは先を歩く。他愛無い会話は窓を伝う雨水のように誰に受け止められることもなく途切れる。

雨の中を二人並んで歩く。キョーコの声は雨にかき消されて言葉の形はわからない。時々ぶつかる傘から零れた雫で片側だけ冷たい。離れて近づいて、正しい距離がわからなくなる。

キョーコと二人つきりで帰るのは久しぶりだ。いつも約束しているわけではないけれど最近帰るタイミングがズレたり他の子が同席して自然と話さないことが多かった。今日のミーティングを踏まえるに他の部員は気を遣ってくれたのだろう。そう思うと合点がいった。

「ミチはどうしたい？」

ヘラヘラとそんなことを投げかけてくる。雨の中に埋もれてしまえばいいのにとズルいことを思ってしまう。

彼女は怒らない。不機嫌にもならないし悲しそうな顔もしない。わたしの前ではいつも笑っている。でも、彼女とペアを組んで二年。

何度か見た中でも特別嘘くさい笑顔。だからつい見入ってしまう。

「キョーコは……」

それを疑問符と受け取ったのかどーしよーなんて言って誤魔化す彼女。わたしより五センチ低い視線が傘で隠れた。水溜まりを避けるように二人の距離が遠くなる。

「梅澤、すごいよね。身長一七五センチだって。今回は団体メ

ンバー外されてたけどキョーコと組んだら結構相性いいんじゃない？ 前衛だと三年の山崎か森かな。二人とも違ったスタイルだから試してみたいな」

気持ち声を張り上げて彼女に追いつく。

「インター行きたいね」

何度も彼女から聞いた言葉。出会った当初はくさいと思ったその言葉が今は眩しいと思う。彼女が言葉にしてくれるからわたしは前に進める。

「行ける。今年のメンバーなら必ず」

「そう、だね」

そのためのペア変え。部長として親友としてわたしにできることは彼女をインターへ連れて行くこと。わたしがテニスを続ける理由。

「このペア替えて大きく変わると思うんだ」

感じるのは大きな可能性。わたしという枷が外れて生まれる大きな可能性。

ふと、キョーコが歩みを止める。後ろからやってきた車に道を譲るように一列になって止まる。車が行ったあとも彼女は俯いたままだ。

「ミチはそれでいいの？」

「……何が？」

「一年の時からずっと一緒にやってたじゃん。なのにミチはそれでいいんだ？」

「いいも何も団体で勝つためにはしょうがないじゃん。わたしより上手い後衛がいるならキョーコはそっちと組んだ方がいい。

キョーコはウチの部のエースなんだから」

あの大会の続き。蓋をした感情が流れ出る。あーそうかと誤魔化してきた感情に気づいてしまう。

「わたしじゃキョーコに釣り合わない」

「何それ……そんなこと誰も言っていないじゃん」

「わたしが思ってるの」

駅に着く。キョーコは上りでわたしは下り。普段なら払う傘に残った雫を垂らしたまま改札に向かう。

「それじゃあねキョーコ」

傘の当たった場所が濡れて気持ち悪い。人ごみに紛れるようにお手洗いに駆け込むと個室にカギを掛けて腰を落とす。コツコツとローファアの音が響いて息をひそめる。聞こえてきた声がキョーコのものではないことに安堵した。

冷えた足が徐々に痛みを伴っていつそのことローファアを脱いでしまおうかと思う。強張った足を無理やり引き抜こうすると皮が剥けて痛い。

トイレのツンとした臭いが気持ち悪い。吐き出したい気持ちを飲み込むように上を向く。水を吸った体は歩き出すにはまだ重い。

ランニングを終えるとウォームアップを兼ねたラリー、続いて前衛と後衛に分かれる。

「梅澤、組も」

「ミチ先輩……。わたしボール持ってきます」

健康的に焼けた肌、姿勢の正しさ。女子に使う誉め言葉では

ないかもしれないけれど、女子にしては大きめの身長とそれに見合うがっしりとした体付きは彼女がスポーツ選手であることを一目でわからせる力強さを持っている。周りではキョーコに近いタイプ。彼女の身長はわたしよりも小さいけれど梅澤に負けない存在感を持つている。そして二人とも感情表現が豊かだ。緊張して口を小さくパクパクさせているのが可愛い。肝の座り具合でいったらキョーコに軍配が上がるなと思った。

「そんな緊張しないですよ？ この前のミーティングのこともあったからさ」

先日のミーティングのプリントには今後試したいペアの候補が羅列されていた。その中にはもちろんキョーコ・梅澤ペアの名前もあった。梅澤からすると複雑な心境だっただろう。彼女はどちらかというとなたしよりキョーコと仲がいい。そう言った意味では嬉しい側面もあったと思うが、他の部員が戸惑っているように既存の三年生ペアを崩すということに遠慮もあるのだと思う。

「どうなるか。わからないし。気楽にやる」

今できることをやる。それがキョーコのためにわたしができることだ。

コートの右側、シングルスサイドラインのやや内側に向かってボールを投げる。コートの外側から梅澤が走る。ボールが跳ねる。落ちてきたボールを回り込んだ彼女が素早いフォアハンドが捉える。甲高い音が鳴ったと思うとなたしの頭上をボールが通り過ぎていく。素早くスタート位置に彼女が戻ったのを確認

すると休む間をなく次のボールを放ってやる。これを十回で一セット。最初は調子のよかった梅澤も五球を超えたあたりから戻りのペースが遅くなってくる。左足が横に滑ってフォームが崩れる。芯に当たった方がいい音がした。手で器用に回転を掛けたボールがコートの外側を回るような山なりの軌道を描く。こういった体制からもある程度の攻撃力を残して打ち込むのは難しい。どれだけだけの練習を、どれだけボールを打ってきたのだろう。

「十球目」

「ラストオ」

低く跳ね上がったボールに対して腰を低く落とす。スパアンと一際大きな音を立てて飛んでいった白球がコーナーに置いてあったマーカーを打ち抜いた。

「あざっしたあ」

誰よりも大きな声が庭球場に響いた。

練習後。日は沈んで代わりにナイター用の照明がコートを照らしている。学校でも大分打ったというのに梅澤はとても楽しそうにボールを跳ねさせている。「ちよつとお話でも」と言われてやって来たのは駅とは反対側にあるスポーツセンターだった。せつかくなので打ちましようということだった。大学生と思わしき集団が撤収するのを二人で待つ。

「打ちっぱなしに来てるんです。いつもはサクラと」

サクラというのは今暫定的にペアを組んでいる原のことだ。梅澤と同じ中学出身で同じように県内ではそこそこの成績を出

していたらしい。

「中学のときからペア組んでたんだけけ？」

「いや、二人とも違う子と組んでたんです。私が組んでたのはこの前先輩たちと当たった……」

「小川さんか」

口の中が苦い。二人とも慢心なんてなかったと思う。先鋒中堅を勝ち負けと迎えた大事な試合。そんなことは幾度もあつてだからこそわたしとキョーコが大将を任されていた。

三年生の先輩たちがいた頃からずっと二人でその枠を勝ち取って部の戦績に貢献してきた。

わたしたちが三年生になって最初の大きな試合だった。卒業した先輩たちから何度も応援の連絡が届いた。「ミチとキョーコになら任せられる」そんな言葉が未だにプレッシャーになっていたのだろうか。あの日のわたしたちは試合を重ねるごとに亀裂が広がっていくようだった。

きっかけはたった一本のストレート。勝負に出たキョーコの横を綺麗に打ち抜いた。そんな読み間違い自体は何度もあつた。相手の読みがうまかった、それだけだ。しかし試合を重ねるごとに息が合わなくなっていた。ゲームの展開に依存するとはいへ思ったように試合のペースが作れない。飛び出す。そう思ったタイミングでもキョーコはそこから動かない。逆にせつかく彼女のプレーで相手の動きが乱れたのにわたしが決めきれない。調子が上がらない。コートの中が遠く広くわたしとキョーコは同じコートにいるはずなのに全然違うところで戦っているような。初めての感覚だった。

「キョーコ先輩とずっと組んでるんですよね？」

梅澤の声にハッとさせられる。背中を嫌な汗が伝った。

「入学してからずっとね。中学のとき地区予選が一緒だったからお互いに認知はしてたけど」

二年ほど前、春の大会の個人戦で組んだ時以来の付き合いだ。飯入部に行った日、彼女から声を掛けられた。その時はああ、地区で中学のときに見かけた上手い前衛の子だ程度の認識だった。とにかく攻撃的。そこに尽きた。彼女のいた中学はそれこそ団体戦も組めないような小さな部でほぼキョーコ一人でゲームを作って勝ちあがる彼女の姿は印象的だった。

「キョーコとつてもしっこかったの」

「ミチ、あたしたちペアだって！ コーチわかってるじゃん」

「見た見た。あんたがいつもベタベタしてくるからでしょ。隙あらば練習練習……」

「だって今年の一年の後衛だったらミチが一番上手いんだもん。それにこの前の強化リーグ！ 息ピッタリだったじゃん！ あんなに伸び伸び飛び出せたのは初めて！」

「中学のとき組んでた子があんたみたいなタイプだったの……。あーもうベタベタしない！」

飯入部から一週間、休み時間になれば練習練習。中学の試合会場で見かけた彼女も騒がしい子だとは思っていたが直接話すと印象の十倍騒がしかった。休み時間に読もうと思っていた小説は一週間経ってもまだ最初の数ページしか進んでいない。

「今日もやるの？」

お昼は彼女が教室に来る前に簡単に済ませた。おにぎり二つ。いくつか買ってきてあるが放課後の練習前に食べれば問題ないだろう。

「もちろん！ 早く行かないとまた先輩たちに取られちゃう」

散歩中の犬が飼い主を引きずるみたいだった。そもそも先輩たちだってあんなきつい練習なのに毎日コートを使っているわけじゃないだろう。一度だけブッキングした時もクラスメイトに誘われてとのことだったしそれ以降は見えていない。

「二人でインターハイ行くんだから」

楽しそうにコートに向かう彼女を追う。そして次第に待ち合わせ場所は教室から庭球場へ。昼休みはテニス。天気などの理由で休みのときはキョーコが昔と同じように教室にやってくる。そんな毎日がわたしは楽しかったのだ。

一年生の頃からの記憶を辿るとホントにずっと一緒にいたなと思う。梅澤はそんな話を楽しそうに聞いている。

「わたしさ。ホントはテニス続けるか迷ってたんだ」

「え？ そうなんですか？ どうして？」

「元々中学のときも仲のよかった子に誘われて始めたんだけど別々の学校になっちゃって。その子のおかげで勝ってたようなものだったし、まあ勉強もあるしなって。初めてコートに行った日、余計にそんな風に思っちゃったんだよね」

実際、あの日キョーコと会ってあんなに説得されなかったら今みたいに続けていなかったかもしれない。

「その気持ち、少しわかります。小川のが嫌とかそういうのじゃなくて。罪悪感みたいな。小川とずっと組んでたんでどこか違和感があつて。でも、この先輩たちと当たってるのを見て、頑張ってるのを見てスッキリしました」

少しずれている。中学の頃組んでいたあの子への罪悪感はありません。しょうがないこととして割り切れる自分がいる。多分キョーコとペアを解消しても同じように考えるのだろう。じゃあ、大学に行ったら？ その先、わたしはキョーコに罪悪感を覚えることがあるのだろうか。同じように割り切る？

「やっぱり、先輩方は組んだままの方がいいと思うんです」

いつになく真剣な目がこちらを見る。そう言って貰えるのは嬉しい。他人から得た答えは安心できる。だけどそれは二人の今までの関係、仲の良さだけを見て出た社交辞令だと否定する自分もいる。結局は実力じゃない。キョーコの足を引っ張るくらいなら梅澤に任せた方がいいと冷静な自分が訴える。

「それは」

間違えちやいけけない。わたしは部長でやるからにはちゃんとしなければいけない。ただいい言葉を探して、視線が彷徨うのを誤魔化すようにコートに入る準備をする。先ほどまでいた大學生はもういない。

「それはキョーコとコーチが決めることだから」

うちの部のエースはわたしじゃない。

迎えた週末。キョーコは梅澤とわたしは森ちゃんと組むことになった。森ちゃんはそれこそ梅澤と同じくらいかそれ以上のこと

身長で男子にも引けを取らない。ただ、性格は気弱で後輩からも「森ちゃん先輩頑張ってください！」なんて試合前に励まされている。

初めて組む、ということもあって手探りでゲームを展開していく。わたしも森ちゃんも堅実なプレーを好むのでゆつくりとしたゲーム展開でテンポを合わせていく。

一方、キョーコの方は寧ろ中学の頃に見たような派手なプレーが目立つ。梅澤も積極的に相手前衛にボールをぶつけにくいなどして攻撃的なゲームが続いているようだった。次の試合を待っている子たちもそちらの試合の方が面白いようで時々後輩たち中心に歓声が上がっている。

「ようやくだね」

ネットを挟んでキョーコと対峙する。こちらを見つめる彼女の表情から感情は読み取れない。練習で前に立たれた時よりも彼女を大きく感じた。横に梅澤や森ちゃんがいるのにそれよりも小さい彼女が一番の存在感を放っている。

「よろしく」

負けじと声を絞り出す。今は彼女を倒す。そのことに胸を躍らせている自分がいる。

「ゲーム2オール。ファイナルゲーム」

校内戦は5ゲームマッチ。互いにレシーブでゲームを取ることでできず7ポイント先取のファイナルゲームに持ち込まれる。

サーブはわたしから。ソフトテニスにトスの上げ直しはない。だからわたしはいつも慎重になる。屈伸をしてボールを二回つ

いて息を整える。入る、という確信が下りてくるまで数秒。長年このルーティンと付き合ってきた。風が静かになる。ボールが指先を滑るようにして離れる。つま先より少し先が上がったボールを追いかけるように、飛ぶ。同時にラケットを空へ向かって伸ばす。最高速でボールを捉える。遅れて自分の打った先を見る。フォルトのコールはない。だがエースにもならない。すぐに体制を立て直す。打ち上がったボールを森ちゃんがその身長を活かして高い位置から叩きつける。まずは一ポイント先取、森ちゃんと軽くハイタッチをする。

二ポイント目。今度は一本目のサーブがフォルトになりセカンドサーブ。深めのコーナーにボールが落ちる。キョーコがラケットを引いた瞬間軽く跳ねる。キョーコならやるといふ確信。その予想は正しいかった、が裏切られる。正面に構えていた森ちゃんのボディにキョーコの強打が叩き込まれる。勢いが殺しきれなかったボールは打ちあがり綺麗なチャンスボールになる。キョーコのスマッシュが鋭角気味にコートを横に切り裂く。

「ポイントワンオール」

やはり一筋縄ではいかない。

ポイント4-7。善戦はしたものの圧倒的な敗北。息を吐くたびに喉が痛い。膝がバカみたいに笑ってる。できることは全部やった。キョーコと梅澤のペアは間違いない強い。

「ありがとう。キョーコ」

トスを上げる時みたいに心を整理して今度は間違えないように言葉にする。

わたしは結局理由が欲しかったのだ。梅澤という新人が入ってきて、明らかに足を引つ張っている自分がいて。それが春の敗北で決定的になった。結局、わたしじゃキョーコを支えられない。

「ありがとう」

キョーコの小さな手を放すと再度言葉にする。梅澤は口を一文字（いちもんじ）に結んだまま視線を逸らす。ずっと黙っていたキョーコが口を開く。

「納得行かない」

「は？」

思わず素つ頓狂な声が出る。空気を読んだのか梅澤が森ちゃんと審判をしてくれた一年生を連れて離れる。

「キョーコ？ 何が気に食わないの？ いきなりわけわかんないこと言わないでよ」

「一人で納得してる風が納得いかないって言ってるの。この腑抜け」

パチンという音がコートに響く。手が熱くなる。血の気が引いていくのを感じる。

「何すんの、さ」

パチン。さつきよりも大きな音が響く。頬が熱くて痛い。頭の中で何かが切れる音を聞いた。

「あんたが訳わかんないこというからでしょ！ 何が腑抜けなのよ！ わたしが手抜いたって言いたいの？ バカにすんなよ。こっちだって必死にやっただよ！」

いつになく口調が荒くなる。留めていた胸の内が濁流のよう

にわたしから溢れたたて辺りを飲み込む。離れていたはずの森ちゃんと梅澤がわたしたちを羽交い絞めにする。気付いたら体が痛い。キョーコも口の端が切れて髪がぼさぼさになっている。

「頑張った？ 笑わせないでよ！ 梅澤が来て一番じゃなくなっと思って清々してる癖に！ いつもいつも、わたしと釣り合わない？ 自惚れんな」

「あんたに何がわかんのよ。あんたの足を引つ張るわたしの気持ちもわかってよ！ わかったじゃん！ 梅澤とキョーコのペアが強いのは今日わかったじゃん。わたしじゃキョーコを勝たせてあげられない！」

頬を熱いものが伝っていく。森ちゃんの拘束はもう解けている。ラケットと荷物を手に取る。後輩が、先生がキョーコがわたしを見ている。恥ずかしさと後悔でその場にいられなくなつてコートの外へ急ぎ足で出ていく。誰もわたしに声をかけてこない。戻るに戻れなくなつて庭球場を出る。叫びたくなる思いを堪えて段々と歩幅が大きくなる。後のことを考えると酷い罪悪感があった。それでも今はあの場にいたくなかった。

行く宛もなく校舎内を歩いた。そのまま帰ってやろうかと思つたが走り疲れたところで部屋に自分の着替えを置き忘れたことに気づいた。鏡を見ると目元を真っ赤に腫らした自分が映った。誤魔化すように顔を洗うと多少まともになったが酷い顔には変わりなかった。

体に染みついた習慣とはすごいもので気づくと教室の前にい

た。それも二年の教室。かつて自分が所属したその教室は今も誰もおらず、それでも所々にある今の所有者たちの作った雰囲気も記憶の中のそれとは違う異質なものを感じさせた。下校時刻ギリギリになったら職員室に行つて謝ろう。もしかしなくても怒られるかもしれない。けれど、島田先生は優しい、ちゃんと話せばわかつてくれる。そんなことを考える自分が嫌になる。

「ミチ」

聞き慣れた今一番聞きたくない声。びくりと体が震えた。顔を上げるのが怖くかった。どこに視線をおけばいいかわからない。机についた木目が錯覚のように回りだす。

「ミチ」

「……ごめん」

キョーコの影が机に落ちる。一年生のころを思い出す。わたしが本を読んでいると彼女の影が落ちるのだ。だからわたしはあの時と同じように顔を上げる。

「ぶって、ゴメン」

そう伝えるとキョーコは苦しそうに顔を歪ませる。彼女の目元も薄っすらと赤くなっている。

「そんなことじゃない」

「じゃあ何のこと？ 言ってくれなきゃわかんない」

ガタン。キョーコがわたしの胸倉を掴む。誰も止めてくれない。ミチのそういうところほんつと嫌い。言葉に酔って部長って肩書に酔って自分だけ納得してさ。なんで話してくれないの？」

「意味が……」

分らない。解らない。わからない。キョーコのことなんてずっとわからなかった。彼女の背中を見て、解った気になって都合のいいように飲み込んで。春の大会のことだって一度も彼女と向き合っていないかった。キョーコのためについて言いながら結局は彼女の理想像を押し付けて自分の言葉なんてキョーコ本人には話していなかったのだ。

「ほんつとにわかんないんだね。もういいよ。解散しよ」

彼女の手が離れる。記憶を辿る本当の彼女を探すように。今度こそ正しい言葉を探すように。

「待って、キョーコ」

やっと出た言葉は宙に消える。ドアの方を見ると代わりにやってきた梅澤がこちらをじつと見つめている。

「私、先輩方は組んだままのがいいと思います」

あの時と同じことを言う。わたしはドアの方まで歩く。追わなければならぬ。

「わたしもキョーコと組みたい」

わたしよりも大きな彼女を見据えてそう告げる。キョーコも彼女もずっと言っていたではないか。わたしがどうしたいのかを。

「キョーコ先輩、ずっと悩んでたつて。さつき先輩がいなくなつた後もずっと田村さんを説得してました。あの日、負けたのは自分のせいだつて。ミチ先輩じゃないとダメなんだつて、だから、だから」

「梅澤ありがとう」

言い淀む彼女を制止する。

「残りは自分で聞く」

教室を出ると体操座りをしたキョーコがいた。コートで見たときのように真剣な何を考えているのかわからない顔。

「梅澤が、さ。全部話しちやいそうだったから。ここで聞いた」

「わたし、キョーコと組みたいんだ。あんたがインターハイに行けるんだったら梅澤と組めって思ってた。でも、それでもキョーコと組みたいんだ」

小さくなっていた彼女が立ちあがって正面から見据える。その瞳の奥が揺れる。今度はネット越しじゃなく彼女のパートナーとして並ぶ。

「苦しいんじゃないの？ あたしといるの嫌なんでしょ？」

自嘲気味な笑顔。そこにあるのは真実でわたしは正直に頷くことしかできない。

「コートの後ろに誰もいないのはもう嫌なんだ。できることならミチにいて欲しい。先輩の引退とか進路のこととか。色々考えてずっと不安だった。ミチがいなくなるのが不安だった」

憧れが一人の女の子になってそう訴える。ああそうか。彼女も悩んでいたのだ。下手に考えない。わたしも素直に話すべきだったんだ。

「この先、キョーコとずっと一緒に難しいかもしれない。それは何かあるかわかんないから。でも少なくとも、少なくとも今キョーコがいないこの先を考えるとわたしは寂しくなるんだ」

この先はまだわからない。だから今思っていることを伝える。こんなにボロボロにならなくてもよかったのかもしれない。こ

んな大きさに泣く必要はなかったのかもしれない。だけどどうしなきゃわたしたちは並べなかったのだ。

「もつとき。話そうよ」

キョーコが笑う。わたしも一緒に笑った。高校生活はまだ長い。やらなきゃいけないことも決めなきゃいけないこともたくさんある。取り急ぎやるべきは部のみんなへの謝罪と先輩にご飯を奢ることだろうか。

「梅澤、戻るよ」

「梅澤、置いてくよー」

教室の中で律儀に待っていた後輩に声を掛ける。歩き出したキョーコを少し遅れて追いかける。

並んで目が合って、それがなんだか可笑しかった。

高校生×高校生

きみに穴をあける

田中美紀

神田にいなの自尊心(一)

毎年盛り上がる文学賞の授賞式。たまたま仕事の合間に通りがかった街の大型ビジョンで生中継されていた。信号待ち、正面に映し出されるそれを周りの人は見上げる中、私は次の打ち合わせ場所をスマホで確認していた。

「最優秀賞は高橋さくら作『*****』おめでとうございませう！」

呼ばれたその名前に一瞬、時が止まった。女性は立ち上がって一礼をする。たくさんの拍手とフラッシュライトにたかれながらスタンドマイクの前に立ち、彼女はもう一度深々とお辞儀をした。あの頃と変わらない黒髪をかけた直した耳がキラリと光った。

それがピアスだと認識したとき、受賞式に沸く歓声も、インタビュをするアナウンサーの声も、受け答える彼女の声も聞こえなくなった。辺りは灰色一色になって頭の中は何も考え

られなくなった。炎天下に照らされているというのに指先が震える。

顔をあげた画面の向こうの彼女は確実に私を見ていた。

彼女と出会った高校時代と同じように。

*

八時五分、自転車で校門を走り抜ける。この時間はまだ人がまばらで、駐輪場まで思い切りスピードを出すのがひそかな楽しみだ。勝手に定位置にしている場所にとめて、そこから校舎を見上げ自分のクラスを確認する。窓際に座る、あるクラスメイトの姿をみることでがにいなルーティンだった。

「おはよう、毎日早いね。今日もすみれと一緒に？」

八時七分、教室に着く。広い教室にたった一人、朝日を浴び

る彼女に挨拶。机に突っ伏していた態勢を立て直してから返事をするあたり律儀だなあと思う。

「おはよう。そっだよ、もう一緒に学校くるのが当たり前になつてて」

「あはは、仲が良くて羨ましいよ。まあ、二人が一緒にいるの見かけると、こつちもなんか安心するんだよね。帰り際とかもさ。あ、ねえ、さくチー、地学の宿題つて……」

「あく！ いいな！ おっはよく。さくチーもおはよ。そっだよ聞いてよさつき真里菜がさ」

おはよう、控えめな声が人の少ない教室に響く。さくチーの笑顔はどこかぎこちない。そのことに、この子はきつと気づいていない。こちらが会話している様子をうかがった後、さくチーは元の体勢に戻ってしまった。今朝の会話は終了だ。

さくチーこと、高橋さくらと出会ったのは二年前、つまり高校一年生のときである。

「神田にいなです。杉崎三中から来ました。部活は演劇部入ろうと思っっています。仲良くしてくれると嬉しいです。よろしくお願いします」

高校生活が始まって二日目。ホームルームをしてガイダンス、そしてホームルームの午前授業。まだまだぎこちない雰囲気の間に行われる自己紹介タイム。

「高橋さくらです。中学ではさくチーって呼ばれていたのですね。う呼んでくれると嬉しいです。あだ名の由来はサクサクチーっていうお菓子で、たまにしか売られているのを見かけませんが、もし見かけたら私だと思っってください。辛いのは苦手です。よ

ろしくお願いします」

それが彼女の、さくチーの自己紹介だった。大半の人はそんな名前のお菓子があつたことを知らなくて呆気に取られ、拍手が一拍遅れて起こる。おそらく一年A組の全員が高橋さくらに對して「お菓子の子」という第一印象を抱いたはず。でもそれが接しやすさに繋がつたのもたしかだと思ふ。さくチーの誕生日には打ち合わせをしたわけでもなく、机の上にサクサクチーの山が出来あがつていたのだった。

「ちよつと、話聞いている？ 真里菜が今度の公演のことで相談したことあるんだって」

ゆにの声にハツとして現実に戻される。今のさくチーは壁を作つて生活しているように感じる。ま、私には前と変わらないけれど

「ほおら、神田にいなさん、早くD組行きませすよ」

腕を引っ張られるまま教室を出る。さくチーは睡眠の体勢に入つていた。

前田ゆにの劣情

にいなは私の一番の友達だ。いわゆる親友つてやつ。唯一無二の存在。にいなのが好き、大好き。毎日笑顔で幸せに、そして健やかに生きてほしい。何に脅かされることもなく。私とにいなとの運命の出会いが高校に入学してすぐだった。一

年生は必ず部活動に所属しなければならない、なんて中学校みたいな校則に私は悩まされていた。だって入りたい部活がない。どうにか抜け穴はないか考えていた時に席が近かった真里菜に誘われて演劇部の見学に行くことになった。そこで声をかけてくれたのがいなだった。

仲良くなるのはあつという間で、演劇なんて興味なかったしどこか遠くの話だと思っていたけれど、気づいたら三人まとめて入部届を提出していた。

演技をしているいなはスポットライトを独り占めしているみたいにキラキラ眩しい。目を背けたくなるのにできない。手を握り締めていないと暴れ出しそうになる。体に熱がこもって息が荒くなるのを抑えるためにいつも深呼吸をする。まだ嫌われたくない。

いなは私の一番の友達で、いわゆる親友ってやつで、それに加えて私の憧れのヒーローで、アイドルだった。

そんな彼女の友達なら是非とも仲良くなりた。友達の友達は友達でしょ。

そう思っていた時期が私にもありました。

いなと同じクラスになれて飛び跳ねるくらい喜んだ高2の春。これで卒業まで一緒だ。クラス名簿を流し見て聞き覚えのある名前を見つけた。高橋さくら、大体の人はさくちーって呼ばれている。演劇部の公演を毎回観に来てくれる吹奏楽部の中にいた。公演が終わった後はいつもいなと話をしていたから顔と名前も既に把握している。

クラスのライングループに追加されていくアカウント。さく

ちーのアイコンをタップして表示されたコメントの文字に既視感があった。読むとメロディが浮かぶ。そのままに口にして、歌だと気づいた。しかも知ってる曲。これだと思った。話しかけるきっかけになるかも。

うちの高校で二年生が行く校外学習先は横浜だった。班はにいなと別れてしまったけど、いなとさくちーは同じ班だった。どの班も行き先はほぼ同じだ。もしかしたらどこかで会えるかも。タイムリングが合えばその時に話しかけてみよう。純粹にさくちーと友達になりたいと思っていた。

「あく！ いな！ やった会えたラッキー。何食べてんの、肉まん？ うちらこれからなんだよね。そうだ写真撮ろ！ ほらさくちーも」

いなに会えたことでテンション爆上がり私の勢いに押されたのか、集団の端っこで気配を殺して縮こまっていたさくちーを引つ張る。遠慮の二文字は私の辞書にない。

「ねえねえ、さくちーのラインのコメントってさ、春に一番近い街の歌詞だよ。合ってる？ 私もあの曲好きなんだよ」

「合ってる合ってる！ いいよね、あの曲。気づいてくれた人いて嬉しい」

ふつと初めて見る顔で笑った。そもそも同じクラスになってからまともに会話をしたのが初めてかもしれない。これはいけるのでは。

「ずつとさくちーとはなして見たかったんだよね。話し合う気がするんだ」

「えっ、本当に？ 私もお話してみたいなって思ってたんだ」

これからよろしくね。同じクラスになって一か月以上経つて
 ようやく交わされた言葉。

それから二年間、二人で話した回数是一片手で足りるほどだっ
 たけれど。

山下祐樹の気遣い

苦しい定期考査を超えて夏が来た。念願の夏休みの到来であ
 る。しかし、夏休みは吹奏楽部にとって地獄のような練習の日々
 の始まりである。

「今年こそ金賞取るよ！ みんな気合入れて！」

そう高らかに叫ぶのは我が吹奏楽部の顧問である。去年は地
 区大会で銀賞だったからリベンジに燃えているのだ。気持ちには
 分かる。同じだ。だって最後の大会だし。でも少し燃えすぎで
 はないだろうか。それこそ周りを消し炭にしかねないほどに。

「それじゃあ十五時までパート練、三十分休憩したあと全体練
 習。全体練習では課題曲を中心にやるからそのつもりで。それ
 じゃ、解散！」

はい！ と刑事ドラマ顔負けの返事が昼下がりの音楽室に反
 響する。字幕にしたら全ての文字に濁点がついていそうだ。声
 の圧でいつか窓ガラス割れるんじゃないかなってたまに思う。
 絶対はないと思うけれど。鳥が当たっても大丈夫だったし。

吹奏楽部のパート練習の場所は普通教室だったり、特別教室

を借りさせてもらっている。だから放課後の校舎ではいたるところで楽器の音が聞こえてくる。ユーフォパートの練習場所は
 三階、渡り廊下を渡って右に曲がってすぐの三年B組の教室。
 つまりは俺のクラス。他クラスでさらには知人も所属していな
 いとなると遠慮が勝ってしまうが、自分のクラスならもう伸び
 伸びと過ごせる。机の移動も思いのまま、椅子も使い放題。去
 年までは委縮した気持ちで練習していたけれど、今年はとても
 快適である。

ただ音楽室から少し遠いんだよなあ、なんて思いながら椅子
 から立ち上がりユーフォを持ち上げる。ぼーっとしていたら音
 楽室に残っている部員は残り僅かになっていた。パーカスが早
 く出てけよと言わんばかりにドラムを打ち鳴らしている。ごめ
 んで、今すぐ出ていきまーす。譜面台も持ち上げて腕で扉を開
 けて廊下に出る。一気にむわっとした湿気と暑さが襲ってくる。
 音楽室を出てすぐ、第二音楽室の前でさくチーがアルトを首か
 ら下げたまま譜面台に囲まれて立っていた。

「さくチーどうしたの？ こんなあつついところで。中はいら
 ないの？」

「うわあ、びつくりした。やまゆーか……いやあ、実は二音が
 既に劇部に使われているみたいでさあ。どうしようかなあって」
 さくチー、本名、高橋さくら。アルトサククス三年、パート
 リーダー。ちなみに俺は「やましたゆうき」で「やまゆー」と
 呼ばれている。サククスのパート練は全体練習で使っている第
 一音楽室の隣にある第二音楽室、通称、二音である。バリトン
 サククスは置いておいて、ユーフォに比べたらサククスなんて

軽いんだし場所変わってよ、と前に言ったらふざけんなと軽く殴られた。そんなことしてたら彼氏でできないぞってつけたしたらもう一発飛んできたのだった。俺、副部長なのに。

「他に使える教室ってあると思う？ 一応いまみんなに探しに行つてもらつてるんだけど……」

「いやあ、どうだろな。他のパートと隣同士になるのは避けたいし、そうなるとパーカスに事情説明して音楽室でやるか、それかうちと一緒でも……あ」

ガチャと音がして二音の扉が開く。顔をのぞかせたのは演劇部の部長さんの神田にいなだった。

「すみません、演劇部なんですけどこれから通し練習……つて、あれ、さくチー？ どうしたの？ あ、もしかして吹部で二音使う予定あった感じ？」

「わっ、にいな。びっくりした。えっと、パート練習でいつも二音使つてて」

部長さんが出てきたのなら話は早い。しかもさくチーと友達っぽいし。なおさら交渉の余地あるのでは。いけ、さくチー、大人しく二音を明け渡せって言うんだ。

「ええー、まじか。滝川先生、二音空いてるって言ったのにな……まあでも吹部が部活やってて空いてる方が変か……うん、どうしよ……」

ちなみに滝川先生は演劇部の顧問で国語教師である。一説によると音楽教師と仲が悪いらしい。その音楽教師とは言わずもがな、我が吹奏楽部の熱血顧問である。つまりそういうことだ。「にいなあ？ もう練習始めますよ……つて、さくチーと

山下くんじゃん。なにに、どうしたの。どういう状況？」

あー、これは面倒になった。演劇部の副部長さんまで来てしまった。きつと、さくチーは気づいていない。副部長、前田ゆにの、一瞬見せた冷めた表情を。そして前田さんも気づいてない。さくチーの顔が今まで見たことがないくらい怖い顔していたことを。部長さんと俺しか、気づいてない。ああ、やだよ、余計なこと言わないように黙っておこう。

「えっ、じゃあ滝川の二音空いてるってヤタ先への嫌がらせってこと？ ううわっ、それで困るのうちらだからやめろって言ってるじゃん。もー、さくチー本当にごめんね、うちの顧問が」

ヤタ先とは、音楽教師、矢谷先生のあだ名である。つまりはうちの顧問のことだ。全くもって迷惑な話だ。そこだけは共感する。ただ、そのごめんねは思っていないだろ。

「でも、もう照明とか機材運んじやってるしなあ。今から他の教室……あるかな……」

おいおい、それは譲つてくださいアピールか？ 先に場所奪つたのはそっちだろうが。

「私、教室探してくるね。にいな、ちよつと行ってくるわ」

「えっ、いいよ、いい、いい。いまパートの子が探しに行つてくれて。もうすぐ戻ると思うし、その、劇部も大会近いでしょ。うちは音楽室戻つて練習するから。大丈夫」

えっ、と思わず声が漏れた。まさかの？ 譲っちゃうの？ 本当に？ ダメだ、さくチーは完全に引けの姿勢を取っている。あちゃー、こりや二音取り返すのは無理だな。

「いやいやいや、大会近いのは吹部も一緒じゃん。悪いよ」

そう言うのは神田さんだ。部外の交友関係は詳しく分らないけれど、神田さんがさくちーと仲いいんだろうな。前田さんがひどくつまらなさそうな顔をしている。サックスの子たちも集まりだしてるし、これ以上は時間をもつたない。というよりこのクソ空気悪いところにこれ以上いたくないのが正直なところだ。

「それじゃ、うちと一緒に練習する？ 課題曲なら同じメロディ多いし、一回合わせておきたかったんだよね。ね、そうしよう」

急に何言いだしたんだこいつ、みたいな顔をしつつもさくちーが頷いた。

「はい、じゃあ決定。うちの練習場所は三年B組だからみんなにも伝えといて。二音はそのまま演劇部さんが使ってください。さ、さくちー行くぞー」

まだ何か言いたげな二人を残して後輩を引き連れ教室へ向かう。

「あ、滝川にはちゃんと文句言っとけよ。吹部の時間を奪った代償はでかいぞってな」

佐川すみれの庇護欲

あんなに暑かった夏はあつという間に燃え尽きてしまつて、

部活を引退した三年生は受験一色となる。吹奏楽部はコンクール地区大会で銀賞。全力を出し切ったから心残りはない。それでも悔しいものは悔しくて、それはきつと、あの子も一緒だった。

「それでなー、そこで俺は言つてやったわけよ……え？ 話長い？ ここからがいいところなんだけどなあ。聞く？ 聞かない？ そうか……」

きりーつ、と教室のどこから号令がかかる。悪ノリしたクラスメイト達が立ち上がって、もはやみんな立っっちゃえ、という空気になるくらいには担任の話にうんざりしていた。まあこのクラスも二年目で慣れてしまったところがある。二年D組お決まりの流れと言つても過言ではない。

強制的にホームルームを終わらせた教室は一気に放課後へと色を変えた。手早く帰り支度を済ませてクラスの友達に挨拶する。廊下をうかがうとあの子、もとい、さくらはもう待っていてくれた。いなど一緒に。あのクラスからいなのを連れてくるなんて。私は二年でクラスが離れてしまったけれど、二人は今も仲が良いようで少し安心する。ただ、いなの周りはこちらと好きじゃない。特に、副部長をやつた子はたまにさくらに対していやな顔をするから。

「さくらごめんねー、滝川先生がなんか熱弁し始めてホームルーム長引いちゃつた。にいなも久しぶり、どうしたの？ あ、もしかして先生に用事？ 先生いま男子に捕まつてるけど」

話を遮られる先生を慰めるために数人の男子が続きを聞きに行くのもいつもの流れだった。

「ごめんね、それがD組だから。そう付け足すと妙に納得したような「ああ……」が返ってきた。他の人がうちのクラスにどんなイメージを持つてるか計りかねるけど、私は嫌いではない。「入りづらいなら私呼んでくるけど、どうする？」

「あー、いや。私行ってくる。じゃあね！」

そう言うとの何の遠慮もなくD組の教室に消えていった。よく考えたらいいなあの彼氏はうちのクラスだ。余計なお世話だったかもしれない。タイミングよくB組から出てきたやまゆーもそのまま回収して下駄箱に向かう。

「……さくら、そっち行くの？ 音楽室に何か用事？」

フルートのケースを握る手に力が入る。さくらのことを真っすぐ見れない。

「あつ、そうだ、今日あそこ寄って帰ろうぜ。いつも練習帰りに営業時間過ぎてたカフェ。ずっと行きたそうにしてたぞ。俺の目はごまかせないからな。さ、そうと決まったら早くいこうぞ」

やまゆーはさくらと私をずると引つ張りながら進む。誰も何も言わなかった。

いつだって、三人揃って向かう先は音楽室だった。でも行ったとしても、そこは私たちの居場所ではなくなってしまう。私たちの夏は終わった。その事実をより突き付けるように冷たい風が吹き抜けていった。

「そういうや二人は進学だったけ？ どこいくの」

カフェに着いて注文も済んだ後やまゆーの第一声がこれだった。遠慮って言葉知らないのかな。

「そういえば進路の話あんましてなかったか。私は〇〇大学の文芸学部に行こうかなって」

一般？ いや、推薦。そんな会話を聞きながらテーブルに届いた紅茶を飲む。私は夏休み入ったときに聞いてたけど。一緒に届いたセツトのミルクフィューを一口。わく、美味しい。

佐川は？ と視線で聞いてくるので××大学の人文学部。と

だけ答えてもう一口ミルクフィューを口に運ぶ。こんなに美味しいのに今まで知らなかったなんて。もっと早く来たかったなあ。

紅茶で流してそっちは、と聞くと、よくぞ聞いてくれましたと言わんばかりに目を輝かせる。

「俺は〇×大学の教育学部。実は中学校の先生になりたいんだよね」

びっくりした？ なんて期待した目で見てくるもんだからさくらと顔を見合わせる。

「いや、びっくりしたというか、なんというか。ねえ？ さくら」

「うん。すみれと『やまゆーは先生になりそうだよね』って話してたから驚きなんて微塵もない」

「えく、ひど、つまんなく。ま、言いつつ俺も二人の進路聞いても、だろいな、としか思わなかったし。当たり前だろうけれど、みんなバラバラか」

寂しそうに笑うやまゆーを三年間、一緒にいて初めて見る。

*

高校生活におけるイベントが次々に終わっていく。残されるイベントは受験と卒業式だけ。そんなのもきつとあつという間。

「と、いうことで勉強教えてくださーい！」

「あ、ごめん。全然話聞いてなかったわ。何、やまゆーが浪人しそうって話？」

「やまゆー、カフェで大声出したら怒られちゃうよ。浪人生の前に四人になりたいの？」

「なんで二人してそんなに冷たいの……」

うそうそ。ごめんってー。なんて謝って笑いあいながら各々勉強道具を取り出す。私たちはもう完璧な受験生だ。でも三人の時間ずっと続けばいいのに、なんて無駄なことを考える。

このときはまだ、卒業後も定期的に会うとは思っていなかったから。

神田にいなな自尊心(二)

秋の終わり、冬の始まり。寒さに耐えられずカーデイガンやマフラーをしている人が増え始めた。冬の朝は空気が澄んでいて気持ちがいい。スカートで自転車は厳しくなってくる。そして推薦合格者が学年の中に出始める。そんな時期だ。

「えっ、さくちーって推薦で受けるんだ。指定校じゃないよね、AO？」

「うーん、ちよつと違うけど、まあそんな感じ」

三年生の授業はいくつか選択制で他のクラスと合同で行われるため、教室移動も増えた。金曜の三、四時間目、選択体育の後、の日本史が始まる前の時間が私は好きだった。

体育はいつも着替えの時間を考慮して十分早めに終わらせてくれる。更衣室から日本史の授業をする社会科講義室まで少し距離がある。さつさと着替えて移動を始める人がほとんどだ。広めの教室、ほとんど人がいない時が一番、隣の席のさくちーとおしゃべりができる時間だった。

「そうなんだ……でも文芸学部なんだね。てつきり音楽系の方に進むのかと思ってた」

「まあアルトも好きだけど大学でも続けるかは微妙かなあ。練習できる環境探すの難しいし」

「楽器の音って結構大きいもんね。そっかあ、文芸学部か……文学部と何が違うの？」

さくちーは聞かれ疲れたような顔をした。きつとご両親と担任とかいろんな人に聞かれてきたんだろうな。なんとなく申し訳ない気持ちになる。

「文学部とほぼ一緒だけど、小説とか詩とかの創作の授業もあつて……」

「へー、そんな学部あるんだ。まあでもたしかさくちー文芸部にも入ってたもんねえ」

そっかえ、という言葉しか出てこない。作品提出しかしてないけど、なんて遠慮がちなことを言うさくちーの目は、今まで見たことがないほど輝いて見えた。

「にいなは演劇続けるの？」

「うん、続けるよ。演劇が勉強できるどころ行きたくて。指定校で受けたけど実技試験もあってさ。発表もうすぐなんだけどすごい怖い……さくチーも推薦ならもう試験終わってるの？」

「ただだよ、来週の日曜日」

「来週!？」

私の大声をかき消すかのように予鈴が鳴った。

*

本格的に冬になった学校の廊下は凍えるほど寒い。クリスマスまで数週間、教室の空気はともそんな気分ではない。みんな気にしていないようで気にしている。異様な状況だ。

「は、今日のお昼楽しかったなあ」

自転車を押しながらゆにと歩く帰り道は久しぶりだ。

昼休み、突然部室に連行された私は大学合格を演劇部の三年に祝ってもらった。まだ自分の受験が残っている人も多い。余裕があるわけではないだろうに。申し訳ない気持ちと嬉しい気持ちが混ざり合う。久しぶりに騒いでみんな楽しそうだったし、リフレッシュにもなっていたらいいな。

「指定校推薦が終わったことはクラスの三分の一くらいは進路決まったってことだよな? うわあ、嫌だなあ……自分で一般受験するって決めけど羨ましい」

うまい返しが思い浮かばず曖昧に笑ってやり過ごす。計り知

れないプレッシャーがあるだろうから、私が何を言っても刺激してしまえうだった。

「あ、さくチーとすみれだ。声かけてこうよ」

通学路にポツンとあるカフェ。広い窓ガラスの奥で二人は勉強しているようだった。

「えっ……あ、でもほら、勉強の邪魔しちゃう悪いし……行こ」

ゆにはカフェを一瞥しただけでそのまま歩いていく。一瞬止まった私を置いて。隣を歩こうとするも速度をあげられて追いつかない。こんなことは三年間で初めてだった。

「ゆに! 急にどうしたの? 私なんか気に障ることした?」

何も答えず、無言のままゆには歩き続ける。自転車がなければ腕を掴めるのに。

「ねえ、ゆに、なんか言つてよ」

「……どうして……」

「何、聞こえないよ」

信号が赤になってようやく隣に立つ。顔を伏せたゆにの表情は分からない。

「どうして……どうして、さくチーに構うの? さくチーなんて何考えてるか分かんないし、人によって態度変えるし、にいなに依存してるだけじゃん。ただにいなに構ってほしいだけじゃん。にいなのお優しいさに付け込んでるんだよ。なんで気づかないの?」

「え……なに、言ってるの。さくチーがそんな子な訳ないじゃん。ゆにの方こそ、どうしてそういうこと言うの。意味わからないよ」

私、先帰る。それだけ言つて自転車に飛び乗り、青に変わった信号を一気に通過した。

それから気まずいまま、冬休みを迎えた。

*

ゆにとは何の連絡もないまま年を越した。冬休みも終われば受験シーズンには佳境に入る。たった二週間ぶりに見るみんなの顔は真剣そのものだった。朝早く来て勉強をする人も増えてきた。

「さくチーすごい髪切ったね。似合ってるよ」

「そう……かな。ありがとう。受験合格したら切ろうと思つて」

「と、いうことは合格したってこと？ おめでどう！」

ありがとう、と柔らかい笑顔を浮かべた。さくチーと話す機会は日本史の前の時間だけになっていた。ふと浮かんだゆにに言われた言葉を振り払う。

センター試験から先、三年生は指定された登校日にしか学校に来なくなる。今日が最後の授業の日。推薦の人は長めの春休みの始まり、一般の人は負けられない戦いの始まりである。

「最近ピアス開けた人増えたよね」

ピアスは禁止されているが大学も合格して限られた日にしか学校に来ないとすると、校則を破り始める人が出てくる。化粧

やピアスは顕著だった。

「さくチーはピアス開けたりするの？」

「いや、私は開けないかな。怖いし痛そうだし。にいなは開きたいの？」

「卒業したら開けようかなって。友達に聞いたらバチンツて音はすごいけど痛くなかつたって言つてたよ。そんなに怖がらなくても平気だつて」

さくチーはまだ疑いの目を向けてくる。

「じゃあさ、私がさくチーのピアス開けてあげるよ。絶対に痛くないから」

「ええ、うーん……まあ、もし、もしね、開けるつてなつたら連絡するよ」

「本当に……絶対だよ、約束だからね？ 指切りしよ、指切り」指切りした後のさくチーの目は爛々としていて、それがなぜか怖かった。

*

卒業から数年後、あの時の約束に苦しめられるなんて当時の私は思つていなかっただろう。

街頭で授賞式をみてからどうやって帰宅したのか覚えていない。上司には怒られていないからへまはしていないだろう。テレビをつければ授賞式のニュースばかりですぐに消した。

私は何をやっているのだろうか。スーツも脱げずソファに脱力しながら考える。大学に進んで演劇を勉強しても、舞台女優にはなれなかった。頑張ったけれど、エキストラや小さな役ばかり。バイトと掛け持ちして体を壊しかけて、夢を諦めた。それでこんな心身ともにクタクタになってまで会社で働いてるんだから、あのまま舞台女優目指していた方がいくらか幸せだったかもしれない。さくチーは夢、叶えたんだな。

カバンの中を漁る。朦朧とする意識の中、さくチーの受賞作を手に取りレジに持つて行った。

なぜか読まなければいけないと思った。読んではいけない、とも思った。これを読んだらきつと、読む前の世界には戻れない。そんな気がした。授賞式の映像にあの日のゆにの言葉が蘇る。そういえば、ゆには今、何をしているのだろうか。卒業してから、もう随分と会っていない。

震える手で、本を開く。

女性が交差点の大型ビジョンを見上げるシーンから始まっていた。

神田にいなインタビュー

栄えある賞を頂き、私自身、実感がわかず驚きで言葉が出ません。小説家なのにだめですね。このお話は作者である私がこの賞を受賞することで完成すると思っています。自信半分、不

安半分でこの授賞式の日を迎えました。無事に受賞することができ、感無量です。

青春は高校時代とよく言われますが、私の青春も高校時代でした。クラスの人にはそうは思われなかつたかと思いますが、間違いなく、私にとつての青春は高校だつたのです。そんな高校時代への区切りと決別の意を込めてこのお話を書きました。なので、私の高校時代を知る人は読んだら誰をモデルにしているか分かってしまうかもしれません。それも含めてこの小説を楽しんでくれたら嬉しいのです。この授賞式を見て、私があつたかもしれないが気づき驚く姿を想像するだけで、胸のすく思いがします。なんて言うかと性格悪いかもしれませんがね。

このお話を書く上で、一方的かもしれませんが、とてもお世話になつた友達がいます。今では連絡を取っていませんが、どこかでこの授賞式を見て、喜んでくれていると嬉しいのです。

最後に改めまして、「きみに穴をあける」を選んでいただき誠にありがとうございます。

俺×幼馴染のアイツ

鈴蘭と幽霊

松村優香

鈴蘭と幽霊

昼休みというのは実に良い時間である。特に科学部部长の特権をフル活用し、理科室で一人昼寝を決め込む昼休みほど良いものはない。遠くから聞こえる休み時間特有の喧騒も、イヤホンを挿せば一瞬でお別れだ。少しうるさいくらいはロックが俺を一時の楽園へと導く……

そーちゃん寝るなー!!!起きろー!!!

前言撤回。楽園は崩壊した。この女のせいで。

「……うるさい、起きてるから……」

お前のせいで睡眠が邪魔されました俺は今苛立ってますよオーラを隠しめせず顔を上げれば、そんなこと全く気にせずに笑う夏未がいた。これが他の奴だったら多少はたじろぐであろうが、幼馴染のこいつには一切通用しない。無論仲が良いか

らなどという理由ではなく、ただ単にこいつがめっちゃくちゃ鈍感なだけである。

「……何の用？人を起こしといて大した用じゃなかったら怒るからな」

「うん！あのねそーちゃん、」

夏未が屈み、座ったままの俺に顔を寄せる。

「……今日の夜、会えないかな……って」

一瞬にして空気が固まる。頭が回らない。ショートした頭が必死に夏未のセリフを翻訳する。

「……っ夜!?!?!」

心拍数は急上昇し、身体は急に熱を帯びた。顔が赤くなってるのが見なくてもわかる。

「……な、な、何で？」

「そりやもろろん、幽霊探しのためだよ!!!」

「……はあ？」

すつと脳から熱が引く感覚がした。いっそ俺を殺してくれ。

心のどこかで淡い期待をってしまった俺は相当な馬鹿だ。

「あ、そーちゃん今馬鹿にした？」

「当たり前だよ高校生にもなって何が幽霊探した、受験生がやる事じゃないだろうよ」

「受験生だからやるんだよー！！高校生活最後の年だよ！？青春っぽいことしたいじゃん！！真夜中の学校に忍び込んで幽霊探しかいかにもそれっぽいじゃん！！それに、夏未は不敵に微笑む。

「最近よく聞くでしょ、『いかにも』な噂」

そう言われれば確かに聞き覚えがある。最近になってやたらと、やれ幽霊を見ただの、やれ怪奇現象だのなんなのクラスメイトが噂しているのをよく聞くようになった、が。

「お前あれ信じてるのかよ……」

「そりや信じるよ！！だってみんな幽霊が出たーとか、ラップ音聞いたーとか言ってるんだよ？しかもそーちゃんも見たでしょ赤城さんの机が急にボロボロになったとこ！！その後及川さんも、臼井さんも急に倒れちゃったりしてさ……」

「ああそうだな、その後赤城達は全部夏未のせいだって言うってたけどな」

その瞬間、夏未は水を打ったようにしゅんと静まり返る。

「それはいいよもう……いつものことだし、みんなも違うってわかってくれてるし」

そう言って夏未は力なく笑う。

いつからだだったか夏未は、リーダーの赤城を中心とした人の女子グループに目をつけられるようになっていた。理由は本人にもわからないらしい。夏未はいじめというほど過激ではないが、しかし知らないとは言えない確かな嫌がらせの数々を受けるようになった。「偶然」ぶつかった。「偶然」お茶を溢してしまった」など、余罪は枚挙に暇がない。だが気が強くクラスの中心的な赤城達のことだ、言及すれば面倒なことになるのには目に見えている。クラスメイト皆が気づかないふりをした。それは俺も、夏未でさえも同じだった。日頃気丈に振る舞ってるとはいえど、傷ついていないわけじゃない。心配させまいと作るその笑顔が痛々しく見えた。

「……まあそんなわけで、今日の夜に時学校集合で良いよね！」

「ちよっと待って俺行くなんて一言も言っていないが。大体どうやって入るつもりなんだよ」

学校は夜間鍵がかかる。最終下校時刻である十九時を回ると正門や昇降口が施錠され、二十一時を過ぎると職員玄関が施錠され学校は無人となる。さらに監視カメラまでついているというのに、一体どうやって入るといのか。俺の杞憂は最もだと言わんばかりに夏未が頷いた。

「だからそーちゃんが必要なんだよー！！そーちゃんは科学部の部長でしょ？今日の部活の後、理科室の窓の鍵を一つだけ閉めないで置いてほしいの！！そしたらそこから入れるよ！！」

「人に何させようとしてんだよお前！っていうかそもそも正門の

時点で監視カメラがあるから無理じゃねえか」

「ふふん！そこもちゃんとお対策してるよ！！うちの学校はね、カメラはあるけどリアルタイムでの監視じゃなくて後で録画を確認してるの。だから学校に入ったとしてもそれに気づくのは一番早くて次の日以降！！ソースは冬休みに宿題を取りに学校遊び込んだ私！！後は個人を特定されない格好で行けば完璧！！だから今日は地味な服着てきてねー」

「用意周到過ぎて引いたわ。完全犯罪じゃねーか」

「だってそうじゃないとそーちゃん来ないじゃん」

「そりゃまあな……」

「ねえそーちゃん、これで完璧でしょ？だからさ、一緒に行こうよ、幽霊探し！！」

夏末が期待の眼差しを向ける。受験生がどこに熱量注いでるんだかという感じだが、この様子だと相当本気らしい。正直オカルトなど信じてはいないがイベントごとが嫌いなわけではないし、何より他でもない夏末からの誘いである。

「分かったよ、行くよ」

こうして俺は今日もこいつに振り回されるのだ。

*

夜の学校は何だか空気が重苦しくて、どことなく不気味で

……なんていうのは俺には全く感じられない。強いて言うならああ俺は不法侵入してるんだなあという謎の感慨深さがあるくらいか。俺と夏末は首尾よく学校に忍び込み、誘導灯と懐中電灯の明かりを頼りに夜の教室を探索している。

「うーん、この教室でも何もなかったね……」

「あるわけないだろ。そもそも幽霊なんていないだし」

「でもでも！次の教室が本命だから！次こそ何かある、はず！」

そう言うと夏末はしゃがみ、壁の下に設置された換気用の小窓を開け、這って教室の中に入る。各教室のドアは全て施錠されているので、教室への出入りはこの方法しかなかった。俺も急いでその後が続く。この教室が他の教室と違うのは、窓際のロッカー上。いくつもの鉢が並び、小さな花が月明かりに照らされている。ここは〇年〇組。俺達のクラスだ。

「夜の花も綺麗だね！頑張って育てたかいがあるなあ」

夏末が鉢を一つずつ照らししていく。この教室の花達は園芸部である夏末が持ち込み、育てているものだ。

「これ、何の花？」

気になって鉢の口を指す。ピンクの花弁が真っ直ぐ立つように咲いている花。

「ん、これ？これはシクラメンだよ。育てやすい花なんだけど、もうすぐでお花が咲く時期は終わっちゃうかな」

「そうか」

「……そーちゃんがお花に興味持つなんて珍しいねえ！！そーちゃんの事だからお花のことなんて興味ないと思ってたよ」

「俺にだって花を愛でる心くらいはあるわ」

ふと、鉢の間に置かれた花瓶に目がいく。「つだけ置かれたガラスの花瓶は、月明かりでキラキラ光つてとりわけ目立っていた。生けられている花は、

「これ……鈴蘭だよな？」

「お、よく分かったねー！！さすがに鈴蘭くらいは知ってるかあ」

「馬鹿にしてんのか」

冗談だと言って夏末が笑う。何となく、こいつには鈴蘭が似合うと思った。カラフルな花が咲き誇る中、真っ白な鈴蘭は頭を垂れるように健気に咲いている。生花だから長くは咲き続けられないだろうに、それでも懸命に小さな花を落とすまいとする姿勢は何ともいじらしい。

「なあ、何でこの鈴蘭だけ鉢植えじゃなくて生花なんだ？」

「ん？ああ、その子は園芸部の花壇から持ってきたんだよね。誰かが変な植え方したみたいでさ、花壇がぎゅうぎゅうになっちゃって。だからいくつか間引いたんだけど、その間引いたのがその子だよ。ただ捨てられちゃうのも、可哀想だしね」

夏末はそう言って愛おしげに鈴蘭を見つめる。夜の学校、鈴蘭、非日常の光景は夢のようで、何だか消えてしまいたいような危うさがある、俺は思わず夏末に手を伸ばして……

「……って私達は学校にお花を見に来たんじゃなくよ！！そら、幽霊探しに来たんだよ！！」

はっとした様子で夏末が叫ぶ。危うげな空気など霧散した。このまま本題を忘れてくれれば良かったんだが。今なんか

ちよつといい感じの雰囲気だったろ、なあ。俺の心の叫びは夏末には届かない。

「幽霊について色々噂は聞いたんだけど、私達のクラスが一番心霊現象が起きてるんだよね」

ゆつくりと教室を歩く夏末の後ろについていく。昼の賑やかな教室では気にならない乾いた足音も、夜の静かな空気の中ではいやに耳につく。

「うちのクラスがとりわけアホなだけだろ」

「違うよー！！だっておかしいよ、三年間この学校にいてこんなに心霊現象の話聞くことなんて今までなかった。ここ数週間で急に噂が広がったんだよ、幽霊を見たとか、人のうめき声が聞こえたとか、ラップ音が急に鳴ったって。絶対何かあるよ」

「そんなん思い込みだ思い込み。いか？今時心霊現象ってのは大体説明がつくんだよ。最近学校の近くでマンション工事始まったろ。大方あれの微弱な振動とかでラップ音がしたり、重機の低音とかが身体に響いて何となく気味悪く感じたのがオチだ」

「でも、そういう噂聞くの全部放課後だよ？お昼は工事してるけど、夕方はもう工事してないじゃん」

「そりゃみんな昼に幽霊は出ないって思い込んでるからだ。昼の間気づかないうちに蓄積された工事によるストレスとか不安が、夕方になって出て来てるってわけ」

「えー、そんなの嘘だあ……でもさ、これは説明出来ないよね？」

そう言うと夏末はいつになく真剣な面持ちで赤城の席を懐中

電灯で照らした。

「赤城さんの机がボロボロになってたこと。他の心靈現象と違つて、これは他の人達も確認出来た……そーちゃんも見たでしょ？」

「ああ、そういうえばそんなこともあつたな」

朝登校してきた赤城が急に悲鳴を上げた日があつた。その理由は彼女の机。彼女の机が異常な程古びていたのだ。天板の傷が増え、薄く埃を被つた机は、まるでそれだけがタイムスリップしたかのようなつた。

「一晩で急に傷がついて、表面には薄く埃も被つてた。急にそこだけ時間が戻つたみたいに。それで、赤城さんは呪われたんじゃないかって噂になつた」

赤城は怒り、その矛先を夏末に向けた。曰く、夏末がゴミを机に撒き、天板に傷をつけたのだと。そんなことは不可能だと誰もが分かつていた。いくら埃をかき集めても、均等に綺麗に机に撒く技術など誰にもない。そこから次第に赤城が呪われたと噂になつた。日頃何かと目立つ彼女達だ、その噂はすぐに広がつた。

「あんなの一番最初に登校した奴がどうにでも出来るだろ。子供騙しだ」

「……じゃあその後、及川さんが目まいを起こして倒れちゃつたのは？」

震える声で夏末が問う。

机事件の数日後、赤城のグループの一人である及川は体調を崩したらしく学校で倒れた。しばらく学校を休んでいた記憶が

ある。さらに数日後、同じグループである白井も部活中に体調を崩し、保健室に運ばれたと聞いている。

「思い込みによる極度の緊張で倒れたんだろ。あいつらも呪われたつて散々言われたんだからな。今じゃ完全にビビつてる」

「そうなんだよ!!!」

突如夏末が声を張り上げた。はつとして顔を上げれば、泣きそうな顔をした夏末と目があう。

「その幽霊のおかげでさ、今は赤城さん達も私にあんまり近寄らなくなつたんだよね。それが本当に嬉しいんだ。感謝してもきれないよ。普通に学校行つて、普通に毎日を過ごさせてるっていうのが凄く嬉しいの。赤城さん達に当たられるのに慣れちゃつてたけど、本当はこれが当たり前なんだよ」

俺が思つていたよりずっと、夏末の心は傷ついていたらしい。それは本人さえも気づかなかつたようで。目の前の夏末は今、泣きそうな顔をしながら笑つていた。

「だからさ、幽霊にはいなくなつてもらつちゃ困るんだ!!! 工事でも勘違いでも何でもいいけど、このまま終わらないでほしいんだ」

「夏末……」

「馬鹿みたいだつて自分でも分かつてるよ。ごめん。こんなことに付き合わせちゃつて」

帰ろうか、と夏末が踵を返す。何かを言おうと思つたが、きのきいた言葉など何も出てこない。

「そーちゃん？」

ついてこない俺を疑問に思ったのだろう、夏未が振り返る。これが最後のチャンスだ。直感的にそう思った。俺は言葉を探しながら、口を開く。

「……幽霊は、いるよ。勘違いじゃなくて、本当に」

夏未はきよとんと目を丸くすると、花が綻ぶように笑った。

「嘘つき」

そう言つて今度こそ夏未が教室を出る。行き場を無くした次の言葉を飲み込んで、俺も教室を出ることにした。

幽霊はいるよ。勘違いじゃなくて本当に。だって俺が、お前にとっての「幽霊」なんだから。

*

最初から面と向かつて言えば良かったのだ、夏未に手を出すのをやめろつて。夏未本人から止められてたとはいえ、それでも直接赤城達を止めに入らなかつたのは勇気がなかつたからだ。自分の体裁ばかりを気にしていたのは確かで、もっと早くから行動していれば夏未はここまで傷つかなかつただろう。意気地無しの俺が取つた夏未を守る手段は、間接的に赤城達を脅すことだった。そのために使つたのが科学の力だ。怪奇現象なんてものは全て紛い物。科学と人間の思い込みが、いもしない幽霊を作り上げる。まず俺は「幽霊が出る」という噂の土台作

りを行った。放課後放送室に忍び込み、用意したCDを流す。工事現場の音を録音したものが、人間が知覚できる周波数を編集でカットし知覚できない超低周波音だけが記録されたCDだ。人間というのは不思議なもので、知覚できない低音を聞き続けると恐怖や不安を感じたり、それが続くど幻覚や幻聴にまで及ぶらしい。職員室のある3階と外にも影響が及ぶであろう校庭は外し、一階、三階、四階に向けて、試しに何日か音を流した。想像より効果は大きく、一週間もすれば学校に噂が流れ始めた。風もないのに急に窓が音を立てた、何かの気配を常に感じる、など。俺からしたら面白くて仕方がない。建物から音がするのは低周波音による振動だし、気配を感じるのは知覚できない音に対する無意識の警戒なのだから。下準備が出来たところで、俺はいよいよ赤城達に狙いを定めた。放課後、誰もいない頃を見計らつて教室に忍び込み、些細な悪戯を繰り返す。ロッカーの教科書の順番を入れ替える。椅子のネジを少しだけ緩める。本人だけが少しだけ違和感を覚えるような、そんな悪戯。赤城は特別に、少し手の混んだ悪戯を仕掛けた。何てことはない、倉庫に仕舞いこまれている古い机と赤城の机を入れ替えただけだ。天板に手形さえつかなければ、多少埃が落ちても問題ない。あまりにも不自然な状況にも関わらず受け入れられたのは、入念な下準備あつてこそだろう。友人達にも「赤城はどうやら呪われたらしい」などと適当な事を言つたが、その噂も簡単に広がった。ストレスで及川達が倒れたのは想定外だったが、恐怖の演出には丁度良かった。あとは放つておいても、勝手にビビってくれるだろう。かくして俺の計画は完璧に遂行

されたのだ。そのつもりだった。

俺の想定は甘かったのだ。計画は全て完璧だったが、想像も来なかったのは夏未の心の傷だった。彼女は必死に幽霊に縋っていた。俺はいるかも分からない存在に願う程あいつが追い詰められていることに気づかなかった。俺が全てやっていたと言おうかとも思ったが、そうすれば夏未のことだ、きつと俺を止める。そう考えると何も言えなかつた。これは夏未が苦しんでいることに気づけなかつた俺の罪滅ぼしで、お前を救っているのは俺なんだと、夏未に伝えられないことが俺の罰だ。

学校からの帰り道、夏未はさっきまでの涙は嘘だったかのようについて通っていた。一方で俺はまだ、教室で見た夏未の涙を忘れられずにいた。道中の会話も、別れ際の挨拶ももう頭に残っていない。涙がこぼれ落ちる瞬間ばかりが脳裏をループしている。夏未を泣かせたのなんていつぶりだったろう。

俺はこれから、夏未にとつて幽霊であり続けることに決めた。もう二度と夏未に涙を流させないために。家までの暗い道を一歩歩く。夜はまだ、しばらく明けない。

*

朝の光が窓辺の花達を照らす。清々しくって気分が良い。私は鈴蘭を活けた花瓶を自分の元に引き寄せる。この鈴蘭はそーちゃんも気に入ってくれたみたいで嬉しい。用意していた小瓶を取り出して、私は花瓶の中の水を注いだ。

「そーちゃんも馬鹿だなあ」

そーちゃんは私が何にも知らない純粹無垢な子だと思っていられるらしい。だから私にとつても甘い。私のために色んなことをしてくれるし、私のお願いなら何でも聞いてくれる。最近はずっと嫌がつてみせるけど、でも断られたことはない。だから私は馬鹿な女の振りをして、ずっと純粹であり続けた。そーちゃんもきつと嬉しいだろう。

小瓶を太陽に翳せば、中で水がキラキラ光る。可愛い見た目をしてるけど、鈴蘭は花から根までゼーんぶ猛毒だ。活けた水すら毒に変わって、酷い時には人が死んじやうくらいの毒。けどまあ、私は人を殺すつもりはない。ちよつと苦しめばいいかなって思っているだけだ。死んじやつても構わないけど。きつとそれも幽霊の仕業になるだろう。

「及川さん、白井さん、……次は、誰にしようかな」

ありがとう、私の幽霊さん。あなたのおかげで、私は今、毎日楽しい。

男装女子×寝取られ彼女

可猥想

はなふさおるた

私は川上愛梨。どこにでもいる普通の女子大学生では無い。
なぜかって？

私、彼氏に浮気されていました。

発覚したのは一昨日。八月十日。彼の誕生日。

私が講義から帰ると、彼は私の部屋で汗だくになりながら他の
女とセックスしていた。

本当に堂々とした、して当然だろとも言い下げな浮気。

本人曰く、隠すのが面倒くさくなつたらしい。

二股どころか四股ぐらいしているような言い草だった。

挙げ句の果てには「お前の良いところはカラダぐらいだから
なあ。本カノ別にいるし、それでもお前俺のこと好きだからい
いだろ？」と来たもんだ。

「いや、よくねーよお！」

「お姉さん、静かにね」

バーの店員に嗜められてしまった。

すいません。

お酒も入っているからか大きな独り言を発してしまった。

愚痴もこぼしたくもなる。だってこの辛さは私にしかわからな
い。てか、私が今世界で一番不幸！

彼とセックスしてた女がまた可愛かったのが苛立ちに拍車をか
ける。

ちなみに彼と女を部屋から叩き出したあと、一方的に別れる宣
言をして何日か引きこもって泣いていた。そしたら泣き疲れて、
急に酒を浴びるように飲みたくなつてしまった次第だ。

目の前にあつたグラスの中身をぐいっと喉の奥に流し込んだ。
もう何を飲んでいいのかもわかつたもんじやない。

「もー、お姉さんがうるさいから他のお客さん帰っちゃったよ。
ワンオぺきつかったから楽できるけどさ」

ジト目のため息をつきながら目の前に腰掛けてきたのは、さつ
き私を嗜めてきたバーテンさんだった。

ジェンダーレス男子とでも言うのだろうか。美人とイケメンのハイブリットみたいな顔をしていた。ウルフカットでピアスの数もすごい。パーとかホストで働いてそうなイメージの男の人の周りを見渡すと確かにさっきまでいた客の姿はなかった。

「それは本当にすいません。でもお、私の方が不幸ですかあ！」

「うわあ。お姉さん、相当酔ってるね。話聞こうか？」

「男にこの気持ちはわかりませんよ！ほっといてくださいー」

「ぼく、女だよ」

「……え？嘘だ。」

「背もちよつとは高いし、声も女らしくないからよく間違われるけど、ぼく女だよ？」

「まじですかあ！？」

「まじまじ。ほら」

バーテンさんはそう言つて私の手を自分の胸に持つていく。

ふにっ

ベストとシャツに阻まれてもなお主張してくる柔らかさ。

「……小太りだとか？」

「えええ」

少し引いた様子を見せるバーテンさん。と思いきや急にニヤリと口角を上げた。

「こつちなら、どう？」

ゆつくりと、私の手を胸から腹に。腹から腰に、腰から股に持つて行く。

いや、男だったらやばい変態野郎だ。小太りで、初対面の酔っ

てる傷心女の手を自分の股に押し付けてくるやつなどやばい奴に他ならないだろう。

女でもやばいと思うが。

疑心暗鬼に駆られながらも遠慮なくまさぐる。

「んっ」

無い。

男には絶対についている、アレが、無い。

いやあ、そんなことありえないでしょ。

いやでもさっき可愛い喘ぎ声がきこえたし。

どっちなんだ？

ああ、そうか！

「めっちゃ小さいんですね」

「……ふーん。じゃあさ、見て、確かめてみる？」

「この人なんて言った？」

「声に出てるよー。実際に見て確かめてみる？って言ったの」

声に出していたらしい。

いや、わかっているのだ。目の前のバーテンさんは女なのだ。

最初こそは男と間違えたが、その、色々と触つていくうちにわかってしまった。

男の体はこんなに柔らかくない。

でも、どうしたものか。

初めて、自分以外の女のカラダについて知りたいと思つてしまつている。

「ぼく、話聞くよ？」

酔っている私に正常な判断はできなかつた。

「ぼく、話聞くよ？」

酔っている私に正常な判断はできなかつた。

その言葉がトドメ。

私は頷いてしまっていた。

「名前は？」

イクメンバーテンさん（女）が聞いてくる。

「愛梨、川上愛梨です」

「え？」

「川上愛梨です？」

「あ、ああ、愛梨ちゃんね。知り合いに同じ苗字がいたからさ」

「あなたの名前、なんですか？」

「ぼくの名前は——」

これが私と刈田あやとの出会いだった。

それからというもの、ぼくと愛梨は二ヶ月ほど一緒に過ごしている。

ぼくが愛梨の家に入り浸っている感じだ。

というかも同棲している。

愛梨の元彼の荷物はぼくがすべて捨ててやった。本人たつての願いだつたから。

あの初対面の日の夜、愛梨はぼくのカラダに、というより自分の他の女のカラダに興味があるようだったから、色々と手取り足取り腰取り教えた。カラダに覚え込ませた。

ぼくも元々は愛梨と同じノン気だったのだが、過去に男と関係を持って良かった試しが無く、若干トラウマ気味であるため、今は同性愛者として愛梨を愛している。

というか、男は全員嫌いだ。死ねばいい。

ぼくはあの日、愛梨の話聞いて過去の自分と現在の愛梨を重ねた。

クズ男を愛してしまったという同じような失敗を犯してしまつた彼女。

ぼくはナンパまがいなことをして愛梨をホテルに連れ込んだことをひどく後悔した。

後悔して、泣きながら話す愛梨を愛おしく感じ、愛し合いたいと、心から思った。

「あの日はすごかったね——」

料理を作ってくれている愛梨の背中に呼びかける。

「え、どの日どの日？」

鍋から目を離さない愛梨。

少し意地悪したくなつて、愛梨の背後までこっそり歩いて行って後ろから抱きしめる。

甘い、優しい香り。

同じシャンプー、リンス、トリートメントを使っているのにこんなにも髪の毛匂いって変わるんだ。

すると愛梨は驚いた様子で、「もう、料理中にちよっかいかけないの！」と頬を膨らませながら言う。かわいい。

「ぼく達が初めて会つた日のこと。まさかこんなに良い人に出会えるなんて思つてなかつたからさ」

「それってなに？都合のいい人って意味？」

意地悪く聞いてくる。

「そんなことないよ。ほんとに好きな人って意味だから」

「ほんと、変態っぽい怪しいバーテンさんが今となつては私の

恋人だからねー」

「その怪しいパーテンについていって、一晩中あんあん鳴いてたのは誰だっけなー？」

「し、仕方ないじゃん」

「ん？なにが？」

「だってあや、上手いから仕方ないじゃん」

愛梨が鍋を見つめて頬を赤くしながら俯く。

「うんうん、当たり前じゃん。何年レズやってると思ってるの？」

「他の女の子いっぱい抱いてきたんだもんねー」

ジト目でぼくを見てくる愛梨。

「前の女は全員忘れた」

そう。話を聞いて、境遇を重ねて、愛梨に恋をして、愛梨を愛した。

告白した時、愛梨はまだ付き合うということにトラウマを抱えていた。

僕は愛を証明するために、それまで元カノや元カレ、体の相性が良かったセフレを切った。連絡先も消した。

愛梨はそこまでしなくても良いと口では言っていた、それが功を奏してかはわからないがぼくたちは無事付き合うことができた。

知り合って四ヶ月。付き合って二ヶ月の順風満帆なカップルだ。

「あ、もうすぐ出来上がるから机の上、綺麗にしといて」

「はい。あ、ご飯終わったら、今日もいっぱいイかせてあげるからね」

「え、今日は私がタチじゃないの!？」

「あれ、そーだったっけ?」

そう惚けると、愛梨はムツとした顔でぼくを睨む。

そんなところも可愛いなあなんて考えている暇では無い。

ぼくは基本的にタチ、セックスでいう攻めの気質なのだ。

もちろん愛梨とする時もタチでやってた。やってたのだが。付き合ってから幾日たったある夜のことだ。

「私もそのペニバン? ってやつ使ってみたい!」

「え?」

「だって、それ使ってもらった時すごく気持ちいいから、あやのことも気持ちよくしてあげたいなって」

きつと愛梨は好奇心から使いたがっているのだろうな。まあ一度くらいならいいかなと考えた。

ぼくは完全に一つの可能性を見逃していた。

愛梨がタチではないかという可能性を。

「優しく、してあげるから、ね?」

ゆっくりと優しくはじまった愛梨主導のセックス。

まず驚いたのはその舌使いだ。常々キスが上手いとは思っていたがこれほどまでとは思ってもみなかった。

誰に仕込まれたなど考えたくも無い、がそんなことを考える余裕も消しとはされた。

キスで舌や唇を、そのまま耳、鎖骨、乳首、へそ、太もも、そして陰核を。

この時点でぼくのカラダは愛梨に屈していた。というか五回くらいイット。

くらいというのは正直なところ意識が朦朧として覚えてないからだ。

この時点でぼくは自分が迂闊だったことを知る。

背中をシートから引き剥がして、なんとか上体を起こし。

「そ、そろそろ交代しようか」

絶え間なく流れてくる絶頂の余波になんとか抗って、声を絞り出す。

この時ほど情けない声を出した日は女の子とやっていて、過去に一度たりともなかった。

その声を聞いた愛梨は一旦舐めるのをやめる。そしてにつこりと笑って。

「まだ、だめだよ？」

押し倒され馬乗りになられた。

そこから先はもう、記憶が飛び飛びになってしまっている。

ただ、とてつもなく気持ちよかった。

あれからというものの、ぼくはぼく自身のプライドのために愛梨の攻めは避けるようにしている。

いや、何かに芽生えそうだから怖いんだ。あと、好きな女の前でくらいカッコつけたいから。

そんなことを考えながら料理をテーブルへと運ぶ。

「ねえ、今日は私が攻めたいの！」

「まあまあ。またいつか、ね」

「じゃあ、ジャンケン、ジャンケンで決めよう！」

カッコつけられる……のか？
というカタチネコをジャンケンで決めるカッブルってなんなん

だろうな。

「は？えなも来れねえのかよ。だる」

ガンガンと耳を刺し殺すような大音量の音楽。ミラーボールで反射された光が時々目に染みる。アルコールと香水とタバコの匂いしかない。

「あー、クラブにもいい女はいねしなあ。美香は胸無えからなあ」

良い女がいらないならコネで入れた折角のMCブースもなんの面白みも無い。

「おう。シンヤ。どした？酒がすすんでねーじゃん」

声をかけてきたのは先ほどのコネクション元、悪友の康介だ。

「おい康介。もーちよいましな女いねーのかよ！さっきのブスなんだありや！VIPに誘って良い女じゃねーぞ！いや、あんな女じゃねーよ。豚だ。雌豚」

「いやあ、お前が面食いすぎんじゃね？まあランク的には中の下ってとこだけだ」

「せめて豚は豚でも特上の豚連れてこいよお」

そう言う康介は呆れた顔をする。

「ま、こんな平日の真夜中にクラブに来るような女はだいたいロクでもねーよ」

クラブは恋人を探すのにベストな場所じゃない。バーにでも行け。と康介。

そう言われてしまおうにも言い返せない。

エド・シーランかよ、と心の中で悪態づく。

「前で連れてくりやよかつたじゃん。彼女は？何人かいるんだろう？」

「えなも佳奈も優衣もダメだとよ。マジで使えねえ」

「まあ、仕事あるだろうしな。シンヤに貢ぐために稼いでんだろ」

全員に断られたメッセージ画面を康介に見せる。

すると康介はニヤリと笑った。

「シンヤ。お前、美香ちゃんに声かけねーのかよ」

「今は巨乳の気分なんだよ。貧乳はお呼びじゃねーの」

「だろーな。そーだと思つたよ」

美香ちゃん顔だけは特上なのになあ。幼女みてーなカラダなんだもんなあ。もつたいねー。と康介が続ける。

そうなのだ。俺の彼女と言つても、まず、第一前提が可愛いこと。可愛く無いやつなんて愛そうと思つても愛せやしない。ブスとセックスなんて萎えるだけだ。

その点あいつは……。

「その点、川上……なんて言つたつけ？あ、そう愛梨だ。愛梨ちゃん。あの子はいいよなあ。可愛いし、良いカラダしてた。おっぱいでかいし」

同じことを考えていたのか、康介が舌なめずりをしていた。

「なあ、シンヤ。愛梨ちゃんと呼ばねーのかよ？飽きたんなら一回やらせてくれ」

「あいつとは別れたわ」

そう言うとき康介は目を輝かせる。

「まじに~~三~~なんで別れたんだよ、もつたいねえ。ちよ、インスタ教えてくれ！」

「別に良いけど、あいつ今彼氏いるぞ？」

愛梨のアカウントを康介に教えながら呟いた。

「ほーん。なんで知つてのよ？別れた女は大体興味無くすのに」別に興味を無くしているつもりはない。

興味の視点が別の女に移つてもとの女の存在が霞むだけ。

しかも、別れるってことは俺のことをもう愛さないってことだ。

そんな奴に構つても時間の無駄だし、他にも女はたくさんいるのだ。そいつに固執する必要もない。

ただ、なんだ。愛梨だけは気になってしまった。

俺でも俺の気持ち理解できない。

気になってしまつて、別れてから一度、愛梨の家を訪ねた。理由は単純、やりたかつたから。

浮気を謝つたり、弁解しようというつもりで行つたわけではなかつた。

まず俺は浮気が悪いことだとは思えない。

世間様は芸能人の浮気などをまるで犯罪のように咎めるが、愛してる女を抱きたい、気持ち注ぎたいというのはそんなに罪なことなのだろうか、と考えてしまう。

まあ、愛梨も俺に会えずに寂しがっているんじゃないかなと心と股間を膨らませながら愛梨の家のインターホンを押す。

そんな俺を出迎えたのは妙に中性的な男だった。

かく言う俺もどちらかと言えば中性的な顔立ちをしていて、髪もウルフカトくらいには伸ばしている、まあ容姿は許容

出来たのだが、なんと言うかメスに近いなどそういう雰囲気を感じさせる男だった。

「どなた様？」

メス男がそう尋ねてくる。

部屋を間違えたのかとも思ったけれども紛れもなく愛梨の部屋番号だった。

「お前こそ誰だよ。愛梨のなに？」

嫌な予感というのだろうか。なんとも言えない感覚が頭を支配していく。

「彼氏、だけど」

メス男がそう言い切った。

その答えを聞いた瞬間、なんと形容すればいいかわからない感覚が五臓六腑に染み渡った。

怒りだったのかもしれないし、悲しみに近いものかもしれないかった。

「あいつ、もう男乗り換えたのかよ。クソビッチが。……おい、

愛梨出せよ。いんだろ」

メス男が訳ありげにクスリと笑った。癩に触る笑い方だ。なにがおかしい。

「愛梨なら大学だ。元彼くん？かどうかはわからないけど、そんな事も知らないんだね」

訂正。癩に触るのは笑い方だけじゃなかった。段々とイライラしてくる。

「ああ、そうだ」

イラつく笑顔を浮かべながらメス男は言った。

「愛梨にはもう近寄らないでもらえる？もうぼくの彼女なんだし。別に振られた女に固執するほど女には困ってないだろ？」この部屋にある君のものも全部捨てちゃったし、と。

「……ああ、そうだな。困っちゃいねえよ」

俺の返答を聞くとそいつは満足そうに頷いて。

「もう二度と来なくて良いから。それじゃ」

そのまま扉と鍵を閉めた。

終始イラつかせてくれる男だった。

今思い出しても腹が立つ。

「おい。相手どんな奴なのさ？もしかしてブリってんの？」

康介の声で現実に引き戻される。

「別になんだろうな、なんていうか気持ち悪い男だったよ。女みてえなやつで、人をイラつかせるのに関しちゃ天才的だったわ」

「へー、僕も、もっと聞きたいなア。その話」

後ろから聞き覚えのない声。

「僕」のイントネーションとか言い方とかいうか、それがム

カつくメス男に似ていた。

康介の声ではない第三者の声だった。

振り返ってみると見知らぬ男がグラスを片手に笑って立っている。

「盗み聞きかよ。気持ち悪いな。康介、一応従業員だろ、お前。こいつ、つまみ出せよ」

「んにや、こいつ、隣の常連VIPの連れだわ。まあ盗み聞きは感心しねえけどよ」

どしたよ、と康介が盗聴男に話しかける。

「あー、ババアの相手も飽きてさア。ホール歩き回ってみたけどまともな女いなくて。面白そうな話してたから、つい、ね。雌豚どもと話すよりも楽しいかなって」

あと顔がいい男の周りには顔がいい女がいるしね。そう言つて握手を求めてきた。

「……へえ。確かに、豚と話す趣味は俺にも無えからな」
女見る目肥えてるなと思いつつ、握手に応じる。

「まあ座れよ。あー、俺、シンヤ。こいつは康介。康介、なんかてきとーに酒とつまみ持つてきてくれ」

「オッケー。シンヤに康介ね。僕は悠でいいよ。それよりさ、さっきの話もう一回聞かせてよ。キモい女男の話。僕もしかしたら心当たりあるかも」

酒持つてくるわー、とブースから離れる康介を尻目に、悠に尋ねる。

「どういう心当たりよ？」

「僕ね、そこそこ色んな女の子と遊んできたんだけどさア、人をイラつかせるのが得意でめっちゃ男みたいな女と遊んだことあるんだよね」

ちよっと待ってて、とスマホを弄りだす悠。

そうして幾つかの動画を見せてきた。

まあ動画の内容自体は、よくあるような男（多分全部悠）と女のハメ撮りだったが、そのうちの一つの女の顔をみた瞬間、身を震わせた。

「そう。こいつだよ。こいつだよ」

多少歳食って大人びたり、メイクがメンズっぽかったりと画面の中の女と相違点はあるが明らかにあのメス男だ。

「こいつ、女なのかよ。なんで愛梨は女なんかと……」

「シンヤに浮気されたのがよっぽど応えてレズになったとか？ 無くは無いやね。だってこの女もそうでもない。男に裏切られてレズになったわけだし。ま、その裏切った男つて多分僕なんだけどね！」

腹を抱えて大笑いする悠。

「なあ、悠」

俺の神妙な様子に気づいたのか笑いのをやめてこちらを向く悠。

「良いカラダしてる女、興味ねえか？ 俺のお墨付きだ」

「それも興味あるけど、面白いことなら付き合うよ？ 暇なんだア、僕」

「あんないい女、女にはもったいないねーだろ」

お互い顔を付き合わせてニヤニヤと笑みを浮かべる。

「おい、酒持つてきたぞ。……うわあ」

片手にアルマンドを持つた康介があからさまに引いたような声を出す。

「んだよ？」

「いやあ、お前らつてなんか似てんなって思つてさ。クズ感が隠せてないとかか」

「お前はもう愛梨とやらせてやんねえ」

「うわ！ めっちゃイケメンが二人もいるうー！ そんなイケメンくんたちにはアルマンドをプレゼントー！」

「僕、康介くんのそーゆーとこ好きだわア」

「いや、あんな上玉とやれるなら媚びくらい売りまくるさ。なあ、シンヤ」

「ま、この酒に免じてやらせてやるよ。……乾杯でもするか」
思わぬ収穫もあったもんだ。平日のクラブも悪いことばかりじゃあないらしい。

脳裏にあのメス男、オス女だったか。あいつの苦悶の表情を想像するだけで安物のシャンパンが美味く感じる。

ああ楽しみで、仕方がない。どうやって、愛梨のオス女に対する気持ちを挫こうか。

そんなことを考えながらグラスの中身を胃へ流し込んだ。

「久しぶり」

仲睦まじく、愛に溢れた生活を送っている二人にそれぞれこのメッセージが届いた。

私は浮気性の元彼から。あやには、ブロックしてくれたはずの過去の男の相手から。

このメッセージから私たちの全てが変わっていったのだと思う。私とあやの間には秘密なんて無いとそう信じ切っていた自分がいた。

もう裏切られないと決めつけている愚かしい自分がいた。

あの時に戻れたら。

壊れかけの心ではそんなことすら考えられなかった。

事件は私とあやのセックスが終わり、あやが眠りについた時に起こった。

枕元で連続して四回ほどメッセージの通知音が響いた。

私の通知音では無い。あやの通知音。久しぶりに聴いたな。

あやが私のために連絡先を断捨離してくれた時からというもの、あやのスマホは私と連絡を取る時専用の道具のようなものになっていった。家族とは連絡を取ったりしなくても大丈夫なのか

尋ねたら、家族は居ないと、そう答えた。

それにあやは「愛梨は特別だから」と私のメッセージの通知音は特別なものにしてきていることも知っていた。

だから、気になってしまった。誰からのメッセージなのか。お

ぞましく思えるほどの好奇心と不安に駆られてしまった。お

あやから、スマホは別に見てもいいけど設定とかいじらないで

ねと言われたきり、あやを信用して覗いてはいなかったが、ここになって久方ぶりに覗いてしまった。

送信者は悠。

「久しぶり」「急だけど、あやに会いたい」「あの時は逃げてしまっただごめん」「クリスマス、一緒に過ごそう」「動画を送信しました」「僕も今なら君を心から愛せる」

目の前が真っ暗になるとはこういうことなのだろうか。鼓動が早く、体が熱を持っていく。目頭が熱くなり、喉から言葉にならない声が漏れる。

動画の中にあやは限りなく激しく乱れていた。私としているときなんかよりも激しく。

メスのような目をして、嬌声をあげ、浅ましくペニスを強請る。

隣で安らかに眠っているあやとはまるで別人だった。耐えきれなかった。

たった五つのメッセージで同じ空間にいるのを苦痛に思えてしまった。

なにより、本当に信じてた人間から裏切られたと感じてしまったことがショックで。

考えるよりも先にスマホと財布だけ持って、部屋を飛び出した。

流石に凍えるように寒い。

どのくらい歩いただろう。

そう思い、スマホを覗いた。

そこには、「久しぶり」というメッセージ。

間違えてあやのスマホを持ってきてしまったかと不安になったが送信者を見てそれはありえないことを知った。

送信者はシンヤ。

どうして。ブロックして消したはずなのに。

狼狽していると電話がかかってきた。

承認していないアカウントと出てきた。わざわざアカウントを作り直したのだろうか。私はどうすればいいのだろうか。

数時間前の私ならば、迷わずに、……いや、少しだけ迷ってそれでもブロックして削除してあやに話を聞いてもらっていただろう。

でも、今は一人だ。誰もいない、一人きりの私を彼は気まぐれなのかもしれないが気にかけてくれた。

この通話に応じれば、一人ではなくなる。

いつの間にか指は緑色のボタンをタッチしていた。

『久しぶり、出てくれてうれしいよ』

久しぶりに聴く元彼の声。以前よりも柔らかく、嘘みたいに優しく語りかけてくれた。

「……なんぞ、今更」

嗚咽でうまく言葉が出てこない。

『泣いてんの？』

自分でも気づかずに涙が溢れ出ていた。

シンヤは甘く語りかけてきた。

『俺、思ったんだよ。愛梨がいなくなつてさ、めっちゃ寂しくて、夜も寝れなくなつた。謝ろうと思って一回顔出したんだけど、もう彼氏がいてさ……』

『正直辛かったよ。もう俺のこと忘れちゃったのかなって』

『自分自身この気持ちがあるのかわかんなくて』

『会いたくなつた』

『迎えにいくよ、今どこにいるの？』

『話、聞くよ？』

耳あたりのいい言葉と知っている。でも、今はそれに縋りたい。いや、縋らずにはいられなかった。

「今は人形町のー」

シンヤは三十分と経たずに迎えにきた。紫色に鈍く光るスポーツカーで。

私の姿を見つけた彼は駆け寄ってきて、覆い被さるように抱き

しめてきた。

「なんでこんな薄着で外に出てんだよ！風邪ひくぞ」

眉を蹙めて私を嗜める彼は本当に心配してくれているようで、暖かい涙がポロポロとこぼれた。

「とりあえずほら」

助手席に座った私に温かいココアを差し出してくる。

「コーヒー、飲めなくてココアかお茶だったよな」

こんなにも私を理解してくれているのに、浮気されるのが嫌ってわかんなかったのかな。

嬉しいし、その分悲しい。

「とりあえずあったかい場所行こう。バーを貸し切っておいたから幾らでも話せる」

そのまま彼はアクセルを踏む。

オレンジ色の街灯が彼を照らして、遠ざかって、また照らして。付き合っていた頃の記憶が映画のように頭に流れた。

バーについて、彼はホットワインを差し出してきた。勝手に色々漁っているがいいのだろうか。

それからお互いにたくさんのことを話した。

というか主に私がたくさんの話を聞いてもらった。

彼は本当に聞き上手で、全て喋ってもいいように思えてくる。

私がワイン三杯目を飲み終えた時、シンヤがキスをしてきた。

拒もうと思えばそう出来ただろう。わたしは拒めなかった。

理由は彼が与えてくれた。

ワインで酔ってしまったから。彼氏（彼女なのかもしれな

いが）の知りたくなかった秘密を知ってしまったって気が動転していたから。久しぶりの元彼に強引に押し倒されたから。

これで罪悪感はどうもは薄れる、そう考えている私が醜くて自分を殺したくなった。

「私、今、彼氏いるからっ」

口先だけの僅かな言い訳。それももう唇を奪われて消えてしま

う。耳を塞がれ、舌を挿れられる。頭蓋の中にお互いを舐り合う音が反響し、何も考えられなくなった。

彼のキスは優しく、けれども情熱的でカラダのあちこちに小さな内出血を残していき、最後は私の秘部へ。

付き合ってた頃は舐めてなんかくれなかったのに。どうして今になって、と言おうとしたが言葉にならない。結

っていた髪の毛は乱れ、腰はビクビクと震える。喉からは声が絞

られるような「あっ」や「うっ」「おっ」としか出なくなった。クンニで一回。その後指でかき回されて二回、イってしまっ

た。情けなくて顔を覆う。とその手に生暖かく脈打つモノが触れた。

同時に頭を大きな手で持ち上げられる。それだけで彼の意図を

理解した。

罪悪感とか感傷だとかそんなものを頭の片隅に追いやり、口

いっぱい頬張る。やっぱり。私とあやが使っていたプラスチック

クのモノよりも大きく、太い。雄々しく仰け反り喉の上を削り

取るかのように動き始める。

あやとの前戯では感じ取れない生臭さに力強さ。それに興奮し

ている私がいいた。

頭を押さえる彼の手に力がこもり、ストロークが速く力強くなつていく。そして、いつもの通り喉の奥で爆発する。生暖かいものが食道を通り過ぎるのを感じて、またいく。

「ありがと、やっぱ気持ちいいわ」

そう言つて彼は満足げに私の頬を撫でる。

いつの間にか股を開かされていた。

そのまま、熱くて硬い、萎えもしていないモノを狙いを定める

かのように私の膣口にあてがう。

あー。付き合つている頃にもあつた。

私が絶頂して、意識が朦朧としている間にゴムをつけずに、種

汁がついたままのそれを容赦無く抉り込ませてくるんだ。

でもそれが快感ー。

ごりつと音が鳴つたような気がした。

彼の肉棒は私の穴では受け止められない。

「なんだよ。付き合つてた時よりも狭くなつてんじゃない」

彼氏の細すぎたんじゃない？と嘲笑うように言い放つた後にシ

ンヤは乱暴に動き始めた。

目の奥がばちばちする。両方の手首は彼の左手に抑えられ、右

手で首を絞められていた。

血液というか、酸素が十分に脳に行き届いていないのがうつす

らと理解できる。

体勢的にシンヤもキツいはずなのに、杭打ちが止まらない。

首、腕、胸、腹。着痩せして見えるが全てに筋肉が詰まつてい

る。

五ヶ月ぶりに男を近く感じた。

もう、あたまがまつしろに、なみだでまえがにじんで、やばい……。

下腹部に熱いものが広がっていったような感覚。それと同時に

酸素不足からも解放された。

必死に呼吸を繰り返し涙を拭いとる。

もう何回イッたのかも覚えていない。

カラダは瀕死の魚のように小刻みに跳ねる。

「まじで、お前は最高だよ。愛梨」

そう言いながら彼はイチモツを膣から引きずり抜く。

吐出された白い煮凝りのようなものが股から流れ溢れた。

普段なら彼はここでタバコを吸い出すはずなのに何故だか匂い

を感じない。

どうかしたのかと痙攣して動かない下半身を責めながらゆっく

りと上半身を起こす。

悪夢的で幻覚のような光景が目前に広がっていた。

にやにやと気持ちの悪い笑みを浮かべている男が二人。そして

赤いランプが付いている三脚付きのビデオカメラが一台。

本当に時が止まったかのように思えた。

「ああ、シンヤなら冷蔵庫に飲み物取りに行つてるよお」

整つた顔立ちに下卑た笑みを貼り付けた男が私の腕を掴み、

ベットに押し倒す。

「や、やめてくださいー」

どこかで見覚えのある顔……。

「あやちゃんはさあ、メッセージ、見てくれた？」

なんで。なんで私はこんなにも辛い思いをしなくちゃならないんだらう。

悲劇のヒロインだとか、そんな陳腐なフレーズじゃ表しきれない。

今、世界中の誰よりも私は可哀想だ。

世間で騒がれている、学校でいじめられている人とか痴漢の冤罪で捕まった人とか大切な人を殺された遺族とか食べるものが何一つ無くて飢えている人とかそんなもの全部ひっくるめても私が一番。

私が一番苦しい。

普段ならこんなくだらない事を考えている時点で自分を客観視できる。

普段ならカッターで手首を切って落ち着くことができる。

普段ならあの子に愚痴を聞いて貰って慰めてもらうことができる。

でも、もう無理だ。無理。

神様、私は一番不幸な人間なんです。

一番不幸だから、願いを叶えてよ。

ほんとになんでもするからさあ。

「早く、殺してよ」

冬の雨は体温を下げながらも汚れたカラダと気持ちの悪い感覚を全部洗い流していく。

目の前に映る九十度曲がった暗く汚い路地も、染み付いた香水と煙草の匂いも、ずっと反響している下卑た笑い声も、無理矢

理飲まされた生ゴミのような精液の味も、おもちゃのように扱われたカラダの痛みも。

感じていた、醜い快楽も。

流されて、遠のいていく。

死ねるのかな。死ねるといいな。

愛に騙された。恋は裏切った。

私は私じゃいられなくなつた。

少数派×少数派

あなたの隣、 変わらなない景色

たかなし戦夜

彼氏が、知らない女の人と手を繋いで歩いていたらしい。

「なに。彼氏、また浮気したの？」

「また!？」

「またじゃないって」

「……我慢してないよね？」

「してないしてない」

詰め寄る友達に笑って返す。心配そうな顔色は消えないけど、取り調べはひとまず終わりのようだ。学食のトレーを持って席に戻って来たカレー好きの友達は、私たちの様子を見て一言で場を荒らしたのを忘れたかのように平然とカレーを食べ始めた。

付き合いが長い分、こうしてすぐに事情を理解してくれるのはありがたいけど、毎度毎度「また浮気」と言うのはやめてほしい。分かっているくせに意地悪い顔で聞いてくるあたり質が悪い。そして、私が睨むとスプーンにすくったカレーを差し出してくるのも。まあ、カレーに罪はないので食べるが。

人の彼氏をそんなに悪者に仕立て上げたいのか。それとも、私の緩みまくった浮気の基準をいまだに楽しんでいるのか。どちらにせよ、彼女が吹いた法螺で困るのは私なのだ。吹くなら吹くで弁明まで手伝ってほしいものだ。

「一夏がいつか悪い男に騙されなにか心配だよ」

「大丈夫だよ。好きか好きじゃないかは一緒にいたら分かるの」
 新たに疑念の目を向けた友達。今度はどう逃げようかと考えていると、昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。何かあったら言ってねとだけ言い残して授業に向かう友達に手を振る。私が手を下ろしたのを見計らって、まだカレーを食べる友達がお口を開いた。

「今度は何だって？」

「手繋いでたんだって。知らない人と」

「一夏は？」

「付き合ってた。この前デートにも行ったよ」

「そっか」

素っ気ない返事だけど、私はそれが彼女なりの安心だということを知っている。茶化すスキルはピカイチなのに、こうして安心の手前の心配が垣間見えるから、彼女とは誰よりも長い付き合いになっている。それきり、彼女はカレーに集中した。

スマホがメッセージの受信を知らせた。開くと、そこには今さっきまで話題に上がっていた彼氏の名前。バイトの終わり時間を尋ねるメッセージに、二十一時だよと返す。既読がついてもその数秒で迎えに行くねと返ってきた画面を見てにやける。去り際まで心配の色を隠さなかった友達には、今度彼氏が迎えに来てくれた話でもしようか。恥ずかしいけど、私の彼氏は、こんなにも私を好きでいてくれるのだと。

「彼氏？」

「え、あ、うん」

いつの間にか食事を終えたらしい彼女は、私の顔を凝視して

いた。あまりにも自然に投げかけられた言葉にどもってしまふ。「一夏が幸せなら私はそれでいいよ」

彼女は、トレーを持って席を立った。そういえば、食べてすぐ食器を洗い場に持っていくのは、小さい頃母親に怒られたからだと言っていた。なんて、どうでもいいことを思い出す。

恥ずかしいなら言わなければいいのに。嬉しいはずの言葉に反抗してしまうのは、その言葉以上に、赤くなった彼女の耳が恥ずかしいから。

トレーを置いて戻って来た彼女は、何事もなかったかのようにバイトに向かった。この短時間で気持ちの切り替えができるのが心底羨ましい。頑張ってねとエールを送ると、必ず私の目を見て手を振ってくれる彼女が、私は大好きだ。

今の彼氏と付き合い始めたのは一ヶ月ほど前。停滞していた前線がようやくやく姿を消した頃だ。

『俺と付き合ってくれますか』

真っ直ぐな言葉に、頷く他なかった。という強制のように聞こえるが、本当に頷く以外の選択肢はなかった。私も彼が好きて、付き合いたいと思っていたから。

彼とは最寄りの駅が同じで、ほぼ毎朝同じ電車に乗っているとは思っていた。ある日彼が落し物をして、それを私が拾ったのがきっかけ。いつも同じ電車に乗ってますよね、と話しかけてくれたのは彼の方だった。彼の名字が「五輪」だと知ったときには、運命だと思った。それから少しずつ挨拶をするよう

になつて、ご飯にも行つて、彼の告白で付き合い始めた。初めて話しかけたときめちやくちや怪しかったよね、と笑う二個上の彼。

そして、お待たせという言葉には必ず待つてないよと笑う彼。「絶対待つたでしよ」

「こんなの待つたうちに入らない」

「じゃあ玲人くんの『待つ』は何分からの？」

「うーん。退屈になつたら待つてることになるけど、一夏が来るまでは退屈にはならないから、一夏を待つてことはないかな」

聞いているこちらが恥ずかしくなるセリフもさらつと言つてのける。だけど、私が同じようなことを言うと、彼はとても照れる。感情表現も言葉選びも素直で実直な彼は、交友関係が広い。

「で、この前ソフト一緒だった先輩がさ」

その証拠に彼の話には、友達や知り合いがつきものだ。あの人はこうだ、あの人はああだったと、楽しそうに語る。その顔には人付き合いが何より楽しいと書かれていて、彼女という立場だけで、彼の楽しみを奪つてはいけないと思わされる。私は彼が好きで、彼には幸せな気持ちでいてほしい。私が彼を好きでいれたいほど、彼のプライベートは冒すことができない。いや、疑問があるとはいへないとも思つていないけど。

ただ、好きだからこそ踏み込んではいけない領域があつて、好きだからこそ与えられない幸せもあつて。それは彼以外にも当てはまるといふこと。

私の浮気の基準の緩さはそこにある。

好きという気持ちでつながつた相手に、好きという気持ち以外に望むものはない。私を好きでいてくれれば、私が、彼の好きという気持ちの中で一番にいるのなら、手を繋ぐでもキスでもあれやこれやしてくれていい。それらの行為が、恋愛感情の中でだけ行われるものだと私は思わないから。

ただ、たとえ踏み込めないとしても一番でいたい気持ちはある。そうでなければ恋人でいる意味がない。私の見える場所で、私が知り得る範囲で、私にしないことをするのは嫌だ。

これが、私の浮気の基準である。

幾度となく友達に驚かれ心配されてきたので、緩いという自覚はある。一番付き合いの長い彼女でさえ、深く追求しなくなったのはつい最近だ。けれど、今以上に厳しくするつもりはない。もちろん、誰かに共感してほしいという気持ちもない。みんなが緩いのではないかと考えるように、私には私の考えがある。それは、今まで生きてきた中で確立された私の一部だ。

「じゃあ一夏、気を付けて」

だから私は、家族に見られるのが恥ずかしいという私のわがままを聞いて家の手前の角まで送つてくれて、私が家に入るまで見届けてくれる彼の愛ある行動を素直に嬉しいと思える。

彼に愛されているのだと、彼が大好きだと思える。

彼氏が、知らない女のひとキスをしていたらしい。

目の前が真っ暗になった。

「なに。彼氏また浮気？」

「また、じゃないけど……」

「一夏？」

こういうとき、どうしたらいいのだろう。

明らかにいつもと違う返事を聞いて、友達もさすがにそれ以上茶化せなかつたらしい。

気を遣わせてしまったようだ。申し訳ない。

詰め寄られている私を茶化しながらも心配してくれる彼女のそんな顔は初めて見た。不安を宿した瞳の奥には、彼氏のことを報告してくれた友達も違和感を覚えるくらい露骨な心配が見えていた。いつもは、私にしか分からない心配の色を浮かべる彼女が。

ごめんね。気にしないで。

そんな言葉が頭に浮かぶ。脳が働いていることは確かなのに、それが口に伝わらない。声が出なかつた。

玲人くん、私にキスをしてくれたこと、ない。

二日連続で会ってくれたことも、ない。でも今日会う約束しているからそれはセーフか。いや、仮にそれがセーフだとして、彼が浮気をしたかもしれないという事実が変わりはない。そもそも彼はどうして学校の近くにいたのだろう。家もバイト先も近くない場所に、二日連続で。浮気相手の家の近くか、二人の家の中間地点か。それはつまり、浮気相手に会うから私にも会つておこうということか。

昨日までの気持ちが嘘みたいなのに、玲人くんを疑う考えが湧いてくる。

浮気されるって、こんな気持ちなんだ。

「ひな！」

「……ごめん」

集まる友達の視線。ようやく謝罪の言葉が出た。

「一夏、まだなの？」

あくまで確認。だけど私を傷付けないような声色に、ひとつ頷いた。

「とりあえずカレー食べな」

そっか、と呟いて座った彼女は、いつものようにスプーンを差し出した。あまりにも脈絡のない言葉に、他の友達もぼかんとしていた。やがて正気を取り戻した一人の友達が、彼女の頭を叩いた。すぐに暴力だハラスメントだと火が立つ今の時代、なかなか思い切つた説教である。

「本当空気読めないね！」

「だからとりあえずカレーだつて」

「何がとりあえずなの！」

それは私も思った。

思ったが、これは彼女なりの慰めなのだとは分かつているから、彼女がくれたスプーンをいつものように口に含む。彼女が心配してくれていたのは一目瞭然、というほどでもないかもしれないが、受け取っていた。それに、カレーをこよなく愛する彼女が一口目をくれるなんて奇跡に等しい。いつも一口くれたり、カレーを中断して話を聞いてくれていたりしてくれている彼女だが、それほど心配してくれていたことだろう。少し言葉足らずで勘違いされることも少なくはないけれど。

私が食べたのを見て、他の友達もカレーの話題を切り上げた。

「で、一夏はどうするの」

「今日会う約束してるから、ちゃんと話すよ」

「……別れるの？」

「かなあ」

自分でもびつくりするほど滞りなく言葉が出た。友達を疑っているわけではないけれど、事実を確認する前に判断するのは尚早だと自分でも思った。玲人くんは浮気なんてしていないかもしれない。キスしていたように見えただけで、本当はしていないのかもしれない。今日私が何も言わなければ、また好きだと笑ってくれるかもしれない。

でも、玲人くんは浮気したかもしれない。

初めて人に向けるその疑惑が、私にとっては信じられないくらい黒くて重かった。好きという気持ちはどこかへ飛んで行って、戻ってこない。残った感情だけで、私は玲人くんと一緒にいたいとは思わなかった。

「一夏には私たちがいるから！」

ありがとうと返すと、話題は完全に切り替わった。明日までの課題を忘れていたとか、夏休みどこに行こうとか。友達がバイトで抜けるまで、そんな話をずっとしていた。私が授業に行く頃には私とカレー好きの彼女だけが残っていた。バイトがない日に彼女がこうして残るのは珍しくて、大切な話でもあるのかと私も立ち上がるのをためらう。チャイムが響いた。私が出席する授業まで、あと十分。

「何度も言うけど、私は一夏が幸せならそれでいいの」
黙っていた彼女が、ついに口を開いた。

いつもは私を見ることなく、でも耳を赤くして言うのに、今日はまっすぐ私を見つめて、両手を真っ赤にしていた。握りすぎだよ。そんなことは彼女の目を見てしまえば言うことなんてできなかった。

「今、一夏は幸せじゃなさそう」

彼女は、隣の席の椅子を引いた。

昔もこんなことがあったな。私が好きな人に、告白をして振られたとき。ベンチに座った彼女は、今と同じようなセリフを呟いて、自分の隣をぼんぼんと叩いた。こっちにおいで。彼女の目は、そう語っていた。私が座ると、彼女は背中を撫でてくれた。そうしたら、……そう。今みたいに。

「一夏は学習しないなあ」

「だって……」

「一回くらい休んでも大丈夫だから、今のうちに枯らしちゃいな」

私が泣き止むまで、隣にいてくれたんだ。

結局、授業はサボった。

涙は早々に引っ込んだけど、背中から伝わる彼女の温もりが心地よくて、離れたくなかった。彼女は言葉足らずだけど、嘘をつく人ではない。「遅刻しても大丈夫」ではなく、「休んでも大丈夫」と言ったのは、それが本場で、私が休んだ方がいいということだ。こうして彼女が隣にいたことが私の一番の休息なのだと、彼女は知っている。これは彼女の自惚れでも私の気遣

いでもない。一緒にいることでお互いが自覚した、私たちの信頼だ。

チャイムが響く。彼女はすつと立ち上がって、人肌恋しくなったら呼んでねと言って去って行った。最後に振り返って、「遅刻しないようにね」と残して。

授業終わりに会う約束をしているなんて、言っていないはずなんだけどなあ。

というわけで、私は彼女の言いつけ通り、玲人くんとの待ち合わせ場所に少し早く到着している。もうすぐ着くよという彼のメッセージに、待つてるよと返事をして。

「ごめんね、お待たせ」

「ううん。行こう」

玲人くんと歩き出す。玲人くんは、私に歩幅を合わせてくれている。

行きつけのカフェに着くと、彼は当然のように日向に座った。

「今日、一限の先生がさ、」

今日友達から聞いたこと、それについて話そうと思っっていること。それらを、私は玲人くんに伝えなかった。玲人くんを試すようにでなんだか悪い気もしたけど、彼がどう振る舞うのか、見ようと思った。

玲人くんは、拍子抜けするほどいつも通りだった。気にしていない、罪悪感など皆無といった様子。もしかしたら彼は、私よりも浮気の基準が緩いのかも知れない。これで浮気という自覚があったのなら怖すぎる。というか肝が据わりすぎだ。そう思うほど、玲人くんはいつも通りだったのだ。

「あのさ」

「ん？」

玲人くんの反応が見られたところで、話を切り出す。呼びかけに対する彼の声も表情も、優しかった。優しすぎた。

「今日、友達に玲人くんが女の人とキスしているところを見たって言われたの」

だから。

「本当なの？」

その問いに対する彼の、

「……ごめん」

という返事には、震えが止まらなかった。

ごめん。

自分が潔白だと信じる人は、罪悪感などない人は、そんな言葉使わない。

「私、玲人くんがうわ」

「一夏のこと、大好きだよ」

浮気なんて。そう続けようとしたのに、彼はそれを遮ってまで私に告白した。ここまで来るとその潔さが下がるくらいだ。言い訳のひとつやふたつ覚悟していたが、まさか真つ向勝負とは。

大好き。一ヶ月前は、その言葉だけで涙が出るほど嬉しかった。嘘のない彼の言葉だから、嘘だとか夢だとか、そんなことを思う前に胸にすんと落ちてきた。それなのに今は、この状況で呟かれたその言葉が怖かった。きつと嘘ではないのだろう。思えば思うほど、体が言葉を拒絶した。

「他の人とキスしていたのは見逃してほしいってこと？」

「違う」

「私のこと『は』って何」

「一夏」

「どうしてわざわざ浮気するの。私のことが嫌なら振ってくれれば」

恐怖を、怒りを言葉にしてぶつけた。彼が攻撃できないように刺す矛でありながらも、自分が傷付かないように守る盾でもあった。矢継ぎ早に言葉を紡ぐことでしか、彼の言葉から逃げるのができなかつた。

「俺の話聞いて」

『遅刻遅けしないようにね』

途端に、口が止まった。

昔から、どんな雑踏の中においても彼女の声だけは聞き取れた。暗闇に射す一筋の光のように、彼女は私を導いてくれた。

「……ごめんね」

「一夏が謝ることは何もない。俺がちゃんと話せば良かった。一夏を傷付けて、ごめん」

玲人くんは、そう前置きをして、話し始めた。

「俺は、同時に複数の人しか愛せないんだ」

「え？」

どうしてそうなのかは分からないけれど、気付いたらそうだった。一人に愛を注こうとしても、どうしてもそれができない。二人以上の恋人を持つて初めて、自分が愛だと納得できる感情を相手に平等に注げる。この前一緒にいたのは第一パート

ナーで、一年ほど交際している。第一パートナーといっても、先に交際していたというだけで、気持ちの優劣は全くない。別れを切り出されたらと考えると怖くて黙っていた。時間が経てば、必ず話そうと思っていた。

第一パートナーは私の大学の近くに住んでいて、それはたまたま。今は第一パートナーと私以外に交際している人も好きな人もいない。一番多いときは六人の女性を好きになっなって、これから増える可能性ももちろんある。

玲人くんは、全く別の世界の話をしているようだった。私が触れたことのない、新しい世界だった。質問には全て答えてくれて、わだかまりを無くしてくれた。

「俺は、第一パートナーも一夏のことと同じだけ大好き。この気持ちに嘘はない」

そう締めくくった。

私は考えた。

彼は確かに、恋人の私にする前に他の女の人にキスをした。これまで私の基準に当てはめれば、浮気。だけど、その人もまた恋人で、私と同じ立場にある。知らない人にキスをしたという事実を私が今知っただけで、彼はこれまでに何度もその人にキスをしているのだろう。その人が先で、私が後。それは彼のように単に交際の順番なのであって、私が後だと騒ぐのは違う気がした。

何より私のいう浮気は、私が彼の一番にあることが根本にある。彼は、その根本を、一番に尊重してくれているのではないか。

「話してくれてありがとう。でも、少し整理する時間がほしいの。整理しても、玲人くんの気持ちが分からないかもしれないわがままだって分かっている。でも、待ってほしい」

玲人くんの話を聞いて、ここに来るまでの一緒にいたくない気持ちとか、恐怖とか怒りとか。それはもうとっくに消えていた。付き合いたてのような気持ちはまだ取り戻せないけど、彼のしたことが私にとって浮気なのか、それを踏まえて彼とどう向き合うべきなのか。私はしっかりと考える義務があると思っただ。

「俺が一夏を待つことはない。一夏が納得するまで考えてほしい」

玲人くんの返事は、優しくして純粹だった。

悩んだ。これから、こんなにも悩むことがあるかと思うほど。

「玲人くん、お待たせ」

「待ったうちに入らないから。来てくれてありがとう」

「ようやく私は答えを出した。……:ではなく。」

「博奈、来てくれたよ」

「聞一夏です」

「初めまして。久万博奈です」

玲人くんの、第一パートナーに会いに来た。

今日の食事を提案したのは玲人くんの第一パートナー、久万博奈さんだ。彼女は私と玲人くんの状況を知った上で、一緒

に食事をしようと誘ったらしい。私はまだ悩んでいたけど、第一パートナーに会えば何か変化があるかもしれないとその誘いを受けた。玲人くんが、私が納得するまで考えてと言いつつ連絡してきたのは、彼の第一パートナーに対する愛なのだろう。

「一夏、そっちに座ってくれる？」

そう言つて、玲人くんは久万さんの前に私を座らせ、彼は久万さんの隣に座った。……:久万さんも左利きなのだろうか。

「一夏は何食べる？」

久万さんの隣に座った彼は、私に見えるようにメニューを差し出した。久万さんの前にはすでにオムライスが置いてあって、私のことを待っていたのだろうと思つた。メニューをめくるも、なかなか決まらない。優柔不断がこんなところでも響くとは。

「急がなくて大丈夫ですよ」

声をかけてくれたのは久万さんだった。

「私、すごく猫舌だから。聞さんの料理が来る頃にならないと食べられないの」

玲人くんは先に久万さんと来ていたはずだけど、彼の前に料理はない。これがいつもの二人なのだとぼんやり考えた。

注文を終えると、玲人くんは水を取つてくると席を立った。二人になるのは気まずかったけど、玲人くんにとってその言葉はただの報告で、私の返事を聞くつもりはないようだった。両手に氷が入った水を持った玲人くんは、ひとつを私の前に置いて、もうひとつを自分の前に置いた。テーブルにある氷のないふたつの水は、久万さんの水だったようだ。そういえば、彼はキンキンに冷えたものが好きだ。私と玲人くんの料理が来ると、彼

はオムライスを頼んだ久万さんにはスプーンを、定食を頼んだ私には箸をさらりと渡した。いただきますと手を合わせた玲人くん。教えているのではと思うほどしっかりと噛んで、最後に食べ終わった玲人くん。そのお皿には、米粒ひとつ残っていない。いつもの、玲人くんだな。

「ごめん。俺お金おろしてくる」

財布だけを持って、玲人くんは銀行へ向かったようだった。

いよいよ二人きりだ。どうしよう。頭をフル回転して話題を探していた。

「私ね、左利きなの」

久万さんが、口を開いた。

やっぱり。私も、口が動いていた。

「聞さんも、左利きかなって思ったの。私、隣に人がいると落ち着かなくて、彼が私の隣に座ることなんてほとんどないから」

久万さんは、氷の入っていない水を一口飲んだ。

「一夏さん、って呼んでいいかな。私のことも、博奈って呼んでほしいの」

「はい」

迷いや抵抗は、なかった。

玲人くんが戻ってくるまで、いろいろな話をした。今はどんな仕事をしているとか、大学では何を学んでいるかとか。好きなものはこれで、休日はこんなことをして過ごしている。傍から見たら、我ながら仲の良い友達だろう。内容的には合コンとお見合いだけだ。

「一夏さん、今度、二人でどこかに行かない？同じ恋人を持つ

者同士ではなくて、友達として」

「ぜひ！」

元気の良い私の返事に、博奈さんは少し驚いていた。ふふつと笑って、同じ人を好きになるだけあるわねと言った。

博奈さんとはレストランで別れた。別れ際、彼女は私にだけ聞かえる声で、家がすぐ近くであることを教えてくれた。三人で食事することが決まったとき、このレストランを提案したのが玲人くんであることも。音量を上げて、またねと手を振る彼女に、私も手を振り返した。

「私、玲人くんとこれからも一緒にいたい」

察しの良い玲人くんなら、私が博奈さんと仲良くなった理由も検討がついているだろう。けれど、私からきちんと言えないと。

ありがとう。そう言った玲人くんの顔は、一生忘れない。

彼氏が、女の人と手を繋いで歩いていて。

「なに。彼氏、また浮気？」

「また！？」

「違うって」

玲人くんとのことは、友達にも伝えた。それなのに、カレー好きの彼女は「また浮気」とからかうことを止めない。そして、他の友達も、そんなことはないと言っているが彼女の言葉に便乗する。違うと私がきつぱり否定をすると、みんなは安心したように笑う。それがむずがゆいけど嬉しくて、私もこの会

話を止めたりしない。

「あ、もうこんな時間！」

「今日は買い物するんだっけ」

「うん。私にびったりの服選んでくれるって」

私が立ち上がると、ちょうどカレーを食べ終えた彼女も、お皿を洗い場に置くと言って立ち上がった。今日はカレーを食べ終えるのが早い。

二人でまだ騒がしい食堂を歩く。洗い場に置いて彼女と別れようとする、名前を呼ばれた。洗い場は、食器がぶつかる音と、食堂のおばちゃんたちの声が響いていた。

「今の一夏、すごく幸せそう」

やっぱり彼女の声は、私に届く。私を導いてくれる。

「ありがとう」

そういえば、この手の言葉に返事したのは初めてかもしれない。

彼女との新しい一步を噛みしめながら、私は博奈さんとの待ち合わせ場所に向かった。

夢現×契約

「死ぬって事はつまり」

令條 零

またここに来た。実家の近くにある無駄に広い駐車場を持つ喫茶店。店内は電球色の照明が落ち着ける空間を演出し、三つの羽根を持つシーリングファンがゆっくりと回っている。僕たちはその店内の端と呼んでいる場所……窓側と厨房側の間だが、入り口からは遠く利便性も景色も中途半端な場所が定位置だった。その場には先に彼女、夢さんが座っていた。彼女が手を振る。急ぎ足で移動し、着席。

「お待たせしました」

「別に何も待ってないさ。私が勝手に早く来ただけで、どう？ 仕事の方は」

「あー、まあ何とか。今年の新卒が吸収の早い子たちばかりなので、抜けた人の穴はもう埋まります」

「それは良かった、いや良かったなのかな？」

「まあ替えが利くというのは残酷ですけど、いなくなった人の事を考え続けたらそれこそ新しい部下に失礼です」

「うんうん、成長しているね。私は嬉しいよ」

夢さんとは中学で出会った。当時一年の僕が所属した図書委員会の先輩が夢さん。当時の彼女は三年生で、僕より二つ上という事になる。二年離れていれば関係は長く続かないものだが、僕の学校は中高一貫校であり、夢さんは高校にそのまま上がっていったため先輩後輩の関係は四年間続いた。

「いやしかし久しぶりだ、何年会っていなかったっけ」

「えーと、四年ぶりですかね、多分」

「四年か、そりゃ成長してる訳だぜ」

「そっちはどうなんですか？」

「どうも何も、私はここが全てだからね。何も得られ

ないけど、何も失わない。最初に言っただろ、君が呼び出しているだけなんだよ。私はこれ以上にもこれ以下にもなれないのさ」

僕らの学校の図書委員会は独特の雰囲気がある組織だった。何故か司書と司書教諭の力が校長・副校長より強く、図書館という領域に絶対的な支配者として君臨していた。無論そんな化け物に学生が敵う訳が無く、図書委員会とはつまところ彼らの奴隷の名である。だが、この特別区域に癒しを感じる生徒も一定数存在し、委員会に長く在籍する生徒がそれである。高校三年時には委員長という実質的なナンバー5（司書が三人いるので）であった夢さんもそうだったのだから。

「で、用件は？」

「要件、何でしょうね？ 夢さんに会いたかったから、

とか」

「おいおい、私は元カノだぞ。それに君は新しい彼女出来たんだろ？」

「ああはい、前に来た時に報告しましたね」

「マンネリ？」

「まさか。まあ、あっちがそう思っているか別として」

「まあ君が悩む問題じゃないよね。私と違ってあんな別れ方じゃなかったら今も続いていたくらい君は一途な人間だ」

「どうかなあ？」

「断言できるね。芯はそうそう変わらないものさ。という事で用件は別にある、あるんだよ」

「と言われても、思い当たるものが見つからなくて」

僕が夢さんに恋したのはいつだろう。確かに夢さんは最初からミステリアスな雰囲気を出していたし、そんな人がどういう性格をしているのかと興味を持つ

たのは確かだ。でも同時に、あの雰囲気から底の見えない恐ろしさも感じていた。だから一目惚れでは無かった筈だ。そう、一年生の時だ。共に本を並べたり、彼女のクラスメイトを間に挟みながら会話をしたりしている内にだ。人間じゃないような、住む世界が違ふような気がしていたが、話せば話すほど人間に思えてきたから。だからもつと話していい、もつと知っていい、もつと好きになつていい。

一年の終わりには、夢さんは僕の事を苗字から「君」と呼ぶようになった。委員会活動終わりに、いつもの喫茶店のいつもの場所で二人だけで会話をする。この光景も当たり前になつていった。

「本当に君は困った人だ、昔と何も変わらないじゃないか。私だつて全知全能じゃないんだぞ」

「はは……ごめんさい」

「そうだね。実は職場の人間関係が上手くいっていないな

いとか」

「そうかもしれません」

「彼女さんと更にもう一步踏み出そうとしているとか」

「そうかもしれません」

「君、何言つてもそうかもしれないって言う気だろ」

「しょうがないじゃないですか、大なり小なり問題は常に発生しているんです」

高校一年の秋、文化祭が終了すれば三年は受験のため委員会卒業となる。その文化祭最終日、僕は夢さんに気持ちを伝えた。

「ああ、いいぜ」

ノータイムでそう返され僕は夢さんと付き合う事になった。

夢さんは本当に不思議な人で、あと頭が良かった。

大学受験が目の前だと言うのに頻繁に僕と連絡を取

ってではデートに誘って来た。勉強は大丈夫なのかと聞けば「君は私が落ちると思ってているんだ、ふーん？」と意地悪に返される。彼女が大学に進学してからも僕らは交際を続けた。頻繁に連絡を取り合ったし、週末はよく顔を合わせた。大学って忙しいって聞くけど、なんて聞こうとしていや待てよと。また嫌な返し方をされると気がつきやめた。僕もまた彼女を見て成長していった。

「もういいや。アレ聞かせてよアレ。今カノとの惚気話、私気になるなあ」

「え？ いや、それは……」

「気になったらダメなのかな？ いや分かるよ、今の彼女さんも良い気分にはならないかもね。でもその彼女さんも、自分の元カレの今カノの話は興味があって聞いていたりするかもよ」

「だとしたら女性って面倒ですね」

「別に女性だけじゃない、そーゆーの怒られるよ今は。まあ、人間って面倒なのさ」

「えー、今の彼女の話です、か。一つ年下で後輩ムーブする子ですよ。犬みたいですが、暇さえあれば僕との時間を取ろうとしてきます」

「後輩か、と思ったけど行動は私と同じだね」

「そうですね？ あーそうかも、でも中身は全然違いますよ。彼女が行きたいところに僕が付いていく事ばかりで」

「たまにはエスコートしたいって？」

「まあそれは……その」

「喜んで付いていくと思うけどなー、ってもう四年以上も経っているんだしその話はしてるでしょ？」

「それはそうなんですけど。……ダメですね、夢さんと比べているんだと思います」

僕は夢さんと同じ大学に合格して、春からまた夢さ

んと同じ校舎で過ごせると喜んでいた時の事。僕の入学式の日、事件は起きた。その日は僕の入学祝にご飯を楽しむ予定だった。待ち合わせ場所は大学から一番近い繁華街の駅前広場。が、その日その場所に一台の車が突撃した。原因は運転手の操作ミス。重軽傷十七人、死者一人。

夢さんこと夢現黄昏は交通事故で亡くなった。

そう、今話している夢さんは幻。僕の思い出が作り上げた僕にとつて都合の良い夢現黄昏の幻像。妙に棘がある発言とか、自分は幻想だと理解している辺りが実に夢さんらしい。このイマジナリー夢さんと喫茶店は必ずセットで現れ、決まって僕が悩んでいる時に見る。

これは夢。夢を見ている、何度も何度も、夢さんに会える夢を。でもこの夢は昔みたい僕を成長はさせてくれない。優しく言葉をかけてくれるだけ。

「死ぬってどういう事だと思う？と聞かれたことがある。別れですかね、なんて答えると彼女はやれやれという顔をしてこう言った。

「死ぬって事は関係の終焉だよ。誰かと交われば必ず関係は進んだり戻ったり、何かしら変化していく。死んだ相手にそれは無い、出来ない。更新の止まった関係、つまり思い出だけの存在になる。懐古するのは結構、でも思い出に頼りすぎちゃいけないよ」

完結ではなく、終焉、停止……。そうか。

「お、何か思いついた顔だ」

「ええ、はい。僕はあなたの言葉を真に理解していなかったただけかもしれない」

「まあ、過去と比べちゃうのはしょうがないさ、でも」

「思い出は思い出以上にはなれない、でしょうか？」
「……うん、正解だよ。先には進めないけど、思い出させることは出来る。あくまで補助とか、思い出の状

態まで回帰しているだけなんだけどね」

「心残りなんです、あなたの事が。だからずっと引きずっている。大学と新米社会人の頃はそれで良かった。大学時代は立ち直れていなかったし、新米のころは余裕が無かったから。でも信じられる仲間と、責任と、心のゆとり。それに新しい彼女、心の拠り所が出来たから思い出しちゃったんですね。あの頃を、清算をつけ忘れた思い出に」

「……そっか」

「あなたは死んだ、今話しているのは僕にとつて都合の良い事を言ってくれる夢さんじゃない夢さん。分かっていたつもりなんですけどね」

「うん。私、ボクは死んだ。死んだんだよ、残念ながらね。ボクの良い所も悪い所も全部比べられるなんて、相手が可哀そうだぜ」

「そうですね、お前があの人のお思い出の先になってくれなんて無茶な注文です。穴は埋められても代わりは

いない。穴は別のアプローチで埋めれば良い、でも穴と同じ型は無い」

「それに気づけたなら、今君が取るべき行動は一つだ」
静かな店内で扉が開く音がした。その方向は店の入り口。そこから暖かな光が漏れてくる。

「こんな思い出に閉じ籠ってないで、今を更新しろ。これがボクから君に送れる最後の言葉だ。あ、飲み物代はボクの奢りだ。餞別だと思ってくれ。期待してるぜ」

僕は席を立ち、椅子を元の位置に戻す。

「夢さん、ありがとう。そして、さようなら」

「——輩」

「先輩起きて下さい！」

「んあ……」

「今8時ですよ、何寝てるんですか！」

「君は真面目だな、これは必要睡眠だよ」

「そんな訳あるかあー！ ほら仕事終わらせて、帰りますよ。って、何で私ツツコミ側なんです」

「え、あ、そうだね。らしくないね」

「睡眠中に先輩に何があつたんだ……。流行りの異世界転生という奴ですか、付いていきたかった」

「いやそんなのじゃないよ」

「じゃあ何ですか」

「秘密」

「はあ!? ここで勿体ぶりますか普通!？」

「フツ。人生ってのは、ままならないものなんだぜ」

「さて、その諸君。お楽しみいただけたかな。楽しかったって人はグットボタンとチャンネル登録を」

なんてね。ボクは崩れかける喫茶店内で誰もいない場所に向かってキメ顔をする。ボクは夢現黄昏。ヒトよりちょっと強いだけの人外だぜ。さて、こんな容姿端麗 頭脳明晰 全知全能なボクが死人の最後の願いを代役で叶えるなんて依頼を受け持ったのか、事の顛末を説明してあげるぜ。

世界は無限の可能性を秘めており、そしてその全ては木のようにいくつもの枝を付け存在している。似たような世界がいくつもあるって事。そして世界たちは大きく大体同じ歴史を歩む本流と、斜めに逸れ過ぎた剪定対象世界に分けられる。ボクはその剪定対象を気まぐれで刈り取る者。全ての世界で存在・同期している管理者。場合によっては不老不死、場合によっては何度も生まれ、場合によっては王となり、常に世界に存在し監視する、それがボク、夢現黄昏。ただけど、

極稀に同期していない、自分の事を一般人だと思いついでいるはぐれ者が生まれちゃうのさ。それに気付いた世界の主流は彼女を事故死で撤廃させ、ボクと引き合わせた。ボクは世界の管理者だけど神じゃない。ボクが泳がせていても、管理外の部分で許されなかったってただだぜ。ここまでされるとまあ、同期するしかないんだけど。その時、彼女、いや僕が持ち掛けた事件。それがこの茶番。

って訳とうんうん頷くボク。ボクは人じゃないからね、上手く振舞えたかは分からないけどこの空間が崩壊しているってことで、契約は果たされたって理解しておくぜ。

「ニンゲンがどうか、思い出とか、まあボクには関係の無い話だ。死人となんて、ましてや消えたボクともう一度会えるわけがないのに、上手く乗せられちゃって。お笑いものだね、彼。こんな茶番、本当につまらない……。……わっはっは」

はぐれ者で、僕の預かり知らぬ者だったとはいえ、彼女もボクであった事に変わりはない。はぐれ者のボク、この世界の夢現黄昏、誰より人間に接近したボク。「しょーがねえ、彼女はボクだった、であればボクは彼女って事だ。という事は、ボクはあんな貧相な人間に落とされた訳だ」

やれやれ。であるならば責任を取って貰おう。今決めた、老衰以外で死ねない刑だぜ。ボクのために限界まで現世で生きて生きて生きて、そして死んでくれ。

「ああ、本当にままならない人生だ」

己×己

セルフバディ

海人

一

僕が目を開けると、そこはいつでもどこかの映画館の、何番かのシアターの、最前列の真ん中から少し右にずれた位置のシートだった。右手で頬杖を付く癖があったから、ここが好みだった。

今上映されている映画に題名は無い。なぜなら映画ではないから。元になった作品はあるはずだが、ここに来ると決まってる僕は記憶喪失になった。

画面の中で死にかけて赤色の人影は、カメラ目線で言う。
「ファックって言うてくれ。一度でいいから。ほら、ファック、ファック」

他に観客はいない。このシアターは僕だけの世界だ。
（ファック）
筋肉マッチョマンの影が言う。

なぜ僕はこれを見ているんだっけ。

そこには大きな理由があった気がして、どうにか思い出せないか自由な左手で頭をかいた。すると一瞬記憶が甦る。

「あつ、振られたからだ」

続いてただでさえ薄暗い空間が暗転し、意識は上か横かわからないがどこかへゆっくり、いやもしかしたら光速以上で沈んでいく。

僕がもがいたなら、それを打ち消す真逆で同等の力が返ってきて、結局微動だにできない。

あれから数秒とも永遠とも思える間を挟んで、僕は朝を迎えた。実際のところ、例のセリフが聞こえていたということと、ベッドに入った時間、そして現在が午前九時であることから、

あの間はおおよそ五時間の長さであったことがわかる。

毎朝目覚めて最初に止める音は、テレビでメニニュー選択画面をバックにそれなりの音量で流れる、寝ながら見ていた

映画のメインテーマだった。ディスク取り出しボタンを押し、熱々の円盤をケースに戻す。こういう時こんがり焼けたトーストが出てきたらと思うあたり、僕も一人暮らしに慣れたなど実感する。

アクション映画のディスクでいっぱいの棚のアメコミの段に、昨夜慰めてくれた映画のケースを差し込む。そのタイトルを見て、嫌な記憶がかつてに再生された。

(「ごめん。つきあうのはできないや」)

僕が好きなかでも特段に笑える映画を見ても、それを選んだ理由を覚えていては枯らした涙はまた溢れてしまった。

僕は、そんな僕が、涙がやけに温かいことが、そんな涙を流す僕が嫌いになった。

僕は、恋をした僕も、一瞬うかれていた僕も、告白した僕も、たった1回の失恋でここまで落ち込んでいる僕も、悲しみに耐えられない僕も、耐えられると信じていた僕も、すぐに最大値の悲しみを呼び起こす僕も、今なら泣き役ができるか思っている僕も、全部が嫌いで、僕を嫌っている僕が嫌だった。

振られた後の生活に現れて、もはやルーティーンかのように振る舞うネガティブタイムを、陽光が透けるカーテンで涙を拭って一事的に終わらせる。

「はは」

乾いた笑いが漏れると、脳内で反響した。僕は頭を振って、

その音を追い出した。

「朝飯どうするかな」

「ポテトとチョコレート」

僕はテレビを一瞥し、口に触れた。

一人っきりの室内。発せられた提案は確かに僕の声で、それも僕の口が動いて出たことに間違いはない。ただし僕が起こした行動ではないことも、また事実だった。

「やあ、他人に笑われるとむかつくから、自分で自分を笑うボクチャンーそれなら俺が代わりに笑ってやるよ。あつ、あはは、はははははは……」

またも僕が、支持をしていないのに話し、笑い始めた。

「ネバー」

(…ネバー)

「ハブ」

(…ハブ)

「フレンド」

わざわざ発声と無音の声を使い分けた輪唱が始まる。

「いらぬいよ。誰なんだ」

独り言が会話になった。

「だから俺だよ」

「どっから出てきた？」

口に続けて右手が動いた。顔の前に人差し指が立つ。

「ずっと、ここに、いた、よ」

僕は操られていた右手を奪還した。意識の外で体が動かされ、だがその感覚を共有する感覚が気持ち悪くて仕方がなかった。

だから僕は右腕を全力で棚にたたきつける。

痛い。

数枚のブルーレイケースが落下した。

「やだ怖い！とりあえず友好の印と言ったらなんだけど。2分もらえば1分で解けるめーろを書いたげる」

握手の形を作った左手が、僕側に向けられる。こちらも奪還して、やっぱり棚にぶつけた。

歯抜けになった棚からはさらにケースが滑る。

両手がしびれた。僕が腕を伸ばすと、手首はだらりと重力に負けて垂れた。

この感覚は彼には伝わっていないのか、ただ大笑いだった。

「おお！おててがティラノだっ」

「痛くないのか？」

「痛いさ。俺の体だぞ？」

彼はまた笑った。

僕と僕の身にこびり付いた存在は、朝食を机に置いて椅子代わりのベッドに付いた。まずは情報の整理だ。勿論ポテトとチョコレートは無い。

「俺はおまえをボクチャンって呼ぶ。俺のことは好きに呼んでくれてかまわない」

「とりあえず、オレ！頭が追いつかない」

「置いとけ置いとけ！ただ一言で説明するなら、がきに必要なのは、恋人でも母親でもなく、俺だっただことだ」
とても説明に思えなかったが、息が詰まった。

「毎日のように、告白のタイミングが違ったらやら、もう一回デートを重ねてたらだの、ごちゃごちゃ考えてんだろ？」

オレは変色を始めているバナナを取り、粘りのある果肉を僕の口に押し込んだ。

「よし！こいつを使ってタイムスリップってのはどーよ。それで彼女と結ばれる未来を探すとするか？」

僕がバナナを飲んだタイミングに合わせ、オレは残った皮を振りながら言った。

オレが黙るのは、僕が咀嚼に口を塞ぎ言葉を発せられない時だけだった。今は数日前に気分転換にと作って冷凍しておいたカレーが、その役目を果たしてくれていた。

とはいえ、脳内ではべちゃくちゃとくだらない話は続いた。
(んー？ややスパイスに不足、欠如は、パブリカ？)

「うるさい」

一時間に渡って一掛ける一の話し合いは行われた。が、僕が望む答えは得られず、また思い描いた結果とは異なる形になった。

「親愛なる隣人程度に思ってくれって」

オレは僕の体を離れられないと言いつ張り、僕の睡眠時の肉体制御権を要求してきた。それぞれの意識は別個なため、オレが体を動かしても僕が覚醒することはないらしい。嘘か本当かは今晚には明らかになることだ。

それに原因と対応は考えなければならぬが、なりふりかまわず体を操られるよりはまだまだましかもしれないと思った。

夜に何をするつもりかを知るには睡眠時間を削る必要があるから、可能な限り早くはつきりさせたい。そして追い出す。

「それともう一つ。左手もおくれ？」

「はあ？」

オレは左手を口のようにぱくぱくと動かす。

「だってだって、活動時間と睡眠時間とじゃ長さが違うだろう？左手ぐらいいはもらえないと公平にならねえ。足だと互いに不便だし。右手なら俺が前から後ろまでお世話してやることになるぜ。それならそれでしかたがないから、ソフトタッチを心掛けるようにするが」

「……！わかった、わかったから触るなよ」

「ははあ！頭を使うべきだったな」

パチン、左手の親指と中指がこすられる。

「契約成立！あー、判子はお持ち？」

常に印鑑を転がしていた衣装ケースの上を見るが、その影はなかった。

「あれ？どこやったっけ？」

「なら」

左の手の甲が唇に押し付けられた。

「最悪な日だ」

オレは僕の足で立ち上がり、両手を高く掲げた。

「何言ってるやがる。ただのいい日どころか、今日はすばらしい一日になるぞ」

「おい、僕的时间」

「さあ、ボクチャンのきらめきを探しに行こう」

二

僕とオレとの共同生活が始まってたつたの4時間。僕は昼食への欲も失い、睡魔が既に器の表面張りぎりぎりといったところでなんとかバランスを取っている状態だった。

「寝るなら寝ていいぞ」

僕はこんなでも、体力を奪った張本人のオレに披露の色は一切ない。しかしここで眠る訳にはいかない。これから映画館でのアルバイトのシフトが入っているからだ。

「タイタニックに乗ったつもりで俺に任せろって」

「だめだろ」

ただ僕とオレの距離は、理由もわからずに始まった関係にしては縮まるスピードが早かった。かつてに侵入してきたのはオレであるから、元からこちらが遠慮する必要など無いが。オレが遠慮しないことは別にしても、今すぐに誰かに助けを求めて走り回らずとも大丈夫だろうと判断できるぐらいには冷静だった。

「てか、夜は僕の体を使うならそっちこそ昼は寝てろよ」

「安心しろ！俺はボクチャンと違って器用だから、合間合間で寝れんだよ。それに左手をもらったからには使わないともらったいねえのよ」

「僕が不器用？」

「ああ、おまえは生クリームで溺れる方のネズミだ」

言い合いながら、結局準備を整え、僕たちはアパートを出発した。

自宅から三十分の所にアルバイト先はあった。

外へ出ると眠気は失せ、代わってまたいつオレが独断で体を動かしたりしないかと気を張るはめになった。

やっぱり肉体の持ち主であるはずの僕が振り回されている訳だが、心配に反してオレはおとなしくしていた。勿論、左手以外は。

「よろしくお願ひします」

「はいよ、左失礼」

道中で出会ったポケットティッシュやチラシの配布に根こそぎ腕を伸ばし、オレは余計な荷物をかつさらつて来る。しまいにはこいつなら受け取ってくれると思つた配りの民たちが押し寄せた。僕は正面を見たまま歩きを早めるが、オレが後方に手を出すものだから、民は小橋りで追い駆けてリレーのバトン渡しのようなことになったりした。

「なあ、ボクチャン？これカバンに入れといてくれない？」

「オレがもらつたんだから、自分で持つてる」

すると荷物がアスファルトに崩れ落ちた。瞬間、左手の自由が戻つた。

「おいつー！」

数時間ぶりに一人の感覚はまさしく解放であつたが、同時にこうなるところからオレを引きずり出すことは不可能であると知つた。

（ティッシュ詰めよう、左手使つて。一緒にやるから。どうして出てこないのお？）

僕は孤独に歌いながら、ティッシュやチラシを荷持つに加え

私服からスタツプシャツへの着替を済ませ、僕はこの日の仕事を上映が終了したシアターの清掃から始めた。

ポップコーンは歯に詰まるが、床の掃き掃除に關して言えば映画館で提供するには天才的な食べ物だと思つづくと思う。

「ボクチャン、ボクチャン」

そう、オレはストライキの後すぐに現れて無邪気にはしゃいでいた。そもそも、こいつは僕の口で話しているがこれは契約違反ではないのか。

「なんだよ。邪魔す——」

左手が口を覆い、窒息を覚悟するほどの球が口内を埋めた。数粒は丸呑み、噛むだけのスペースと余裕ができてそれがキラメルポップコーンだと理解した。

まあ好きな味ではある。

「うまいだろ？」

しかしこのポップコーンはもはや捨てるためそこにあつたもの。

「ざけるな、何食わせてくれてるんだよ」

「ご飯を食べてなかつたら？元気が出るようにまじない込めて作つたんだ」

「もうやるな」

折りたたんだシートの背もたれと座面に挟んで、「サイズの容器が取り残されていた。中身は三分の一は余っている。」

「60分でこのサイズはきついな」

「ワニよりカエルの方が印象に残ってるわ」

「たしかに。見たんだ」

「俺だからな。よしじゃあこれはチップだ」

オレがカップごと取り上げた。

「やめろ。食うなら一人で食え」

「オレたちは一人で二人だぞ？食べないなら素直に言えよ」

そうか。

スムーズに受け答えが行われ、僕はオレの言葉を考えていないから、どうも誰かと会話する気分に近い。側から見れば独り言とは不気味だ。

「あのお」

背後からの呼び掛けに、出かけた声を慌てて飲む。

「わっ!!」

オレは我慢できなかったようだ。

「すみません。びつくりさせてしまいましたか？」

新顔らしいスタッフの美少女が、ペこペこ腰を折っていた。

「いや、今のは僕じゃなくて……」

少女からしたら意味不明な弁解だろうが、どうしても言っておきたかった。

案の定、彼女は可愛らしく首を傾げた。それも本当に疑問に思っているのではなく、ひっかかったがこちらのプライドを守るためにそう振る舞ってくれた演技派女優に見えた。

「はじめまして。一昨日から新しく入った嶋根詠伽って言いませう。あたしも先輩と同じ大学なんです1年です！」

「そうかあ、よろしく。僕は2年だよ」

「まあわからんことがあればいつでも俺に聞いてくれや！」

オレは僕が一度たりとしたことのない笑顔まで作って、割り込んだ。

(こら、かっつてに喋るな)

「どうかしましたか？」

(なあ、ボクよ。俺にはわかる、この子は俺たちに気があるぜ。

次の恋に進む時だ)

嶋根さんは僕の瞳を覗いていた。

(そんな訳ないだろ？どんだけ自意識過剰なんだ)

(悪いが女を見極めたい)

「あのお、先輩？」

話し相手の突然のフリー図に、嶋根さんはかなり心配した様子だ。

「だいじょぶだいじょぶ！それより、君のこと見覚えがある気がする。ほらあの映画の——」

「あ、もしかしたら彼氏とよくこの映画館に来てるからかもですね！お金が無いから映画デートばかりで。先輩すごい記憶力ですね」

僕は動揺するオレを抑えて冷静に見せるのでせいっぱいだった。

(ははっ、そうかもしれないね)

(それは口に出せ)

その夜、珍しく映画を再生せずに眠った。

普段であれば映画を見るようなスタイルの夢だが、今回は僕の一人称視点だった。

僕がバスルームに入ると、浴槽から全裸の美女が現れた。彼女は誘うように近づき、腕を回してきた。くぎ付けになっていた僕も抱きかえし、唇を重ねた。だが美女が老婆に変わった。

場面が移った。プロンドの美女がシャワーを浴びていた。僕はまた老婆になられてたまるかと、握っていたナイフで彼女を滅多刺しにした。女は悲鳴を上げが、やがて生き絶えた。黒の血が排水溝に流れた。

さらに場面が飛んだ。目を開けるとまたもバスタブから美女が現れ、こちらにあるいて来る。何かループにはまったのか。そう考えると恐怖が押し寄せ、視界が暗転した。

気がつくくと、僕はベッドに座って顔面にテレビの光を浴びていた。

ちようどメカゴジラとガンダムが戦っているシーンだった。

「どったっ！」

隣には三枚のブルーレイケースが積まれている。

III

夜の駐車場、僕はかかって来いと招く男を恐る恐る殴った。

「くそつ。てめえ、耳殴りやがって」

歩き周りながらあまりにも痛がるものだから、僕は詫びた。

「いや、あれで良かった」

助走を付け、体重を乗せた拳が今度は僕の腹にヒットした。

僕はうずくまった。痛い感じがした。

場面が変わった。僕は座る男を上から殴った。

「ああ。頭からやっちゃだめだ。それじゃあ相手がぼおつてして次の痛みを感じる——」

再びの拳で黙らせた。

しばらく話し合ったが、僕は彼を掴んで壁に抑え付けた。

「真実を知るにはそれを破らなきゃ」

何のことがわからなかった。

「この世界はルール抜きで生きるの賢い。今夜おまえは自分のルールを破るかなあ？」

覚醒すると、僕は床に倒れていた。

「へんな夢」

映画の上映時間が過ぎて人通りも落ち着いた。この会の最後だろう客が、明らかにカメラ男も終わった頃に飛び込んできたのをさばくと、急に暇になる。

僕と嶋根さんは入場カウンターで話しをしながら時間を潰していた。

「遅れてから入る人とは友達になれないな」

「でも電車が遅延したのかも」

「僕ならチケット買い直すよ」

「それなら、リピーターさんだからもう最初はわかってるからとか？」

「それは、あるかも」

沈黙が生まれた。先輩として話題を提供しなければと記憶ホ

ルダーを遡る。だが絶対に話せないオレとのエピソードトークばかり気が向いてしまい、他がまったく浮かばない。

「あつ、そうだ先輩！聞いてくださいよ」

僕が態度に表してしまつたのか、嶋根さんが話し始めた。ただしそんなこちらの失態をも忘れさせてくれるような雰囲気は彼女にはあつた。オレが好意を向けられていると感じたのも納得できる。皆に優しく、誰にでも全力の笑みを見せてくれる人だからだ。

これは僕が失恋した人によく似ていて、だから嶋根さんでその代わりをしてしまいそうになることが少し怖かった。

途端、インカムからロビーへの応援要請が流れた。

「ごめんなさい。あたし行ってきますね」

嶋根さんが去り、僕は話し相手を求めて左手を叩いた。

「オレ、起きてるか」

「いつでも起きてます」

人目も憚らず、オレは伸びをした。最近はこのぐらいの契約違反は黙認していた。なぜなら何度言っても直らないからだ。

「んー、朝に嗅ぐ映画館の香りは格別だな」

「もう昼だ。なあ？ 昨晚って何してた？」

オレは僕の生活を好きな時に見ることができたから、逆が成立しない以上たまには質問する権利ぐらいはあるはずだ。

「レゴのデススター組み立ててた、3803」

それでもやはりこの調子。ネガティブタイムとはごぶさたになりつつあつたが、いっそオレのような人になれたなら、僕もかなり生きやすくなるのかもしれないと妄想する日があつた。

バイト帰り、僕は居酒屋に寄つた。

「オレもビール飲めるよな」

「ボクチャンが飲めるなら俺も飲めるさ。一緒にモツプも忘れるなよ」

ビールは一致したが、食べ物についてはそう簡単に決まらなかった。というよりも、僕の注文にオレが文句を言ってきた。彼の提案は僕にとつても好物ばかりであつたが、気分ではなれない料理ばかりだった。

「すみません」

店内で悲鳴が上がつたのは、僕が店員を呼び止めた直後だった。

「どつた？」

またも契約を破り、オレが僕の体を捻つて振り返つた。

店の入り口に膝を落とした男性店員と、鋭く見下ろすジャー

ジのチンピラ男が立っていた。

僕とオレでその光景を見たのは同時であつたが、オレの方が理解は早かつた。

「！？」

視点が定まらず、周りの客の顔なんかを順番に窺っていた。オレは立ち上がった。

「ボクチャン、悪者退治の時間だ」

僕は慌てて座席に戻つた。木製の椅子は生温かかつた。

「は？ 僕たちには無理だ」

「問題ねえ。俺たちは最強のひとりだ。俺に言わせれば、俺た

「ちなら何でもできる。だろ？」

しりを浮かせようとするオレを、テーブルにしがみ付いて阻止する。

「ばかなこと考えるな。喧嘩何てしたことないよ」

「アクション映画を見まくったから問題ねえ」

片隅で一人の大学生が二役でじたばたしていても、誰も気にしなかった。別の争いが皆の注目を離さないからだ。

「何でこんなことになってる」

「レッドボールがころころ転がってきたから」

オレはテーブルをひっくりかえして、僕の支えを奪った。この音に、さすがの店内も僕たちへ注目を移した。

「やばいって」

「俺に任せろ。シヤザム」

叫び、オレは胸を張って喧嘩の間に割って入った。

店員は鼻を折られ、もう気力を失っていた。

「待ってって。あんたらにちよつと聞きたいんだが、母親の名前って何？」

「は？」

「は？みずき」

チンピラが即答した。オレは店員に耳を寄せる。

「のぶこです」

血を垂らしながらの返事。オレは空を切るようにぶんぶん首を振って二人を交互に見る。

「ちよつ待ち、カバンにバイスタンプがあった気がする」

「あつ」

そうだ。この間、区役所に行った時に印鑑をバッグの内ポケットに入れて行ったことを思い出した。

紛失物は忘れた頃に見つかると言われる。僕はつまらない講義を聞く時など、現実から逃げるとそうなるタイプだ。

ただやはり今ではなかった。飛ばした意識が体に戻ると、僕はチンピラにむなぐらを掴まれていた。

「何だてめえ。狂ってんのか？」

「俺は可愛さもいかれぐあいも120パーセントだから——」

遊園地のアトラクションのような浮遊を感じた。そしてすぐに遊園地ではありえない衝撃に襲われた。僕とオレはレジスターを巻き込んで倒れた。

「ぐふっ！痛い……」

僕たちを投げた男が吹きながら迫る。

「殺すぞがき」

オレが怒りを露わに歯をくいしばる様子に、男は不満気に鼻を鳴らす。

「オレ、まずいよ」

「黙ってる。チンコ切りって食わせてやる」

起き上がると、さっそくジャージの尾を引いた拳が発射された。

「マトリックス避け……。うぐっ」

オレは大きく上半身をのけぞらせたが、男のパンチは軌道を変えてから空きの腹に叩き落とされた。

僕たちはまた床に転がった。

腹が熱を帯び、脈に合わせて波打っていた。このままでは体

が持つはずがない。

「わかったから、とにかく僕もやるよ。手伝えることは」
壁を使って僕が立つ。

「二つある。笑顔の可愛いチンピラ語の通訳の用意と」
「と？」

僕が右手に、オレが左手にそれぞれ力を込める。

「邪魔だから出てくるな」

肉体を完全支配され、僕たち正しくはオレが反撃に出た。僕は拳の固め損だった。

「きもいな、誰と話してんだよ」

大振りの連打攻撃はあっさりとかわされた。身のこなしからして、チンピラが喧嘩に慣れていることは明らかだ。一方でオレは明らかに頭に血が上っている。

オレも可能なかぎりガードを試みるものの、ほとんどの攻撃をくらっていた。もちろん僕も殴られているが、客観的に見ることででき、痛みもあるがどこかぼんやりとしていた。つまりこの男の動きを止めて反撃するにはそこを生かす他ない。

（僕が隙を作るよ）

（俺に言ってるのか？）

僕がチンピラの瞳に映ったオレに目を合わせると、そこには鬼のような形相の彼がいた。

（オレに言ってるのか？）

（そうだ）

僅かにかっこを付けたことは認めるが、僕はオレに唾を吐いて見せた。

（あ？びびってたくせにか。そろそろ怒っていいぞ）

おそらく僕が大きな態度で振る舞ったことで頭が冷えたらしく、オレの声には調子が戻っていた。そう思えた。

（僕の秘密を教えようか。いつも怒ってる）

（いいねえ。やってみろ）

沈黙と眼飛ばし状態、おまけに唾まで吐かれたとなれば、チンピラは当然激怒した。殺してもかまわない決意に血管を浮き上がらせ、構えた一撃を、いたぶるものから仕留めるものへと変えた。もう少しでエフェクトが出ていたぐらいだ。

（来た）

だからこそさっそくのチャンスをつえた。

僕は最後の攻撃を、頬で受けた。

鈍い音に連れ立って全身を震わせる痛みが、もはや内側から沸いた。

体制を崩さぬように、息を吐いて体の芯を握える。これが僕の役割だった。

「ふっ！勇気を称えて十点を、ボクチャンに」

狙いが伝わり、オレは肘を大きく引く。グーのふりこが放物を描いて、急所を下から突いた。

「きんてきー！」

仲間ながら来たくない。

男はうづくまり戦闘不能となった。

僕たちも激しい負傷に耐えられず、床に座り込んだ。

「よくやるな」

「オレがどんな攻撃に繋げるかわからなかったから、手足は残

しておきたくて」

「それで顔か」

「僕も必死だったから」

オレは壊れたレジスターからこぼれた十円玉を一枚拾った。

「俺のためだろ？」

「違うよ」

「照れるなって。表なら俺のため、裏なら俺のため」

硬貨を弾くが、オレは取らずに見送った。

「見ないよお。なぜなら俺のためだから」

VI

居酒屋での事件後すぐに警察がかけつけ、チンピラ男は逮捕された。周囲の証言で解放された僕たちは帰宅を許された。

「使うか？」

「サンキュ」

オレが少し前に路上でもらって、バッグを圧迫したままだった大量のティッシュを右手で受け取る。僕は傷口を撫で血を拭いた。

自宅へ着くと、僕はすぐに横になった。風呂は寝てる間にオレが済ませてくれると言うものだから、その言葉に甘えることにした。

僕は久しぶりに夢の映画館の、いつもの座席に身を預けていた。

画面には黒を背景に白文字が隊列を組む様子が映る。だがそれがここでは始めて見るエンドクレジットであることを理解すると、僕は思わず立ち上がった。

「どんなに長編だろうと、映画には必ず終わりがあがる」

僕の言葉ではない。僕を通じてオレが話した訳でもなかった。

「何か気が付かないか？ていうより、なんか気付いているだろ。気付くはずのことがないって」

その声は最も身近でありながら、空気を震わせて鼓膜まで伝わって来たなら最も違和感を覚える声。つまり僕の肉声であった。

後方を振り返ると、シアターの真ん中の席に声の主たる見慣れた男がいた。

「僕じゃないか！」

右手で指を刺すと、もう一人の僕は鏡かのように同じ行動をとる。たじ唯一異なるのは、彼は左だ。

「ふっ」

笑っていないが、偽者の僕が結ぶ口を緩めた。

「ボクチャンなんかと一緒にするなよ。俺だ」

名乗った通り、彼は僕だがオレだった。もしかして依然からずっとそこに居たのだろうか。

「オレが僕の夢で何してる」

「何って、名乗ってやつを嗅いでんだよ」

現実であればマナー批判だろう大声で尋ねる。

「どうやって入った」

「簡単さ。人は自ら悪魔を作り出す。ある有名な二人の男が言っ

たが、おまえが作ったのは俺だったってだけのことだ」

落とし込むよりも先に確認する。

「オレは僕なのか？」

「俺のようなやつは他にいない。俺以外にはな！」

オレについて、濃い靄が薄れていくのがわかった。

オレは退屈そうに胸を張って固まった背骨を鳴らしてほぐした。席を離れて通路の会談をのそのそと下ってくる。僕の体はあからさまな対比か、硬直していた。

「人間よりも人間らしくが俺のモットーだ」

オレは僕の隣を抜けて、シアターの扉に手をかける。

「アイル ビー バック」

扉が開き、オレは明かりの中に消えた。僕はオレの向かった先を知らないし、このシアターから出ようとすら考えたことがなかった。

それどころかスクリーン以外に集注すると、必ずノンレム睡眠とかいったやつに落ちるはずだ。ただ今回はこんなにも自由が許されている。それどころか、オレまでも現れた。

僕はシートに崩れ落ちた。

「あつ、言い忘れた」

入り口に目をやると、オレがまぶしい光を背負い顔のみを覗かせていた。

「自分にできない奴が映画キャラに感情移入とか無理に決まっている。アクションばかり見るのもそういうところにあるのかな」

僕は黙ってうなづくことしかできなかった。

「ボクチャン！己と共にあらん事を」

オレが首を引くのを見届け、画面に向き直る。するとちょうど監督名が流れた。

「監督が僕？」

読み返す時間を与えず、エンドクレジットが終了した。

終わった。

「！？」

続けてポストクレジットシーンだかメイキングビデオのような映像が始まった。

だがもはやその内容などどうでもよかった。

そこには映された役者や監督、自分を写したカメラマン、アシスタントにいたるまで全員が僕だったからだ。

元ネタ映画紹介

- アラジン 1992年
 地獄の黙示録 1979年
 バック・トゥ・ザ・フューチャー 1985年
 バットマン vs スーパーマン ジャスティスの誕生
 2016年
 ブレイドランナー 1982年
 キャプテン・アメリカ〜ウインター・ソルジャー 2014年
 キャッチ・ミー・イフ・ユー・キャン 2002年
 デッドプール 2016年
 デッドプール2 2018年
 映画大好きポンポさん 2021年
 E.T. 1982年
 ワイルド・スピード MEGA MAX 2011年
 ファイト・クラブ 1999年
 フリー・ガイ 2021年
 アナと雪の女王 2013年
 グッド・ウィル・ハンティング〜旅立ち 1997年
 ガーディアンズ・オブ・ギャラクシー 2014年
 ハリー・ポッターと賢者の石 2001年
 100日間生きたワニ 2021年
 インセプション 2010年
 最強のふたり 2011年
 アイアンマン 2008年
 アイアンマン3 2013年
 アベンジャーズ 2012年
- アベンジャーズ〜インフィニティ・ウォー 2018年
 マイノリティ・リポート 2002年
 ワンス・アポン・ア・タイム・イン・ハリウッド 2019年
 パブリカ 2006年
 パイレーツ・オブ・カリビアン〜ワールド・エンド 2007年
 パイレーツ・オブ・カリビアン〜最後の海賊 2017年
 サイコ 1960年
 レディ・プレイヤー1 2018年
 セイバー+ゼンカイジャー スーパーヒーロー戦記 2021年
 千と千尋の神隠し 2001年
 シャザム! 2019年
 シン・エヴァンゲリオン劇場版 2021年
 ソウルフル・ワールド 2020年
 スパイダーマン〜 ホームカミング 2017年
 スター・ウォーズ エピソード4〜新たなる希望 1977年
 スーサイド・スクワッド 2016年
 タクシードライバー 1976年
 ダークナイト 2008年
 マトリックス 1999年
 シャイニング 1980年
 ターミネーター 1984年
 タイタニック 1997年
 ヴェノム 2018年
 ウルヴァリン〜 X-MEN ZERO 2009年

Secret End

ホテルの一室にて、青年は嶋根詠伽を隣に、ベッドで寝転ぶ。耳にはワイヤレスイヤホンを装着していた。それに繋がるスマートフォンはバッグの中で、誰に見せるでもなく配信アプリを立ち上げ、映画を映している。

青年は人差し指を口元に立てる。

「しゅいー！………」

少女×重力

彼女がG線上へ行く姿を、僕は瞬きもせずに見ていた。星の光だけを頼りに見失わないよう目で追い続ける。ただ行つてほしくなかった。そんな想いが気づけば目にまで込み上げていた。涙でぼやけそうになる視界を拭うために一瞬だけ瞼を落とした。

そこは重力の領域と呼ばれていた。僕の背丈ほどある青々とした雑草たちが風で折れ、向こう側の景色が映る。草が生い茂っている同じような光景だったが、目ではわからない明らか違いがそこにはある。

ぼんやりとそこを眺めていると視界の端でおかしなものを見た。細々とした白いもやが空に向かって上がっていたのだ。それだけならただの煙だと思うが、領域内でのことなら話が変わる。あまり領域内に人は立ち入らず、自然発火を除いてはまず

G線上へ

松本大輝

煙が上がることはない。何にせよ、只事ではないので急いで確認に行つた。

領域に足を踏み入れると、自然と歩調は遅くなった。闇雲に歩き回ると辛い目に遭う。辛いというより恐怖だった出来事が頭をよぎる。じんわりと汗が吹き出るのを肌で感じ空を仰いだ。すると尾を引くような煙を間近に捉えたから、背高草の茂みをかき分けた。瞬間視界が広がる。そこは人が十人ほど仰向けになつても余白があるくらいの広さで草木が生えていない不思議な空間だった。

「こんにちは」

柔らかな声が聞こえた。そこには一人の少女が座っていた。突然のことですぐには反応できず体が強張ってしまう。少し間を開けた後、静かに深い呼吸をして声をかけた。

「こんにちは」

挨拶を返したのはいいものの、内心はまだ落ちついていなかった。どうしてこんなところにいるのか、何をしているのか、気になることがいくつもある。少女に歩み寄ろうとすると、その様子を見た彼女は手を前に突き出した。

「待つて待つて。そこから二歩半進むとC線を越えちゃうから」その言葉で半歩後ずさってしまった。見えない境界線がすぐそこにある。あの時の恐怖がじわじわと蘇っているような感覚がする。

「もしかして、経験済み？」

無言で頷く。体にも、もしかしたら表情にも表れていたのだろう。彼女にはそのことがすぐにばれてしまった。

「あれ、怖いよね。自分の体全然動かなくて一生このままなんじゃないかって思うもん」

かつて一度、C線を通り過ぎた際にCエリアの重力に耐えきれず地に這いつくばったことは今でも鮮明に思い出せる。どうやら彼女も似た経験をしたらしい。

座りなよ、と言われその場で腰を下ろす。小さな焚き火がパチパチ音を鳴らしていた。おそらくこれが煙の原因だろう。

「どうしてこんなところに？」

そう質問したのは彼女の方だ。

「領域から煙が見えたから」

「領域？」

そう聞き返した彼女の反応は、僕にとっては違和感でしかなかった。領域といえば重力エリアを区切る境界線があるここ一帯をおいて他にない。

「重力の領域。C線があるこのことだけど」

「あ、へー。ここではそう呼ぶんだ。私のところでは世界の門って言ってたなあ」

初めて聞く重力の領域以外の別称。そのことだけでも彼女はこの地域に住む人じゃないと感ささせるは十分だった。

「君は一体どこから？」

「Aエリア」

「え、A？」

それは俄には信じられないことだった。AエリアはC、Bエリアの先にある重力が最も重い地域だ。そこから彼女はすでにこのDエリア目前まで来ている。ただ重い重力地域から軽い重力地域への来訪自体はあまり珍しくない。だがそれは長くても三日程度のものだ。それ以上の滞在は体が軽い重力に慣れてしまい元いたエリアの重力に耐えられなくなる。

AエリアからこのDエリアまでの正確な距離はわからない。しかし、確実に三日以上は経っているだろう。つまり、彼女はもうAエリアに戻れないのだ。

そんな複雑な背景が見える少女の前で自然と俯いてしまっていた。今更僕から何か言えることなどなく口も閉じていた。

「多分だけど、勘違いしているよ」

先程と何も変わらない調子で彼女はそう言った。

「私はGエリアに行くためにここまで来たの」

Gエリア。重力が最も軽い地域でありAエリアから最も遠い場所。

なんで、という声は出なかった。ただ下向きだった顔は彼女

の方に向き直していた。

「興味あるなら話すけど、どうする？ 聞く？」

微笑を浮かべながら僕にそう問いかけてくる。その姿が少し魅力的だったから返事の言葉が詰まってしまった。

あんまり面白くないけど、と挟んでから彼女は話し始めた。

「私はG線っていう境界線を探すためにGエリアまで向かってる」

「G線？」

「そう」

僕の引っかけに答えるため、彼女は簡単な図を地面に描く。

「重力地域はAからGの七つあって、Aエリアが一番重力が重くそこからGに向かうにつれ段々と軽くなる。そして、それらを区切るAからFの境界線が六つ。ただ、境界線は六つじゃないってほんとは七つ目がある」

彼女はそう説明しながら簡略化された世界図の端に七本目の線を付け足した。

「それがG線？」

「うん」

それから彼女はG線について教えてくれた。G線の向こう側にはもしかしたら重力がないかもしれないということ。Gエリアだと存在が確認できるということ。何より一番驚いたのはこれらの考えは小さい頃に全部一人で思いついたとのことだった。それからG線の存在を広めることが夢になって今に続いているらしい。

まあいつてみないとわからないけどね、なんて言いながら彼

女は笑っていた。だけど僕よりも下に見える少女がAエリアからここまで来ていることが彼女の強さを表していた。

「君はすごいな」

自然とそんな言葉が口からこぼれる。

「タイムリングが良かっただけだよ」

それが遠慮なのか本心なのか僕にはわからなかった。静かな時間が二人に流れる。

焚き火の灯りが消えるのと彼女が声を出したのはほぼ同じだった。

「君には自分を取り巻く何もかもが面倒になって不安になるとない？ 私には何回もあった。大抵は時間に身を任せるけどすぐには解決しない。どうせこのまま何度も同じことを繰り返すならいつそし……知らない場所まで行こうって思ったんだ」

一つ息をついて続ける。

「そんな時に唯一の身寄りを失った。とても悲しかったけど同時に今しかないって感じた。だから私は関係してきた全てを捨ててここまで来たんだ。実際すごく楽だったよ。AからBに移動した時に感じた体の軽さくらい」

そう言い終えると彼女はふわりと宙を舞った。空中で体勢を整えそしてそのまま着地する。それが立ち上がる動作だったことに遅れて気がついた。つられて僕も立ち上がる。

「あんまり面白くなかったでしょ」

そんなことはない。けれど簡単に感想も言えなかった。

結局立ち尽くしたまましていると彼女はこちらの方に歩いてきた。

「よっ、とっと」

D エリアに足を踏み入れた彼女はその軽さに体のバランスを崩していた。咄嗟に腕を掴んでしまった。

「ありがと」

しっかりと足がついたのを確認して手を離す。彼女は僕の胸下くらいの背丈だった。そして人を掴んでいたとは思えないほど軽かった。感覚の一部が狂ってしまったかのようにだ。彼女の方は視線を地面に向けたまま僕にも聞こえない声で何か呟いていた。

しばらくその状態だった彼女を見守っているとある提案をしてきた。

「あのー、ちょっと頼みたいんだけど、領域の外まで案内してくれない？」

僕は首を縦に振って、後ろにある生い茂った緑を左右に踏み倒して道を作って行った。しかし、手間のかかった動きをしているのにもかかわらず彼女の進みは僕よりも遅かった。僕から見れば無理に歩こうとしているように見えなくてもない。

「跳んだ方が早く進めたりしない？」

「うん、絶対にそっちの方が早いと思う。でもいくらかは重力に慣れておかないと。何があるかわからない、し」

彼女は高草を支えにゆっくりと一歩ずつ踏み出す。僕の進みもそれに合った速度になっていた。

重力の領域をでるのには行きの二倍くらいの時間がかかった。彼女の様子は先程と何も変わらず不安定さがある。手を差し伸べるべきかとも思ったが、余計なお世話かもしれない。

「これはさ、個人的なことだから聞かなくてもいいんだけど」
できれば聞いてほしいみたいな言い方だった。

「歩いてみてわかったけど私はDエリアから先、まともに動けない。DではなんとかなったとしてもEエリアでは間違いなく補助が必要になる。私はDエリアで世話人探しをしながらEエリアを指さなきゃいけない」

僕は彼女の方に目を向けていた。

「でもG線のこととはなるべく人に話したくないし、私と同じくらい強い覚悟を持った人じゃないと連れて行きたくもない。だから」

そう言葉を区切った彼女は、空中へと跳ねた。

「何もかも捨てて生きる覚悟ができたならついてきてよ」

彼女の姿が見えなくなるまで僕はその場で立ち尽くしていた。今すぐ決断して彼女についていけるほど僕は強くない。いや、普通に考えてもさつき知り合って別れた人について行く方がおかしい。彼女も聞かなくていいと言っていた。

それなのに、僕の頭の中はざっと迷っている。

「ほんとにきたんだ」

驚きを含んだ声を僕は初めて聞いた。結局決断するのに一週間を要した。それが長いのか短いのかはわからない。

Dエリアにおいて飛び跳ねるように移動する人はいないの
で彼女を見つけること自体は簡単だった。しかし、懸念していたのはすでにバートナーがいた場合だ。もしバートナーがいた

としても意地でもついていくつもりだった。しかし彼女の方もそう簡単にことを運べないらしくそれは杞憂に終わった。

「正直、とても助かる。Eエリアに行く予定が早まるからね」

そう言つて小さな手を前に差し出してきた。その手を取つて軽く握り返す。

「私はシイ。よろしく」

「僕はテン。よろしく、シイ」

「ちなみに、私三十超えてるから」

「え」

そんな僕の反応にシイは満更でもない笑みを浮かべていた。

軽い紹介を終えた後、僕は一つだけ気になつていたことを聞いた。

「G線の話はあまりしたくないなんて言っていたけどどうして僕には話してくれたの？」

彼女は悪びれることもなく答える。

「君が、鈍感そうだったから」

Gエリアで一番高い場所を探して。長い旅の末、Gエリアにようやく辿り着いたシイの最初の一言がこれだった。

Gエリアは僕ですら歩くことが難しく、シイに至ってはほんのわずかな力でもすぐに宙に放り出されるほどだ。そんな状態の中、多少の時間がかけながら僕らは目的地まで来ていた。

「これが、シーリンの樹」

それは見上げても頂上が見えないほどの大樹だった。場所と

いうよりものだったが、シイ取つては高ければどっちでも良かったみたいだ。

それにしてもシイはそんな場所からどうやってG線を見つめるのだろうか。G線も境界線であるからにはC線と同じく目では認識できないはずだ。ただ迷いもなくこの場所を探せと言われた時もしかして検討はついているんじゃないかと思った。しかし、ここに向かうまでにそれとなく聞いてみたものの曖昧な返事ではぐらかされた。

「ほら、行くよ」

シイは地を蹴つて空中へ跳んだ。急いでその跡を追う。大樹の頂まででは途中にある枝や出っ張りを經由して目指す。シーリンの樹は上に行くほど枝と葉がびっしりと蔓延つており安定した足場が増えていた。しかし、彼女より重力がかかっている僕は枝などに頼る回数が多く必然とシイとの間に距離が開いていった。

地道に上り続けてようやく最高点らしきところに手をかける。頂まで登り切ると茜色の空が世界を覆い尽くしていた。視界に広がっていたのはどこまでも続く地平線。遮るものはなく何もなく、それだけで心が震えていた。先に来ていたシイは座っていたので、近くの安定した場所に腰をおろす。

しばらくの間そうしていると星の光が一つ二つと現れ夜の気配が訪れ始めた。

「それじゃあ、いこうかな」

少し大きな声で、シイはいつもの会話みたいに告げた。唐突だったから焦つて彼女を止める。

「ちよ、ちよと待つて。どこにG線が？」

「あそこにずつとあるよ」

シイは空に指を差す。その先をなぞるように空を見上げた。

当然そこには何も無い。しかしこんなところにいるのだ。流石に察する。

「もしかして、空」

「そう」

境界線は地上にあるからG線もそうだと思ひ込んでいた。だから、空にあるなんて普通は考えつかない。シイはG線という考えを持った時から空にあると睨んでいたのかもしれない。ただ空にあるとしたら問題が一つある。

「どうやってG線の存在を確認する？」

「それは、私がG線上まで向かうから君が観測してくれたらいよいよ」

向かうと言われても一面は夜空だ。

「足場があるようには思えないけど」

そう呟くとシイは口元を隠して静かに笑っていた。すごいね君は、という小声も聞こえてきて何がおかしかったのか問い詰めようとする。しかし、先に動いたのは彼女の方だった。

「私はね、G線 #上# へ行くんだよ」

そこでいくつかの歯車が噛み合い始めた感じがした。気づいてはいけないようで、けど知らなくてはいけない何か。頭をゆつくりと整理する。

G線は空に存在し、その先には重力がないらしい。重力がないということは落ちる地面がないことと同じだ。つまりG線上

に行けばきつと永遠に彷徨う事になる。彼女はそんな場所へ今から向かうというのだ。誰だつてここまでたどり着けば一つの答えが見える。

「シイは死に行くの？」

「そうだよ」

躊躇いもなくそう返された。

「なんでっ」

勝手に語が荒くなる。

「G線の存在を確立させるため」

「そうじゃないっ。わざわざ死ぬ必要なんて」

「あるよ」

いつもの柔らかな声なのに、その一言が僕の声を詰まらせた。「繰り返しされる不安から逃れるために死ぬ。G線の存在を確かさせる。私にはどっちも同じくらい重要」

シイの言葉になんていえないのかわからなかった。だけど何か言わなければ彼女はすぐにでも言うてしまいうので、僕は無理矢理話を繋げる。

「でも死ぬなんて、そんなこと一言も言うてない」

「言わないよ。言ったら止めたでしょ」

当たり前だ。今だつてそうなのだから。

「ありがと。ここまできてくれて」

シイの態度の変わらなさに胸が痛くなる。自分が空回っていることが思い知らされる。

「最後に、君に二つお願いがあるんだ」

そう言うてシイはゆつくりと立ち上がった。僕は咄嗟に彼女

の方に身を投げた。しかしそれはひらりと躲され、同時に背中から強い力で押される。僕が体勢を整え振り返ると、シイはG線上に向けて宙へ跳んでいた。

「私のこと、ちゃんと見送ってよ。そうしないとG線の存在を確立できないし、世界にも広められないから」

シイからの言葉が本当に最後ののだと予感させる。けれども、そんなこと今はどうでもよくて、胸の内の想いが声になって溢れ出す。

「いかないでよ、シイ」

無数の星の光だけが僕らを照らし出していた。シイの表情はここからじやもうわからなかったけれど、きつと困った顔をしていた。

「私のために君には生きてほしいけど、私は君のために生きていとは思わない」

大きな声が澄んだ夜空に響く。

「だからさ、私のために生きてよ」

それがシイの二つ目の願いだった。

　　顔を上げると彼女の姿は見えなくなっていた。この一瞬でシイとの思い出が流れるように蘇る。結局僕は彼女のことを何もわかっていなかった。

彼女はもう、思い出しにしかない。

それが、とても悲しかった。

人外お姉さん×天才少女

かくりよのくに

青沼倅生

1

この部屋は、白で統一されている。今となつては、見慣れたものだが、初めてここに来たときは、殺風景に感じたものだ。サイコロのような形をしたこの空間の他に部屋はない。

この正方形こそが、アタシの世界の全てだ。

とは言つても、この空間には、一人の同居人がいる。もともと、この部屋は、彼女の所有物であった。名前は、「アイ」。「カサカ アイ」と言う。今は、部屋の中央にあるロウテーブルに突っ伏して眠っている。アタシよりもはるかに若く、両手と右足があれば数えられるくらいに年齢だ。

今、寄り掛かっている壁から向かつて右手には食料庫がある。壁一面を埋める食料庫には、レーションや缶詰、輸血パックのように詰められた水が、大量に保存されている。

その向かいの壁には、本やフィルム、レコードなどの娯楽が並べられたシェルフがある。あとは、アイが枕にしている、小さなロウテーブルが中央にあるのと、この空間にはそぐわな

い、「カプセル」がひっそりと置かれている。女二人が生活しているとは思えない部屋であることは確かだ。

アタシは、この「カプセル」について詳しく知らない。映画でよく見る、「ゴールドスリープ」用の機械をイメージしてもらえると分かりやすいかもしれない。これについて一度、アイに尋ねたことがあったが、「これは、使わない方が良いと思った」と言っていたので、そういうものなのだろう。

ちなみに、アタシから見ると正面には、この部屋に入るときに通った扉がある。だが、この扉は一度と開くことはないだろう。監禁されているわけではない。自分たちが、出ないことを選択しているのだ。

アタシは、わずかな眠気を感じ、床に横たわった。欠伸を一つ、浮かべながら考える。

今はきつと夜中だろう。

四年前、ニッポンは滅びた。海の向こうの国々が手を組んで、総攻撃を仕掛けてきたのだ。

以前から決して良好とは言えず、絶妙なバランスで保たれていた諸外国との関係は、ニッポンの、「とある技術」の誕生によって、バラバラと崩れてしまった。

「〇〇システム（乙女だから正式名称は知らない）、通称「SOS」である。これは、万が一戦争になった際、ニッポンが他国に負けない戦力を生み出そうと、国の技術を総動員して作らせたシステムだ。

詳しいことはやっぱりわからないが、生身の人間をベースにして、凄まじい力を持つ生物兵器を生産する技術である。

「サイボーグ」、いや、「人造人間」と言った方が適切だろう。

「SOS」のベースとなる人間は、ニッポンジンの中から無作為に選出され、「国のため」に人造人間になることを強要された。

まず初めに、ニッポンの中で恐らく最も悪運の強いであろう一人が選出された。この一人目は、抵抗を許されないうまま「SOS」に体を改造されることになった。記念すべき「第一世代」である。しかし、この「第一世代」には、重大な欠陥が見つかったため、同世代の「SOS」が作られることは無かった。以降、この欠陥を改善した「第二世代」が生まれ、それに続くように数多くのシリーズが作られたそうだ。そして、数百人のニッポンジンが、この技術の供物とされた。

当然、悪魔のようなこの技術を、他国が見逃すはずが無かつ

た。国同士の力関係が壊れることを恐れたいくつかの大国は、ニッポンに「SOS」関連の情報を開示することを要求した。恐ろしい戦力を封じるのではなく、互いに共有することでバランスを保とうとしたのだ。

しかし、この要求をニッポンは受け入れなかった。「SOS」の技術を独占している限り、他国との争いに負けることは無いと考えていたのだろう。何度も繰り返された要求を撥ねつけるニッポンに、初めにしびれを切らしたのは、A国だった。話し合いが叶わないのなら、力づくで、ということだ。それに続くように、C国、R国、I国がニッポンに攻撃を始めた。数ある大国が、たった一つの島国を落とそうと躍起になった。当初は、安易にニッポンを攻め落とし、降伏させることが可能だろうと思われたが、「SOS」の能力は、彼らの想像をはるかに超えていた。先述した通り、「第一世代」は欠陥があるため、それ以外のシリーズが戦場に駆り立てられた。「SOS」の活躍により、ニッポンは次々と勝利を重ねていった。

ニッポンジンが自らの力を実感し始めた頃、ニッポン中だけに留まらず、世界中に激震を走らせるニュースが出た。ニッポンを除く、多くの国が手を結んだのだ。その国の数は、百を超えていただろう。ニッポンを大敵と定めた国々の結束は固く、「同盟」というよりは、まるで「合衆国」のようであった。

ニッポンは善戦したと思う。しかし、「合衆国」が手を結び開発した、強力な二つの兵器によって、この国は為す術なく大敗した。

「大敗」では生温いか。ニッポンは「滅亡」した。

「合衆国」に勝利をもたらした、一つ目の兵器は、「爆風」と「火炎」によって、国を吹き飛ばす「爆弾」であった。何百発と落とされたこの兵器は人々に「恐怖」を植え付けた。

もう一つの兵器は、「猛毒」と「強酸」によって、生命が宿らないように大地や海を変化させる「霧」であった。延々と漂い続けるこの兵器は人々に「絶望」を植え付けた。

「爆弾」によって、大地は抉り取られ、「霧」によって、大地は死んだ。それ以降、大地やニッポン付近の海は白く染まり、とても人間が住める環境ではなくなった。死んだ大地の上からは、次々と人々が消えていった。「霧」の影響で、文字通り溶けて消えてしまうのだ。

また、他国からの助けがある訳でもなかった。というより、助けになど来れないのである。特殊な装備を付けないまま、この国に足を踏み入れようものなら、数分もしないうちに、身体が溶け始めるからだ。太平洋にボツンと浮かぶ、この島国は、まるで、別の惑星に変わってしまったようだった。

現世か常世か分からないほどの変貌を遂げたこの国は、誰が名付けたか、『幽世の國』と呼ばれた。

こうして、ニッポンは、滅亡したのである。

さて、長々と前置きをしたものだが、この国から全く人間がいなくなったかと言えば、そうではない。先ほど、「SOS」という、ニッポンが発明した、人造人間を制作するための技術について説明したのを覚えているだろうか。大戦争のトリガーになったと言っても過言ではないそのシリーズには、失敗作の「第

一世代」が存在した。

では、この「第一世代」の欠陥とは何なのだろうか。

それは、「死ねない」というものである。

「SOS」は、膨大な力を持つとともに、強靱な肉体も持っている。その肉体は、刃や銃弾は勿論、「合衆国」の二つの兵器でも、貫くことが出来ないほどに強かった。正しい手順で、機能停止を図ることは可能かもしれないが、それが叶わない場合は、誰も手出しがでなくなってしまう。

「SOS」は、「ロボット」ではなく、「人造人間」だ。身体をいじられてはいるものの、本人の意思が存在する。そのため、「SOS」が反旗を翻したり、万が一暴走したりでもしたら、制御不能で不死身の殺戮兵器になってしまう。これを恐れた開発者と上層部は、「第一世代」を失敗作とし、これを隔離した。この「失敗作の第一世代」こと、「死ねない人造人間」こと「無作為で選出された悲しき最初の被験者」こそ、アタシ、「ヤラワン」である。

先の戦争で生き残った数少ないニッポンジンだ。

幕間

食料庫から選んできたお気に入りの缶詰を、アイは口いっぱい頬張っている。その様子を眺めているアタシの視線に気づいた彼女は、「やっぱり、一緒に食べない？」と尋ねてくる。子供ながらに気を遣ったような眼差しは、なんだか愛らしい。

「いいよ。アタシは、食べなくても大丈夫なの。食料だって限

りがあるんだから、大切にしなさい。ほら、食べた」

「うん……」

アイは、申し訳なさそうな感情と、目の前の缶詰の味を楽しみたいという感情が入り混じったような表情で頷いた。

アタシは、「人造人間」だ。食べなくたって生きていける。味覚の楽しみを求めめるために、成長期のアイの食べる量が減るようなことがあつてはならない。

アイの苗字、「アカサカ」は、「SOS」の開発者の一人と同じものだった。社会情勢に疎いアタシでも、名前を聞いたことがあるような有名な技術者だ。その技術者こそ、アイの父親である。

彼は、この白い部屋と、その中にある「カプセル」を作ったそうだ。

詳しいことは知らないが、アイの父親は、この二つで、たった一人の娘を戦争から守りたかつたのではないだろうか。現に、娘を生かしているのだから、親の愛とは、すごいものだ。

3

アタシは、何の変哲もない、平凡な人間だったと思う。普通に勉強して、普通に大学を出て、普通に社会に貢献する、そんな人間だった。当時のニュースで、「今までにない緊張状態」だとか、話しているのを耳にしたが、少なくともアタシの世界は「平和」だった。可もなく不可もなく、波風立てずに二十年と数年を費やしてきた。

だが、ある日、そんなちっぽけなアタシの「平和」が、破壊されるのだった。

休日だからと、アラームもかけずに眠っていたアタシは、インターホンで目を覚ました。寝巻のまま、玄関を開けると、見渡す限りのスーツの男が、アタシの家の前で待機していた。これが夢であることを疑う前に、彼らが、政府の機関の人達で、アタシは、これから連行されることを告げられた。信じられないことに、アタシの手元には、手錠が向けられ、これ以上の説明がないことが理解できた。抵抗して逃げ出せたのなら、かつこよかつたかもしれないが、アタシは今までの人生で、そんな性格を確立していない。

「かつ、かるーく化粧してきていいすかね」

情けないが、これが、勇気を振り絞った、アタシにとつての渾身の一言だった。

最低限の身なりを整えた後、手錠を掛けられたアタシは、スーツの黒をかき分けて、外に出ると、黒塗りの長い車（車種は分からない）とカメラのフラッシュに出迎えられた。

スターにでもなったような気持ちでいる呑気なアタシに、「選出された気分はどうですか「政府に対して思うことはありますか」など数多くの声がかけられた。それらの声に返事をするほどの器用さは持ち合わせないアタシは、無言のまま、車に乗り込んだ。車のドアが閉まる直前飛び込んできた、「民主主義の崩壊だ」というヤジが印象的だった。

それからは、アタシの人生とは思えないくらい怒濤の展開

だった。かつて歩んできた人生とは、あまりにも密度が違い過ぎて、正直あまり覚えていないというのが、素直な感想だ。

車で運ばれたアタシは、機関で身体を改造された。人造人間として生まれ変わって間もなく、アタシは、失敗作の烙印を押されてしまった。そして、よくわからないまま、気が付くと、病院のベッドの上に寝かされていた。

人里離れた海の近くに建てられたその建物は、かつて映画で観たサナトリウムのような場所だった。白く塗られた壁に囲まれた部屋には、いくつかの窓とシングルベッド、花瓶に挿された名も知らぬ赤い花くらいしか存在しなかった。部屋の扉は、内側からは開かない。つまるところ、アタシは隔離されていたのである。

読書と潮騒とラジオの音声が繰り返される日々が続いた。

半年ほど過ぎた頃だった。ラジオから、男性の声で、「合衆国が、『爆弾』と『霧』を、この国に放ち始めた」ことを告げられた。首都圏は、容易く崩壊したらしい。

ニュースを締め括る形で、「生きることを諦めてください」と言われたのには、さすがに笑ってしまった。

数日後、アタシは、いつものように窓の外を眺めていた。見慣れた四角い景色が、崩れ去っていくのをただ眺めていた。

爆発と霧が落ち着いた頃合いを見計らって、アタシは、サナトリウムを出た。激しい攻撃の後でも、サナトリウムは、ほとんど原型を留めていた。人造人間を幽閉するための施設だけあって、強度にはかなり拘ってあるようだ。力づくで脱走を試みたとしても、実現は難しかっただろう。窓のガラスにわずか

に入った亀裂を広げて、何とか外に出ることができた。

アタシは、白い砂漠の上を何日も彷徨いながら、様々な感情が頭を埋めていくのを感じていた。それらの感情を処理するための経験のアタシは積んでいなかった。

普通の人間ならば、入っただけで溶けてしまう霧の中を、何日も歩き続けた。

何日も、何日も歩いた。

歩き続けたその先で、アタシは転機に巡り合った。不幸続きのその先で、アタシは宇宙人に出会った。

実際には、宇宙人などでは無かった。しかし、風に吹かれた死んだ砂漠で、光るヘルメットを見つけたときに、「アタシは、どこかの惑星で宇宙人に出会ってしまったのだ」と本当に思った。向こうもアタシに気づいたらしく、こちらに向かってくるのが見えた。

近づいてみると、「それ」は相当小さいことが分かった。身長は、アタシの胸くらいしかなく、宇宙服のようなものを身に着けている。まるで、宇宙飛行士のぬいぐるみみたいだった。銀色のヘルメットの向こうにあるはずの表情は、こちらからは確認できなかった。

敵か味方かわからないそれを前に、アタシの声帯は働き方を忘れていたようだ。声も出せずに立ち尽くしていると、

「ナニジندスカ」

と向こうから声を掛けられた。

きつとアタシは、とつてもおかしな顔をしていたことだろう。久しぶりに耳にした音を、言語だと認識するのに時間が必要だった。そして、その言葉の並びが、アタシの国籍を尋ねているものだと理解した。

「あ、つと、ニッポンジンです」

「そうかと思いました。こんにちは。久しぶりに生物を見た気がします」

「アタシもです。あ、こんにちは」

ヘルメットの向こうから発せられる声は、透き通っていて、幼く感じられた。

「生身のまま歩いて、苦しくないんですか」

「いろいろあつてね」

「まだ生きている人がいるだなんて驚きです」

「それは、アタシのセリフだよ。どうやって生き残ったの」

「いろいろあります。……良ければ、一緒に来ませんか。お姉さんなら、なんか安心できますから」

初対面の相手に対して、いささか信頼し過ぎのにも思えるが、こちらから危害を加えるつもりは無いし、何よりも、誰かと一緒に行動できる機会を逃すほど愚かでは無かった。アタシは、小さな足跡の後についていった。

4

あれから、ずっと二人で過ごした。身体を改造されてから、いや、それ以前の人生を含めても、最も孤独でない時間であつた。

ただろう。時があつという間に過ぎていくのをひしひしと感じた。

白い箱の中で、たつた二人だけだったが、退屈はしなかった。ラジカセで古い音楽を聴いて眠りについたり、映画を観て涙を流し合ったり、本を読んで静寂に身を委ねたりするだけで、十分だった。何より、二人の波長が不思議なほど良く噛み合ったため、一緒にいるだけで心が安らいだ。

そう、不幸では無かった。幸福であつたと思う。だけど、いつの日か、アイと共にいることが苦しくなつてしまった。幸せなはずの一瞬一瞬が、私の心に絡みついて苦しくなる。

整えられた前髪の裏に隠れたニキビを見る度に、アタシも知らないような言葉がいつぱいの本を読む横顔を見る度に、

出会ったころから癒されていたその笑顔が女性らしくなる度に、

アタシの心は締め付けられた。

アタシは、アイと共に居られるだけで良かった。一緒に居るだけで幸せを感じられる。

逆に言えば、アタシは、アイと共に居なければ、幸せを感じられなくなつてしまった。

時間が、あつという間に過ぎるように、アイも、あつという間に成長していく。

そして、死んでいく。彼女が、死んでしまったら、「死ねない」アタシは、どう生

できれば良いのか。想像することも出来ない感情を抱えながら、永遠に生き続けるのは、きつと死ぬほど地獄だ。

そのことに気が付いたとき、アタシの心は多分壊れてしまった。アイと共にいつまで過ごせるかは分からない。

数十年後、寿命によってかもしれない。数十年後、食糧庫の中身が空っぽになった時かもしれない。明日、命を奪う病にかかるかもしれない。

そんな可能性を考えれば考えるほど、苦しくなっていて、死んでしまいたくなる。いつの日か、アタシは、耐えられなくなつた。部屋の隅で、膝を抱えてうずくまる。そうして殻に籠ることとで自分を守ることにした。

アイとの今を楽しんで、将来死ぬほど苦しむくらいなら、今から孤独に慣れておこう。そうして、目をつぶり、耳を塞ぐようになった。

5

ワランに救われた。私は、実は、死のうと思っていたのだ。四年前、父に入れられたこのシエルターで、私は孤独だった。誰かが助けにくると自分に言い聞かせたが、子供にとつて、待っている時間は、苦痛でしかなかった。

いざというときに、と父が置いていった宇宙服みたいなスーツを着て、ちよつと外を見てみようと思った。好奇心もありながら、長い階段を上り進めた先に待っていたのは、絶望だった。

変わり果てた大地と、空気を覆う霧、空は見えなかった。それらを見てから、この国の敗戦を理解した。

生きている人がいないことは、子供の目にも明らかで、「誰もいないのなら死のう」と考えるまでに、長い時間は必要なかった。

だけど、地下で待ち続けた挙句、こんなところで死ぬのには、自分の人生が、あまりにもかわいそうだった。だから、私は足を動かした。死に場所を探して。

死に場所を求めたその先で、私は転機に巡り合った。生を諦めたその先で、私は人造人間に出会った。

そのときは、人造人間なんて思いもしなかったから、霧の中を歩いている女性を見つけて驚いたことは、言うまでもないだろう。未知の存在に警戒すべきだったかもしれないが、私の目には、その存在が、「なんかソワソワしている不思議な年上の女性」にしか見えなかった。その姿を見ていると、可笑しくて妙な安心感を覚えた。

それから、私たちは一緒に暮らし始めた。

白い箱の中で、たった二人だけだったが、退屈はしなかった。ラジカセで古い音楽を聴いて眠りについたり、映画を観て涙を流し合ったり、本を読んで静寂に身を委ねたりするだけで、十分だった。何より、二人の波長が不思議なほど良く噛み合ったため、一緒にいるだけで心が安らいだ。

だけど、いつの日か、ワランが塞ぎ込むようになったこと

に気が付いた。

夜になって、私が眠るのを見ると、ワランが、独り言を言うのを何度も聞いた。

『かくりよのくに』と呟くのをよく聞いた。最初は、死したニッポンについての独り言かとも思った。この国に狂わされたワランの独り言とするならば、その言葉に違和感は、見当たらなかった。

だけど、ある晩、『かくりよのくに』とは、『幽世の國』ではなく、『隔離夜の苦に』であることに気が付いた。

『隔離夜の苦に』という言葉が、地下に沈むこのシエルターに隔離された私たちを表していることを理解した。そして、その空間から生まれるのは、「苦」であると彼女は口にする。

「苦」なのだ。二人のこの世界は彼女にとって「苦しいもの」なのだ。

ショックを受けなかったと言えば、嘘になる。私は、ずっと疑う余地のない幸福を感じていたのに、ワランはそうでは無かった。救われていたのは、私だけだった。

それから、ワランが漏らした言葉から、彼女が、「私が死んだ後のこと」を憂い、「将来の苦痛を少しでも減らすために、今からできる限りの幸せを排除しようとしていること」を考えていることを知った。

結論として、私は、父が残していった「カプセル」と向き合うことにした。ワランが幸せになれる方法を探し出す。必要なのは、決意だけだった。

「カプセル」について知れば知るほど、父の偉大さを理解した。「カプセル」とは、「SOS」を作成、改造することができる機械だ。コンピュータが主体で、わずかな手動の操作を行うだけで、勝手に「SOS」を作成してしまう。また、「SOS」を破壊したり、強化したり、その記憶を弄ったりもできるらしい。

もともと、父は、私が自分の身体を「SOS」に改造して、戦争を生き残れるようにと、この「カプセル」を残した。だけど、父はそうすることを強要はしなかった。

シエルターを出ていく前に発せられた、『カプセル』をどう使うかは、自分でよく考えなさい」という父の言葉が、とてもありがたかった。

私は、自分の膝に顔をうずめたワランの肩を揺らした。わずかに視線を上げた彼女の目は、暗い光を放っていたが、優しいものだった。

「どうしたの」

前よりもトーンの落ちたその声に、悲しくなりそうにもなるが、私は返す。

「ワラン、終わりにしようか」

「……どういふこと？」

「私、ワランがずっと苦しんだこと、前から気づいてた。だけど、助けられないまま、今になっちゃった。私は、ずっと支えられてたのに。ごめんね」

「……アイが悪いことなんてないよ。ただ、アタシの心が、自

分の身体についていけるほど強くなかったただだよ。そんな顔しないで、笑ってよ」

私は、ちよつと無理して笑顔を作ると、ワランも微笑み返してきた。その表情は、私が大好きなもので、とても久しぶりに見た気がする。その顔を見つめながら、私は言う。

「ワラン、私ね、『カプセル』の勉強をしたの。ちよつと時間かかっちゃったけど、やつと見つけた」

「……なにを？」

「ワランを助ける方法」

わずかな沈黙が流れてから、ワランは、とても重たそうに唇を動かした。

「アタシを、助ける？」

「うん」

「そっか……頑張ってくれたんだ。お願いしよっかな」

意外だった。あまりにもすんなりと受け入れたものだから、拍子抜けしたが、それほどにワランの精神は、まいってしまっているのだろう。早く苦しみから解放してあげたい、そんな気持ちは積もるばかりだった。

少し言葉を交わした後、私は、ワランを「カプセル」に静かに寝かせた。扉を閉める前に、ワランが、私の顔をじっと見つめていた。それに気づいて、こちらも見つめ返すと、彼女は、照れ臭そうに笑った。

「なんか、もう会えないような気がしちゃって」

「……そんなわけないじゃん、またすぐに会えるから」

小さな嘘をついたことに後ろめたさを覚えつつも、「カプセル」の扉を閉めた。

ワランを救うべく、私は、やけに複雑な機械を操作する。その間、ずつと温かい視線を感じていた。ガラスで出来た「カプセル」の小窓から、ワランがこちらを見つめているのだろう。だけど、そちらを見返すつもりはなかった。見てしまつたら、固めた決意が、ドロドロと溶けてしまいそうだったからだ。

手動での操作を終え、あとはコンピュータに任せるだけだった。だけど、コい最後のスイッチがなかなか押せない。自分で選んだ悲しい決断に目をそらしたくなるが、このまま逃げしまえば、苦しむのはワランだ。「これ以上苦しめちゃいけない」。怯む自分にそう言い聞かせて、私は、指に力を入れる。

ワランを乗せた「カプセル」はゆっくりと動き出した。

「さよなら」

もう、後戻りは出来ない。

6

小さなロウテーブルを二人で囲んで、お気に入りの缶詰を一緒につつく。

「やっぱりおいしいね」

無邪気な笑みを浮かべながらそう言う彼女は、嬉しそうだ。

「好きだね、それ。私の分も食べな」

「ありがとう！」

缶の中に残った牛肉を、彼女、「ワラン」は、頬張った。

彼女の偽りのない笑みを見て、安堵する。以前よりも、幼さが残るものの、苦しみとはかけ離れたその表情を見れば、私は十分だった。結局、私の決意は無駄ではなかったようだ。あの日、私は、「カプセル」で、ワランの記憶を消したのだ。様々な選択肢がある中で、私が選んだのは、そうすることだった。

彼女の記憶を抹消し、彼女自身が、「死ねない人造人間」であることを忘れさせた。

私は、「自分のことを人間だと思いついてる人造人間」と人生を共にすることを選んだ。

将来、彼女が、自分のことを人間では無いと気づくことがあれば、また記憶を消去する。

将来、私が、死にそうになったら、「カプセル」で彼女を破壊し、共に人生を終える。

その時こそ、私たちのフィナーレの瞬間だ。

多くの嘘で汚れて、綺麗な選択とはとても言えないが、後悔はない。幸せそうな彼女を見れば、胸を張ってそう言える。

ワランは、記憶を消された影響で、精神が幼くなってしまった。見た目は以前と変わらないのに、幼い言動を繰り返す彼女は、可笑しいようで、愛らしかった。

缶詰を食べ終えた彼女は、いつの間にか眠ってしまった。その横顔を見るだけで、自然と頬が緩んでしまう。

「人造人間」は、食べ物を必要としない。だけど、私は、「人間」と暮らすことを選んだのだ。限りある食料を彼女と分け合うことは、なんだか嬉しかった。いつか食料が尽きたとしても、

私は満ち足りているはずだ。

この頃、私の中で、知らない感情が芽生えていくのを感じていた。ワランが、私に笑いかける度に、なんでもしてあげたいと思ってしまう。甘やかしすぎるのは良くないと、理屈では分かっているのだが、感情を抑えることができない。こんな矛盾を抱えることが、とても幸せだ。

もし、ワランが、私を嫌いになったら、また記憶を消せばいい。

もし、ワランが、優しく成長しなかったら、また記憶を消せばいい。

もし、ワランが、私の思い通りにならなかったら、また記憶を消せばいい。

はあ、幸せ。

私の大好きなワランと、ずっと一緒に居られる。そのことが、とても心を満たしてくれる。ロウテールに、伏せて寝ているワランの頬を撫でながら、私は感謝する。

かくりよのくに、ありがとう。

【鹿志村直人】

まずはじめにインタビュアーを受けていただいた溝口さん本当にありがとうございました。改めてこの場を借りてお礼を申し上げます。そのほか、一緒にインタビュアーに同行してくれた吉永くんをはじめとするSF研の方々、編集作業を手伝ってくれた定直さん、何度も相談にのってくれた青木先生ありがとうございました。

色々な人との繋がりや偶然の上でこのような雑誌が完成しました。

一つでも誰かの心に突き刺さるものがあると幸いです。

【定直みなみ】

「関係性ファイトクラブ」をお手に取っていただき、誠にありがとうございました。

私はずっと、幼いころの記憶を頼りに、家族を題材にした作品を執筆して参りました。敬愛する人を小説に書き出すというのは、口下手な私ができる唯一の愛情表現だと思っています。そんな私も来年度にはこの学舎から旅立つことになるのですが、メンバーも作風も毎年変化していく青木ゼミのゼミ雑誌の、今この瞬間の作品を楽しんでいただければ幸いです。

どうか、読者の方の思い出や、ご嗜好に刺さる関係性が見つかりますように。どこから開いても素晴らしい作品たちが首を長くして待っています。

関係性
ファイトクラブ
Kankeisei
Fight Club
2021
Winter

令和三年度青木ゼミ 文芸研究Ⅲ
関係性ファイトクラブ 二〇二二冬号

発行日 二〇二一年十二月二十四日

発行人 青木敬士

発行所 日本大学芸術学部文芸学科

印刷所 東京都練馬区旭丘二一四十二一

編集 山栄プロセス

表紙／題記 鹿志村直人 定直みなみ

表紙／題記 清水綾乃

本誌掲載記事の無断転載を禁じます。